
あたしの中の ア・イ・ツ

和 貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしの中の ア・イ・ツ

【Nコード】

N4764I

【作者名】

和 貴

【あらすじ】

隣に住む同級生の秋庭慶は、あたしの幼馴染。ずっと一緒にいたからか、お互いに『異性』を意識した事が無かった。だけど、慶を意識している女の子達の出現で、あたしは慶と少し距離を置いてしまつうようになった。そんなある日、慶のお母さんが入院してしまい、あたしは放って置けなくなって……

第1話 誤解からの出会い（前書き）

他サイトで公開中『STEP!』（完結済）の彼女視点版です。

第1話 誤解からの出会い

> i 2 5 6 0 — 3 1 6 <

小学生最後のクラス替えが行われて、まだ日が浅かった三組の教室。クラス全員の顔と名前が一致していなかったあたしは、二人の女の子から声を掛けられた。

「ねえ、あんたさあ『アキバ系』ん家の隣に住んでいるの？」

「え？」

五時限目の授業が終わって、国語の教科書とノートを赤いランドセルへ片付けていると、クラスの女子二人が遣って来て、あたしに向かってそう言ったのだ。

「あんたさあ、いつもそいつと一緒に帰ってんの？　つーか、付き合ってるのか？」

「はあ？」

初対面いきなりの失礼極まりない暴言に、かちんと来る。

『付き合ってる』……って、なに？

知らない女の子達から、あたしはそんな眼で見られていたの？

思いもよらなかったその言葉に、あたしはカツと身体が熱くなる。彼女の失礼な言葉は聞き捨てならないけれども、それよりもなによ

りも……『恥ずかしさ』が先行してしまった。

彼女から『アキバ系』と呼ばれた人物は、あたしの隣に住んでいるクラスメイトの秋庭慶の事。「あきにわ けい」が本当の名前なのに、みんなは面白がって『アキバケイ』だなんて慶の事を呼ぶ。

慶も面倒がつて一々訂正しないから、いつの間にかみんなから『アキバケイ』が本名だと勘違いされているみたい。『アキニワ』と慶の名字を正確に読める人は、一部の限られた先生や、慶の身近な友達くらいしか居ない。だけどその事を知っていても、わざと『アキバ』と呼ぶ慶の親しい友達も居る。本人が気にならなくて良いのなら問題は無さそうだし、そこはあたしがとやかく言うものでも無いと思っている。

慶とは家が隣同士だけじゃなくて、クラスでも部活でも一緒なのだ。部活は男子と女子で別れてしまうけれど、あたしは女子軟式テニス部の部長だし、慶は男子軟式テニス部の主将を遣っている。同じ顧問の先生だから、練習カリキュラムも殆ど同じ。だから帰宅時間も殆ど一緒。

別に時間を示し合わせて帰っている訳じゃない。単に『偶然』が重なっただけ。

それに『二人っきり』で帰宅しているのじゃないわ。

いつも途中までは、慶やあたしの友達と四、五人のグループで帰っているけれど、途中でみんな家が違うからそれぞれが分かれての帰宅になり、最後はあたしと慶の二人っきりになってしまっただけの事なのに。

大体、慶の家とは昔から家族ぐるみの付き合いだし、もの心ついた頃からずっと一緒だったから『好き』とか『嫌い』とか言う恋愛対象ではあり得ない……と思うのだけれど？

「……と言つか、あなた達誰？」

「あたし、川村姫香^{かわむら ひめか}。この子は遠藤亜紀^{えんどう あき}。あなたが土橋香代^{どはし かよ}……さん？ 女子軟式テニス部の部長でしょ？」

「そうだけど？」

あたしの返事に、二人はお互いに顔を見合わせて、『この子に間違いない』とばかりに示し合わせたような微妙な目配せを送り合う。

あたしは変な疎外感を感じてムツとなった。

「ね？ 実はあたし達もテニス部に入部したくってさ」

「そ……そう？」

な、なあんだ。入部希望者……ね？

そう思ったのだけれど、初っ端彼女のあんまりな質問に、あたしはなおも不信感を募らせて新しいクラスメイトの二人を見上げた。

入部したいのならそうだと先に言って欲しかったわ。いきなり慶の事を聞いてくるだなんて、どうかしているわよ。しかも『付き合い

っているの?』だなんて、し……心外だわ。

慶の事を聞きたいのなら、本人がちゃんとそこに居るでしょうに。

ちらりと横目で盗み見た、斜め左後ろの席に居る慶は……信じられないくらいの大あくびを遣っている最中だった。行儀悪く、隣の机に腰を掛けている副キャプテンの門田くんが呆れて笑っている。

全く……『コレ』がテニス部の主将だなんて、思いつ切り幻滅させてくれるわよね。

教室内にはまだ何人もの女子が居残っているって言うのに、その大口を手で塞ごうとかって言う気にはならないのかしら……デリカシーの欠片も何も無いのね?

あたしは慶からさり気無く視線を彼女達に戻した。

姫香は、言葉遣いからして結構『個性^{アク}』が強そう。少なくとも名前から来る穏やかな印象とは真逆のタイプで、思った事をすぐ口にしてしまいそうだけれども、その分胸に溜まるものが無いから、あっさりとしていて後腐れが残らなさそう。

方や遠藤亜紀さんは、川村さんとは反対に内向的っぽい。色白でひ弱そうな彼女は、どちらかと言えば読書が好きな文学少女。思った事の半分さえ言えなさそうで、頼り無さそうな印象を受けた。

「早速だけどさ、今日部活無いでしょ? あたし達と一緒に帰らない? それとも『アキバ系』と一緒に帰る?」

「は？　なんでそうなるのよ？」

姫香の言い方が気に入らなくて、あたしは猜疑心一杯の眼で以って、机の前に遣って来た二人を見上げた。

いつもなら、この後練習が入っているのだけれど、今日はうちの学校での指導研修があるとかで、他校の先生方が遣って来る。モデル学級を残して他の生徒は帰宅させられてしまうし、運動場の一部が臨時駐車場になってしまいうから、今日の練習は無い。

「い、いいわよ？　別に慶と待ち合わせして帰っている訳じゃないもの」

あたしがOKを出すと、二人ともホッとしたような表情を浮かべた。

この二人の様子に、あたしは心の隅で微妙に引つ掛かるものを感じたけれど、慶とは付き合っていないし、約束している訳じゃないから……別に一緒に帰らなくってもいいわよね？

でも、わざと慶と一緒に帰らないだなんて、こんな事は初めてだわ。

『慶とは付き合ってなんかいない』……自分の言葉をここで証明してあげれば、彼女達の誤解も解けるはず。いつまでも慶と一緒に居られないのだし、丁度いい機会だわ。

あたしは心の中でそう自分に言い聞かせると、身支度を済ませて立ち上がった。

「ああ、香代、もう帰るのか？　ちょっと待てよ」

先に席を立ったあたしの背後で、慶の慌てる声がした。

教室の出入り口には、先に行って待っている二人があたしと慶を見詰めている。

注目されている……そう意識した瞬間、あたしは猛烈に恥ずかしくなつて、情けない声で『待った！』を掛ける慶を振り返り、睨み付けてしまった。

「うるさいわねっ！　なんでそう……いつも慶と一緒にじゃなくっちゃいけないのよ？」

「は？　どうしたんだ？　香代、お前いつもと……」

「あたしは他の子達と帰るの。じゃあね」

慶の言葉を遮るようにあたしは早口で捲し立てると、ツンとそっぽを向いて踵かかとを返す。そして、慶を振り返らずに彼女達の許に急いだ。

今まで遣っていた当たり前の『いつも』を、ほんの少しだけ勇気を出して『違ういつも』に切り替えたあたしは、なんだか急にお姉さんになった気分だ。

「おまつ……香代？」

「ばいばい」

「お……おいつ」

置いてきぼりを喰らった慶が、情けない声であたしを呼んだ。

第2話 三人の秘密

「お待たせ」

「これでもう『慶と付き合っているの?』だなんて失礼な事は言わせないわ。」

「あたしは少し気取って、二人が待っている教室のドアまで遣って来た。」

「あ、あのう……」

「なに?」

先に言葉を発したのは、物静かそうな亜紀だった。

彼女はパツン前髪に、左右振り分けお下げ髪眼鏡つ子。彼女には失礼だけれど、自己主張したい今どきの女の子の中でも珍しく『地味』が服を着て歩いているような女の子だった。

彼女はまるで悪い事をしてしまったような、すまなそうな眼をしてその眼鏡越しにあたしの表情を窺うと、言い難そうに顎を引いて俯いた。

「い、いいの? ……秋庭くん」

「……え?」

亜紀はあたしから放置されてしまった慶の事が、心配になって仕方が無いらしい様子だった。

その弱々しく言った一言が、あたしの胸に細い針のようにチクリと刺さる。まるで姫香の言葉を真に受けて、あたしの取った行動を非難しているみたいない方だったから。

だけど、慶とは本当に単なる幼馴染のお隣さんなのであって、『彼氏』だとかそんな眼で慶を見た覚えは無い。それを証明してあげただけなのに、どうしてこんなにも亜紀の言葉が『痛い』と感じたのか、自分でも不思議だった。

あたしが居なくつても、慶には副主将の門田や佐伯……他にも一緒に居て帰る友達は何人も居る。だから、なにもあたしが気にする事もなければ、亜紀みたいに心配する必要なんて無いのに……

「ふふーん、気になるう？」

遠慮がちに亜紀が言った言葉を、姫香が挑発的に切り返した。

亜紀はあたしに聞いていたのに、どうして姫香が出て来るの？

そう思ったのだけれど、二人は友達同士みたいだし……それに二人とも入部希望を口に出しているけれど、どんな子達なのかよく判らない所がある。だから、あたしは一步退いて二人の出方を窺う事にした。

「だっ、だつて……き、急にあんな……姫香だつて……」

「はいはい、続きは帰りながら続けようねー?」

「ち、ちよつと姫香あ」

「いいから!」

名前を呼ばれた姫香の顔が、たちまち真っ赤になった。そして亜紀に続きを言わせないように廻れ右を促すと、強引に彼女の背中を押して教室から離れようとする。

どうなっているの?

二人の奇妙な遣り取りを黙って静観していたあたしは、自分に向けられた姫香の視線に気が付いてハツとした。

「さ、一緒に帰るんでしょ?」

「え? ええ……」

亜紀の背中を押しながらあたしを振り返った姫香は、にっこりと笑ってそう言った。

「あ、香代お、一緒に帰ろう?」

「うん、い……」

「あつ、ごつめーん、今日はパス」

下駄箱の所で、いつも一緒に帰っていた雛乃達ひなのから声を掛けられて、あたしはOKの返事を出そうとしたのに、姫香にきっぱりと断られてしまった。

「ちょ、ちょっと姫香さん？ さっきからどうしてそんなに強引なの？」

なに仕切っているのよ？ これじゃあドラマとかに出てくる『お局様』みたいじゃないの。

姫香の態度が気に入らなくなつて、つい棘とげのあるような言い方をしてしまった。一緒に居る亜紀も、あたしと同感だと言いたげな眼で姫香を見ている。

「ああごめんね？ でも他の人には聞いて欲しくは無かったから」

「なにが？」

あたしの言葉を合図に、姫香はチラリと亜紀に視線を走らせると、亜紀は顔を赤らめて俯いてしまった。

「あのね？ この子、秋庭くんが好きなのよ」

「……は？」

な、なに……？ 今、何て？

あたしは自分の耳を疑った。

「や、やだぁー姫香ったら、そんなにハッキリと……」

「って、ハッキリと言わなくっちゃ判らないでしょう?」

照れる亜紀に姫香がぴしゃりと言い切った。

あたしはいきなりな事を聞かされて混乱してしまい、なにがなんだか……

「でね? 亜紀はこんな性格だし、いつまで経ってもこのまんまみたいじゃない? それに秋庭くんにはあんたが居るし……」

「で、あなたが代わりにあたしに直接聞いて来たって訳?」

「ピンポーン!」

言葉尻を取ったあたしに、姫香が能天気な調子付く。

「……」

あたしは言葉を失った。

慶とは単なる幼馴染だと思っていたし、『好き』っていうほどの恋愛感情も持つてはいないと思っていた。でも、慶の事を想っている亜紀の存在を教えられた瞬間に、自分でもよく判らないもやもやとした感情が胸の奥に湧き上がって来たのを感じてしまう。

「秋庭くんの事をよく知っているあんたが居れば、心強いわ。ど? ここはひとつ情報提供して、あたし達に協力してくれないかしら?」

そう言われても、簡単に『ええ、いいわよ』と言う気にはなれなかった。第一、幾ら親友の事だからって、こんなに真剣に……

そこまで考えて、あたしはある事に気が付いた。

初対面で慶の事を『アキバ系』と言っていたのに、今の姫香は『秋庭くん』と呼んでいる。

嘘……でしょ……？

亜紀はどうも気が付いてはいないみたいだったけど……まさか、姫香まで慶の事を密かに想っているのじゃないでしょうね？

第3話 『彼』を見る眼

「ねえねえ、香代が『カノジヨ』じゃないんだったら、秋庭くん、他に付き合っている女の子っているのかなあ？」

姫香が上機嫌で聞いて来た。

慶に一番近い存在と見越して疑いを掛けて来たあたしが大外れだったと判ったからか、さつきまで身構えていた姫香も亜紀も、何だか妙にリラックスしている。

それにしたってこの二人、よりもよってなんであんな慶を……？

さっきの大あくびなんてまだマシな方。男子ソフトテニス部の主将だと言えば聞こえは良いけれど、実力は他の部員といい勝負。部内で抜きん出た子が居なかったせいか、顧問の先生から聞いた話ではくじ引きで決まったそうなもの。

その時は、しっかりと納得してしまったわ。小さかった頃からずっと一緒に居たあたしには、慶が部活のまとめ役をやっている事自体不思議に思えたから。

最弱最強の幼馴染……残念ながら、昔の慶を知っているあたしには、これ以上の皮肉な褒め言葉が頭に浮かばない。

幼稚園の頃の慶は物凄く身体が弱くて、すぐに熱を出しやすい体質だった。なのに、自分の身体が異常を訴えているのに本人は全く気付かなくて、周りの人が先に気付いてしまう鈍感タイプ。だから

と言って、我慢強くて辛抱強いのかと思えば弱虫で、遊園地に行っても、お化け屋敷やジェットコースター、観覧車に乗ってさえ、すぐに怖がってメソメソ泣き出してしまふような男の子だった。

当時、あたしは髪を短くしていて、動き易い短パン姿で慶と一緒に居たからか、あたしは大人達から男の子だと間違われて、しかも慶をいじめて泣かせた犯人だと濡れ衣を着せられてしまった事だった。

今でもそうだけど、何かあれば必ず先生はあたしに慶の事を頼んで来るし、本人もすぐにあたしに頼って来る。

お隣に居るだけなのに、なんであたしばかりが慶のお守をしなくちゃいけないのよ……？

泣き虫の慶のお陰で、あたしはいい迷惑だわ。

慶に対する不満は、日々大きくなって行く一方で、あたしは慶と離れようと思った事だって何度もある。だけど、どんなに別行動を取っていても、最終的にはあたしの近くには必ず慶が居た。だって、帰る家が隣なんだもの。

姫香や亜紀が慶の事を想っているのは、昔の慶を知らないからだわ。今は随分とマシになって来ているけれど、小さかった頃の慶を知ったら、二人はどう思うのかしらね？

「彼女なんて居ないんじゃない？」

あたしは素っ気なく言い放った。

実際、慶は付き合っている女の子どころか、意識している女の子が居るような素振りさえ見られない。

「はあ、香代ってばクールねえ」

「だから、そんな仲じゃないから」

何度も言わせないで欲しいわ。

ずっと黙っている亜紀も姫香に同感らしく、さっきからうんうんと相槌を打っている。

「なんで？ 背だって高くてカッコ良いし、テニス部の主将だよ？」

「あたしに見る目が無いとでも？」

ほー、男の子は背が高ければカッコ良いの？

背が高いのは慶のお父さんが高いから。単なる遺伝でしょ？ 主将だって、くじ引きだもん。

「うん」

「……」

これだもの。

唐突に『隣の芝生は青く見える』という諺が頭に浮かんだ。一体、どっちが『見る目が無い』のよ？ と言いたい。あたしからしてみれば、二人の眼の方がよっぽど『節穴』だわ。

あたしはウンザリして深いため息を一つ吐いた。

「ねーねー、この近くにクレープ屋さんの屋台が来るの、知ってる？」

「へー？ そうなんだ」

呆れるあたしと会話が噛み合わないと思ったのか、姫香が話を切り替えて、寄り道コースを提案する。

「ね？ 寄って行かない？」

「でも、あたしお金持ってないし……」

「奢りでも嫌？」

「行くっ！」

あたしは、慶と一緒に帰っていたら、絶対に知り得なかっただろう美味しい情報に飛び付いた。

姫香は去年の暮れにこの小学校に転校して来た。家庭の事情はみんなそれぞれだけど、姫香の両親は離婚して、お母さんの実家のあ

るこの町に遣つて来たのだそう。

彼女なりに辛い事があつたらしいけれど、自分がお母さんを支えなくちゃと意識しているせい、姫香は他の女の子よりも格段しっかりしている。でも、思った事をズバズバ言う性格が災いしてか、中々友達が出来なかつたらしい。

亜紀の家は、両親が揃つて内科医で、病院を営んでいる。下に弟が居るけれど、弟が居るとは思えないくらい温厚で物静かな子だ。本が大好きで暇さえあれば読んでいる文学少女だとか。でも内向的過ぎて周囲に中々馴染めないと云う、彼女なりの悩みを抱えていたそう。

そんなある日、姫香は、下校時間に鎖の解けた犬に吠えられて、泣いている亜紀を見付けて、犬を追ひ払ったのが知り合う切っ掛けになつたらしい。

「すごい。強いんだあ」

「ううん。だってあの犬飼ひ犬だったし、尻尾振っていたもん。きつと亜紀に遊んで貰いたかつたんだと思うよ？」

感心したあたしが姫香にそう言つと、苺クレープを頬張つた姫香が鼻先に生クリームを付けたまま、にこにこして答えた。

第4話 居合わせた男の子

姫香からごちそうになった帰り道、あたしは舌先に仄かな甘いクレープの余韻に浸りながら、二人に入部希望の真相を知るべく、探りを入れた。

「ねえ、亜紀はどうして慶の事が好きになったの？」

「うわー、香代ってば『慶』って呼び捨て？」

「あのね……」

呆れて言葉を失った。

「何年慶のお隣さんを遣っていると思っているのよ？ そんなあたしが『秋庭くん』って呼ぶ方がよっぽど不自然だわ。なら二人とも呼び捨てにしたら？」

「おおっ？ 幼馴染から呼び捨てのお許しが出たわよん？ 亜紀いゝ、どーする？」

「でっ……でもお……」

姫香がにやにやしながら、『そんなこと出来な〜い』だなんて言って赤くなつて俯いている亜紀を肘でつつく。

二人は『彼』の話題になると妙にソワソワして落ち着かなくなる場所がある。同性のあたしから見ても可愛いなと思うのだけれど、そのお相手が慶だなんて……あたしとしては微妙だわ。

「で？ さっきの話だけど？」

「あー、あたし無視い？」

「姫香は後から聞いてあげるから」

茶化さないで欲しいのに、テンションが上がってしまったのか、姫香は超上機嫌。亜紀も姫香に乘せられたのか、クスクス笑っている。

あたしも二人に合わせて表面では笑っているけれど、その実、心の中では何を聞かされてしまうのか心配になって、ドキドキしていた。

亜紀が慶と出会ったのは、歳の瀬も押し迫った去年の冬休みの事だった。

週に二回、停留所を七つ通り越した隣町までピアノのレッスンを受けに通っている亜紀は、この日、今年最後のレッスンを終えてバスに乗り、帰宅の途についた。

けれど、運悪く仕事納めの帰宅ラッシュと重なって、定員をオーバーしたバスの混み具合は半端じゃなかった。

次のバス停で降りなければいけないのに、亜紀の立っている場所からは、停車サインのコールボタンまで手が届かない。

立ち位置さえ変えられず、ままならないほどの混み具合の中で精一杯片手を伸ばすけれども、五年生女の子の平均身長よりも背が低くて、身体が小さい亜紀にとって、そのボタンは全く届かない場所にあった。

どうしよう……

他の人に『押してくれませんか』の一言が恥ずかしくて、言葉に出して言えない。けれど、降りるはずのバス停は、どんどん近付いて来る……

いよいよ困って、泣き出しそうになった時、亜紀の頭の上から声が降って来た。

「次、降りるの？」

「……」

見上げると、自分の通っている小学校の校章が胸に入っている、白いジャージを着た背の高い男の子が、亜紀のすぐ傍に立っていた。

亜紀が涙目になって大きく頷くと、男の子は亜紀の代わりにボタンを押してくれたのだそうだ。

「で？　それが慶だったの？」

「ん……」

亜紀は恥ずかしそうにもじもじしながら頷いた。

あたしなら、別にボタンを押してくれた男の子にときめいたりな
んかないけど？

「まあまあ、香代、まだ続きがあるんだって」

不満げなあたしの表情を読み取ったのか、姫香が亜紀の話をフオ
ロ―する。

男の子が停車ボタンを押してくれたお陰で、バスは亜紀の下車す
るバス停に停車した。けれど、今度は余りの混み様に、バスを降り
たくても降りられない。

「降りるんでしょ？」

「で……でも……」

人を掻き分けて出て行こうにも、身じろぎ一つ出来やしない。そ
もそも、亜紀には人を押しのけて自分が通るなど、実行どころか考
える事すら思い浮かばなかった。

「降りる人が居ますので、少しお待ちください」

せっかく運転手がアナウンスしてくれたのに、降りそうな客の気

配が無いと覚った他の乗客から『悪戯じゃないの?』と言う声が上がった。

ざわざわとざわめき始めたバスの車内で、切羽詰まってしまい、今にも泣き出しそうになった亜紀は、さっきの男の子から急に腕を掴まれた。

「降りまーす!」

亜紀が想像もしていなかった元気な声が車内響いた。

男の子は亜紀の腕を掴んだまま、他の乗客の中に分け入って、ぐいぐい乗車口に連れて行く。

「なんとか降りられたね?」

「は……は……い」

バスから無事に降りられた亜紀は、男の子からそう声を掛けて貰った。亜紀は安心して気が抜けてしまったけれども……何か大変な事を忘れてしまっているようではない。

「降りる時は、頑張って勇気出さなくっちゃ」

「あ、ありがとうございました」

男の子にお礼を言ってぺこりと頭を下げる。そして、そこでハタと思い付いた。

「あ、あのう」

「ん？」

「降りて……良かったのですか？　あなたまで」

車内でボタンを押して貰った時、確か一緒に降りる予定では無かったみたいな言い方をしていた彼だったけれど……？

「えっ？　う、うわっ！　マジっ？」

亜紀の問い掛けで我に返った男の子は、かなり慌てていたと言う。そして、次のバスが来る間、亜紀も一緒に待っていたのだそうだ。

男の子は気を利かせて、いろいろ話し掛けてくれたけれど、亜紀は恥ずかしさと緊張で会話どころじゃ無かったらしい。相槌を打つのが精一杯で、会話の内容さえ覚えていなかったそうだった。

唯一、亜紀が覚えていたのが小学校の白いジャージ。それがテニス部のジャージだと知ったのは、年が明けて三学期始業式が始まった後の事だった。

「ね？　ね？　笑えるでしょっ？　ふふっ、二人とも間抜けなんだからー」

姫香が嘖き出したかと思ったら、今度はお腹を抱えてくくく……と笑い出した。その背後で、亜紀が照れて耳たぶまで真っ赤になり俯いている。

「ははは……」

思わずあたしも乾いた笑いをしてしまった。

はあ、なんか……慶らしいオチだね。

優しい所は認めてあげてもいいのだけれど、なにかこう……スマ
ートさに欠けちゃうのよね。慶がトロいのはもう既に知っているし、
話の途中でこうなるだろうなと結果は予測出来ていたのだけれど……

でも……ちょっとだけ、慶の事を見直しちゃった……かな？

第5話 別れ道

「で？ 姫香はどうなの？」

「うええ？」

いきなりあたしから話題を振られて、姫香は慌てた。

さつきは亜紀よりも先に自分の事を話したかった癖に。隙が無さそうで案外隙だらけになっているのね？

「慶のどんなトコが好き？」

「ち、ちっ、違うわよっ！」

あたしの『直撃』に姫香は真っ赤になって、猛然と否定する。

「え？ 姫香も秋庭くんを？」

「あのね、姫香はね……もがっ？」

「ちょ、まつ、待ってえ！ ご、誤解して欲しくないんだけど。あたしは亜紀の応援であって秋庭くんのファンとかじゃないから」

「ご丁寧に解説しようとしていたあたしの口を、慌てて姫香が手で塞ぐ。しかも、更に後から『絶対に』って強調して付け足した。

今更なにを隠そうとしているのよ？ 亜紀からは気付かれていなかったでしょうけれど、あたしの眼からはバレバレだわ。

亜紀だって……姫香の事、もっと早く気が付いてあげなさいよね？ あたしなんかさつき知り合ったばかりなのに。もう判っちゃったから。

亜紀の『天然』ぶりに退いてしまいそうになる。

「ふふん、判り易い子ね？ 姫香、あんたこそ怪しいわ。ここで吐いちゃいなさいよ。スッキリするから」

さつきとは立場が逆になった。なんだか自分が刑事か名探偵になったみたいな気分だわ。

「べつ、別にどう思っているかだなんて……つか、意識なんかしてないわよ。ただ亜紀の応援でつい視線が秋庭くんに行っちゃってるだけなのよ」

「ふ——ん？」

怪しいなあ。

「あー、なにその疑いの眼は」

「疑っているもん」

「……香代ってしつこ」

あたしの疑いの眼差しから必死で逃れようと、姫香は心持ち頬を上気させ、『心外だわ』と言わんばかりに口を尖らせてあたしから眼を逸らせた。

まあ、なんて判り易い性格なのかしら？ それにしても『あの慶』を……ね？

背が高くてカッコ良いと言っていた亜紀達に、一度は否定的になったあたしだったけれど、確かに慶は男子の中で、そんなに人目を惹くほどのイケメンじゃないけれど平均ラインはクリアしているわね。

そう言えば……慶とよく一緒に居る副主将の門田くんにも、さつき下駄箱の所で会った日名子が居る。補佐の田村くんにも他のクラスに居ると本人が話していたのを聞いた事があった。

あのお笑い系目指しているんだと宣言している門田くんだって『特別な女の子』が居るのに、慶にはそんな『特別な女の子』なんて居ないの……かなあ？ でもあたし、慶からそんな話を聞いた事も無ければ、別に噂だって聞かないし……

慶は『女なんか不要だぜ！』みたいな硬派系でもなければ、逆のアブナイ方向なんかでも無……い？ だけど門田くんも田村くんも、慶にいつもくっ付いているわよね……幾ら仲が良くなったって、二人とも特別な女の子が居るのに、どうしてあんなに毎日……

あたしは俄かに慶の取り巻き連中が、妙な趣味を持っている妖しい連中に思えて来た。

「……」

「どうしたの？ 顔、真っ赤だよ？」

「香代？ おううゝい？ 『戻って』来ゝい」

「はっ？」

我に帰ったら、亜紀と姫香が二人して心配そうにあたしの顔を覗き込んでいた。

「んな、な、なななんでも無いよ？ あはは……」

あたしはたった今思い浮かべてしまったイケナイ妄想を二人に見破られはしないかと焦り、必死になって笑ってごまかす。

我ながら、想像力が凄過ぎて困ってしまうわ。

別に食べ物に釣られた訳じゃないつもりだけれど、改めて会話をしてみたら、姫香も亜紀も最初に受けた印象よりずっと親しみが持てる子だった。

姫香の突っ込みはキレがあって鋭いけれど、亜紀がそれをやんわりと受け止める役目を果たしていて、二人の間には妙に嫌味な遣り取りは見られない。気性も性格も全く違っていて、しかもお互いが『慶』を想っている恋敵。ライバル同士の二人なのに。

その後、彼女達は女子軟式テニスに入部してくれた。

元々運動神経の良い姫香は、俊敏にボールに反応してくれるのだけど、コントロールがいま一つ。亜紀は逆にコントロールは良いのだけれど、ボールの球筋を予測して反応するのが遅れがち。二人とも、即戦力になるには時間が必要だった。

二人には、慶を知っているあたしに近付きたいと言う、邪な思惑よこしまがあつたから、きっと続いてはくれないかもと思っていたのに、彼女達はあたしの想像以上に熱心だった。

亜紀は、暇さえあればソフトテニスのマニュアル本を読み耽り、ふけ姫香はイメージトレーニングやラケットでの連続ボールつきを練習して、それぞれが自分に合った自主トレを頑張っている。

部活終了後も彼女達の練習に付き合っているから、あたしは慶とは帰りが全く一緒にならなくなっていた。

第6話 異性の友達

朝の集団登校は、慶が先頭に行く『班長』で、あたしが最後尾の『副班長』だから、お互いに顔を会わせる必要性は無い。

姫香達の自主トレに付き合っている事もあって、あたしはまるで潮が引いて行くみたいに、急速に慶の居るグループから離れて行った。

「失礼しました」

「あれ？ 香代？ 香代お」

日直の日誌を担当の先生に届けて職員室を出ると、雛乃から偶然呼び止められた。

「あ？ …… ああ、雛乃だあ、元気い？」

「うん、元気い。どうしたの？ 最近秋庭くんと一緒にじゃないのね？ つれないなあ」

「……」

うーん、やっぱりそう来たか。

でもってその言い方は、まるであたしが意地悪しているみたいじゃない？

雛乃は慶の友達である門田くんの彼女。だから門田くんが慶と一緒に行動する以上、雛乃もセットでついて来る。

「聞いたわよ？ 男子ソフトテニスのマネージャーになったんだって？」

「うん」

雛乃が肩をすくめて照れくさそうに笑うと、左右に振り分けている艶やかなお下げ髪がクスンと揺れた。

あの慶が主将のテニス部のマネージャーを志望するだなんて物好きね……とは思ったけれど、門田くんの練習が終わるのをただ待っているだけじゃ、辛いかもね。

「マネージャーよりも、女子部に入ればいいのに。男子と同じ時間に終わるわよ？」

「えー、だって香代達、部活が終わっても自主トレしてるでしょ？ ってか、運動オンチのあたしには無理だよ」

軽い気持ちでそう言って誘ったけれど、雛乃からはあっさりと断られてしまった。

雛乃が言った『自主トレ』は、もちろん姫香達の自主トレの事で、毎日の練習が終わった後で一時間くらい。希望者も含めて五、六人が基本練習を遣っている。

「あたしの事はいいのよ。香代？ あんた、秋庭ちゃんとケンカでもしたの？」

「は？」

ケンカ？

「あれ？ …… 違った？」

あたしが軽く驚いて固まっていると、雛乃はなにか自分が勘違いしているのじゃないのかと気付いたみたいだった。

「あの…… 慶とあたしが…… ケンカ？」

「違うの？」

「ち、違うわよお！ なんであたしが『あの』慶とケンカしなくっちゃなんないの？」

あたしは雛乃の発言を否定した。

だってここ最近、顔を突き合わせる事も無ければ、お互いに話をする機会も無い。それに弱虫・泣き虫の慶は、昔からあたしには頭が上がらないし、あたしが慶を言い負かした事があっても、慶があたしを言い負かした事なんて、ただの一度も無いのよ？

ケンカするより以前の話だわ。

「そう…… なんだ。あー、でも良かったあー。てつきり絶交でもしちゃったのかと思って心配したよお。もお」

雛乃は大袈裟にホッと胸を撫で下ろして見せた。

あたしは、自分でも気付かないうちに、雛乃達に心配をさせてしまったのだと気付いて、少しばかりきまりが悪くなった。

「別に慶とはなんでもないよ。でも、どうして雛乃はあたしと慶をくっ付けたがるの？」

「え？ 違うの？」

「えっ？」

「付き合ってるんでしょ？ 秋庭くん」と

あたしにとつては、慶の事よりも雛乃の反応の方が意外だった。そして、俄かに不愉快になって来る。

雛乃も姫香や亜紀達と同じなの？

一緒に帰ったり、傍に居れば『付き合っている』って事になっちゃうの？

あの……『アキバケイ』と？

「じよ、冗談言わないでくれる？ 付き合っただとか。あたしはタダの幼馴染で、慶の家のご近所さんだって事だけだわ」

「『ご近所さん』じゃなくって『お隣さん』……でしょ？ ……あら？」

やや興奮気味に語ったあたしの揚げ足を取って、軽く受け流した

雛乃は、あたしの背後に誰かが遣つて来た素振りを見せた。

「誰か来たの？」

「噂をすれば何とかだよ？ ほれ、秋庭クン」

「ええっ？」

雛乃の言葉に驚いて、あたしは背後を振り返る勇氣さえ持たずに、息を詰めて咄嗟に身構えてしまった。

あたしには心の準備つてものがあるんだから、いきなり出現なんかしないで欲しいわ。

特に慶には。

「ぷー！」

「……ど？ どうしたの？」

あたしの様子を見ていた雛乃が突然吹いた。

「ごめ……くつくつく……ご、ごめんね。まさか引つ掛かるとは思わなかったから……今のは『嘘』」

「な……？」

雛乃にからかわれてしまったと知ったあたしは恥ずかしくなり、全身がかぁーっと猛烈に熱くなってしまった。気持ち、なんだか息苦しいわ。

「ふむふむ……多少なりと意識しているのだわね？」

そう言つて、雛乃は自分で勝手に頷いて納得しちゃっている。

「い、意識だなんて……し、していないからっ！」

「いいのよ？ 自分で判っていないだけなんだから」

なに？ そのお姉さんみたいな態度は。

「ち、ちがつ……違つてば！ あ、あたしは慶の事なんか、少しも思つちやいないわよ！」

「あーあ。言い切つちやつたわね」

「それがなにか？」

いきり立つて雛乃に咬み付くと、彼女は少し困つた表情を浮かべてあたしを見た。

「香代？」

「んな……なによ？」

「素直じゃないわよ」

「そ、そんなこと……」

笑いながら、「冗談っぽく雛乃はさりと云つたけれど、あたしに

は十分重い一言のように思えて、正直不快だった。

雛乃の言葉の半分が冗談なら、残りの半分は本気ってことだよな？ 『素直に』……って、あたしが慶の彼女だって認めなよって事なのかな？ でも、本当に彼女だとか彼氏だとか意識………していないんだってば。

確かに慶とは他の男子に比べて話し易いし、妙に気を利かせる必要も無ければ、一緒に居ても気疲れもしない。友達以上、彼氏未満の仲の良い『男友達』……じゃダメなのかなあ。

第7話 冷やかし

「なあ、土橋？」

「なに？」

「お前、最近アキバ系と一緒にじゃねーんだな？」

姫香と亜紀の三人で理科実験室に移動中、後ろからクラスの立川くんが声を掛けて来た。

立川くんはバスケット部の主将で、陸上全国大会に出場した高校生のお兄さんがいる。体育会系特有の負けん気としつこさを持っていて、何処となく不良っぽい所がある。噂では気が短くて喧嘩も強いらしい。あたしとしては苦手だし、近寄りたくないタイプの男子だった。

「別に。一緒じゃないと問題でもあるの？」

立川くんは早く離れて欲しくて、あたしは気持ち身構えて、ツンと澄ましてソツポを向いた。

「なんでえ、スカシやがつて。聞いただけじゃんかよ。『アキバカ』」

「ははっ！ それって『秋葉かよ』？ いや、区切り方変えたら、『アキ馬鹿よ』？」

「！」

男子二人の煽^{あお}りに、全身がカツと熱くなった気がした。

い、今……なんて？

なんであたしの名字が慶の名字になっているのよ？ しかも傍に居た鈴原まで面白がつて煽りを入れて来る。

二人の嫌な言葉はショックだった。あたしの頭の中で割れがねのように鳴り響く。

思いも寄らず耳を塞ぎたくなるような酷い言葉を投げ付けられたあたしは、言い様の無い強い不快感に見舞われて、きゅっと唇をひき結んだ。

「るさい！ 立川！ アンタこそ関係無いのに引ッ込め！」

「じゃかあし！ オメーにや言ってねーじゃん！」

「厚かましいわね！ 人の事言っんなら、自分こそどうよ！」

「そっちこそ黙ってる！」

姫香があたしを庇^{ささ}って、お互いに罵^{ののし}り合いの喧嘩になってしまった。日頃、口の悪い姫香は、この時とばかりに本領を発揮する。

「か、香代お〜」

「亜紀……」

姫香達の剣幕に怖くなったのか、亜紀が泣きべそを掻いて心配そうにあたしを氣遣ってくれるけれど……さすがに今は効いたわ……まだ頭の中がクラクラしてるもの。

それに……

知らなかった……慶と一緒に居た時は、こんな事言われたりなんかしなかったのに……慶から離れて周りを見れば、みんなそんな眼であたしの事を思っていたんだ。

誤解なのだと言っても、みんなの眼からはそうは見えていないのだと知って、なんだか悔しくなってくる。

「大体アンタは卑怯だよ！」

「はああ？ 俺のどこが卑怯なんだよ？ フザケンナ！」

「あーやだ々。自覚が無いって……これだもの」

「な、なにをお……この……」

乱暴な言葉に退くだろうと高を括っていたらしい立川は、姫香の反撃に怯んで、色をなす。

姫香が果敢にも立川達に応戦している。しかも、この言い争いは一対二で普通なら分が悪い筈なのに、口が立つ姫香の方が優勢だった。勢いで『うるせえ』とか『黙れ』とかを連発する立川に対して、姫香は立川達の出方を冷静に分析し、淡々と指摘するものだから立川達にとっては面白く無いだろう。

先に立川が切れて暴力沙汰になりそうな……そんな陰悪な空気により詰めた時だった。

「ナニ遣ってんだよ？」

「え？ うわわ……アキバ」

「わわ……」

後から遣って来た慶の冷静な声掛けで、一触即発になってしまった危険な空気が一気に開放されて、委縮してしまつた亜紀とあたしは、緊張の糸が解けて^{ほど}ホツとする。

「立川、準備係だろ？ 早く行けよ」

「お？ おお……」

「へー、噂をすれば……だな」

慌ててその場から立ち去って行つた立川とは違い、居残つた鈴原が慶に絡もうとした。

普段でも立川は、他の人には上から目線で見下して来るのに、なぜか慶には素直だ。そして、鈴原は誰にでも難癖を付けては人をおちよくつて絡んで来る嫌な奴。但し、味方に付いてくれる仲間が居ないと咬み付けない。

「なんか用か？」

「いんや。別に。じゃあなアキバカヨ」

場の空気を読んだ慶が、顎を引いて鈴原を軽く睨み付けると、分が悪いと覺つたのか、鈴原はあたしに再び『あの言葉』を浴びせると、まだ物足りなそうな顔をして立川の後を追ひ、行ってしまった。

「……？ なんの話？」

鈴原に肩透かしを食らった慶が、先に行つた鈴原の背中を見送りながら、あたし達に誰ともなく訊ねる。

「なんの話？ じゃないわよ。来るのが遅いつて……」

「い、いや、な……なんでもないよ」

対戦相手が居なくなつてしまい、持て余して今度は慶に突っ掛ろつとした姫香の言葉を遮ろうと、あたしは慌てて大声を出した。

あたしの挙動不審な態度を訝つて、慶が首を捻^{ひね}る。

「香代お……」

あたしのすぐ後ろに隠れるようにして、亜紀が情けない声を出す。

「ほ、ホントに、だ、大丈夫……だからっ！」

「ならいいけど……あのさ……だったらなんで香代が泣いてんの？」

「知らないっ！ な、泣いてなんか、いなっ、いないもん！」

言い難^{にく}そうに慶はあたしにそう言った。

慶との仲を誤解され、からかわれてしまったあたしは、必死になつて平然を装った。けれど本人を眼の前であんな事を言われて……胸に後から後から込み上げて来る悔しさと恥ずかしさが入り乱れて来たあたしは、抑え切れない不思議な感情で息が詰まりそうだった。

慶だつて、鈴原の言葉を聞いている筈なのに……あたしを気遣っているのか何事も無かつたように振舞っている。でも、その態度があたしにとっては余計に感情を逆撫でされている気がして、不愉快で堪らなかつた。

第7話 冷やかし（後書き）

（色を作す^な）： 顔色を変えて怒りだすこと。

第8話 小さかった頃の慶

あたしが小学校へ進学する年の三月。例年よりも風が無くて、暖かで穏やかな日差しの小春日和に、慶はお隣に引越して来た。

家に挨拶に来たのは、優しくそれで背の凄く高いおじさんと、少しぼつちやりして良く笑う、可愛らしいおばさんに、綺麗で素敵な女子高校生の美咲さん。そして、美咲さんの後ろに隠れるようにして、そつとあたしを見詰めていた慶が居た。

慶は、あたしの従兄の駿ちゃんよりも小柄で、あたしと大して変わらない背格好だった。

肌が白くて眼がぱつちりとした可愛らしい子だったし、名前が『けい』ちゃんだったから、あたしはお隣に女の子が引越して来たのだと勘違いして喜んでしまったもの。

慶は生まれつき身体が弱くて、年に何回かぜん息の発作を起こすらしく、ご両親は発作がよく起こる夜中に慶を救急病院へ連れて行っていた。

見るからに貧弱そうで、少しきつい言葉を掛けるとすぐに涙ぐんでしまうほどの意気地なし。

あたしの知っている男の子ときたら、やんちゃ盛りな子しか居なかった。

駿ちゃんなんか、ダイニングテーブルからジャンプして着地に失敗し、救急車を呼ぶ騒ぎになったり、下りの坂道を整備不良の自転

車で疾走して壁に激突。この時も救急車沙汰になっていた。他の子だって駿ちゃんほどじゃないけれど、余所の飼い犬をいじめて咬みつかれたり、種まきがやつと終わった畑へボールを拾いに侵入して農家のおじいさんにこっ酷く叱られたり、余所の家に駐車している車にボールを当ててしまったり……とにかくそんな事をする子達ばかりだったから、おとなしい慶は、あたしにとって一種不思議な存在だった。

だって、男の子がちょっとした事でメソメソ泣くだなんて、あたしにとってはあり得ない事だったもの。

だから、ものの数週間と経たないうちに、見兼ねたあたしは慶のお守役を買って出てしまった。

何かあるとすぐに『香代ちゃん、香代ちゃん』とあたしを探しては後追いしていた弱虫の慶。

でも高学年になった頃には、慶のぜん息の発作も治まり、殆ど症状が出なくなっていた。それは慶があたしの想像以上に努力家で、負けず嫌いだった事が幸いしたらしい。

小さかった頃『泣き虫』だったのは、『悲しくて』泣いていたわけじゃなく、『悔しかった』から。本当は人一倍負けん気が強くて……でも自分の弱い身体が思うように利かなくて、悔しくて泣いていたのだと言う事を、あたしは最近まで見抜く事が出来ずにずっと誤解していたのだ。

慶は基礎体力を強化しようとスイミングや軟式テニスも自分から積極的に遣り始め、最高学年の今年には、テニス部の『主将』になっていた。くじ引きで主将を決めたそうだから、最初は慶の事を少

し軽く見ていたのだけれど、それなりに実力が伴っていないと……
何よりも部員が慶について来てはくれないだろうと思う。

そして、気が付けばいつの間にか、慶は滅多にあたしを頼るような事をしなくなって、お守役だったあたしと並び、対等の立場になつていた。

そんな慶に、不覚にも涙を見られてしまったなんて……

慶に助けて貰いたいだなんて思ってやしなかった。むしろその逆で、あたしは立川に絡まれた事を、真っ先に慶に知られたくはなかったのに。

でも、助けて貰ったのは覆^{くつ}せない事実。しかもあたしの涙まで見られてしまった……

立川達が絡んで来た時に現れたのが、よりもよってどうして慶なの？

あたしは自分の運の無さに落ち込んでしまった。

* *

立川達の悪口の嫌がらせは、その時だけじゃ終わらなかった。

あたしが傍にいるのを目敏く見付け、事あるごとに言い掛かりを付けて来ては面白がって『アキバカヨ』を連発する。

『よー、土橋……って違った、アキバカヨ』

『おい、アキバ』

『なあなあ、アキバカヨ』

まったくもう！　一々しつこいんだから！

あたしは慶とは関係無いって、何度言わせれば気が済むのよ？
一体、このあたしに何の恨みがあるって言うの？　あたしは立川の
事なんか全然知らないし、関わり合いになりたくなんかないのに。

『あの事』があつてから、立川は何かとあたしを呼び、引き合い
に出して来ては些細な事や面倒な事を押しつけ、言い掛かりを付け
てからかって来るようになった。

最初は真に受けて怒っていたあたしだったけれど、そのからかい
が幼稚でくだらないものだったから、あたしは徐々に相手をするの
が鬱陶しくなつて行つた。

そもそも、立川から嫌な眼に遭わされていたこのあたしが、ま
とにも相手をする必要など無いのよ。

だからあたしは素知らぬ振りで無視を繰り返していた。

第9話 切ない意地悪

そんな事が一カ月近く続いたある日の事だった。

修学旅行の日程が近付いて、あたしは姫香や亜紀が居る旅行グループの女子メンバー六人で、見学予定コースやお土産について相談していた。

「よーよー、ドバシ、これ何て読むんだ？」

授業前の休憩時間だった事もあり、前回の授業で音読を指名予告されていた立川が、国語の教科書を開き、珍しく真面目な顔をして雑談をしているあたしに近寄って来た。

でも、あたしは立川とは関わりたく無かったから、雑談に耽^{ふけ}っているふりをしたのに、立川の足はちつとも立ち止らない。

あたしは立川が会話に絡んで来れないよう、一際声を張り上げた。

「でさあ、今度の土曜日にね、みんなで旅行準備の買い物に行かない？」

「きゃあー、行く！ 行くー！」

あたしのピンチを読んだ姫香がすかさずはしゃいで賛成し、一緒に居た亜紀もニコニコして大きく頷^{うなず}いた。

「何着て行こうかなあー」

同じ班の楓^{かえで}や沙希^{さき}、真理奈^{まりな}も雰囲氣を読んで承知してくれた。立川^{けんせい}を牽制した話題だったけれど、休日待ち合わせしてお出掛けに興味を持ってくれて嬉しそう。楽しみにしている修学旅行にプラスして、ちょっとしたイベント提案でみんな瞳がキラキラしちゃってる。

「ね、ね、ね、待ち合わせの場所と時間を決めておこうよ」

「ついでに一緒にお昼ご飯食べに行く？」

「いやぁーん、あたしもそれ賛成いゝ！」

みんな立川の悪評を知っているし、あたしへの嫌がらせを快く思っていないから相手にしたくなくて、必要以上に会話が弾んで場が盛り上がったのだけれども……

「おい！ 聞こえなかったのかよ？」

「った！」

あたしが無視をしたのが気に入らなかったらしく、立川はポニーテールのあたしの髪に結んでいた紺色のリボンを乱暴に引いた。

引き方が悪かったせいとか、リボンは髪に絡まってしまい上手く解^{ほど}けてはくれなかった。

いきなり頭を後ろへ引つ張られた状態になり、あたしの身体は椅子ごと後方へと大きくバランスを崩してしまう。

あたしはその場に居た女子の『きゃー!』と言う悲鳴と一緒にひっくり返りそうになったけれど、必死に手足を突っぱねて支え、なんとか危ういところを免れた。

教室のあちらこちらで雑談をしていたみんなが、何かと一斉に息を潜^{ひそ}め、それまでざわついていた教室内が水を打ったようにシン……となる。

「いたた……なにするのよ!」

「よー、無視すんなよ。アキバ系に振られた癖に」

「な? ……なんですって?」

その失礼極まりない言い方にカツとなる。

真っ赤になって怒り出したあたしを見て、立川がにやにやと笑みを浮かべながら偉そうに続ける。

「アキバに振られたから、女同士でうろつろしてンだろ?」

「それ言い掛かりじゃん!」

一緒に居た姫香がいきり立ち、それまで静かになっていた教室内がざわざわとざわめいた。

「ま、待って」

何度も立川と危うい修羅場になりそうになった姫香を、起き上っ

たあたしは右腕を彼女の方へ伸ばして遮り、黙らせる。この二人、放っておけば本当に殴り合いでもしそうだもの。それに、このままじゃ姫香にいつ害が及ぶか判ったものじゃ無い。

いつも逃げ腰だったあたしは心を決めて、ばん！ と机を両手で叩き、その勢いで机から上半身を乗り出した。

「か、勘違いしないでよ！ あたしがいつ慶に振られたって言うの？」

そもそも慶とは単なる幼馴染であって、付き合うとか、振られたとか関係ない。

「ほお、大した自信だぜ。じゃあ自分から振ったってのか？」

「てか、最初っからあたしは付き合ってたんじゃないわ！ しつこいわよ！」

立川は腕組みをして、あたしの出方を斜に構えて面白そうに窺っている。その態度が気に入らなくて、立川の腹黒い笑い方に乗せられてカッとなってしまった。今まで事を荒立てずに穏便にしておこうとしていたあたしの努力は掻き消されてしまう。

勢いに任せて大声でまくし上げたあたしの視界には、驚いてこちらを見ているクラスメイト……

そしてその中に……慶が居た。

「だあゝとよ。どーするアキバ系」

あたしの言葉をそのまま受け継いだ立川が、慶の方へ身体の向きを変え、見下した笑いを投げ掛ける。

嘘でしょ……？

後悔してももう遅い。

慶を眼の前にして視線が合ってしまった瞬間、あたしは自分で言い放った言葉の酷さに驚いて竦すくんでしまい、息を詰めて慶の様子を窺った。

慶と言えば……門田くん達との雑談を急に中断させられたせいか、それともあたしの爆弾発言に怒っているのか判断に迷うところだけれど、少しだけムツとなっているように見える。

「どうよ？」

「……別に」

面白がっている立川に対して、慶は面倒臭そうな表情を浮かべて呟くように低い声でボソリと返す。

慶が言葉を発したのは、たったそれだけ。

休憩時間の終了を告げるチャイムが鳴り、あたし達の遣り取りを中断させられてしまったクラスの間みなは、慌ただしく各自の席に着いた。

席に着いても、あたしは慶の事が気になって仕方が無かった。

なんの感情さえ読み取れなかった慶の返事を聞き、あたしは自分が言い出した事を棚に上げて、無性に腹立たしくなってきた。

『別に』……って。他にになにか言い様は無かったの？

憎らしい立川に、否定するなり冗談で切り返すなり……他に方法は無かったの？

慶にとって、あたしはその程度の人間だったの？

第10話 弄（いじ）り

「おりゃー!」

「面〜!」

掃除当番の日、同じ班になった立川と鈴原が教室を掃く^{ほうき}箒でチャンバラを始めた。あたしはバケツに水を汲み、机を拭く準備をしている最中だった。

「こらー! 遊ばないでよ!」

班員である委員長の福田さんが、机を移動させながら大声を張り上げると、立川と鈴原はブツブツ文句を言いながらも振り上げていた箒を下した。

「ったく! さつさと遣らなくっちゃ帰れないでしょう!」

「へーへ、委員長には逆らえねーな。何せ先公にチクるからよー」

「言い掛かりだわ! 叱られても仕方が無いような事をするからよ」

福田さんの指摘に、立川達は舌打ちをして鼻息を荒くしたものの、それでも自分達が悪かったと反省したのか急におとなしくなった。

あたしはその間、関わり合いたく無い一心で彼等に背を向けて、せつせとクラスの机を拭いていた。

いつもあたしの護衛を引き受けていてくれた姫香は、歯医者さん

に行くために先に帰っちゃっているし、亜紀もピアノのコンクールが近いから、帰宅せずに直接レッスン教室に向かってしまい、運悪く残っているのはあたしだけ。

「お、土橋！ これ頼むわ」

「え？」

何の前触れもなく声を掛けられて、あたしは素直に振り返ってしまった。

瞬間、眼の前が真っ暗になり、じめじめと濡れたものがあたしの顔面に直撃する。

「いよっしゃあー！」

「ナイスコントロール！」

あたしの顔を襲った『それ』が、ばさりと足元に落ち、男子二人の歓声が上がった。傍で福田さんの息を飲んで硬直している。

「……………？」

あたしの足元には、使い古された真っ黒くて汚きたならしい雑巾が転がっていた。

まさかとは思っけれど、さっき顔に直撃したのは、もしかしくても……………この雑巾？

自分の眼を疑いたくなるような状況に、ぞつと悪寒が奔った。

どうして？

立川はどうしてあたしを眼の敵に………するの？

夢なら早く醒めて欲しい………あたしは何度も何度もそう願ったけれど、これは紛れもない、そして信じたくない現実だった。

「………もう………嫌だ………」

あたしが立川に何をしたって言うの？ 先に突っ掛かって来たのは立川の方じゃない。あたしは絡まれたく無かったから、ずっと逃げて無視していただけなのに……

立川は乱暴だとは聞いていたけれど、クラスで直接被害に遭っているのはどうやらあたしだけみたい。品行方正の言葉からは全くかけ離れた立川だけど、どうしてあたしばかりがこんな眼に……

「ど、土橋さん………だ、大丈夫？」

「う………うん………」

福田さんが心配して声を掛けてくれたけれど………空元気で平気そうに返事をしてしまったけれど………こんなの………こんなの、大丈夫なんかじゃ………無い。

「あゝあ、泣いちゃった。よー立川、お前のせいだぞ」

一緒になってふざけていた鈴原も、あたしの涙に驚いて掌を返す

ように立川を咎める。

「はああ？　なんで俺？　つか、俺はちゃんと声掛けて投げたんだぜ？　顔で器用にキヤツチしたのは土橋じゃん」

「いや、けどよお」

「受け取り損ねたやつの責任まで俺のせいかな？」

鈴原が『あんまりじゃないか』と言ったけれど、立川は少しも悪びれた様子は無かった。それよりも、あたしの反応の鈍さを指摘して、もつとからかおうとしている様子が窺える。

あんなやつの前でなんか、泣いたりなんかするもんか！　……あんなやつなんか……！

そう思っていたのに、悔しくて、悔しくて……

「そこで何をしているー！」

「うわ、やべ。山本じゃん」

気配を察して、隣のクラスの学年主任があたし達のクラスに遣って来た。

「先生！　立川くんが……」

「またお前か？　立川あ！」

福田さんの報告で、山本先生が立川をきつく叱っている声がするけれど、あたしはそれどころじゃ無かった。止め処なく熱い涙が溢れ出て、雫となってぱたぱたと床に零れ落ちる。

どうして立川はあたしに酷い事をするの？ どうしてあたしじゃないと……いけないの？

頭の中で、いつもあたしを助けて庇^{かば}ってくれる姫香や亜紀の顔が浮かんだ。そして、どうしても自分でも判らなかったのだけれど、慶の顔が浮かんだ。

小さかった頃はあたしがよく見守ってあげていた慶なのに、その慶に心の中で無意識とは言え、このあたしが助けを求めてしまったなんて……どうかしているわ。

「ほら、立川！」

先生に促され、立川があたしの方を見た気配がする。

「……ごめんなさい……」

「土橋、立川も反省しているようだから、許してやってくれないか？」

消え入りそうな声で、立川はあたしに謝った。でも、その言葉には心が籠^{こも}っておらず、先生から強制されて仕方なく言ったのだと……誰もがそう思える様な言い方だった。

それでも先生は立川を許して遣れと言っている。

「……はい」

あたしは仕方なく頷いた。

立川がクラスに居る以上、こんな嫌がらせがずっと続くのかな？
もうこのクラス嫌だ。立川の居るクラスなんて居たくないよ！

ところがその日を境に、立川はあたしを弄^{いじ}つて来なくなつた……
と言うか、立川の方があたしに対して完全無視をきめ付けている。

まるで狐に化かされたような気になつてしまつたけれど、あたし
にとっては眼障りで鬱陶しかった立川が自分から離れてくれたのは、
歓迎すべき事だ。

不思議に思つたけれど、これ以上立川の事を気にしていたら、今
度は間違いなく本腰をいれていじめられそうな雰囲気だったから、
気にしないでおこうと思つた。

第11話　トラベル　トラブル？

「香代、忘れ物は無い？」

「うん、大丈夫だよ」

初めての修学旅行。

初日は船で瀬戸内海を渡り、広島の大和ミュージアムに平和祈念公園から山口の秋芳洞に行って宿泊。二日目には下関の海響館。そしてあたし達のお目当てである福岡のスペースワールド。

全行程は一泊二日で短いけれど、あたし達にとっては五年生の時の少年自然の家に次ぐ、お泊りのワクワク一大イベントだった。

旅行へ行く六年生はいつもよりも早い集合時間になっていて、今日は集団登校じゃない。

あたしはこの旅行の為に母さんから買って貰ったパステルピンのクの大きいリュックを背負って、履き慣れているスニーカーに足を通し、玄関で見送ってくれるお母さんとお父さんを振り返った。

「まだ六時だよ？　今からだと少し早くないかね？」

新聞紙を片手に持ったお父さんが、玄関脇の下駄箱の上に置いてある置時計を見てそう言った。

「ん、でも班の子達と正門で待ち合わせするようにしているから」

「お隣の慶くんと一緒じゃないの？ なんならお母さんが車を出して慶くんと一緒に正門まで送ってあげましょうか？」

「いやだ。止してよ。小さい子じゃないのに」

幾ら夜が明けるのが早いからと言っても、午前六時の外出は人気が無いし寂しいからと、お母さんは心配する。

「大丈夫よ。ちゃんと防犯グッズ持っているもん。じゃあ、行ってくるね？」

あたしはリュックの横にぶら下げている、キーホルダー型の卵型防犯ブザーを見せてそう言い、お母さんの心配を余所にさつと家を出てしまった。

立川の弄りも無くなったし、あたしは楽しい学校生活を再び送れるようになった。

あの後、やっぱり気になってお母さんに話したら、お母さんは笑っていてぜんぜんあたしの事を取り合おうともせず、心配する様子でもなかった。

『あんたがもう少し大きくなったら、その子の気持ち少しは判るかもしれないね？ まあ、遣り方が少しばかり乱暴だけど……男の子だから……ねえ』だなんて。

乙女の顔に雑巾を投げ付けられたのに、お母さんはどうして立川

の肩を持ったりするんだろ？

あんなヤツは女子の敵よ、敵！ こっちから無視してやるんだから！

* *

修学旅行の出だし午前中は順調で、あたしにとっては見るもの聞くもの総てが新鮮で興味深かった。

さすがに午後からの広島の平和記念公園は別で、物凄く怖かった。

『核』があんなに凄い威力のもので、戦争がどれだけ怖くて悲しいものかを思い知らされて、なんだか怖くて堪らない。お陰で今日はせっかくの旅行なのに、怖くて眠れそうにないし、眠ったら眠ったで怖い夢にうなされそうな気がして、あたしは余計に怖くなってしまった。

そして、もうひとつ不安な事があたしに降り掛かりそうで、気になつて眠れそうにない。

もうひとつの不安は……あたしの体調の事。

平和記念公園から秋芳洞近くのホテルにバスで移動している間に、あたしは少し気分が悪くなって、窓際の姫香と席を代わって貰っていた。

なんだか身体がだるくなつて来ているみたいな気がするし、喉が

やけに乾く。それに……何だかお腹の下の方が痛いような気も……する。

もしかしたらとお月様を疑ってみたけれど、先月まで順調にきっかり月末の二十五日に来ていたから、今月はまだまだ先だと思って安心していた。だから、準備なんてして来なかったのに……

「いたた……」

「香代おゝ、大丈夫？」

心配した姫香達が不安そうにあたしの様子を代わる代わる見に来てくれる。彼女達が凄く心配してくれているのは判るし、嬉しいのだけれど、こう卒中見に来られると『平気だよー』と言う元気も忍耐も無くなって、挫けてしまいそうだわ。

そう思っていたら、バスの斜め前に座っていた慶と偶然視線が合ってしまった。

「おい、おまいも心配なのか？」

隣に座っていた門田くんが、にやにやしながら慶を冷やかすけれど……慶はあたしの方をじっと見詰めて表情一つ崩さずに、門田くんの冷やかしにさえ全く応じなかった。無表情……といまではいいないけれど、なにかを言いたそうな……心配そうな表情を浮かべているように思えた。

慶もあたしの事を気にしてくれているのかな？ それとも、今朝の集合の時に、慶を誘わずにさっさと行っちゃったから、もしかす

ると怒っているのかしら？

途中休憩で立ち寄ったドライブインのお手洗いで、あたしの心配は現実になってしまった。

もう……なんて最悪なの？

あたしはこそつと姫香達にSOSを打診して、みんなから好意の『寄付』を貰ったけれど、持って来ている子だってみんな自分の為に持って来ている。それでなくても荷物がぎゅうぎゅうで一杯なのに、他の子の予備なんか持って来る余裕なんか無いだろうし、あたしだってそんなことはしないわ。

でも、貰った『用品』の数は、お泊りの初日で逆算しても足りそうに無い。

今まで恥ずかしくて、お母さんに買いに行つて貰っていた『用品』。修学旅行だから、常に何処からか男子の眼もあるし、あたしが買いに行くだなんてとても恥ずかしくて行けないわ。

まさか、こんな日に来ちゃうだなんて、困っちゃうよー。

……どうしよう？

その日、あたしはとても旅行を楽しめた状態じゃ無かった。

真剣に困っていたあたしは、宿泊ホテルでみんなが委員長の宮田くん達の部屋に遊びに来るよう呼ばれた時に、何故か慶から指名されて、慶達の部屋にそつと来るように呼び出されてしまったの。

第12話 母からの…

みんな宮田くん達の班の部屋に集合してしまい、他の部屋はシンとして、気味悪いくらいに静まりかえっていた。

通路に出たあたしは、人の気配がしなくなった幾つもの部屋の前を、足早に通り過ぎる。

途中、みんなが集まっている部屋からは、ガヤガヤと騒々しい声が漏れ聞こえていて、他の部屋ととても対照的だった。

あたしは体調が悪いからと言って、姫香達には先に部屋で休みたいからと断り、頃合いを見計らって慶の居る部屋にこそこそと壁に隠れながら遣って来た。

「慶？ 居るの？」

みんなが居る部屋の三つ隣にある慶の居る部屋のドアをノックして、あたしは周囲を気にしながら小声で問い掛けた。

「ああ、僕だけしか居ないから、入っていいよ？」

中から慶の声がした。

こんな時に、一体なんの用事なのかなと不思議に思いつつ、あたしはドアをそっと押し開けた。

「わ？」

ドアを開けた途端、すぐ目の前に慶が立っていた。

「驚かしてごめん。これ……今朝、おばさんから預かって来たんだ」

慶はそう言うと、四角いスーパーの紙包みがすっぽりに入った、小花柄の布製手提げバッグをあたしに差し出して来た。

大きさの割には物凄く軽くて、ふわふわしてて……？

たちまち、それがなんであるのかが判ったあたしは、頬がチリチリと熱くなって来るの感じた。

「なっ？　ち、ちよつと慶！　これって……」

「渡して来たのはおばさんだよ」

「これが何だか判って……」

そう問い掛けると、慶は少し赤くなって顎を引いた。

あたしは慶の表情を見るなり、カツと頭に血が上り、身体が戦慄わなないた。

なに？　慶は今朝からあたしのお母さんから預かっていた『用品』を、あたしに渡そうと思って、ずっとあたしの事を見ていたの？

「あの……さ、悪いんだけど僕に八つ当たりしないでくれる？　僕は香代のお母さんから『これを渡して』って預かっただけだし、それに……僕には母さんも美咲も居るから、だいたい事は、その…

…知っているんだ。保健体育で習ったし、美咲がお腹が痛いって言って毎月機嫌が悪くなるから」

「で、でも……でも……」

慶から受け取ったあたしの手が震えた。

慶の一言々が信じられない。

美咲さんは慶の年の離れたお姉さん。お姉さんが居れば、女の子のお月さまも当たり前のものだと思っちゃうのかな……？

でも、慶は口では平気だって言っているけれど、顔は正直に赤くなつて俯いてしまっている。平気だったら、どうしてちゃんと眼を合わせて言わないのよ？

こんな所に呼び出して、何かと思えば……

「平気なんかじゃ……ないでしょっ？」

「そ、そんなこと……」

否定しておきながら、慶はあたしを直視出来なくて居心地が悪そうにソワソワし、視線も定まらなかった。あたしは慶の気配りが俄かに不愉快に思えて嫌になり、堪らなくなつて来た。

「慶の嘔吐き！」

気になっている癖に！

そう言い捨てると、ぱつと身を翻して自分の割り当てられている部屋に駆け戻った。

用意されていたお布団に潜り込むと、横になって身体を丸める。そして、たった今慶から手渡された『用品』をぎゅっと両腕で抱き締めた。

恥ずかしくて身体が燃えるように熱い。このまま燃えて消えちゃえばいいのに……

結果的には物凄く助かったのだけれど、それでも頭に血が昇って腹立たしかった。

お母さんもお母さんよ！ あたしを車で送ってあげるだなんて言っておいて、こんなのを慶に持たせてしまっただから！ どういう神経しているのよ！

あたしが恥ずかしい思いをするだろうって、どうして判ってくれないの？

受け取った慶も慶だわ。

もう……慶も立川と同じよ。男なんてみんなデリカシーが無くって……嫌いっ！

* *

どのくらい経ったのかな？

通路からガヤガヤと雑談が近付いて来ている。

「香代おゝ調子はどう?」

姫香達が真つ先に声を掛けてくれた。

あたしは寝起きでぼんやりしたままこくと頷うなずき、大丈夫だよと伝えると、同じ班の子達が、みんなホツとした表情を浮かべた。

「ごめんね? あたし達だけ楽しんでやって」

「ううん、いいのよ。みんなが楽しんでくれた方が。却って心配されるより、楽しんでくれた方が嬉しいもの」

そして、あたしはみんなが集まった時の事を聞かせて貰った。

男子による一発ピン芸から始まり、結構盛り上がったかくし芸大会になったそうで、途中何度か先生が部屋に遣つて来て、嚴重注意を受けのだそうだ。

しかも、解散直前に『シメ』だとか言つて、『あの』立川を含む五、六人がまくら投げを遣らかして女子まで巻き込む大騒ぎになり、遂に学年主任から怒られてしまったと聞かされた。

首謀者の数名は、今も通路に立たされていると聞かされて、あたしの笑いを誘った。

「そうそう、秋庭くんが遅れて来たんだよ」

不思議そうに言った亜紀の一言に反応して、あたしの心臓がドキ
りと大きく脈打った。

慶はその……あたしにお母さんから渡された物をあたしに届ける
ために、みんなが集合していた部屋に行けなかったんだっけ……

「こら、亜紀」

姫香の突っ込みをあたしが不思議に思っていると、慶はお手洗い
に入っていて遅くなったのだそう。同じ班の門田くんが本人より
も先にその事をみんなに伝えていたから、遅れて遣って来た慶は男
子のから拍手喝さいを浴び、ついでに下品なネタに困らされていた
と言っただけ。

……嘘よ。

慶は、あたしの為にみんなと離れて遅れてしまっただけなのに、
クラスの人々からかわれていたなんて……

結果的に、あたしは慶にも思わぬ迷惑を掛けてしまった事になる
のだわ。

それからというもの、あたしは慶と視線を合わせられなくなって
しまった。

慶がかさばる荷物を持ったまま、まる一日どうやってあたしに渡
そうかと悩んでいて、出来る限りの気遣いをしてくれたみたいだっ

たのに、あたしは許してあげる事が出来なかった。

クラスの担任は男の先生だったから、とても相談できそうに無かったけれど、それでも自分でなんとかしなくっちゃと、勇気を出して買いに行こうと思っていた矢先だったのに。

第13話 バレンタイン…（前編）

あれからほぼ一年近く、あたしは慶とは殆ど口を利^きかなかった。

利かなかったというよりも、あたしが利きたく無かっただけで、慶からは相変わらずあたしに平気な顔をして話し掛けて来るし、何事も無かったみたいに振舞っている。あたしが慶の話をまともに取りあおうとはしなかったただけなのだ。

修学旅行のあの事は未^{いま}だ誰にも知られてはいないし、みんなが岡君の部屋に集合していた時に、あたしと慶が会っていたなんてことも、誰にも知られてはいない。

ただ、あたしの近くに居る姫香と亜紀はあたしの変化に気が付いたらしく『どうかしたの?』と聞いて来たけれど、慶の話題を振る度に不機嫌になるあたしを嫌ってか、それともあたしの事をライバルの射程外だと思って安心たのかは定かじゃないけれど、あたしの前では余り慶の話題を口に出さなくなっていた。

「ねえ、週末に菓子^{カシム}夢のショコラティエにチョコを見に行かない?」

「えー、でも自転車だと、ちょっと遠いよー」

「お母さんがお店の近くに用事があるんだって。三十分くらいだけで、行かない?」

「行くう!」

三人の中で一番の甘党であり、市内のお菓子屋さんがオープンすれば必ず行つてチェックを欠かさないと言う、自称スウィーツ評論家の亜紀の提案に、早速姫香は賛成した。

小学校最後のバレンタイン。

亜紀は密かに慶への想いをずっと温めて続けているのだ。

姫香と言えば、広く浅くをモットーに、目星を付けた男子へのアプローチに余念が無い。本人は否定しているけれど、慶の事も少しは気になっているみたいで、何かと言えば慶に絡もうとしているのが見え見えだった。

「香代はどうする?」

「行くんでしょ?」

「え?」

二人の会話を上の空で聞いていたあたしは慌てた。

そう言えば……去年までは慶にチョコあげていたんだっけ……市販のミルクチョコを買って来て、湯せんで溶かし、星型やハートの可愛い形をしたアルミカップに入れてラッピングしたものを。

でも、それは幼稚園に行っていた時に、慶が誰からも貰えないって言っていたからあげたのが切っ掛けであって……ただなんとなくチョコを義理であげていたのが習慣になっちゃっただけ。

そう。義理よ、『義理』。少なくとも、真剣に想っている亜紀は慶にあげるだろうし、もしかしたら姫香だって『乗りだよ』なんて言っでごまかして、慶にあげるのかも知れない。

だから、あたしの役目はもう終わり。

義理であげたりなんかなくても、慶にはちゃんと貰える子が居るんだもの……そう思ったら、急に胸が苦しくなった。

あたしは不思議な胸の痛みを感じながら……それでも二人の提案を拒否した。

「あ……あたしは……パス」

「ええええ〜？」

姫香が大袈裟に驚いた。そして『香代も秋庭くんにあげるのじゃなかったの？』と付け足した。

『も』……って事は、姫香も慶にあげるつもりだったんだ。だったら尚更あたしがあげるまでも無いじゃない。それにあたしが参加すれば、チヨコをあげるライバルが増えるだけなのに、姫香はそんなこと気にしないの？

「だって、チヨコをあげたい男子がいないもの」

「秋庭くんにあげないの？」

亜紀が姫香の言葉を言い換えて、繰り返して聞いて来た。

「うん。悪い？」

乗りの悪いあたしの返事で水を差されたと思ってしまったのか、二人はそれっきりチョコや慶の事を口にしなくなってしまった。

* *

「じゃあね、また明日」

「ばいばい」

その日の下校時、あたしはいつもの所で二人と別れたけれど、休憩時間の時のチョコの会話が気になって、なんとなく家に真っ直ぐに帰る気にはならなかった。

あたしは気の向くまま歩いて……気が付けば、家と全く反対方向にある高級デパートが立ち並び通りに来ていた。

来週のバレンタインイベントにお客をお店に呼び込もうと、どのお店も必死だ。

あたしはお店から少し距離を置いている路線バスの待合ベンチに座ると、売上に必死なお店の人や、道行く人達をぼんやりと眺めた。

クリスマスもお正月も、門田くん達男子の企画で会場を確保して、姫香や亜紀をはじめクラスのみんなと楽しく過ごせたのだけれど……バレンタインとなると話は別だわ。

バレンタインの本当の意味をまだ理解出来ていなくて、ただ女の子から大好きなチヨコが貰える……くらいにしか理解していなかった頃の慶に、あたしも深い意味を知らずに、ただなんとなく作ってあげていただけなもの。

そんなバレンタインに意味なんか無いわ。『乗り』であげていたチヨコは、もう卒業しなくっちゃ……

そう思っでは見たものの……

他にチヨコをあげてもいいなと思う男の子なんて想い浮かばなかった。しかも、なぜか『他の男の子』のキーワードに反発して、刷り込まれたように慶の顔がばんばん頭の中に浮かんで来る。

眼の前を足早に歩いて行く人達の何割かはカップルで、彼氏と一緒にのお姉さん達。腕組をしたり、中には肩を彼氏に抱いて貰って幸せそうに微笑んでいるお姉さんも居る。

単純に、羨ましくていいなと思った。

あたしもいつかはあやって、腕を組んだり肩を抱いて貰って一緒に歩いてくれる彼氏が出来るのかしら……ううん、出来て欲しい。

そう思っていたら、唐突に眼の前を通り過ぎたカップルの男の人の顔が、慶の顔に見えた。

「……」

なんで……慶の顔が……？

あたしは一人で真っ赤に赤面している事に気が付いた。

別にあたしを意識して見ているはずもないのに、道行く人達から見詰められた気がして、更に恥ずかしくなってしまった。

第14話 バレンタイン…（後編）

二月十四日……遂に遣って来たバレンタイン。

その日は朝からみんななんだかソワソワしていて、特に男子は落ち着きがない。

「ねえ、見た？ 三宅^{みやけ}くん、今年も両手一杯にチョコ抱えて登校して来たわよ」

二組に偵察に行った瑞穂が、鼻息を荒くしながら戻って来た。

「えゝ、やっぱり？」

「いやゝん、あたしももっと早く渡すのだったあゝ」

「あたしもー」

「今から渡す？」

「うん！」

「あ、あたしもゝ」

瑞穂の帰りを待っていたクラスの子の殆どが、それぞれチョコを手にして席を立った。

クラスの子の大半は六年二組の三宅くんのファン。

彼は四年生の時にイギリスから帰国して来た男子。お母さんが凄
い美人のイギリス人だと聞いている。そのせいか、彼の髪は淡い栗
色で、光に透けると金髪に見えるし、瞳の色も黒に近い濃いブルー。

背が高くて頭が小さいアイドル系人形みたいな容貌だ。帰国した
当時は日本語が上手く喋れなくて、随分苦勞をしたらしいし、望ま
ないいいじめにも遭ったらしいけれど……基が頭の良い彼だったから、
半年も経たないうちに日本語がペラペラになって、あっという間に
クラスに馴染んでしまった。

彼とは五年生の時に同じクラスだったけれど、品のある優雅な立
ち居振る舞いをする彼の周りだけはいつも空気が違っていた。頭が
良くて運動もそつ無くこなせるから、確かに女子に人気があるのは
頷ける。去年のバレンタインでは、彼がダントツでトップだったか
ら、恐らくは今年もそうに違いない。

「あゝあ、やっぱり今年もこうなるのかよ？ 乗りで告^{こく}つても実らね
ーって事、まだ判^はんねーのかねー？ 競争率激しい『激戦区』なの
に」

教室の窓辺に慶と並んで寄りかかっている門田くんが、嫌味混じ
りにぼやく。

あたしは自分の席から見えた二人に視線を送ったけれど、慶があ
たしの方を見ている気がして、慌ててぱつと顔を逸^そらした。

「秋庭さん、これ、受け取って？」

「ん？ あ、ああ……」

「おおっ？ やるじゃんチクショー。で、これ何人目？」

「え？」

「言っなよ、門田」

顔をそむけたあたしの耳に、慶宛にチョコを渡す女子の声が聞こえた。そして慶の妙に気乗りしていないような声がする。門田くんが傍にいて冷やかしたりするからそうなったのかな？

あたしはその遣り取りを聞いただけで、自分までが緊張して息を殺してしまった。

だって、女子の殆どが二組に行っちゃって、手薄になった今のこの狙い時を逃す手は無いわ。慶の所に行っているのはきっと亜紀だと思ってしまったから。

さっそく亜紀は頑張ったのね……でも、亜紀にはなんだか大胆かも……？

そう思っただけ視線を戻したら、慶の前には二人連れの女の子の後ろ姿。一人はショートボブの髪で、もう一人はツインテールに髪を結んでいる。どちらも亜紀とは別人だわ。

姫香や亜紀じゃなく、あたしの知らない女の子が慶にチョコを渡している光景に、あたしは啞然としてしまった。

「受け取ってくれてありがとうございます！」

「失礼しまあゝす」

その言葉遣いで、女の子達が後輩だと判った。

慶に受け取って貰えた彼女達の弾んだ声が教室内に響き、二人は嬉しそうに笑いながら教室を出て行く。

あたしは無邪気な彼女達の後ろ姿を見送った。

本物の亜紀はどこに居るのかなと思い、教室を見回したら……教室の隅っこで、顔を真っ赤にして尻込みする亜紀と、亜紀を説得しているらしい姫香が居た。あの様子じゃ、亜紀は慶に渡す勇気がなくて、更に後輩の出現で精神的にプレッシャーを掛けられてしまったみたい。

でも、亜紀には『あの』姫香が居るから、きっと大丈夫。渡せるよ。

そう思ったら、急に気抜けしてしまった。

な、なあんだ……あたしが心配することなんか……無かったじゃない。

心配しなくっても、慶って意外ともてていたんだ……？

予想外の展開を目の当たりにして、席に着いていたあたしの両手が、無意識に机の下で長方形の箱を掴んでいた。

『慶なんかにあげないんだから……』そう心の中で誓っていたものの……結局はいつものお手製チョコを持って来てしまった。

チョコのカップが五個一列に並んでいるよう配置している細長い箱の中身は、去年雛乃から教えて貰っていた。生クリームとホイトチョコのマーブル模様のチョコを、あのまま作らずに忘れてしまうのも……そのう……勿体無いし。

「ただ姫香や亜紀にしてみれば、あたし……立派に裏切り行為してる。」

* *

「ねえ、亜紀達もう渡せた？」

「う、うん。なんとか……ね？」

「良かったわね」

「うん」

午前中の授業が終わり、当番で給食室に行く途中、あたしが亜紀に問い掛けると、照れた明るい返事が戻って来た。

亜紀は、初めて慶と二人で喋った事が嬉しくて仕方ないのと言う。姫香からかなり積極的にプッシュされていたにも関わらず、結構尻込みしていたみたいだったから、あたしは凄く気になっていたのだけれど……無事に手渡しが出来て良かったわね。

亜紀の成功を喜んだあたしだけれど、反面、あたしの心の中で何

かがぽつかりと抜け落ちてしまったような……不思議な感覚を覚えてしまった。

それは多分、あたしが持つて来てしまったチョコをずっと机の中に入れたままにしているから？

渡す心算が無いのなら、そもそも作る必要も無ければ、それを持つて来る必要だって無いのにどうして持つて来ちゃったんだろう……？

今までは義理で渡すのが義務だと思っていたから、止めようと自分で決めた事なのに……なのに辛く感じてしまうのはどうして……なのかな？

第15話 チョコの行方

午後の授業になっても、あたしは持って来たチョコの遣り場にずっと悩んでいた。

こんなに悩んでしまうのなら、みんなのお目当てだった二組の三宅くんにはささと渡しておけば良かったのに……

そう思ったけれど、自分のチョコがなんだか惨め^{みじ}で可哀想になっ
てしまいそうな気がする。

第一、その気も無いのに三宅くんには渡そうだなんて考える事自体
がどうかしているし、渡されれば三宅くんだってきつと迷惑だわ。

「……………」

あたしは頭の中で三宅くんにはチョコを渡そうとしている図をシミ
ユレートしてみたけれど……大きな問題に気が付いてしまった。

あたし、三宅くんどころか、チョコを他の誰にも渡せそうにない
……………

今まで慶にしかあげた事が無かったチョコ。もちろん『お義理』
のつもりだから、お互いに畏^{かしこ}まったシチュエーションなんか無い。

『はい、これ』『お？ サンキュ』なんて、プリントか回覧板
を手渡すようなノリだったから、『照れ』も無ければ『恥じらい』
なんて言うのも全く無かったもの。

途端に持つて来たチヨコが精神的に『重たく』なってしまった。
ついでにあたしの胃の辺りもなんだか重苦しい気がして来る。

渡すつもりが無いのなら、どうして学校に持つて来てしまったの
だろう……ううん、それよりももっと先……

チヨコなんか……なんで作っちゃったんだろう……？

自分に言い訳までして。

「こらっ！ 香代」

「きゃ？」

急に頭の上からふざけ気味に怒鳴られたあたしは、自分の席で飛び上がりそうになるくらい驚いた。

「なあゝに遠い眼で秋庭くんの方見てんのよー。もう授業終わったよ？」

「あつ、え？ え……ええ……」

姫香と亜紀に左右から挟まれて縮こまってしまったあたしは、姫香の言葉に二度驚いてしまった。

無意識とは言え、あたしが慶の事を見ているって言うの？

……うつん、そんなはずは無いわ。慶なんか嫌いだもん。慶には亜紀や姫香が居るし、あたしは慶とは単なるお隣さん……なんだから。

単なる……

あたしは一学期にあつた修学旅行の嫌な思い出を脳裏に蘇よみがえらせてしまった。

* *

『お母さん酷い！ どうして慶にあんな物を渡したのよ？』

旅行から帰って『ただいま』もそこそこに、あたしに恥ずかしい思いをさせたお母さんを涙目で責めてしまった。

『ごめんね。本当は車で追い掛けようとしていたのよ。でも丁度慶くんとお母さんがお家から出て来られてね、「香代ちゃんの忘れ物なら慶が届けますよ」って言われて……』

『断れば良いじゃない』

『せっかくのご好意なのに断れないでしょう？ それに、慶くんだつてお母さんが手にしていた物を見てすぐに何か判ったみたいだったから、隠す事も無かったしね。美咲ちゃんも居るし、別に取り立てて驚くような事じゃないでしょう？』

『だからってなにも……』

あたしは顔から火が出そうなくらい恥ずかしくなってしまった。
反論しようとするのだけれど、余りの怒りに言葉が上手く浮かばない。

お母さんはそんなあたしを見て、少し困ったような顔をした。

『女の子のお月様は香代が思っているように、恥ずかしくて不潔なものかしら？ 慶くんのお母さんは、女の子には必要で大切なものとして慶くんに伝えているわ。香代は渡して貰った時に、慶くんから何か嫌な事を言われた？』

『……うつん』

そんなこと……無かった。

慶は少し恥ずかしそうだったけれど……からかったり、その事を他の男の子に喋ったりはしなかった。それどころか、あたしに手渡す為に、みんなとの集合に間に合わなかったのを、自分のせいにしてくれた……

『女の子は、旅行や体調の変化で急に周期が変わっちゃって事がよくあるの。お母さんがうつかりしていたわ。気が付くのが遅れてごめんね？』

あたしはそれ以上、お母さんを責められなくなってしまった。

でも、恥ずかしい思いはしてしまったわけ……このどうにもなりそうにない不快感のせいで、以後、あたしは慶を避けるようになってしまったの。

慶は全く悪くない。

だけど、お母さんからの話を聞かされても、どうしてもあたしは慶と視線を合わせる事が出来なくなってしまったのだ。

* *

「ねえ、香代はもう渡したの？」

亜紀から不意に質問されて、胸がドキリと高鳴った。

「え？ あ、やあ……べ、別にあたしは、そ、そんな……」

曖昧に言葉を濁したあたしは、無意識に机の下へ隠していたチョコを触わった。

「なに？ 怪しいな」

「な、なんでも無かったら。大体あたしはバレンタインだなんて興味無いし、それっ？」

あっという間に姫香の手が伸びて、あたしの机の中に入った。

あたしが軽く触れていた箱を素早く探り当てると、それを握って取り出した。

「あっ！」

「ふふ〜ん、やあ〜っぱし持って来てるじゃない。もー、香代ってば、素直じゃないんだから」

「ちょ、ちょつと姫香！」

あたし達は小競り合いになった。

ファンシーショップで買った、小さくて可愛い熊が一杯印刷されているクリーム色の包装紙に水色のサテンリボンを飾っているチョコの箱にクラスのみんなの視線が集中する。

みんなが見てる……そう思った瞬間、あたしはとつさに慶を見た。

慶は不思議そうな顔をして、あたしと姫香の遣り取りを見守っている。

慶が見てる……

慶の視線を意識してしまったあたしは、更に恥ずかしくなつて真っ赤になった。そして強引な姫香にムツとなる。

まさかこのチョコを慶の目の前で披露して、姫香と引つ張り合う破目になるだなんて。こんなやつて……無いよ。

「やだ、姫香放してよ！」

「そうムキになりなさんなつて」

姫香はウシシと笑って、妙に嫌らしい眼付きであたしの困った表情を窺^{うかが}っている。

「嫌なものは嫌なのよ!」

「まあ、まあ」

「あっ?」

お互いに手を緩めなかったのがいけなかったのだ。

遂に包装紙と箱が破れて、中からカップに入ったあたしのチョコが、勢い良く教室内に飛び出して宙を舞った。

第16話 拾われたチヨコ

「ああ——！」

あたしは宙に舞った自分のチヨコを眼で追いつけた。

五個人っていたチヨコのうちの二個が箱から勢いよく飛び出して、教室の床に落ちてしまう。

「じつ……ごめん！ 香代っ！」

さすがにこれはいけないと思ったのか、姫香は両手を自分の顔の前で合わせてあたしを拝むように平謝りする。

あたしとしては、誰にも渡すつもりがなくなっていたチヨコだもの。別に食べられなくなっただって……いいもん。そのつもりも無かったのに、勝手に持って来てしまったあたしが悪いのだし、こんなことになっちゃって逆に姫香が可哀想に思えて来る。

「い、いいよ。別にそれ持って帰ろうと思って……た……？」

チヨコを持って来ている時点で、あたしは姫香達に嘘を吐いて裏切っているもの。そんなあたしが、謝る姫香を責める訳にはいかないわ。

落ち込む姫香に慌てて言葉を掛けようとしたけれど……でも、ちよっただけ悲しくて、まともに姫香と視線を合わせられなかった。

それに、クラスみんながずっと見ている眼の前で、チヨコを落

としてしまったもの。

あたしは所在なく視線を泳がせてしまい、床に転がったチョコの
一つを見付けて肩を落とした。

すると、男子の履いている青いゴムの縁取りがしてある上靴シューズが歩
いて来て、落ちたチョコの前で立ち止まった。

あたしはその上靴が容赦なくチョコを踏み付けてしまうのではと
思ってしまった、悲鳴を上げそうになる。

ところが、立ち止まった上靴の持ち主は、上体をぐっと屈めて落
ちたチョコを摘まみ、拾い上げた。

「ふーん、今年のはアレンジしてんだ……」

「な……？」

あたしは、チョコを拾った相手を見て驚いてしまった。

そろそろ散髪すればいいのと思うような黒い髪に、部活で毎日
日焼けして下地を作ってしまった小麦色の肌。練習している時は眼
付きも全く違っているけれど、今は草食動物を連想させるような穏
やかな瞳をしている慶が、あたしのチョコを拾って眺めていた。

拾った相手がまさか慶だったとは思ってもよらず、固まって動けな
くなってしまった。そして慶が拾ったチョコをどうするのが気にな
ってしまい、息を飲んで慶の一挙手一投足を見守った。

「あ？」

慶はあたしの方をちらりと見るなり、拾ったチョコをカップから取り出すと、素早く自分の口の中に放った。

「あ……あ……」

「たっ……食べた！ お、落としたチョコ……ひ、ひ、拾って……」

亜紀も姫香も驚いて退いちゃっている。

あたし達の咎めるような視線を感じた慶は、珍しくニヤリと不敵に笑って見せた。

「うん？ こんな三秒以内に拾って食べれば大丈夫だって。それに、カップに入っているし、大丈夫だよ」

慶は口をもぐもぐさせながら、落ちていたもう一つのチョコも拾って食べてしまった。

「美味^{うま}かったよ。はい、ゴミ。で、その手に握り締めてるのと交換な？」

「う……」

「はい、これ」

落ちたチョコを拾って食べられてしまった事がショックだったのじゃなくて、あたしは慶に食べられてしまった事の方がショックが大きかったのに……

あげるのを諦めていたチョコだったのに……

それまで見た事が無かった慶のワイルドさを目の当たりにしてしまい、あたしは完全に気圧^{けお}されてしまった。思わず握っていた破れた箱を慶の言う通りに差し出して、慶の手にしたカップの屑^{くず}と交換してしまう。

「おー、アキバケイ。今日コート整備だから先に行くぞー」

「ああ、待てよ、今行く。じゃ……」

先に教室から門田くんが出て行った。

慶も今日は準備当番らしく、破れてボロボロになってしまったあたしのチョコを、バッグに押し込むと、急いで門田くんの後を追った。

……一体どう言っつもりなの？

慶が言う『三秒以内』説、二つ目のチョコは三秒以上落ちているから当て嵌^はまらないし、説得力が無いしわよ？

「あ……あ……」

あたしは予想外の出来事に、開いた口が塞がらない。

「いや、ちょ……」

「かつこいい……」

姫香と亜紀の蕩けるような声で、あたしはハッと我に返った。見れば、姫香も亜紀も顔を赤くして慶の消えて行ったドアの向こうに、うつとりと視線を送っている。

渡すつもりが無かったけれど、結局は慶の手にチヨコが渡ってしまったと言うのに、二人とも怒らないの？ 二人が想っている『慶に』……なんだよ？

「女の子に恥を搔かさないだなんて……さすがは秋庭くんだわ。やつぱあたしの眼に狂いは無いのよ」

「だよねー」

そう自信満々に言い切った姫香は、今日何人の男子にチヨコを配っていたのよ？ まあ、亜紀は別だけれども。

あたしは……

あたしは二人とは少しだけ違っていた。今度こそお約束行事を止めようと思っていたのに、結果的には成り行きとは言え、また慶にチヨコをあげてしまったのだし……

落ちたチヨコを拾って食べちゃうだなんて……

落ちたモノなんか拾って食べたなら、お腹壊すんだから……

「……あれ？」

姫香達の様子を微笑ましく思っ
て見ていたら、なんだか胸がドキ
ドキしちゃってる。

なに？ この動悸は？

クラスみんなが見ていた……から？

意識したくはなかったけれど、
気にしちゃ駄目と思えば思っ
ほどドキドキが治まらなくて苦
しくなってしまうのに、益々意
識してしまっ
まう。

以来、慶と顔を合わせればこの
ドキドキが起こるようになってし
まった。お陰で慶とはずっと顔
を合わせられなくなってしまい、
あたし達はそのまま小学校を卒
業して、地元中学の藤沢中学校
へと進学した。

第17話 入部の動機

あたし達が入学した藤沢中学校は、市内でもかなり部活動に力を入れている中学校。部活動の三分の二が運動系で、県大会や全国大会にもランキングされているほど知名度が高く、高校の推薦入試では有利な位置を占めていた。

部活に運動部を選べば、自己の運動能力を高めるに規則正しい生活が前提となるため、藤沢の生徒は他の中学生よりも自己管理に優れていると、卒業生を受け入れる側から好印象を持たれている。

「どうしようか……」

入学式の後の部活動見学で、あたしは少しだけ迷って溜息を吐いた。

「なにが？　ねえ、部活は当然軟庭でしょ？」

あたしの呟きが聞こえても溜息が聞こえなかったのか、姫香がにんまりと笑って、部活案内のパンフを読むあたしの顔を覗き込んで来た。

笑い方が妙にいやらしく、下心ありに思えてしまいあたしは退いてしまう。

「な、なによそのやあゝらしい顔はあ」

「ふっふーん、だってえー秋庭くんはもう入部してるわよ？　ほら」

「ええ？」

入部って……さっき入学式が終わったばかりなのに？

あたしは姫香が指した運動場の方を見た。

小学校よりも一回り大きくて広い運動場では、野球部とサッカー部、陸上部がそれぞれ分割して練習を始めていて、あちこちで積極的に新入生を勧誘する姿が見える。そして運動場と繋がっているけれども……校舎で『L』字型に区切られる奥まった場所にテニスコートがあり、そこで男子先輩方が練習を始めているのが、校舎越しに少しだけ見えた。

ラケットのガット中央に当たる、独特なボールのインパクト音が校舎の壁に反響している。

姫香は慶がその男子先輩方に混じって練習していると言うのだ。

* *

「僕さ、お父さんみたいにテニスの大会で優勝するんだ……」

小学生の声変わりする前の慶の声が、頭の中で急に蘇った。

四年生に上がる年の春休みに、お仕事の都合で慶のお父さんは、遠い名古屋へ行ってしまった。

小さい頃からお父さんっ子で泣き虫だった慶なのに、お父さんが出発するまですっと我慢していたみたいで、お父さんが出発した後、慶のお母さんとお姉さんは家に戻ったのに、慶だけは門の前で車に向かっていつまでも手を振りながら泣いていた……

あたしが心配して慶の所に行くと、慶はあたしに背中を向けたまま、片手でぐいと涙を拭いて振り返り、無理矢理引き攣った笑顔を浮かべた。

その時、慶の右手には、お父さんから貰ったと言う金色のメダルが納められている四角いケースを持っていて、あたしに見せながらそう言ったのだ。

『いつかお父さんと試合が出来たらいいなって……約束したんだ。だから、香代も一緒にやろう？』

『一緒にやろう……』

『一緒に……』

慶の言葉が繰り返して頭の中でリプレイされる。

その時は慶に誘われた勢いで入部なんかしちゃったけれど……今、冷静に思えば、なんであたしまでがテニスを遣らなくちゃいけないの？ と考え込んでしまう。

でも、それからの慶は人前で涙を見せたりしなくなり、泣き虫の慶はどこかへ消えてしまった。

* *

「姫香あゝ、香代おゝ」

呼ばれて声のする方を見ると、亜紀が息を弾ませながら運動場を校舎沿いに駆けて来るのが見えた。

「やっぱ、本人だったでしょ？」

「うん！ 姫香が言った通りだったわ。でもああやって見ると、秋庭くんって主将遣っていただけあって、さすがだわ。上手いんだね？ 先輩達に混じって練習していたのに違和感無いもん」

「でしょ？ でしょう？」

二人は興奮して手を取り合つと、声にならない歓声を上げてその場でぴょんぴょん跳ねた。

「……」

……まるでアイドルの追っかけだわ。慶ってそんなにカッコ良い？

あたしは二人のはしゃぎっぷりに退いてしまった。どうしても二人みたいに、慶がカッコいいとは思えない。

だけど……それは小さかった頃の慶を知っているから？

慶の失敗ばかりしていたのを間近に居て見過ぎてしまったせい……
…なのかしら？

あたしがぼんやりと入部案内を読んでいる間に、姫香は持ち前の視力で、あの遠方で練習している先輩方に混じっていた慶を発見したらしい。そして亜紀は姫香の言葉を確認するため、先に練習を見に行つて来たのだそうだ。

「水を差すようで悪いけど、ここは顧問の先生が男女別々で、練習メニューも違うわ。女子は練習量もきついそうよ？」

「うん。聞いてるよ」

「男子よりも女子の方がレベル高いから、脱落する人が多いんだってね？」

あたしの問い掛けを二人は既に承知していたみたいだった。

実際、男子部員に比べると、女子は男子の三分の二。但し、練習量も多くてきついけれど、毎年試合では上位に入賞している。レベルが高ければ遠征も多くなり、必然的に練習量も小学校とは違って多くなる。時間的・家庭の経済的にも負担が掛り、余裕がなくなってしまう。

あたしはそこまでして部活に打ち込めるかどうか……正直、自信が無かった。実は去年入部した先輩方の殆どが、顧問の先生と揉^もめて退部してしまったのを聞いていたからだ。

それに……

四面あるコートを練習量に合わせて男子部と女子部で振り分ける

そうだから、隣のコートには先に入部してしまった慶が必ず居るって事になるのだ。

第18話 香代の悩み

「判ってるわよ。でも秋庭くんが居るから」

「ん、ねえ」

「……」

二人はタイミングを合わせて大袈裟に首を傾げた。

彼女達はもうとっくに入部を決心しているらしい……でも、やっぱり入部理由は不純な動機のままなのね？

小学校でたった一年間だったけれど、二人とも他の部員より熱心に練習していたせいか、見違えるくらいに上手になっていた。

『秋庭くんが居るからテニス部に……』最初の入部動機はかなり不純で問題有りだったけれど、それでも彼女達はそれぞれ練習を頑張っていたし、最近ではゲームの面白さが判って来たみたいだった。

後はもつと試合数をこなして経験値を上げて行く事くらい。あたしが二人に教えてあげられる事はもう無いし、本人達が今以上に上達するよう努力出来るか……だわ。

「ねえ、香代も入ろうよ？」

「う……うん……」

亜紀にブレザーの袖口を引っ張られて歩き出しても、あたしはま

だ迷っている。

慶を見たら、また変なドキドキが始まっちゃうかも知れない……
あたしはそれが怖かった。

慶を見なければいいと単純に思っていたのは甘かった。最近では
近くに慶の気配を感じただけでドキドキして苦しくなる。

あたしはそのドキドキを姫香や亜紀に……うつん、この事は他の
誰にも知られたくは無かった。

だって、もしかしたら病気なのかも知れないもの。

……どうしよう……？

悩めば悩むほど胸が苦しくなって、不安で堪らない。

もう……慶が居るからだわ。慶が居なければ、こんなドキドキに
悩まされる事なんか無いのに……そんな酷い事を考えてしまうけれ
ど、居れば鬱陶さまよしいと思うのに、いざ姿を見ないと無意識に視線が
慶を捜して彷徨さまよってしまう。

一体あたしってばどうしたんだろう？

あたしって、そんなに慶の事が眼障りで……嫌いになってしまっ
たのかな……？

慶はなんにも悪くないのに。あたしが勝手に慶を動悸の原因にし
て、悪者にしちゃっているだけじゃないのかしら……？

「あの人が女子部の部長だよ？」

「え？」

亜紀に袖口を引かれて、されるままに付いて行けば……あたしはいつの間にか運動場の隅を姫香と亜紀に促されて通り、気が付けば慶達男子が練習しているテニスコートの前に来ていた。

あれこれと考え込んでいるうちに、あたしは二人にまんまと連れて来られてしまったのだ。

「今から入部するわよ？」

「ええっ？　ち、ちょっと亜紀！　あたしは入部するだなんて一言も……」

「遅かったね？」

「は……はい？」

言い掛けたあたしの言葉を遮る^{おさえぎ}ように、背後から慶の声が聞こえた。途端にドッキーンと心臓が大きく跳^はねて、不規則にあたしの胸を打ち鳴らす。

あたしは自分の異変を姫香や亜紀に知られるのが怖くなって、オドオドしてしまった。

こんな時に、なんで慶が……？　な、な、なんで来てるのよ？

慶のお邪魔ムシ！

「あー、アキバケイ。あんたもう入部して練習してんだ。流石はテニス馬鹿だわね」

「『馬鹿』で悪かったな。で？ 三人とも入ったの？」

「えっ？」

その姫香の言葉に、あたしはキョトンとして自分の耳を疑ってしまった。

だって、慶が部活練習しているのを真っ先に見付けて知っていたのは姫香だよ？ なのになった今見付けたみたいな話し方をして……しかも、三人しかいない時の姫香は、慶の事を『秋庭くん』ってちゃんと名前で呼んでいるのに、本人を前にして他の男子と同じ対応で、タメグチ・あんた呼ばわりして……どう言う事？

あたしの頭の中は、疑問符が一杯飛んでいる。

あたしはいつものドキドキを持て余しながら、それでも姫香が気になって顔を上げたら、丁度あたしの真ん前に亜紀が居た。

「……」

ああ……亜紀の慶に対する反応は、やっぱり以前と変わっていない。頬を赤らめて俯いてしまっている。

だけど、その亜紀の向こうで慶と喧嘩腰で話している姫香は、いつもの姫香とは違っていた。

好きな人の前だと、どうやら普段よりもテンションが上がってしまっとがて尖とがってしまうみたいだわ。

「あのね、その『三人とも』って何よ？ あたし達はひと山幾らじやないのよ。失礼ね」

「はあ？ 失礼って言われても別にそんな心算じゃ……」

姫香に突っ込まれて慶が困っている。

あたしはその光景が、昔のあたしと慶の遣り取りに似ているように思えてハツとした。

「秋庭――！ 次、お前だぞ？」

「あ、ハイ！ 香代、まだなら入部しろよ。じゃあな」

先輩から呼ばれて、慶はさっさとコートに戻って行った。

……なにその命令口調。それに、なんであたしが入部を迷っているのを、慶が知っていたの？

二人の前であたしは慶から名指しされてしまい、頬が熱く火照ってしまった。あたしだけ慶から特別扱いを受けてしまい、二人になんだか申し訳ない気がして引け目を感じてしまう。

亜紀はあたしの事を羨ましがり、姫香はと言えば……慶との遣り取りに不完全燃焼だったらしく、少し不機嫌だったのに、慶が居な

くなつた途端にいつもの姫香に戻って『秋庭くん、やっぱいいわ…』
だなんて惚^{のろけ}気する始末。

「はいはい、入部しないのなら、さっさと帰れ。そこでボサーッと突っ立ってたら、アウトボールが飛んで来るぞ」

不意に背後から注意されて、あたし達は驚いた。

振り向けば、詰襟の学生服を着た慶と同じくらい背の高い、色黒の男子が立っていた。

第19話 入部

「ちょっと！ あたし達は入部するために来ているんだから。邪魔者扱いはやめてよねっ！」

不躰^{ぶしつけ}な男子の物言いに、早速姫香が咬^かみ付いた。

「へえ、三人とも『男子テニス部』に……か？」

「なっ……」

「馬っ鹿じゃないの？ あたし達がなんで『男子部』なのよ？」

お約束でボケた彼に、すかさず姫香が突っ込んだ。

「あ？ すまん。この二人が『女子部』で、アンタだけ『男子部』に入りたいみたいだな」

「こ、このお……」

惚^{とぼ}けた彼は、真っ赤になった姫香を指してニヤニヤと笑っている。偉そうな上から目線で馴れ々しく話し掛けて来るけれど、どこか憎めないなと思ってしまふのは、あたし達に対して悪意が全く感じられないからだろうか？

「危な——い！」

「ボール行つたよ！」

練習中の先輩からの声掛け直後に、高く飛んだアウトボールがあたり達を襲った。上空で小さな点になっていた軟式ボールが、急速にこっちに向かって落下して来る。

「動くな！」

彼は上空を振り仰いでボールを捉えたままあたり達を一喝して、素早く手にしていたラケットをケースから取り出すと、真剣な表情をしてあたり達の頭の上で慎重に払って、ボールの落下コースを変えた。

彼によって球威をいなされたボールは、練習中の先輩方の居るコートにコロコロと転がってネットの端に引っ掛かる。

「サンキュ」

「うーっす！」

先輩からの挨拶に軽く頭を下げる彼。

ふーん、先輩にはちゃんと礼儀を弁えているんだ。場の空気を読んでふざけたり、真面目になつたりの切り替えがきちんと出来ているのだわ。そうだと判ると、今までの嫌味も彼の冗談の範囲内に入れて、良くなかった最初の印象が薄れてしまった。

……一人、姫香を除いては。

彼は何事も無かったような素振りで、ラケットを再びケースに片

付ける。

「いや、マジでココに居れば危ないって。入部希望なら俺もだから一緒にいこうか」

「ちょ、ちよつとお！ だから『男子部』じゃないって！ つか、アンタこそ『女子部』に入部するつもり？ 『一緒にいこうか』ってナニ？」

「いんや、誰が『女子部』だよ。男の方はマネジが居ないから、入部希望者は女子も男子も窓口が一つなんだとさ」

『案内するよ』と言ってあたし達の前に行く彼を、姫香は気持ち悪がったけれど、そういう理由なら仕方が無いわ。

「てか、まだあたしはまだ決めて……」

「はい、ウダウダ言わない。『入部するから』ってさっき言ってたろ？」

「それはあたしじゃな……い」

初対面で叱^{しか}られた。あたしじゃなくって、言ったのは姫香なんだってば。

「いいじゃん。ひと山セットで」

「まだ言つかあ……！」

強引な彼に促^{うなが}されて、あたし達は奥のコートで練習を始めている

女子の先輩方の所へと連れて来られてしまった。

「いやゝ女の子が大漁、大漁！ 部活ライフが愉しみだぜい」

今にも鼻歌を歌い出しそうくらい上機嫌な彼とは対照的に、あたし達三人はやや機嫌を損ねてしまった。しかも、あたし達の事を魚か何かと勘違いしているし。

特に姫香は思いつ切り頬を膨らませて鼻息を荒くしている。

あたしは彼のテンポに乗せられてしまい、STOPを掛けるタイミングを完全に失っていた。亜紀もあたしと同じく退いている。

「先輩、入部希望者四名でお願いしまあーす」

「はい。じゃあここにクラスと名前、連絡先を記入してね」

「ハイ」

姫香と亜紀は最初から入部するつもりでいたから別に問題は無かったけれど、迷っていたあたしまで巻き込まれ、不甲斐なくも流されて……断る事が出来ず、結局入部してしまった。

彼の名は『田村 恭介』。親の事情で校区外の東雲小学校から、この春に引っ越して来たのだそうだ。

見覚えの無い顔だわ……と思っていたら、通りでね。

「へー、俺よりも先に入部していた奴が居たんだ。てっきり俺が一番だと思ったのになあー……あき……にわ？……あきにわ？あきば？」

田村くんが口をしているのは、先に名簿に記入されていた慶の事だとすぐに判った。名前に振り仮名が無いから彼は呼び方に少し戸惑っていたみたいだった。

あたし達三人は、これから慶のライバルになるかも知れない田村くんの反応を窺^{うかが}って、息を潜^{ひそ}めた。

「おっ？ これ、アキバケイじゃん。なあーんだアイツかよー」

そう言つと、田村くんは後ろの男子コートを振り返り、慶の姿を探し出す。

「知ってるの？」

「ああ、試合で何度か……あ、居た居たあそこだ」

「対戦していたんだ」

あたしの問い掛けに、彼は黙^{うなず}って頷いた。

あたしは慶よりも色黒で体格の良い田村くんを見て、直感的に彼の方が慶よりも強いと思ってしまった。彼が入部するのなら、慶のライバルになるのかしら……？

急に慶の事が気になって、心配になってしまった。

あたしの表情を読んだのか、田村くんはまたしてもニヤニヤと笑いながらあたしの顔を覗き込んで来る。

「何度対戦してもボツコボコに……負けんだよね、これが」

「……はあ？」

彼のわざとらしい『間』で思いつ切り肩透かしされてしまった。

これも田村くんの得意な冗談なのだろうか、判断に悩んでしまう。

「女子の更衣室はそこ。男子は向かいの奥……少し離れているけれど、つき当たって左が部室よ」

入部手続きを終えた田村くんは、先輩の説明もそこそこにあたり達から二・三メートルほど離れた所で荷物を乱暴に置くと、いきなり制服を脱ぎ始める。

「きゃっ！」

「ち、ちよつとー、なにココで着替えてるのよ！ 部室があるでしょうが！」

「はあ？ つか、下に着てるし。見なきゃいいだろ？」

「そつ、そおゆう問題じゃ……無いったらあ！」

姫香の注意さえ聞いてない。

結構『俺様』な田村くんには、姫香の突っ込みが中々さまになっ
ているように思えた。

第20話 本当の姫香

小学校の時より中学校の校区が広いから、クラスの友達や顔見知りになった人もたくさん出来たし、入部した女子軟式テニス部でも友達や先輩に囲まれて、あたしは充実した中学校生活を送る事が出来るようになった。

入部したテニス部は、小学校での部活とは違って練習量も多いし、一日にこなすメニューも日を追う毎に増えて行つてそれなりにきついけれど、姫香や亜紀もあたしと同じく、音を上げずに頑張つて先輩方に付いて行く。

だけど、たつた一つだけ心に何かが引つ掛かつていて不快だった。急に何かのきつかけで大切な事を思い出せそうな気がするのに、それが何であるのかを思い起せない。不思議な焦りを感じてしまい、それが不安を掻き立てて、胸が苦しくなってしまう。

最近では、みんなとワイワイ騒いでいる時や、あたしが何かに満たされている時に限つて、その奇妙な引つ掛かりを持った『何か』があたしの中のを過つて、夢中になっていた会話に突然醒めてしまつたりしていた。

一体、このモヤモヤの原因は何なのよ……？

あたしは何を焦っているのかしら……？ 何を……？

「て、ねえ、香代？ 聞いてる？」

「え？ あ、ああ……うん……で、何だったっけ？」

「あのね……聞いて無いじゃん」

亜紀の問い掛けに、いい加減な生返事をしてしまったあたしは、姫香に呆れられてしまった。

「……ごめん」

「よく聞いててね？ 明日、八幡神社の夏祭りに、練習が終わった部活の一年生同士で行こうって話していたでしょう？ 亜紀はピアノのレッスンがあるから行けないそうだけど、香代はどうする？」

「い、行くっ！」

どうせ部活が終わったら、家に帰るだけだもの。家に帰ってもお父さんもお母さんも仕事を持っているから、なかなか帰って来ないし、毎日独りで留守番しているのも寂しいわ。

「そう言うと思ったわ。良かったあ、香代が来てくれて」

「え？」

意味深な姫香の言葉に、あたしは妙に警戒する。

「だって、四組の国立さんや中村さんなんか、彼氏を連れて来るって言うのよ？ これって一緒に待ち合わせても良いけれど、後は別行動になっちゃうじゃないのよ。他の子とは、あたしあんまり話し

た事がないからさあ……心細くって」

「みんな女の子だけでしょう？ 七人中、二人だけ？ でも、彼氏連れて来るのは違反だよー」

「でしょ？ でしょう？」

姫香はあたし以上に興奮している。

『彼氏』――

あたしはその言葉が妙に気になり、キーワードとして胸に響いた。

何故だか慶の顔が頭の中でちらつくけれど……あたしの中に現れた慶の顔は、みんな小学生の頃の幼い慶の顔ばかりだった。『彼氏』と言う言葉を聞いてから、あたしの心は妙にざわついて落ち着かない。

どうして……なのかな？

* *

浴衣を持っている子はそれを着て、学校正門に七時半に集合との約束だった。

次の日の部活が終わったあたしは、お母さんが用意してくれていた紺色生地に綺麗な蝶が描かれている浴衣に初めて袖を通し、慣れない手つきで浴衣を着た。

あたしが着ていた小学生の時の浴衣は、白地にピンクが基本色のカラフルな手毬模様で、帯もふんわりしたピンクの幅広い帯のちようちよ結びだったけれど、今度の浴衣は色も暗くて少し地味かなとも思った。でも、帯は浴衣とは反対色の鮮やかな黄色。後ろの部分が先に結^ゆって出来あがっている帯だから、結び方で困る事は無いし、あたしでも簡単に着る事が出来た。

「……わ……」

着つけを終えて、姿見を見たあたしは少しだけ驚いてしまった。

浴衣を着ただけなのに、あたしってこんなにお姉さんっぽくなっちゃった……

お隣の美咲お姉ちゃんみたいで、凄く嬉しくなる。

ついでにお母さんの化粧品を借りようかと思ったけれど……それはこの前に失敗して、お化粧みたいになっちゃったから止めておこうと思い直した。お化粧は、まだあたしには早過ぎるのかも知れないわ。

約束の時間に正門に集まったのは、七人中六人。そのうちの二人は宣言通りに年上の彼氏を連れて来ていて、彼女達二組は早速別行動になってしまった。

あたしみたいに浴衣を着て来たのは、浴衣を持っていない姫香以外全員だった。但し、あたしと一葉^{かずは}だけが足首まで丈がある、昔ながらの浴衣で、他の子達は膝上丈の今風のミニだ。

「羨ましいな……」

そう小さな声で言った姫香の独り言を聞いてしまい、あたしは悪いような気がして、浮かれていた気持ちが一瞬で萎んでしまう。

何故浴衣を着て出掛ける前に、絶対に行く約束していた姫香と着て行くものを合わせてあげられなかったのか……友達なのにそのくらい気を効かせてあげても良かったのじゃないのかしらと。

「香代おー、もしかして今、あたしに凄く悪いって思ってる？」

「うん」

「気にしないで。あたしだけが持っていなかったのはそれなりにシヨックだったけど……でも、よくよく考えたら浴衣が似合うようなあたしじゃないし。良いのよ別に」

「どうして判ったの？」

「だって、香代ってば顔にちゃんと書いてあるもん」

「え？ 何て？」

「あたしに『ごめんね？』って。でも気にしてくれて嬉しかったなあー。あたしはもう大丈夫だから、せっかくのお祭りなのに楽しもうよ？ ね？」

そう言って、姫香はにっこりと笑ってくれたけれど、笑った姫香の目尻からは、光る涙が少しだけ見えていた。

普段、男子にも気遅れしないで張り合うくらいの負けず嫌いで、
芯の強いしっかり者の姫香だと思っていたけれど……本当は自分の
弱い部分を知っていて、それを隠すためにわざと強がって見せてい
たんだわ……

一年以上も一緒に居て、少なからず疑っていたのだけれど……本
当に……そうなんだ。

あたしはこの時初めて『素』の姫香を見てしまった気がした。

「姫香あ~~~~」

「きゃっ？ な、なに？ どうしたのっ？」

あたしは思わず姫香に抱き付いてしまった。精一杯背伸びしちや
つてるアマノジャクみたいで、なんだか可愛く思えたから。

第21話 女神（おんながみ）様のいたずら…1

あたし達の校区には、市内でも一番大きくて立派なお社やしろを持つ神社がある。福の神である女神様おんながみを祭っている県内でも有名な神社で、季節の行事がある度に遠方からわざわざ参拝しに来る人も多い。

神社が近くなるに連れて、沿道には参拝する人達が増えて来た。屋台も神社から随分離れた所から、ぽつりぽつりと見掛けるようになったけれど、朱塗りされた大きな神社の鳥居を過ぎると、もうそこは完全に車進入禁止区域で規制されていた。

普段は車が行き交う片側一車線の道路だけれど、広く余裕を取って舗装されている道路が歩行者で埋め尽くされているのを見てしまうと、つい参拝が億劫になって気後れしてしまいそうになる。

左右の道路脇にはいろいろな屋台がびっしりと軒を連ねて、行き交う人達の眼を愉しませた。美味しそうな焼きそばのソースの匂いや、香ばしいイカ焼きの匂いもして来て、鼻をくすぐられたあたし達は誘惑されてしまいそう。

「香代、たこ焼き買わない？」

「えー、お参りが先でしょう？ それに、荷物が増えるからまだ駄目だよ」

姫香が堪らなくなつてあたしの浴衣の袂たもとを軽く引く。

本当はあたしも賛成したい所なのだけれど、ここはうちの学校の校区内。まだ明るいからたこ焼きを頼張っている時に、知り合いの

子や先輩に逢うかも知れないもの。

それはちょっと恥ずかしいかなと思ってしまう。

「ん、でもね香代」

「なに？」

「一葉達、もうチョコバナナ買って食べてるわよ」

「あ……いいなあ」

一葉達が美味しそうに食べているのを見てしまい、上品なあたしはどこかに消えてしまった。

神社が執り行うお祭り——夏祭りには、昔から健康や農家の収穫などの祈願や厄払いと言った目的がある。ただどあたし達にとって是不謹慎だけれども、お祭りイコール屋台が本当の目的になっちゃっている。そして、もし神様が居てくれたのなら、成績を上げて貰いたいとか、ステキな人と巡り逢えますように……なんて都合の良いお願いをコッソリと言いに来た……くらいにしか思っていない。

「ねえ、みんなは何をお願いするの？」

姫香の質問に、みんなはテストや部活での成績の事や、片想いの彼氏に想いが届きますように……って、やっぱりお約束みたいな都合の良いお願い事が返って来た。

「ねえ、香代はあ？」

返事を洪^{のそ}つていたあたしに気付いて、姫香があたしの顔をぐぐつと覗き込んで来た。

「ええ？ そう言う姫香は？」

あたしはもう一人姫香の質問にまだ答えて居なかった本人に話を振った。

「あ？ あたし？ よくぞ聞いてくれたわね。あたしの願いは、今年こそ『意中のカレに振り向いて貰う』ことよ！」

「えー、それって誰？」

「い……いやあ、あのさあ……今のところはまだ一人に絞^{しぼ}れてなくってさあ……」

「それって複数のカレだよね？」

「う……うん……」

莓チヨコを頬張った一葉が暢気に突っ込んだら、さっきの威勢はどこへやら……息巻いて答えた割には、しどろもどろになっちゃって消極的な答えになってしまった。

「一体、何人居るのよ？」

「……」

「決められないんだ」

「やだ、香代あたしばかりか答えさせて、今度は香代の番だよ？」

真っ赤になった姫香が、慌ててあたしに振って来た。

「いや、あ、あたし……」

本当は、神様が居てくれるのなら、一つだけ願ひ事があつた。

それは、六年生からあたしがずっと悩み続けている事で、他の子達はもちろん、姫香や亜紀でさえ内緒にしていた事。

——以前のように、慶と普通に話せるようになったらいいな。

別に慶と喧嘩したわけじゃ無い。あたしが慶の事を自分で勝手に嫌ってしまい、勝手に慶のなにかもを悪いように思っていただけ。慶は何も悪くはないもの。

でも、そんな事を姫香を前にしては言えないわ。

姫香も慶の事が好きだから。

だから……

「ナ・イ・シヨ」

「あゝ香代、ずるゝい」

祭りのお囃子^{はやし}が近くなって来た。

東西の大きな朱塗りの鳥居からお社^{やしろ}までは、双方ともに約一キロほど距離がある。あたし達は屋台に惹^ひかれて寄り道をしながら、やっと目的の神社に到着した。

普段は広くて閑散としている境内^{けいだい}だけれど、この日は一日限りの夏祭り。日がとつぷりと暮れると、境内のあちらこちらには暖かいオレンジ色の提灯^{ていとう}が賑^{にぎ}やかに点^{とも}された。

所々足元を照らす行燈^{あんどん}のような照明も用意されて、行き交^かう人の足元を照らしたけれど、こう人が多くては足元なんか判らない。

「あー！」

「大丈夫？ 気を付けて？」

人混みに揉^もまれた拍子^{ひょうし}に、あたしは階段があるのに気付かなくて躓^{つまず}いてしまった。見知らぬおばさんから優しく声を掛けられて、恥ずかしくなって慌ててすぐに立ちあがったけれども……

「……………」

あれ……？

たった一瞬だと思ったのに、あたしの傍^{そば}に居たはずの姫香達^{ひめかたち}が……居ない。

……どうしよう。姫香達と、はぐれちゃったみたいだわ……

第22話 女神（おんながみ）様のいたずら…2

あたしは一緒に居たはずの姫香達の姿を捜して、薄暗い辺りを見渡した。

既に姫香達の気配さえ周囲の雑踏に掻き消されてしまい、あたしは一人になってしまった心細さを通り越して、恐怖心すら感じてしまふ。

たくさんの方が行き交う波を避けようとして、見知らぬ人と何度も肩や腕がぶつかった。あたしはその度（たび）に「すみません」と言っ、相手と視線を合わさずに頭を下げる。

「あ、カズハ？ あたし。今ねえ……」

「！」

あたしと一緒に来ていた『カズハ』と同じ名前を口にした人が居た。

ハツとして声のした方を振り返ると、二十代の女の方が携帯に出た『カズハ』さんに話し掛けている所だった。彼女の隣には、赤ちゃんを抱っこした男の人が一緒に居る。

この神社には、今まで幾度となく両親と来た事があった。普段の日なら、明るい昼間に友達同士で来た事もある。でも、こんなに暗くて人が一杯居る境内で、はぐれてしまう事なんか無かった……

一葉の名前を言った女の人が羨ましい。彼女が手にしていた携帯が、これほど欲しいと思った事は無かったもの。なぜなら、一葉も姫香も携帯を持って来ていたから。あたしが今ここで携帯を持ってさえいれば、はぐれてしまう事も無かったのに。

* *

あたしは中学生になる時、共働きの留守勝ちな事を気にしてか、お母さんから携帯を持たないかと勧められていた。

あたしは既に小学校で携帯を持っていた子を何人も知っていた。けれど、その子達は大抵、両親があたしと同じ共働きの鍵っ子だったり、母子・父子家庭の子だったから、携帯を持っているというだけで少し可哀想な家庭環境の子だと言うイメージが出来上がってしまい、余り良いようには思っていないかった。

だから、あたしも携帯を持つ事で他の子達から同情の眼で見られなくなかったし、携帯が無いと困ると言うような事も無かったから、その時は必要なか無いわよと断っていたのだけれど……それはあたしの大きな誤解であり、勘違いなのだと判った。だって、中学生になったら、クラスの殆どの子が携帯を持っていたんだもの。

親から話を持ち掛けられていたにも関わらず、あっさりと自分で断ってしまったから、やっぱり携帯が欲しいだなんて、すぐには言い出せなかった。

取り敢えず、携帯が欲しい状況になってしまった事が無かったものの。

でも、今は違う。

今は一緒に居たみんなの誰でも構わないから、彼女達への情報が欲しい。

とにかく、姫香達と何とか合流しないと……

お社^{やしろ}へ続いている人混みの流れからなんとか離れることが出来た。あたしは、眼を凝^こらして姫香達の姿を捜した。

あたしの視線が行き交う人達に注がれるけれども、眼に付くのはあたしと同じように浴衣を着た女の人ばかりだった。

一緒に来た里^り緒^お達みたいにミニの浴衣姿の人も居れば、あたしみたいに足元まで裾^{すそ}がある昔ながらの浴衣を着ている人も居る。

しかも、浴衣姿の人に限って彼氏らしい男の人と連れ添^そっている。

何組ものカップルを眼にしてしまい、自分の置かれている状況さえ忘れて見入ってしまったけれど、そこで偶然、あたしと色違いで同じデザインの浴衣を着こなしている綺麗なお姉さんが眼に留った。

そのお姉さんが他の人よりも一際美人^{ひとときわ}だったせいもあったけれど……お姉さんの隣に連れ添っている男の人も、背が高く結構イケメンのお兄さんなのに、和装のお姉さんとは正反對の普段着Tシャツに穴あきのダメージジーンズ姿。男の人は本当に彼氏なのだろうか、それとも単なる友達なのだろうかと疑ってしまった。

奇妙なカップルだわと思ってしまっけれど、二人はそんなあたしの視線には気付かず、楽しそうに連立って歩いている。

「いいなあ……」

思わず羨ましくなって言葉が出たら、目の前の景色がぼやけて見えた。

あたしなんか、姫香達とはぐれてしまっって一人なんだもん。

もうこのまま先に帰ってしまおうか……それとももう少し捜してみようか……？ 迷っていたら、左右から人の気配がした。

「あれ、お嬢ちゃん独りなの？」

「え……？」

俯いていたあたしは、それが自分に掛けられた言葉だと思って顔を上げた。

助けてくれるのならこの際誰だって構わないわと思ったけれど、あたしを挟み込むようにして立っているおじさん達を見て、咄嗟とっさに危険だと感じてしまった。

優しくそうに声を掛けてくれたけれど、このおじさん達は困っているあたしを助ける為ではないのだと。

「どうしたのかな？」

「あ……お、お友達とはぐれちゃって……」

「ああ、そいつは困ったねえ」

「お兄さん達が一緒に捜してあげるよ」

『お兄さん』……？

見た目よりも、この人達若かったのかな……？　だなんて思っている場合じゃない。早くこの二人から逃げ出さないと。

「ええ、べ、別にいいです。じ、自分で捜しますから」

「一緒に捜した方が早く見つかるよ？」

「で、でもいいんです。ありがとうございました」

あたしはそう早口で捲し立てると、その場から急いで立ち去ろうとした。

「待てよ。一緒に捜して遣るって言ってるだろ？」

「ひ……」

急に口調を変えたおじさんが、素早くあたしの手首を捕まえた。大きな手でしっかりと捕まえられてしまい、逃げ出せなくなったあたしは怖くなって立ち竦み、声さえ出せない。

——いや！　だれか……助けて！

その時だった。

「ああ、そこに居たんだ」

あたし達の背後から、聞き覚えのある声がどんどん近付いて来る。

「もー、搜したじゃないか。どこ行つてたんだよ」

あたしは今日、女子同士でお祭りに遣つて来た。男子と待ち合わせもしていなければ、彼氏を作った覚えも無い。

だけどその台詞は、今まで一緒に居てはぐれてしまったあたしを捜してくれていたようにしか聞こえなかった。そして、あたしを困らせたおじさん達にもそう自然に聞こえたみたいだった。

「よ、良かったな、見付かつて」

「じ……じゃあな」

言葉とは全く反対に、おじさんは奇妙に口元を歪めると、すりとあたしの手を放して背を向けた。

「なんだ？ 連れが見付かったのかよ……」

背中越しにそう言うと、おじさん達は舌打ちして去って行った。

「……」

あたしは後から現れて助けにくれた人物を黙って見上げた。

第23話 女神（おんながみ）様のいたずら…3

彼が誰なのかすぐに判ったあたしは、本当は今にも泣き出してしまいそうだったのに……意地を張って顔を引き攣らせてしまった。だって、彼の眼の前では絶対に泣き顔なんか見せたくないと思ったから。

泣き顔を見せるだなんて……そもそもアンタの特許じゃないのよ。そうでしょ？

慶。

あたしは何度も息を吸って必死に泣き出すのを堪えた。そのせいか、きつと慶からはもの凄い顔に見えていたのだと思う。

「あ、あのう……ひょっとしてさ、僕が来て悪かったのかな？」

「うー」

んな事有るはずないじゃないのよ？

「もしかして、香代怒ってる？」

「……」

喋る事なんか出来なかった。喋ればきつと、ぱんぱんに膨らんだあたしの涙腺が、容易く緩んでしまいそうだったから。

だけど……

——助かったわ。

あのままだったら不審者おじさん達に、どこかへ連れて行かれる所だったんだもの。

「か、香代っ？」

緊張が一気に解けてホツとしたせいか、あたしは膝に力が入らなくなつて、へなへなとその場に座り込んでしまった。

助けて貰ったのは嬉しかったけれど……でも、どうして慶がここに居るの？ それもたった一人で。いつもの門田くんや田村くん達と一緒にじゃないなんて。

あたしはこの神様に慶との事をお願いしようとしていたのに……まだお社に行つてお願いさえも告げていないのに、神様つてばもうあたしの願い事を聞き届けて……くれたのかしら？

「大丈夫？」

「う……うるさいわよ」

慶が身体を深く折つて、あたしの目線まで屈み込んで来る。

こんなに大勢の人混みの中で……慶はあたしを見付けてくれたんだ。そう思うとなんだか気恥しくなつて、あたしはぷいとそっぽを向いた。

「…………ごめん」

「な、なんで慶が謝るのよ？」

かあああつと顔が熱くなる。

謝るのはあたしの方だわ。あたしの方だとは判っているのだけど……でも……でも……こんなに急に会っちゃうだなんて、心の準備がまだなのに……素直になんか……なれないわよ。

「ごめん。でもその元気なら、気遣い無用だったね」

「そんな……そんなんじゃ……ない」

安心したような慶の穏やかな声がした。

近くでハッキリと聞いた慶の声は……今まで聞いていた声よりも幾分低くて太い声になっていた。慶と距離を置いてしまったあたしの知らないうちに、慶はもう声変わりをしちゃっていたんだ。

「慶いー、その子香代ちゃんだったのお？」

「うん」

「じゃあ、先に行くわよ？」

「判った」

「……」

なんだ。慶は美咲姉さんと一緒だったのね。

慶が振り返った先を見ると、浴衣を着た美咲姉さんともう一人。美咲姉さんに寄り添っている和服姿の男の人が居る。察する処、あの人が美咲姉さんの彼氏みたい。

うわぁ……なんて素敵でお似合いなのかしら……？

あたしは慶に助けて貰っていると言うのに、今どき珍しい和装姿のカップルに心を奪われてしまい、見惚れてしまった。

さっきの『浴衣美人』と『不良オトコ』の奇妙なカップルも気になったけれど、やっぱりあたしはこっちの正統派美咲姉さん達の方が断然素敵でいいなと思った。

「立てる？」

慶は心配そうにあたしの顔を覗き込むと、あたしの眼の前に掌てのひらを上に向けて差し出して来た。

「……」

あたしはスマートに差し出された慶の手に、自分の手が出せなくて、自力で立ち上がろうとしたのだけれど……膝に全く力が入らない。

それほどさっきのおじさん達の事が、怖くて堪らなかった。あん

な怖い思いなんかさつさと忘れてしまいたいの、今頃になって冷や汗を掻き、身体が自然と震えて来る。

「じゃあ、おんぶしようか？」

慶があたしに向かつて、くるりと背中を向けた。

うちのお父さんほどじゃないけれど、慶があたしに向けた背中は……随分成長していて広くなっていた。Ｔシャツ越しに引き締まった背中の筋肉が盛り上がって見える。

あたしの中に棲んでいる慶の『時間』は止まっていて、未だに小学生のままだった。だから、成長した慶の姿に驚いて気後れしてしまう。

「い……いいわよ。小さい子じゃあるまいし。自分で立てるから」

「だって、香代立てないじゃないか」

「き、休憩しているだけなのっ！ 浴衣姿なのに、おんぶしようだなんて言わないでよ。まったくもう！ こっちが恥ずかしいでしょう。そ、それに慶こそ美咲姉さん達と一緒に行かなくってもいいの？」

「ああ、良いんだ。要兄ようにいと一緒にこうって誘ってくれたんだけど、美咲は僕が付いて来るのを凄く嫌がっていたから。でも、要兄の誘いを断るのも何だか悪い気がしてさ……で、結局ついて来たんだ」

慶は恥ずかしそうに照れ笑いを見せる。

「『要兄』って言うんだ。あの人」

「うん。美咲と結婚……するんだって」

「え？」

「そのうちにね。要兄に愛想を尽かさなきゃだけど……ね」

「……」

慶はほんの少し頬を赤くして、嬉しそうにそう言った。

まさか慶の口から『結婚』と言う言葉が出て来るとは思わなかったわ。あたしよりも幼稚でいつまでも子ども々々している慶だと思っていたのに……

あたしは美咲姉さん達が消えて行った人混みの方へと視線を送った。頭の中で、何度も『結婚』と言う憧れの言葉が繰り返して浮かんでは消えて行った。

第24話 女神（おんながみ）様のいたずら…4

「ほら、手を出して？ もう立てるだろ？」

「え、ちょ、ちょっと待って……」

慶は半ば強引にあたしの手を取ると、立ち上がらせようと腕を引く。

あたしは立つつもりは無かったのに、慶から片手でひょいと引き起こされてしまった。タイミングもあったのかもしれないけれど、あたしの殆どの体重が慶の片腕に掛ったはずだわ。

「お、重いでしょ？」

「なにが？」

「……あたし」

「え？ そう？ ……別に？」

あたしは慶と眼が合わせられないどころか、恥ずかしくて消えてしまいたいくらいだったのに、慶はけろりとしてそう言った。でも、口では大した事無いだなんて言っているけれども、本当はあたしの事が凄く重かったって顔をしているに違いないんだから。

慶の言葉を疑ったあたしは、それまで逸らしていた視線を恐々慶に移した。

「……」

お互いに立ったままの状態で、あたしは慶の顔を見上げてしまった。

嘘……

慶って、また背が伸びたんだ……

もちろん、あたしだって成長期。身長も女子の標準に近付いて来ているけれど、百八十以上もあるお父さんがいる慶には、全く敵わなかった。顔つきだって昔よりも少しだけキリツとして、お兄さんっぽくなっただよに見える。

久し振りに近くで顔を見合ってしまったあたしは、妙な照れと恥ずかしさから身体の火照りを感じていた。

こんなにも慶が成長していただなんて予想外。『男の子』だったはずなのに、急に慶が『お兄さん』みたいに思えて来る。このあたしを置いてきぼりにするだなんて……は……反則……なんだから。

視線が合った慶は、ふわりとあたしにほほ笑んだ。

「一人で来たってわけじゃ無さそうだね。他のみんなとはぐれたの？」

「う……うるさいわね。見りゃ判るでしょ」

触れて欲しく無かった事を蒸し返されてしまい、あたしは可愛げ

無く口答えをしてしまう。

「見りゃ判るって……まあ、それはそうんだけど……」

慶はそれ以上、みんなの事については何も言わなかった。言えなきゃとあたしが怒り出すと思ったのだろうけど……本当のあたしはその逆だった。

きっと、居なくなつたあたしをみんなが心配していると思った。不注意とは言えみんなに迷惑を掛けてしまい、情けなくて自分が嫌になっちゃうもの。これ以上、あたしを落ち込ませないでよ。

だから、慶にはそつとしておいて欲しくて、つい、きつい言い方をしてしまった。

「そうだ。はい、これ」

「なに？」

言うなり、慶は手にしていた綿菓子の大袋をあたしの目の前に差し出した。

さっきからずっと片手で後ろに隠していたものが、まさかこれだったなんて……見掛けは大きく変わったけれど、中身の成長はまだなのね？ そう思って、あたしは多少なりと上からの眼線を慶に送ってホッとす。

「要兄から貰ったんだけど、僕はこういう砂糖系の菓子って苦手なんだ。良かったら貰ってくれない？」

「……だつたらなんで買つて貰つたのよ」

さてはあたしの眼線に勘付いたのね？ でも、なあんだ。慶が強^ね請^だつて買つて貰つたのじゃなかったんだ。

「印刷されているキャラクターの絵が懐かしくて見ていただけなんだ。そしたら要兄が買ってくれたんだよ」

「欲しくなかったのなら断ればいいじゃない」

「うーん、まあそれはそうなんだけどさ……これが美咲だつたら絶対に断つて……って言うか、僕に買ってくれたりなんかしないからね。こつこの。小遣い貰っているんだから、自分で買えって言うだろうし」

「ふーん」

「なんかさ、要兄の気持ちが嬉しくつて」

「あー、だから断れずに買つて貰っちゃったんだ」

「そうなんだ」

そう言つて慶は苦笑^{にがわら}いをしながら頭を掻いた。

『僕、本当はお姉ちゃんじゃなくつて、お兄ちゃんが欲しかったな……』

美咲姉さんと喧嘩をする度に、負けた慶はその言葉を口にしていた。姉弟が居るだけでも一人っ子のあたしにとっては羨ましい悩みなのに、なんて贅沢を言っているのよとあたしはずっと思っていた。

でも、美咲姉さんが結婚したら、慶にはお兄さんが出来るんだよね？

さつき遠眼でしか見えなかったけれど、要兄さんは中タイケメンのお兄さんだったし、慶の嬉しそうな顔を見て、とても優しい人なのだと判ってちょっぴり妬けた。

「受け取っておいてなんなのだけど……やっぱりこれ、返すわ」

「なんで？」

「慶が要兄さんから貰ったのでしょ？ 受け取れないわ」

あたしは一旦慶から貰った綿菓子を返そうとした。

「いいつて。それに『あの時の』をまだ香代には返していなかったから」

「なにが？」

慶はあたし達が小学二年生だった時、夜店で買って貰った大袋の綿菓子を、あたしが一人で食べきれないだろうからって、あたしのお母さんが慶に半分あげてしまい、怒って泣き出した話を話した。

「あの時はびつくりしたよ。香代が泣いて怒るんだから」

「そんな……そんな大昔の話なんかされたって、あたしは覚えてなんか……いないわよ」

遠い眼をして嬉しそうに当時の事を思い出す慶に、あたしは一種、恐怖みたいなものを感じてしまい、怖いなと思ってしまった。あたしが覚えていない事まで……ううん、覚えていて欲しく無い事まで、慶は昨日の事のようにしつかりと覚えてくれていたんだもの。

覚えてくれていて嬉しい……と言うよりも、なんだか自分の弱味を握られているようで……ちょっとだけ慶と一緒に居るのが嫌だなって。

「だから、これは『あの時』のお返しだと思って貰ってくれない？」

「……う、うん……慶がそう言うのなら……」

慶の穏やかな話し方に擦くすくられたような気がした。

第25話 女神（おんながみ）様のいたずら… 5

「慶はもう御参り済ませたの？」

「うん」

「じゃあ、もう帰ろうっか？」

あたしの願い事はもう叶ったし、さつき嫌な眼に遭ったから、これ以上の長居は無用だと思った。それにこれだけ大勢の人が御参りに来ているんだもの。

今のあたしは慶とツーショット。だから、そ、そのう……デ、デ
ートしているみたいに見えちゃうとアレだし、ましてや姫香達に見
付かったら、この状況をなんて言い訳……い、いやあのその……な
んて説明すれば良いのか……

今日はお祭りに来ていないけれど、亜紀が慶の事を想っているのは判っているし、気の多い姫香だって、本命は慶なのかも知れない。あたしは、二人とも慶の事が好きだと知っているから、幼馴染のお守役だったあたしが慶を独り占めして一緒に居ちゃ、なんだか悪いような気がするもの。

「香代は参拝済ませたの？」

「あ……ああ、その……」

「なに言ってるの。正直に言いなよ。もう。まだ行っていないんだろ」

「？」

「……………」

当たり。あたしは心の中で返事をする。でも、しどろもどろの答えになっちゃったから、一発でバレちゃったのかも。

「行くよ？」

「つて、何処へ？」

思わず聞き返してしまった。慶は困った顔をして小首を傾げる。

「なに言ってるの？ 神社に決まってるでしょ？」

「あ？ ……う、うん……そ、そうだね」

慶にリードされて、あたしは渋々従った。周囲の雑踏に紛れてあたし達は肩を並べて歩き出したけれど、あたしはそわそわして落ち着かない。

お祭りのお囃子の音が近くに聞こえ、和太鼓の力強い音が、あたしの早くて浅い呼吸に合わせるようにドンドンと身体に鳴り響く。

お願いだから、誰にも会いませんように……

あたしは心の中で祈る様に呟きながら、いつ顔見知りの誰かに会

うかも知れないと言うドキドキの状態を気にしていたのに……中々そんな状況にはならなくて、気が緩んだあたしは、いつの間にかそれさえもスリルとして余裕で愉しんでしまった。

しかも周囲にはあたし達と年の近いカップルも結構居て、あたしの視線が無意識に同年代のカップルを捜している。

……もしかしたらあたし達、あんな風に他の人達から見られているのかな？

そう思うと嬉しくなって浮かれてしまった。

「ねえ、慶はどんな子がタイプなの？」

「え……？」

慶は一瞬あたしの質問に困ったような顔をした。

会話が途切れてしまい、黙ってお社へと向かって歩くだけになってしまったあたしは、この沈黙の状態が我慢出来なくなっていた。

殆ど顔を合わさなくなってしまったし、お互いに状況は違っている。せつかくの接近チャンスなのだから、亜紀達が一番慶に聞いた事を聞いてみようと思った。

で、あたしもそこところは是非聞いてみたい気が……するし。

歩いていた慶は、急に足を止めてゆっくりとあたしの方へ身体を向けた。思わずあたしの胸がドキンと弾む。

「いや、急に聞かれても……」

「ううん、違う。違う。あたしが気になっているのじゃなくて、男子の意見を聞きたいと思っただけ……だけなのよ。でね、慶の意見はどんなのかなあーって」

「……」

「あ？　んなつ、なに？　そ、その疑いの眼は？」

慶はすぐには答えてくれなかった。訝ってあたしの様子を窺^{うかが}っている慶の視線に、またもやドキドキの動悸が……

「そ、それとも、もう彼女が出来た……とか？」

「いや、居ないよ。まだ……」

慶の答えにドキドキしながらホッと胸を撫で下ろした。だって『居るよ』って言われたらどうしようかって……返事に困ってしまっただから。

「『まだ』……って事は？」

あたしの視線を受け取って、慶は軽く頷^{うなず}いた。

「そうだなあ……すぐに想った事が顔に出て、判り易くて『嘘』が吐けない娘……かな？」

「は……あ……」

「なんかさ、判り易い所が可愛いかも」

「なんだか曖昧な言い方ね？」

慶の言った言葉をもう少し解釈してみると……

あたしの頭の中には、純情可憐ではにかみ姫の亜紀の顔が浮かんだ。亜紀は今年のバレンタインに勇気を出して慶にチョコを渡しているし、去年は同じクラスだったから慶が亜紀の事を知らないはずは無い。

確かに亜紀なら慶の理想の彼女にぴったりかも知れない。積極性を持ちたいからって理由でテニス部になんか入っているけれど、普段は本ばかり読んでいるおしとやかな文学少女で、男子とはなかなか会話に至らないオクテ中のオクテ女子。

そうなんだ……慶は亜紀みたいな女の子が好きなんだ……

なんだ。ちょっとだけ残念……かも……

「……って、香代、聞してる？」

「え？ え、ええ、き、聞してるわよ？」

慶からの急な『振り』に驚いて、あたしは慌てた。

「いや、聞いてなかっただろ？ 今の」

「ええ？ きつ、聞いていたわよ。わ、判り易くて単純な子が良い

「んでしょ？」

「……………」

あたしのつつけんどんな言い様が癪に障ってしまったのか、慶は少しだけムツとなって眉を寄せる。

「んな、なによ？」

「まったく……なに誤解してるんだよ？　僕は……の事が……」

「ええ？　なに？　聞こえないわよ？」

「だから……………」

肝心な所を言い掛けた慶の言葉は、お囃子のクライマックスになった和太鼓と見物客の歓声に掻き消されてしまった。

「なに赤くなってるのよ？　聞こえないってば！」

「も……………もういいよ……………」

一人でなに鼻息を荒くしているのよ？

亜紀が好みだつてさつさと認めちゃえば良いものを、ごちゃごちや言うから邪魔が入って……………聞こえなかったんじゃないのよ。

「だけど……………やっぱり慶は亜紀みたいな女の子がいいんだ……………お守り役だったあたしなんかじゃ……………駄目……………なんだよね？」

第26話 女神（おんながみ）様のいたずら…6

慶に女の子のタイプなんか聞いたりするのじゃなかったわ。『男の子からの一般的意見を聞きたい』だなんて、本当はそんな事なんか考えてやしないのに。

慶が……慶の事が気になったから、知りたかったただけなのに、都合の良い口実なんかを見付けたりして。

答えを焦り過ぎたあたしは、半ば判り切っていた答えだったはずなのに……やっぱり少しだけ後悔してしまった。だって、亜紀も慶の事が好きなんだもの。

これって……どう見たって両思いだわ。なのに二人に動きが無いって事は、慶がまだ動いていないって事だと思う。だけど、いずれあたしが思い描いているような展開に……なっちゃうのかしら？

慶から想われている亜紀の事が羨ましく思えた。慶は楚々としたおとなしい子を選ぶのね……残念だけれど、あたしには慶の理想には近付けそうに無いわ。

「……」

……なんだろう？ この胸のモヤモヤは……？

慶の事を想う度に、胸が苦しくなって切なくなる。

「どうしたの？ 急に立ち止まったりして」

「え？ …… な、なんでも …… ないよ」

お社^{やしろ}へ、慶と話せた事のお礼を伝えて、無事に誰とも遭わずに参拝出来た帰り道に、慶の事を考えてぼうっとしていたあたしは、慶の呼ぶ声に驚いて、貰った綿菓子で顔を隠した。

…… 慶があたしを見てる……

慶は、嘘が吐けない素直な子が良いと言っていたのに、あたしは平気で嘘が吐けるもの。慶の理想が知りたくて、適当な口実を作って聞き出せるんだもの。

ドキドキの鼓動が鳴り止まない。

「よお、なんだよ結局ツーショットしてンじゃん」

聞き覚えのある乱暴な喋り口調に、あたしは飛び上がるほど驚いた。恐る々振り返ると、そこには見知らぬ女の子と一緒に来ていた立川が居た。

立川は去年…… 六年生の時にあたしと掃除当番だったグループの一人で、慶と離れたあたしに何かと付き纏^{まと}い、あたしから相手にされなかった拳句にあたしの顔に雑巾を投げ付けて、その後卒業するまで、クラスの女子全員から総スカンの完全無視を喰らっていた。

女の子に酷い事をしたのだから、無視されても当然の仕打ちだわ。

被害を受けたあたしは、それ以来立川と話す事はおろか、顔さえ合わせる事は無かった。

嫌な奴に、慶と一緒に居るのを目撃されてしまったわ……そう思ったのだけれど、慶はあたしとは違っていた。

「よ、久し〜。クラスが違うだけなのに、全然会わないな」

「ああ、お互い部活で忙しいからな。でも、奇遇と言つか、やっぱりと言つか……」

爽やかに挨拶をする慶とは反対に、立川は意味有り気なニヤニヤ笑いを浮かべてあたし達に近寄った。

「？ なにが？」

「惚けるなよ。ドバシの事に決まってるだろ？」

立川は、左右ズボンのポケットに両手を突っ込んで、わざとらしく肩を聳^{そび}やかし、あたしに向かって横柄に顎^{あご}を杓^{しゃく}った。

「？」

「お前、なにバツクレてんの？」

「香代がどうかしたのか？」

「ああッ？ シカトすんなよ」

さっきの不審者おじさんとほぼ同等。相変わらず偉そうに淒味を利^きかせる立川は、そこいらの不良と変わらない。それなのに、慶はなんでも無いみたいだ。

あたしは昔の嫌な事を思い出してしまい、怖くなって慶の後ろに隠れた。

「ああー、もうあんなこと遣らねーから、そんなに俺の事嫌うなよ」
「……」

あたしは慶の右腕から、そうつと顔を覗かせる。

「わざとじゃ無いって言ったら嘘になるけど……あの時は悪かったよ。でも、俺だって反省していたんだぜ？ 遣り過ぎだって」

「なんかあったのか？」

あたしに話し掛ける立川を訝って、慶は惚けた質問をする。だって、慶はその時居なかったから、あたしが立川から雑巾を投げ付けられた事は知らないもの。

「つま、イロイロとね。アキバケイの知らねーところ、イロイロ訳アリだったのさ」

「やだっ、立川もう止め……」

「ねえ、話まあくだあ？ もう行こうよお」

あらぬ妄想を書き立てるよう、意味深に言った立川の口を塞はさごう
と言い掛けたら、立川に連れ添っていた茶髪彼女が口を挟んだ。

そうそう。彼女を放ってないで、さっさと何処かに行って欲しい
わ。

「まあ、待てよ久し振りに……」

立川が彼女を説得している最中に、慶が人混みの中から誰かを見
付けて眼を細める。それが誰なのかすぐに判って、慶は大袈裟に両
手を大きく左右に振った。

「おーい、門田あ、こっちだ!」

「おお? アキバケイ? やっぱオマイも来てたのかよー?」

「アキバケイ! いやっほーう!」

「あれ? 田村も?」

「ンだよー。オマケで悪かったな」

慶は人混みの中から、慶の友達であるテニス部員の門田くと雛
乃のカップル。そして今年転校して来た田村くんと……何故か田村
くんにくっ付いている姫香を見付けた。

「って、お前等俺に言わせるよっ!」

一人、みんなから台詞を強引に止められた立川が、情けない声を
出してみんなから笑われる。

なんで姫香が田村くんと一緒に……居るの？

あたしの視線を感じてか、姫香は肩を竦めてペロリと舌を出した。

「良かったあ、香代が見付かって」

「で？ あたしの事は放っぽって、田村くんとデートなわけ？」

「え？ ち、違うつて」

田村くんが慌てて否定する。

「そうだよ。違うよー。一緒に香代を捜してくれるって言うからさあ……」

「でもどうして一人なの？ 一葉や沙耶は？」

「それがさあ……あたしも香代の事捜してて、余所見してたら一人になっちゃったんだなこれが」

本当なのかなあ……？ なんとなく、あたしをダシにされたような気が……しないでもないのよね？

「あゝ！ 姫香！ 香代おー！」

「捜しちゃったよおー！ もあ、どうしようかって言ってたところだったんだあー」

「沙耶、一葉あゝ！」

人混みの中から不意に呼ばれて、あたしは一緒に来ていた女の子達と再会する事が出来た。

「おーし、メンツ揃ってるから、イッチョ歌い上げに行くか？」

「おー！」（×八人）

慶の二次会カラオケ提案に、全員が盛り上がる。

……一人、あたしを除いては……

せっかく慶と二人つきりで良い感じになっていたのに……みんなが揃ってくれて嬉しいのは嬉しいのだけれど……こんな……こんな……のって、無いわよう。

神様のいじわるうう……！

帰宅後、お母さんにお祭りでの出来事を話した。

お母さんは、笑いながら、みんなと出会えてよかったねと言った。

「香代は、あのお社に女神様おんながみが祭られているのは、知っているわよね？」

「うん」

「祭られているのは女神様だから、カップルでお参りに行くと、神様が妬いてしまうのだって」

「ふーん……」

「だから、お友達同士で行った方が良いのよ」

「そ、そんなの、もっと早く話してよね？」

女神様が嫉妬する……

あたし、とんでも無い事を神様にお願いしちゃったから、神様が拗ねちゃったのかなぁ……

第27話 亜紀と慶…1

「でも、慶くと話せて良かったじゃない。あんたは昔、慶くんの面倒はあたしが見るのって言うていたからねえ」

「や、ヤダお母さん……」

お母さんは一体いつの頃を思い出しているのよ？ 少なくとも、小学校低学年の頃はそう言っていたのかも知れないけれど……大昔の事を引き合いに出されても、あたしだって困るわ。そんなのってもう『時効』よ。

だけど……母さんから冷やかされてしまったけれど、あたしは少しでも気持ちが上がってきた。このまま、以前のように慶と仲良く出来ればいいな……

そう思っていたのに……

* *

新人戦が近付いて来ていたある日の事、双方の顧問の先生が不在で、本番さながらの試合形式でゲームを遣っていた時に起こった。

「アキバケイ！ 任した」

「オツケ！」

ダブルスで後衛こうえいを受け持つて居た慶が、相手コートからの高い口
ピングボールを眼で追いながら、軽快な足取りでスマッシュを決め
ようと後退する。高く左手を上げてバックスイングの体勢に入った。

あたしはコートが空く順番待ちをしていた。

相変わらず、隙の無い構え方をする慶に、あたしは少しだけとき
めきみたいなものを感じて、慶の姿を眼で追った。

丁度、隣で練習していた女子部のコートから転がったアウトボー
ルを、亜紀が必死に追い掛けていたのに、殆どの部員が慶のスマッ
シュが決まるかどうかを見届けようとしていて、二人のニアミスに
寸前まで気が付かなかった。

「亜紀！ 避けて！」

「っああ、ヤバイ！ アキバケイ！」

「STOP！」

「ぶつかる！」

二人の危険に気付いた部員達がそれぞれに警告するけれど、『わ
ー』と言う悲鳴に似た声に掻き消されてしまい、あつと言う間に二
人はお互いに気付かないままぶつかった。慶は背中を丸めて屈んで

いた亜紀に足を掬すくわれるような格好で転倒してしまう。

乾いたグラウンドコートから、土煙がもつもと舞い上がる。

「いたた……」

後ろから転んで、背中を強したたかに打った慶が呻うめいた。

「きゃあー！ 亜紀い！」

「大丈夫かつ！？」

「アキバケイ！ 早く退きなさいよっ！」

姫香の金切り声が炸裂する。

慶の下敷きになってしまった亜紀は、部員どころか隣で練習していた陸上部や校舎テラスに居た吹奏楽部等の他の部員達から一斉に注目を浴びてしまい、真っ赤になって顔を伏せた。

「大丈夫？ どこか痛く無い？」

「大丈夫かつ？」

姫香とあたしが慌てて駆け寄った。男子部員も駆け寄って、二人の無事を確認する。

「う、うん……」

「ごめん、遠藤さん。怪我しなかった？」

慶が慌ててグラウンドに正座して、亜紀の無事を確認する。

「だ……大丈夫……です。すみません、秋庭さんこそ怪我はない？」

「あ？ ああ、別にどこも……って、痛ッ！」

亜紀の無事な表情を確認してホッとしたのか、慶は利き手に痛みを感じ、右手首を庇って蹲る。

慶達の隣のコートでゲームをしていた先輩方も、ゲームを中断して遣って来た。

「転んだ時に、捻ったんだろう。秋庭、保健室に行って来い！」

「っは、ハイ……」

痛さに顔を顰めながら、慶が先に立ち上がった。

あたしは利き手を痛めた慶の事が心配だったけれども、慶には男子部員が大勢居るし、きっと大丈夫だよと自分に言い聞かせる。それよりも、身体の大きい慶の下敷きになっちゃった亜紀の方が可哀想だ。

「亜紀、立てる？」

「う……うん……！」

亜紀は両手を着いて、慎重に立ち上がろうと右足に力を入れた。

「亜紀っ？」

「い……た……」

途端に亜紀のバランスが崩れて、糸の切れた操り人形みたいにその場に崩折れそうになった。

みんなが息を飲んで亜紀を見守ってしまった瞬間、先に立って亜紀の様子を窺^{うかが}っていた慶が、倒れ掛けた亜紀の左腕を掴んで、タイミング良く引き寄せた。

慶に支えられて事無きを得た亜紀は、もう耳朶^{みみたぶ}まで真っ赤だ。今にも破裂しそうなくらい心臓がドキドキ音を立てているのじゃないのかしら。

「ごめん。遠藤さんに怪我させちゃったみたいだ」

「あ、あのっ、そ、そんな……そんな事な、無いです。あ、ああ、あたしが周りを見ていなかったからこんな事に……あたし……あ、あたしの方こそすみません」

「うわっ」と？

亜紀は慶に支えて貰っていたのを忘れてしまい、深々と頭を下げた。

急に亜紀から体勢を崩されてしまい、亜紀の『重心』を見失った慶がバランスを崩しそうになってうろたえる。

女子部のキャプテンも騒ぎを聞き付けて遣つて来た。

「二人とも保健室で見て貰いなさい」

「はい」

「付き添いは必要かしら？」

「いえ、大丈夫です。平気ですから」

慶の返事を聞いた両方のキャプテンは二人を保健室に向かわせると、他の部員に緊急招集を掛けて、注意喚起を促した。うなが

第28話 亜紀と慶…2

本当に大丈夫なのかしら？

慶はみんなにそう言っていたけれど……男子キャプテンと短い遣り取りをしていた間に、慶が庇^{かば}っていた右手首は、見るうちに赤く腫^はれ上がっていった。

キャプテンが『ねんざ』したのかと言っていたけれど、『ねんざ』ってあんなに腫れちゃうものなのかな？

亜紀は慶とは反対で、もの凄く痛くそうだった。

最初は慶がおんぶして連れて行くよと言ったけれど、慶も怪我をしているのにそんな事はさせられないと、男子キャプテンが身体の大きい田村さんに亜紀を保健室へ連れていかせようとした。

でも、亜紀はこれ以上迷惑は掛けられないからと、今にも泣き出しそうな顔をしてキャプテンからの勧めを拒み、独りで行くからと言いつけて両キャプテンを困らせた。

見兼ねた慶が肩を貸して亜紀を連れて行くことになったけれども、それでも亜紀は恥ずかしがってなかなか慶に触れようとはしない。

「……」

あたしは小さくなって行く二人の後ろ姿を、複雑な想いで見送っていた。

保健室がある校舎に二人が辿り着くまで、亜紀はずっと片足ケンケンで移動して、痛めた右足は一度も地面に着けたりはしなかった。ケンケンが辛くなった時の少しの間だけ慶に肩を貸して貰っている。亜紀の姿が、妙に脳裏に焼き付いて離れない。

来月予定されている新人戦まであと僅^{わず}か。もちろん、二人の怪我の事も気になるし、心配だった。

でも……

亜紀は慶の事が好き……なんだよね？

そして、慶は……

——慶は亜紀みたいな女の子が好みだったよね……

夏祭りで慶と二人つきりになれたあの時、肝心な部分が周りの雑音に掻き消されてしまい、全く聞き取れなかったけれど、慶は『すぐに想った事が顔に出て嘘が吐けなくて判り易い』……亜紀みたいな女の子が好きなんだよね？

練習中、不安な想いは一向に晴れず、心の隅に湧き上がった黒い暗雲はどんどん拡がって行った。そしてあたしの身体に重く押し掛かり、ボールへの反応を更に鈍くさせていた。

「土橋さん、ちょっと……」

「はい」

練習とは言え、三ゲームともストレートで落としてしまったあたしは、ゲーム終了後にキャプテンから呼び出されてしまった。

「貴方が呼ばれたの、理由はもう自分で判っているわよね？」

「……はい」

あたしはキャプテンが何を言いたいのかすぐに判り、肩を落としてがつくりと頂垂れた。

ゲーム中、凡ミスの連発に　インターフェアが二回。あたしとペアを組んでいた松木さんが怒ってしまうのも仕方が無い。

「仲の良い遠藤さんが怪我をしてしまって、気になるのは判らなくも無いけれど……本人は大丈夫だと言っていたのだから、貴方も彼女の言葉を信じてあげなくてはね。幾ら練習だからって、試合中では泣き言は言えないわよ？　もっと気持ちを切り替えて　コンセントレーションを上げて行かないと。今が大切な時期だって事を忘れているの？」

「い、いえ……判っています……」

うつん、判っていなかったから負けたんだ……

「土橋さん？　下を見ないでこっちを見なさい？」

「……はい」

穏やかに諭さとすよう言ったキャプテンの声に、あたしはなかなか顔を上げることが出来なかった。

あたしは一度も勝てなかった理由を、慶と亜紀の怪我のせいにして、尤もっともらしい言い訳をしていたんだ。ううん、違う。怪我は単なる口実で……本当は二人の仲が気になって仕方が無かったから……想像の域を出ない『仮定』としての妄想で、自分の不安を煽っていたから……こんな結果になってしまったんだ。

あたしは自分が情けなくて堪らなかった。

* *

練習が終わり、コート整備も完了して部屋に戻ると、先に部屋に入っていた先輩方は、怪我をした二人の話題で持ち切りだった。

三年の先輩方は、顧問の先生が不在の時に起こった予測可能な怪我に、責任を感じて落ち込んでいる。その先輩方を慰める人が居れば、一方的に慶が悪いとして男子に責任を押し付けようとする人まで出て来る始末。

あたしはそのどちらでも無いと思った。

ぶつかった二人の注意力が足りなかったせいももちろんだけれども、慶の試合に気を取られてしまい、二人の危険を予測出来なかつ

たあたし達にも、全く責任が無かったわけじゃ無いと思うもの。

「亜紀、どうなったのかなあ……」

姫香が心配そうにぽつりと呟いた。

男女合わせると二クラス分が簡単に出来るほどの大人数。部員全員が保健室に押し掛けて行くわけにはいけないので、先輩からは様子見は控えるようにと先に言われていた。

「ねえ、亜紀に会いに行かない？」

あたしは着替えをしながら、隣で同じく着替えをしている、元気の無い姫香に声を掛けてみた。先輩は『控える』と言っただけで『行くな』とは言っていない。

てつきり姫香からは、OKを貰うものだとばかり思っていたのに

……

「ごめん香代……あたし、実はこれから用事なんだ」

「えっ？」

「だから、亜紀の事が気になっても、時間が無くて行けないの。ホント、ゴメンね？」

手早く身支度を済ませた姫香は、あたしに向かって拝むように両手を合わせると、胸の前で右手をひらひらと左右に振ってサヨナラをする。

「え……?」

先に部室から消えて行く姫香の姿を追って、虚ろになったあたしの視線が漂った。

「あーら、香代。姫香はあんたよりもデートの方が大事みたいだね?」

あたし達の遣り取りを見ていた二年の先輩が　　もったい　勿体を付けて
そう言ったけれど、あたしは先輩にそれが何故なのかを問ただい質す気
力さえ失くしていて、姫香が消えた部室のドアを見詰めたまま、呆
然と立ち尽くしていた。

「なになに?」

あたしの代わりに他の先輩が話に参加して来る。あたしに話を振
った先輩は、乗って来ないあたしを無視して勝手に喋り始めた。

「あのね、先週の土曜日にさ、姫香と新田高の男子が二人で歩いて
いたのを見ちゃったのよ」

「ええ……?　それ、本当に高校生?」

「うん。だって鞆、新田の校章だったもん」

「姫香やるう!」

あたしにわざと聞こえるように話す二年の先輩方。

あたしは『心配だ』と口に出しておきながら、怪我をした亜紀の様子を知ろうともせずにさっさと帰ってしまった姫香の行動が信じられなかった。

三人の中ではいつも姉御肌であり、あたしなんかよりもずっと亜紀と仲が良いのに……

姫香の事を疑い始めると、先輩方のひそひそ話で裏付けされてしまい、それが単なる噂じゃ無く本当だったのではないかしらと錯覚を起こしてしまいそうになる。

どうして？ 姫香ってそんな女の子だったの？

友達が怪我をしたのに、彼の方を優先してしまうような子だったの？

第28話 亜紀と慶…2（後書き）

（インターフェア）：正しく入れたサーブボールをレシーブ側でないパートナーが触れること。打球妨害。

（コンセントレーション）：ボールや相手の動きに精神を集中させること。精神統一。

（勿体を付ける）：わざと深刻に振舞う。

第29話 先輩の場合

「……よ？ 香代？」

「あ？ はい」

二年の百瀬先輩の声で我に返った。

百瀬先輩は、あたしが部長だった前の年に小学校軟式庭球部のキヤプテンだった人だ。

「川村さんに振られちゃったの？ ぼーっとしちゃって……可哀想に。まあ、彼氏が出来ればそんなものよ？ 女の友情なんてね」

「そ……そんな……」

あたしは先輩から思いがけず同情されてしまい、戸惑った。

『振られた』ってわけじゃないと思うけれど、それはあたしの都合の良い思い込み……なのかしら？

姫香を弁護して反論しようにも、言い返す言葉が思い浮かばない。

でも、きつとなにか……どうしても抜け出せなくて亜紀の所に行けなかった理由があるのだから。あたしにも言えない事情があるのだと思うでしょう……

そう自分に言い聞かせていたら、百瀬先輩が気を廻してくれた。

「気にするような事じゃないわ。川村さんが特別ってわけじゃ無いのよ？ 遠藤さんの怪我だって捻挫でしょう？ そりゃあ新人戦が近付いたこの時期の怪我は痛いけど……心配なら、一緒に行きましようか？」

「はい」

たった一年しか変わらないのに、百瀬先輩が物凄く頼り甲斐のある人に思えた。

* *

「すみません。付き合ってくださいなのに……」

百瀬先輩と肩を並べて廊下を歩きながら、しょんぼりとしていたあたしは、取り敢えずのお礼を言った。

亜紀の事が心配で、練習が終わった後に保健室へ先輩と二人で直行了したのに、二人とも先に帰ったと保健室の先生から聞かされていたのだ。

「まあね？ 自力で帰れるのなら、取り敢えず怪我の方は安心だね」

「……はい」

そう優しく言ってくれる先輩の言葉も、今のあたしには気休め
しか無い。

保健室に入ろうとして、引き戸の取っ手に手を掛けると、外で用
事を済ませて保健の井坂先生が戻って来た。

「先生、亜紀は……亜紀の様子はどうですか？」

あたしからの質問に、先生は少しだけ気の毒そうな顔をした。

「ああ、先に二人で帰ったわよ？ あの子、仲良さそうね？」

「……」

あたしは少なからず、先生の言葉にショックを受けてしまった。

「先に二人で帰ったわよ？」

「帰ったわよ？」

「二人で……」

先生の言葉があたしの頭の中で何度も何度も繰り返される。

そして、時間が経つに連れて、あたしの心中は穏やかじゃ無くな
って来る。

だって、二人からしてみれば思いも寄らない急速大接近。お互いに相手の事を気に掛けているんだもの。

いつもなら慶には門田くんや田村くん達が居るし、亜紀にはあたしや姫香が傍に着いている。でも、お互いに怪我をしまして、二人きりになれただなんて……こんなチャンスなんて……滅多に無いわ。

姫香だけでなく、亜紀からもあたしは急に独りにされてしまった気がして、不安に包まれてしまった。

*
*

「あたしもねー、実は土橋さんみたいになっちゃった事があるんだよね。なんだか放って置けなくなっちゃって」

「え？」

廊下を歩きながら、百瀬先輩が意味深な事を言った。

「あたしね？ 幼馴染でケンカ相手……って言ってもタダの口喧嘩みたいなものよ？」

「はあ……」

「周りからは『ケンカ出来るくらい仲が良い』って思われるくらいの男友達が居たの」

「……」

「でね、塾に行くようになって仲良くなった友達が居てね？ 半年くらい経った頃……だったかな？ 彼女から、その彼を紹介して欲しいって……」

「紹介って……引き受けちゃったんですか？ まさか？」

あたしの問い掛けに、先輩は黙って頷いた。

「おかしいでしょう？ 彼とは本当に『友達』の付き合いだったのだから、彼女も友達として紹介したはずだったのに……」

「……だったのに？」

「彼女は友達としてじゃなくて、『彼氏』として紹介して欲しかったのね。気が付いた時はもう手遅れ。自分が本当は彼の事が誰よりも好きだったのに、彼にはもうあたしが紹介しちゃった彼女が居て……で、その後は判るかしら？」

「……」

「二人とも、あたしとはもう殆ど顔を合わせる事が無くなったし、もう口も利かなくなっちゃったわ……『異性の友達』と『恋愛』って、線引きが難しいのよね」

「せ、先輩は……先輩はそれで構わなかったんですか？ 友達を『彼氏』として取られちゃって……」

「ん……」

先輩は俯くと、少しだけ言葉を詰ませた。

「それでも……あたしが今更告白したとしても、アイツはあたしとは『友達』のまんまだったんじゃないのかなって思うワケ。結局、アイツはあたしを『友達以上』には見てくれない。彼女とは上手く行っても、あたしとアイツとは友達以上になんかなれなかったのだと思うわ」

「そんなあ……」

「あたしにも『気持ち』があるように、アイツにも『気持ち』——って言うか、選ぶ権利があるでしょう？ 簡単に想いが通じたりするのなら、こんなに悩んだりなんかしなかったわよ」

「でもあ……」

「仲が良過ぎて相手を恋愛対象には見られない……そんなこともあるのよ」

「……」

先輩の一言々が心に深く突き刺さる。だって、これってあたしと似たような……

そこまで考えると急に顔が熱くなった。

「まあ、香代ってば素直なんだから……」

「ど、どう言う意味ですかあ？ あ、あああたし、そっ、そんなに

『素直』じゃ……」

言い当てられて、更にあたしは茹で上がってしまったあたしの顔を見て、百瀬先輩がくすくす笑った。

第29話 先輩の場合（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

今年の更新はこれでお終いです。

完結目指して頑張りますので……見捨てないで……（汗）
（気を取り直して……）

来年も宜しくであります。（ケロロ風）

2009/12/31 守備範囲が広い 和 貴より

第30話 お守り役

急に百瀬先輩は立ち止まり、思い詰めたような顔をしてあたしに向き直ると、ずいっとあたしに顔を近付けた。

「いゝい？ 黙っていたって自分の思いなんてのは、行動に移さない以上、相手に伝わったりなんかしないものよ？ 特に相手が鈍感男だったなら尚更だわ」

「えっ？」

先輩のいきなりな説得に、あたしは思わず混乱して退いてしまった。

「『逃がした魚は大きい』って事……どうしてこんな面白くも無い話を思い出して、あたしがわざわざ香代に話したのか判ってる？ 香代見ているとイライラするのよ」

「??? …… な？ き、急にあたしに振って来られても、何のことか……」

「ほら！ また惚けて逃げてる。怒るわよ？」

「そ、そう言われたって……」

ムキになった先輩の迫力に気圧されて、あたしは委縮して俯いてしまった。

先輩の言わんとしている事も、そして、先輩があたしと誰の事を

指して言っているのかだって、ちゃんと判っている。

……ただ、自分の本当の気持ちが判らないだけ。

自分の気持ちに慶に傾いているのは、それは慶の『幼馴染のお守役』って言う特権からまだ解放されていないから……なのだと思うている。だからどうしても慶の事が気になってしまふのだと。

「本当に……いいの？ このままで……？」

「す、すみません先輩……あたし……あたし自分でもよく判らないんです……」

幼馴染としての慶が好きなのか、それとも異性として意識しているのかだなんて、今のあたしには判らない。

でも、あたしがこうして立ち止まっている間にも、周りの状況はどんどん変化して行くし、慶だっていつまでも子供のままの『あの時の慶』じゃない。

そんな事、先輩から言われなくったって判ってる。

「な、なんで香代が謝るのよ？ あたしはてつきり……」

「……先輩い」

あたしの事を気遣ってくれる先輩の気持ちが嬉しくて、思わず顔を上げた。

先輩はあたしとしっかり眼が合ってしまい、少し恥ずかしくなっ

たのか照れた素振りであたしから視線を逸らせる。

「な……そ、そんなキラキラした眼で見ないでよ。あ、あたしまで恥ずかしくなっちゃうでしょ？」

「す、すみません……」

「だから、謝らなくったっていいから」

「すみません」

「またあゝそう言う」

条件反射みたいに反応するあたしに困ったのか、先輩は怒らせていた肩をすんと落として息を吐いた。

そして「お節介……だったかしらね」と小さく呟いた。

* * *

次の日の朝、慶の家の前に黒塗りの高級車が止まり、運転手さんが降りて来て慶のお母さんと言葉を交わした後、家から出て来た慶を無理矢理高級車に押し込んで連れ去ってしまった。

丁度登校しようとしていたあたしは、眼の前で起こった非日常的な出来事に驚いてしまう。

「お、おばさん」

「あ、香代ちゃんおはよう」

慌てて駆け寄ったあたしに、おばさんはいつもと変わらない笑顔を向けてくれた。

「お、おはようございます。あ、あのっ、い、今の……慶くんが……？」

連れ去られてしまったように見えたのだけど？

「ええ、先方には大丈夫だからって言ったのだけどね。あちらのお嬢さんが凄く気にされていて……」

「は……あ……」

おばさんの話で、その高級車を誰が遣して来たのかが直ぐに判った。亜紀は足首の捻挫で歩行困難だから車で登校するのは判るけれど、手首を怪我しただけの慶に車での御迎えは少し大袈裟なのじゃないかしら？

「慶も歩いて行けるって言ったのだけどね？ 先方がどうしてもって……」

「あの、おばさん？ 慶くん、さっき腕を吊るして……」

あたしは慶が三角の白い布を肩から吊るしていたのをしっかりと見てしまった。しかも、手首から肘の辺りまで包帯でぐるぐる巻きになっていたし。

「ああ、あれね？ 大した事は無いのよ？ 少し骨にヒビが入っちゃってたみたいだけど、お医者からは少しの間動かさないでねって言われただけだし、本人は平気だって言ってるから、大丈夫よ？ 心配しないでね？」

「……」

『心配しないでね？』……なんて言われたって……心配するわよ。

骨にヒビが入っていたなんて……

お互いに不注意だったとは言え、あたしは亜紀の気持ちを察して、暗くなってしまった。

慶は男子部員の中でもテニスが上手な方だ。噂では今度の新人戦で、もしかしたら上位入選するかも知れないと、先生方が期待しているのだと聞いた事があったもの。

そんな慶が亜紀とぶつかって怪我をした。しかもそれが慶の利き腕の右手首だったなんて。

亜紀じゃなくなたって、罪の意識を感じてしまっわよ。

そう思ったのだけど……

亜紀は慶とあたしが居るクラスとは別のクラスだ。

なのに、時間があれば頻繁にクラスに遣って来ては、あれこれと

世話を焼きに来る。

「あ、秋庭くん……二時間目音楽室でしょう？ 荷物、持つわ」

「い、いいよう……自分で行けるから。遠藤さんこそ……」

「だ、駄目よ？ 無理しちゃ。暫くは安静にしておかないといけな
いって……そ、その、お医者さんから言われたでしょう？」

聞いているこっちが恥ずかしくなつて来るわ。

二人はお互いに顔を真っ赤にさせて恥ずかしがりながら、こんな
遣り取りをもう朝から何度も遣つていた。

最初はクラスの男子が面白がつて冷やかしたりしたけれど、録画
再生を見ているような進歩の無い遣り取りに白けてしまったのか、
やがて誰も相手にしなくなつてしまった。

時間が経つに連れてあたしには、はにかみ屋の亜紀が慶の怪我を
口実に押し掛けて来ているように思えて……そして、口では断つて
おきながら満更悪くは無いような素振りを見せる慶に、何故だか不
快感を覚えてしまった。

——なんでだろ……？ 二人を見ていると苛々する……

優しい亜紀だからこそ、こうして慶にお詫びの心算で遣つて来て
いるのだと判つて居ながら、苛立ってしまい、ワケの判らない自分
に嫌気が差してしまう。

第31話 聞かれてしまった独り言

五時限目の授業が終わって黒板を消していたら、さっき呼ばれて職員室へ行った委員長の瑞穂が、プリントを抱えて戻って来た。

「香代っち、今日、あんた日直だったよね？」

「うん」

「先生が『日直は職員室へノートを取りに来るように』だって」

プリントは一人に三枚ずつあるらしく、交互に重ねられていた。瑞穂はそのプリントの束を崩さないように、教壇の上にそっと置く。

「ノートって、今朝持って行った宿題のノートの事？」

「うん、そう」

「ええ……？」

あたしは自分でも驚くくらい、嫌そうな声を上げてしまった。

だって、今日の日直はあたしと慶だ。その慶が怪我をしているから、いつもなら二人で分担していた作業なんかを、全部一人でこなさなくちゃいけない。

ノートの事だって、今朝みんなの宿題ノートを回収して、独りで苦労しながら職員室に運んで行ったばかりだって言うのに、今度はそれを返すから取りに来るようにだなんて……

あんまりだわ。

ノートが重くて、二度も職員室を往復したのに……

だからと言って、利き手が動かせられない慶に手伝えとは言えなかったし、慶の事を気遣ってあれこれと世話を焼く亜紀は別のクラス。幾ら友達だからって、慶の日直の仕事を手伝わせるのはちよつと……無理に手伝ってと言うのは気が引ける。

こんな時、頼りになってくれる姫香は、慶と亜紀が怪我をした日以来登校して来ない。

先生の説明では、他県に住んでいる親戚が亡くなったと連絡があったそうで、あれからずっと戻って来ていないのだそうだ。

あの時、亜紀の怪我の具合を気にしながらあたしに謝って帰っちゃったのは、部活終了後に予約されていた列車の時間を気にしていたからであって、別にあたしや亜紀に心変わりや愛想を尽かせたわけでは無かったらしい。

理由を話せなかったのは、身内の『不幸』ならば、姫香が言い辛くなったのもなんとなく判る気がするし。

姫香の件はアリだとしても……なんであたしはこんな時に、慶と日直なんかになっちゃうのかな？

「はあ……」

あたしは大きいため息を一つ吐いて、重い足取りで職員室へ向かった。

「香代、どこに行くんだ？」

浮かない顔をして廊下を歩いていたあたしは、背後から慶に呼び止められて思わず立ち止った。

「し、職員室……」

「職員室？ …… ああ、今朝香代が持って行ってくれたみんなのノートか？」

「そ」

あたしは少しだけいじけて素っ気なく言い放つ。

「あれ、重たかっただろ？ 僕も手伝……」

「い……いいっ！ 独りで持って来れるから」

「……香代？」

言い掛けた慶の言葉を遮り、あたしは強く言い切った。

剥きにならなかったと言えは嘘になる。

あたしは、それまで亜紀からちやほやされていた慶が急にあたし

を氣遣つてくれたのが嬉しかった反面……悲しくなってしまった。

自分だって日直なのに、今頃になって日直であるあたしを意識しただなんて……遅過ぎるわよ。

それでも、あたしは自分の気持ちとは真逆の言葉を口にした。

「あ、あんたは来なくていいから。そのまま教室に残って居なさいよね？ け、怪我してるんだから。それに、二回に分ければ持つて来られるんだし、慶が氣にする事ないよ」

ああ、あたしの馬鹿馬鹿馬鹿。なんでこんな時に意地張っちゃったりなんかして、平氣なフリするのよ？

「でも、香代……」

「『でも』じゃないの。いいから慶は教室に帰ってて！」

慶の心配そうな声を振り払うように、あたしは後ろを振り返らずにそつきつく捨て置くと、可愛げも無くサッサと足を速めて歩き始める。

なんだか顔が火照^{ほて}って……身体が熱いわ。

……れ？ あたし……なんでこんなに怒っちゃっているのかな？

日直に氣付くのが遅かった慶に対して頭に来ているのか、それとも、亜紀にちやほやされて照れていた慶に対してなのか……？

でも本当はもっと早くに慶は日直の事に気付いていたのかも知れない。だって、午前中は亜紀が心配して、休憩時間はずっと付きっ切りだったから。

慶が日直を遣るうものなら、きっと亜紀は自分が代わりにするって言い出すだろうから、慶は行動出来なかったのかも知れないわ。

「全く……それで無くたって新人戦が近いのに、こんな時になんて怪我なんか遣ったりするのよ……ふんだ。亜紀にデレデレなんかしちゃって……」

お陰であたしまで迷惑を被^ひつちやっただじゃないのよ。

こんな事で気持ちが浮いたり沈んだりするんだもの。

その……こ、困らせたり……しないでよ。

「……」

「ええっ？ う、うわ！」

ぼそつと呟いた独り言だったのに、いきなり背後から慶が謝って来た。

もうとつくに教室へ慶が帰ってしまったとばかり思い込んでいたから、この不意打ちには驚いてしまったわ。

「なっ、なんで？ 慶は教室に居ればいって言ったじゃない」

「そんなコト言わないでよ。片手なら遣えるんだし」

慶は穏やかに笑ってあたしの目の前で左手を広げると、ひらひらと振って見せた。

「……」

ひゃあ~~~~、どっ、どうしよう。

もしかしてもしかなくても、あたしの今の独り言を慶に聞かれちゃったの……かな？

うわあ、あたし聞かれると拙い事を口走って居たりしなかっただろうか……？

いや、そんなコトよりも……

あたしは慶にくっ付いているであろう亜紀の姿を捜して、辺りをキョロキョロと見回した。

「あ、亜紀は……？」

「教室移動が無いから、来ていないよ？」

「そ、そう……」

慶の言葉にホッとした。

だけど……

だけど、同時にあたしの友達でもある亜紀の不在を聞かされて、
安心してしまった自分が何だか卑怯に思えて……

第32話 思いもよらない誘い

「ねえ、なんで慶が練習に来ているのよ？」

日直で慶と一緒にみんなのノートを取りに行ってから、一週間が過ぎた。

部活練習の途中、先に自分のゲームを終えた田村くんが、派手に水飛沫を上げて手洗い場で洗顔しているのを見付けたあたしは、早速慶の事を尋ねてみた。

田村くんは顔を洗うと、出しっ放しの水に頭を突っ込み、水浴びをした犬みたいにブルブルと頭を左右に激しく振る。

「つぷはあく、チョー気持ちイ〜〜〜」

咄嗟に持っていた汗拭きタオルでガードしたけど、それでも散らされた水飛沫があたしに掛った。

「冷たっ！ もあ。ねえ、聞ってるの？」

「ああ悪イ。で？ なんだって？」

田村くんは、首に掛けていたタオルで顔を拭きながら、あたしの質問を聞き返した。

「慶がどうして練習に来ているのかって、聞いているの」

「ああ、そっぴゃあ居るよな？」

田村くんはあたしの質問をやつと理解してくれたのか、アウトコートでラケットを手にして順番を待っている慶に視線を送った。

「出来るから来てるンだろ？」

「え？」

意外な答えに、あたしは驚いて思わず聞き返してしまった。

慶の利き手である右の手首は確かヒビが入っていて、安静にしないといけないはずだ。以前、事故で骨折を体験した事があるお父さんから、歩くだけで傷に響いて痛かったとその時の事を聞かされていたから、少しならどんな具合なのかは想像が付く。

慶の場合はヒビだけだからかも知れないけれど……それでも心配になって来る。

やっぱり怪我しているんだもの。痛くないハズなんて無いわよ。

「だ、だって利き手を怪我してて……ラケットなんか持てないでしようっ？」

「いや？ アイツ、左でやってるぜ？」

「え？」

「だから、左手で練習してンだよ」

「え？」

「なんだ？ 知らなかったのか？ アキバケイは元々左利きだったんだってよ。昔、注意された事があって、無理矢理治したって言うた。でも、クセは抜け切れてなくて、今でも給食でミカンが出たら、左で皮を剥いてるんだぜ？」

「え……？」

そ、そうだった……かしら？

今まで気にしたりはしなかったから、よく覚えていないけれど……言われてみれば、慶は左手でミカンの皮を剥いていたような気がするわ。それに、確か慶のお父さんが左利きだった。

遺伝的な事はよく判らないけれど、ずっと昔……幼稚園の頃に、クレヨンの持ち方を先生に注意されて、慶が泣いて怒った事を思い出してしまった。

慶が泣いて怒ったのは、あたしが知っている限りでは、後にも先にもその事だけだったように思う。おとなしい慶が泣き出すのはよくある事だったけれど、注意されて逆ギレした慶を眼にしたのはそれ一回きりだったはず。

以来、慶はあたしの知っている、臆病で泣き虫の慶に戻ってしまった。

たった一度だけだったし、まだ二人とも小さかった頃だったから、印象が強くて忘れてしまっていたのかわ。

あたしは意識して、もう一度アウトコートに居る慶を観察した。

慶の右手は包帯でまだぐるぐる巻きだったけれど、今は肩から三角布で吊るしたりしていないし、ラケットを左手に持って自分の順番を待っている。

時折、左手の感覚を確かめているのか、何度もラケットのグリップを握り直してその度に下を向き、手元を確認している素振りだった。

「自分から直接本人に聞けば良い事じゃねーの？ そんなに気になるのか？ アキバケイが」

田村くんは意地悪そうにニヤニヤ笑いながら、あたしの顔を覗き込んで来た。

「ちっ、違うわよ」

あたしが慶を不安そうに見詰めていたものだから、田村くんから誤解されちゃったみたいだわ。

「ふーん『違う』ってか？」

「あ、当たり前でしょ？ な、なんで田村くんがそんな事……」

田村くんは慶よりも少しばかり背が高いし、身体も大きい。そんな田村くんから顔を覗き込まれてしまい、あたしは近過ぎる彼の顔の位置に驚いて、思わず身体を引いてしまった。

田村くんの強引な接近に、あたしはドキリとした。ほっぺたが熱くなって痺れているみたいな感覚に、あたしはハッとして顔を伏せてしまう。

な……なんでこんなに近くに居るのよ？

女の子との距離が判っていないのかしら？　もう、近付き過ぎだね。

「じゃあさ、今度俺に付き合わない？」

「……え？」

なに？　その『付き合う』って、どう言うコト？？？

あたしの頭の中で、疑問符が乱舞した。

『付き合う』って、友達として？

それとも……？

田村くんから、なんだか物凄い事を聞かされたような気がしたのだけれど……今のはあたしの聞き違い？

友達として改めて付き合う様な余所々しい仲じゃないし、そもそも彼が部活に……その、強引だったけど誘ってくれたから、あたしは成り行きで仕方なく入部してしまった。

普通に友達として、こうして会話が成り立っているのだから、こ

の場合、田村くんの言った『付き合う』とは違うような気がするし。

「あー居た々、香代〜！ 次い〜、アンタの順番だよー！」

居なくなつたあたしを見付けて、姫香が向こう側の離れたコートから大声を張り上げ、あたしに向かって手を振った。

「……」

女の子同士なら、買い物とかに誘う時気軽に『付き合つて〜』なんて言われたりするけれど、男の子からでもそう言うのってアリなのかしら？ そんな言葉を掛けられた事が無かつたから、あたしは自分の都合の良い聞き違いなのかも知れないと、自分の耳を疑った。

「なに固まつてンだよ？ ホレ、川村が呼んでるぞ？」

「あ？ あ……ああ」

「なに？ ぼ〜としちゃって。連絡、遣すからさ、楽しみにしていなよ」

「……ち、ちよつと……待って！ あたしは何も、返事なんかしてないわよ？」

慌てて言い返したけれど、田村くんの姿はもう無かつた。

田村くんも男子部員から声が掛り、彼は爽やかに笑って練習コートに戻ってしまったのだ。

「……」

強引な田村くんに振り回された気がして、少しばかり不愉快な思
いを抱いてしまう。

第33話 雨の日の…

次の日は生憎の空模様だった。午後から降り出した雨のせいで、コートは幾つもの水溜りを作って水浸しになっている。

だから今日の練習時間は、新人戦が終わった後に控えている学内の文化祭行事について、部員同士で話し合う場を設けられていた。

文化祭での催し物は、文化部の活動発表がメイン。なのであたし達運動部は、その殆どが軽食や屋台関連の物を任されている。

あたし達テニス部では、男女合同で毎年喫茶店をするように決まっていたのだそうで、今日はその役割分担と詳細を決める事になっていた。三年生の先輩方は既に引退されていたけれど、引き継ぎ等詳細の為に、一部の三年先輩方が打ち合わせに参加してくださっていた。

メニューは毎年変わらないそうで、飲み物はアイスとホットが選べるコーヒーと紅茶。それからコーラとサイダーで、百円を追加すれば冷たい系の中にバニラアイスが付くフロートタイプが注文出来る。軽食は簡単に出来るたまごサンドと、一口サイズのホットケーキ。個数限定で女子部の先輩達が焼いたクッキーを出すのだそう。

売り上げの一部は部費に還元されて、新しいボールの購入やネットやライン用の石灰と言った備品消耗関連に宛がわれるので、先輩方の意気込みは半端じゃない。

小学校の頃の文化祭と言えば、体育館でクラブ活動の紹介と入部

あたし達と同じ様に、男子も一年が接客をするようになっていたんだけど、どうやら普通の接客ではないみたいだった。だって、鈴木先輩が見本として手にしているのは、後ろからだけでもヒラヒラフリルが一杯付いた、後ろのウエストで大きなリボン結びのエプロン……って、どう見たってメイドのエプロンでしょ？ あれは。

で、その『コスプレ姿』で男子は接客させられるの？

あたしの視界に、先輩の力説に蒼くなつて退いている慶達一年の男子の姿が映った。その向こうには、照れ笑いをして赤面している二年の先輩方の姿が……

線の細い男子なら良いかも知れないけれど、線が太くてガッチリタイプに分類されてしまう慶や田村くん達は……本当に申し訳ないけれど、本気で着て欲しくないなと思つて軽く吹き出してしまいう。

「……まあ、た口くでもない事を男子は企たくらんでいるみたいね」

別のグループで打ち合わせをしていた、金子先輩と宮脇先輩が百瀬先輩に近寄った。

「男子、去年で味を占めて、また今年も遣る心算よ？」

「やーね……ふざけ過ぎだわ」

口では嫌悪感を露わにしたような言い方だったけれど、三人の先

輩方の顔は物凄く嬉しそう。そして、今にも吹き出しそうになるのを必死に堪えているみたい。

って言うか、去年……って？

それで二年の先輩方が真っ赤になって恥ずかしそうに笑っていたのだと、あたしは納得した。

「先輩、当日はデジカメ持って来ても良いですか？」

空気を読んでなのか、姫香がサッと手を挙げて質問した。あたしの隣に座っている亜紀も、その隣の一葉もウンウンと頷うなずいている。

な……なに？ この彼女達の意気込みと盛り上がりは？

「デジカメの学内持ち込みは、貴重品だから駄目よ。携帯持っているでしょう？」

「だって画像が粗くて……」

「引き延ばしてもする心算？ 広報部が各部を巡回して撮影に来てくれます。後日、写真の販売もあるそうだから」

「で、広報部。去年はすさまじい売上だったそうよね？」

宮脇先輩が困った表情を浮かべて補足説明をすると、金子先輩が嬉しそうに補足の『追加』をしてくれた。

「うわ、そうなんですか？」

「やったあー！」

手放して喜ぶ姫香達に付いて行けず、あたしは退いた。

でも、本気で男子の先輩方は慶達にあのフリフリエプロンを着用させる心算なのかしら……？

まさか……本気？

「せ、センパあゝい？　じよ、冗談ツスよね？」

顔を引き攣^つらせた田村くんが、片手を軽く挙げて問い質^{ただ}したけれども、先輩の様子は残念ながら本気……みたい。

会計の谷先輩が、男子の部長に声を掛けた。

「ねえ、小林い。男子は去年と同じにするの？」

「他に良い案があるのかよ？」

「メイドエプロンは去年ウケたでしょう？　でも今年も大受けするとは限らないのじゃなくて？」

「はあ？　だからなに？」

流石は女子部の先輩だわ。行き過ぎた催しモノに異議を唱えてブレーキを掛けてくれるのだから。

そう思っていたのに。

「今年はタキシードで……って、どお？」

「ってか、それホスト？」

谷先輩は、小林部長に向かって意味ありげに満面の笑みを浮かべる。

「げ！」

二人の遣り取りに、固唾を飲んで注目していた一年の男子が一斉に退く。

「きゃあ！ その案に賛成一票！」

「あたしもー！」

「前日は、絶対携帯充電しておかなくっちゃあ！」

退いている一年の男子を無視して、勝手に盛り上がる女子部員と男子先輩方。

谷先輩の発言で、借り切っていた一年の教室が、蜂の巣を叩いたように急に騒がしくなる。

「真面目に遣りなさあい！」

遂に部長の長谷川先輩が、顔を真っ赤にして声を荒らげた。

「うつん、舞ちゃん。これは集客の為のとても大事な戦略なのよ？ ふざけているみたいに見えるかも知れないけれど、集客イコール

売上に繋がるんだから。重要な事だわ」

「……言うかな？　そこまで」

「うん！」

にこにこしながら副部長の真鍋先輩が、長谷川部長を宥めてる。

はあ。それなりに説得力はあるけれど、なんかもうみんな趣味に奔っちゃっているみたい。

「いやー、今年の男子は中々のメンツが揃っているから、結構楽しい文化祭になるんじゃないの？　あたしはどちらの案でもOKだわー」

へ……ヘンな想像しないでくださいっ

百瀬先輩の腹黒い笑顔に、あたしは心の中で思わず突っ込んでしまった。

もぉ~~~~百瀬先輩まで……みんな……みんな、一体どうしちゃったのよぉお？

その後は、即、準備可能なメイドタイプのエプロンを着用するか、それとも真逆の正装タキシード姿になるのかを時間ギリギリまで議論する事になったけれども決着が付かず、最終は男女三年の先輩方で取り決められる事になってしまった。

け、慶や田村くんがメ、メイド姿やタッ……タタタキシード姿になるだなんて……

も、もお、想像したあたしの方が、恥ずかしくなっちゃうじゃないのよ。

あ、あああ、あたしはそっ、そのっ……ど、どっちでも……い、良いかな……なんて思ったりして……

第34話 初めて吐いた嘘

週末土曜日の午後六時。新人戦まで残すところあと二週間を切っている一年生のあたし達には、休日だなんて皆無だわ。みんな、今より少しでも上達して良い結果を得ようと、その日も練習に励んでいた。

女子部は基本ストロークから始まって、ライジングやパッシングショットと言った、相手にわざとタイミングを合わせない、試合の流れを変えるための鍵になるレシーブや、サービスの見直しをするメニューが組まれていた。もちろん、顧問の先生も休日出勤で来ている。

「礼！」

「ありがとうございました」

「お疲れ様でしたあ——！」

キャプテンの合図でコートに一列に並んだあたし達は深々とお辞儀をして、やっと練習が終了する。

「お疲れ様です」

「失礼しまあす」

更衣室を先に出て次々と帰宅する先輩方に挨拶をしながら、あたし達は居残ってグラウンドの整備をしていた。

それは一年の男子も同様だったけれど、今日は生憎慶の姿は無い。

「香代おゝ、帰りにマックに寄って、シェイクなんてどお？」

姫香と亜紀が早速提案をする。

今日一日、たっぷりと汗を流したから、持って来た二リットルのレジャー用水筒が空っぽだった。

「んー、シェイクも良いけど、今はお茶かスポーツドリンク。とにかく水分が摂りたいなー。それにあたし、この後用事があるの」

「じゃあ、北門にある自販機に行こっか？ あそこ新製品を入れ替えして、五百缶が百円になるキャンペーン遣っているのよ」

「うん」

約束時間にはまだ少しばかり余裕があった。それに、姫香達の誘いを断つてもあたしは自販機に駆け込む心算だったから、この姫香達のお得情報の誘いに乗らないワケにはいかない。

「でさあー、香代が約束だなんて珍しい。相手はダレ？」

冷やかし半分なのか、姫香はにこにこしながらあたしの用事を詳しく聞こうと突っ込んで来た。

あたしと同じく喉が渴いていた姫香は、一気に五百のスポーツ飲料をクリアすると、もう次の一本を買おうと自販機にワンコインを落とす。

さつきと全く同じ種類の五百缶が、ゴトン！と鈍い音を立てて
転がり出す。

「姫香あー、そんなに一気に飲んじゃったら身体に良く無いよー」

「そうだよー、それにこんなに冷たいのに、お腹壊すわよ？」

「いいのいいの。喉が渴いているんだから。暑いから丁度冷えて良
い感じだわ」

あたしと亜紀の心配を余所に、姫香は迷わずプルタブを引き起こ
した。

運動直後の急激な水分補給は良く無いって、姫香は知らないのか
しら？

あたしと亜紀は道路と歩道を別けているガードレールに並んでも
たれ掛り、揃って同じメーカーのスポーツ飲料をちびちびと舐めるよ
うに飲んでいるのは、そんな理由だ。

「本当にお腹壊しても知らないから」

「大丈夫だよー。このあたしが腹痛ハライタごときになったりするもんです
か。第一、お腹壊した時に飲むのもコレでしょ？ だったらモンダ
イ無いわよ」

「だからって、これ冷え過ぎだよ？」

亜紀が心配しているのに、姫香は全く聞く耳を持っていない。ま

あ、あれだけコートをくたくたになるまで走らされてゲームすれば、喉が渴くのだって半端ないわよね。

「それよかさ」

「うん？」

「さっきの返事は？」

「あ？ ああ、あれね？」

うやむやになっていたあたしの約束の件を、姫香はしっかりと覚えていて、なぜか追求して来る。

だけど幾ら友達だからと言っても、まさか男子部員の田村くんから個人的に呼び出されているって事をペラペラ喋る心算は無かった。

最近では亜紀と良い感じになっている慶の事を、姫香はあまり好いようには思っていないみたい。で、今の姫香は田村くんがどうも気になる存在みたいになって来ているらしい。だって、田村くんの前では姫香はウソみたいにしおらしい女の子しちゃっているんだもの。

だから、尚更姫香には呼び出しの相手が誰なのかを言えなかった。

……姫香、ごめんね？

そして、あたしは親友に向かって、初めて嘘を吐いてしまった。

「あたしの従兄。来年、地元こうちの大学を受けるって。下見で田舎から出て来るの」

「ふーん、あんたに受験生の従兄ねえー」

「……」

白々しい嘘を見破られてしまったのかなあ……？

亜紀はあたしの約束がなんであるのか全く気にならない様子だったけれども、姫香はあたしの言葉に敏感に胡散臭さを感じ取ったのか、意味有り気な視線であたしを見詰めて来る。

……来週リョウマにだけど、受験生の龍馬兄があたしの家に来るのは本当の事だもの

「ねえ、香代」

「なに？」

「それ……ホント？」

怪しげにあたしの心の中を見透かそうとしている姫香の視線が痛い。姫香をあたしは傷付けたくなくて、嘘を吐いているんだもの。

男の子からの本格的……らしい誘いって、あたしにとってはこれが初めてだった気がする。

『俺に付き合わない？』――

田村くんは、そうあたしに言ってくれたのだけれど、なんだか引っ掛かる微妙な言い回しなのよね？

『俺』と『付き合わない？』って、限定した言い方じゃ無かったし、『俺』に『……』って言う言葉の向こうには、複数の人が絡んでいくような気がするんだもの。

第34話 初めて吐いた嘘（後書き）

ライジング：ワンバウンドした球が、軌道上十分に上がり切らない状態を打つ。

パッシングショット：ネット前衛の横を打ち抜く打球。略してパス。サイド側はサイドパス。真中はミドルパス。

第35話 お洒落？

姫香達と別れた後、田村くんからの呼び出しを受けて向かった待ち合わせ場所は、数年前に市が移転拡張した中央公園だった。

公園に向かう途中で自宅があるから、あたしは一旦自宅に帰って部活へ持って行った荷物一式を降ろした。ついでに手早くシャワーで練習の埃と汗を流して、普段着に着替えた。

だけど、初めて男の子との待ち合わせと言うちょっぴりドキドキなイベントに、少しだけ自分の格好が気になって、こっそりお母さんの部屋に入り、置いてある姿見に全身を映して、くると廻ってみた。

「ん〜と……」

自分の姿だし、誰からも見られていないのは判っているのだけれど、何だか少し……照れちゃうな。

あたしが着替えたのは、淡いベビーピンクのＴシャツとクリーム色のパステルカラーのハーフパンツ姿と言う、これからまた部活練習すると言われても違和感が無い恰好だった。

「……」

ちらりと頭の中で、この前お母さんから貰った、白地に小さな青い水玉柄のワンピースが浮かぶ。

それはお母さんが型紙と布を買って来て、手作りしてくれたワンピースだ。ちょっとした場所にも出られるようにと、丈の短い半袖ボレロタイプの上着とセットになっている。『アンサンブル』とか言う上下お揃いの服だ。

あたしのお母さんは手芸が得意で、年に何回か地域で開催されている趣味の講座で、手芸教室の講師として呼ばれていたりしている。

フェルトの布で可愛いマスコットなんかを簡単に作ってしまうし、季節によっては編み物とか、刺繍。カントリー調のツールペイントとか、ステンドグラスなんかも自分で作っちゃう、とても器用なお母さんだ。

でも、あたしはお母さんの器用さは譲り受けては居なかったみたい。

第一じつと座って居られないし、家庭科でお裁縫をしても怪我ばかりするし、縫い目はバラバラでとても見られた出来じゃ無い。

お父さんとお母さんは、あたしが生まれた時、女の子で良かったって喜んでくれたそうだけど、今のあたしはちっともお淑やかじゃ無いし、女の子らしくなんか無いんだもの。

* *

あたしはリビングのロングソファにうつ伏せに寝転び、膝から下

……両脚を宙に浮かせて時折足首をヒョコヒョコと動かしながら、
頬杖について優雅に雑誌を見ていた。

『少しはスカートでも穿^はけば？』

練習が無い日でも、ジャージかスウェットの短パン姿でいるあた
しを見兼ねたお母さんがそう言った。

でも言われれば、いつの間にか家でスカートを穿かなくなってい
る事に気が付いた。

『ええー？ あんなのヒラヒラしてて邪魔だもん。あたしにスカ
ートだなんて似合わないわよ』

『そんなこと無いわよ？ 女の子なのに。お母さんは香代のスカ
ート姿を見たいわ』

一度ジャージの心地好さと言うか……ラクなのを体験してしまう
と駄目だね。それに、ジャージだってオシャレで結構可愛いのを
売っているもの。スカートだなんて窮屈に感じてしまっただけだわ。

『学校の制服だってスカートでしょ？』

ハコヒダのプリーツスカートをいつも穿いているじゃない。

『それは制服でしょ？ もう……そうじゃ無くって、家で穿くの』

『面倒だもん。これでいいの』

あたしはそれっきり、お母さんにぶいとそっぽを向いた。

お母さんにはスカートを穿きたくないみたいと言っちゃってしまっただけ……本当はそんなことなんか無い。ずっと小さかった頃は、いつもスカートだったもの。

いつの間にか、周りの友達がスカートを穿かなくなったせいもあるけれど、スカートの丈によっては自転車に乗れなかったり、飛んだり跳ねたり出来ないし、それに男の子とはつきりと区別されているみたいで、なんとなく恥ずかしくて嫌だなって思ってしまったから……

暫く着ていなかったワンピースやスカートに妙なコンプレックスを抱いてしまう。『似合わない』とさえ思ってしまうもの。

そうは思ってみたものの……『もしかしたら似合うかも知れない』……とも思った。だって昔はちゃんとスカートを穿いていたんだもの。

「……」

あたしはお母さんに作って貰った白い水玉ワンピースになった自分を想像した。

そうしたら……何故だか眼の前に……左右からあたしに向かってにつこりと笑い掛け、手を差し伸べる慶と田村くんが、セットで出て来た。

「いいいつ？」

な、なに？　こつ、この状況は……？

あたしは顔が急に熱くなつたのを感じ取ってしまい、慌^{あわ}てて両手をバタバタと振ったり、妄想を掻き消した。

しかも、文化祭の男子一年生に用意されるコスチューム騒動が冷め遣らぬ今のあたしの脳内には、二人ともタキシード姿……って、何気に処か、猛烈に恥ずかしくなつて来る。

い、幾ら田村くんからの誘いでも、でっ、でで、デートなわけじゃないんだから、畏^{かしこ}まつて気張る必要なんか無いわよね？

あたしは姿見に映つた自分の姿を、今度は観察するようにじっと見詰めた。

日焼け止めを塗っていたけれど、今日も炎天下で頑張つて練習に励んでいたから、服から出ている顔や手足は、少しだけ熱を持って赤味を帯びてはいるものの、程よくこんがりと色付いている。

日焼けを何とも思っていないらしい慶や田村くん達男子の黒さには負けてしまふけれど、それでも……

「焼けてる……」

思わず自分に向かって言つた言葉で傷付いてしまった。

* * *

テニスコートに一番近い駐輪所に自転車のスタンドを立てると、あたしは辺りを見渡して田村くんの姿を捜した。

幾らテニス部だからって、部活後に即呼び出したなんてあんまりよ。そう思いつつ、男の子との待ち合わせに少しだけドキドキ。

「あ、おうい土橋い」

あたしの姿を先に見付けた田村くんが声を掛けて来た。

声のした方を振り向いたあたしは、居る筈の無い慶の姿と、もう一人の人物の姿に驚いて眼を見張り、顔を引き攣らせてしまった。

第36話 計略

「……」

自転車置き場で立ち尽してしまったあたしは、頭から冷水を浴びせられたような気分だった。

田村くんのお誘いに、なんだろうかと首を突っ込みたくなって、少しか舞い上がり……そして、半分だけ姫香の事を想って嘘まで吐いてしまったのに……あっさりと嘘がばれてしまうなんて。

あたしは姫香に訊ねるべき言葉を失くして俯き、親友に嘘を吐いてしまった事を後悔した。

こんなのって……無いよ。

それに、どうして姫香がそこに居るの？

練習の後、きつと姫香はあたしがこうして遣って来る事を既に知っていたのだわ。だから曖昧に答えるあたしに対して、妙に絡んで来ていたのね。

でも……姫香だって酷いわ。慶や田村くん達と一緒になら、先に言ってくれば良いじゃない。それならあたしだって余計な心配や、嘘なんか吐いたりする必要なんか無かった筈よ？

「あれえ？ 香代、親戚の人が来るのじゃなかったの？」

「う……うつん。あたしの勘違い。来るのは来週だったの」

「ふうん」

予想通り、姫香はあの時のあたしの答えを蒸し返して来た。

きつと、姫香は嘘を吐いたあたしの事を見損なってしまったに違いないのだわ。一緒に居る慶や田村くんだって、あたしを友人に嘘を平気で吐けるとんでもない女の子だって思った筈よ。

「あ、あたし……やっぱ……か、帰る……ね」

あたし……三人から見詰められている……そう思うと身体が竦んでしまった。震える手をやっとの思いで自転車のハンドルに伸ばして、握り締める。

あたしは居た堪れなくなつて、とにかくこの場から逃げ出そうとした。

「香代、待てって」

「あー、待てよ土橋」

慌てた慶と田村くんの声が重なる。そして……

「ほらな川村？ 言った通りだったろ？」

「……そうね」

田村さんと姫香が意味深な遣り取りを始めた。

あたしは何事かと思い、俯いてしまった顔を上げて二人を見る。

あたしから嘘を吐かれた姫香は……少しも怒ってやしなかった。
むしろその逆で、なんだかあたしを気の毒がり、可哀想に思っている
みたいな表情を浮かべている。

対して田村くんは、彼の後ろで困っている慶を見て、少しだけ意
地悪そうにニヤニヤと笑っていた。

「な……なに？」

あたしは二人の様子を訝り、答えを求めて姫香を見詰めた。

「ううん。大した事じゃないの」

姫香は無理矢理な作り笑いを見せる。

「そんな……」

『大した事じゃない』……って、一体どう言う事なの？ あたしは
姫香に嘘を吐いちゃっているんだよ？ 悪いのはあたしでしょ？
なのに、どうして笑顔なんかあたしに向けられるの？

「さー、これでメンツも揃ったし、行こうか？」

何事も無かったみたいに平然としている田村くんの声に、あたし

はハッとする。

「ちょ……田村くん？ 一体どういう事？」

あたしは自分の置かれた居心地の悪い状況に納得出来なくて、今度はあたしを呼び出した田村くんに食って掛った。

「ハイハイ、んじゃあ後で説明して……」

田村くんは面倒臭そうに軽く両手を上げて見せたけれど、その後すぐに慶とあたしの顔を素早く盗み見ると、急にプツと吹き出してクスクス笑い出したかと思ったら、掌を返すように態度を変えた。

「やっぱ説明すんの……止めるわ」

「おい、田村そりゃ無いぞ？」

「え？」

言い返そうと身構えたら、先に慶が口を割った。

慶も……なの？ 慶もあたしみたいに呼び出されたのかしら？

田村くんは慶から突っ込まれているにも関わらず、相変わらずなニヤニヤ笑いを浮かべている。慶はそれが気に食わなかったらしく、少しだけ頬を紅潮させながら眉を潜めた。

「まあ、ココで話込みまうのも時間が勿体無いしよ。取り敢えず予約してるコートに行かね？」

「…………お？ あ、ああ…………」

慶は狐に摘ままれたみたいなの顔をしたけれど、田村くんの強引な押しの強さに気圧けおされて、上手く丸め込まれてしまったみたい。二人の男子はあたしに背を向けて、先に歩き始める。

「…………」

ちよつと…………待つて？ 『時間が勿体無い』？ 『予約してるコト』???? つてなに？

取り残されてしまったあたしは、田村くんの言葉に混乱した。

「ほらあ、香代もこっち、こっち」

「え？」

先に二人の後を追う姫香が、あたしに声を掛ける。

「あれ？ ラケット持って来なかったのぉ？」

「え？」

「仕方無いなあー、じゃあ、あたしの予備を貸してあげるね」

「ええ——っ????」

ラケット持参が当然のような姫香の言い様に、退いてしまった。

ここに呼び出されたのは確かだけれど、でも、今日だって一日中部活をしていたのよ？　なのに、部活がやっと終わったら、呼び出されてまたしても練習なのお？

第37話 我儘な思い込み

「さーて……ンじゃあ、アキバケイが医者から『一応治ったよ』宣言を貰ったってーコトだし、『出所祝い』にイチヨ揉んでやりますか？」

田村くんが左手に持っていた白い軟式ボールを、青空に向かって真上に高くトスアップした。

夏の頃の濃い蒼さは無いけれど、澄み切った青空に田村くんが上げた真つ白なボールが、ポツンと綺麗に浮き上がる。

「だ、誰が『出所』だよ？ 人間きの悪いコト言つなよな？ ……」
「たたく」

口を尖らせて文句を言いつつ……それでも慶はすぐに笑顔を浮かべると、田村くんの反対側コートの後衛に就き、軽く膝を折り曲げてレシーブの構えを取った。

田村くんは、コートへと真つ逆さまに落ちて来るボールを慶に向かって打ち込み、サーブエースを取ろうとしたけれども、右手でラケットを握り、腰を落として低く構えていた慶が、容易くリターンを決めて来る。

「遣るじゃないか！」

田村くんが不敵に笑い、速攻で返球する。

「……」

あたしは眼の前で突然始まったゲームに、どうすればいいのか戸惑い、立ち尽くしてしまった。

「ほらほら香代、アンタもサッサとコートに入った。入った」

「ち、ちよつと、姫香あ？ あたしゲームするだなんて……」

——そんな心算で来ていないって。

別に田村くんとペアを組みたいとか、慶じゃなきゃ嫌だなんて思わなかったけれど、慶の居るコートには、もう姫香がチャッカリ入っちゃってペアを組んでいる。その姫香に誘導されて、あたしは空いていた田村くんの居るコートの前衛に渋々入った。

練習直後にまた練習？　こんなの……聞いてないわよー？　だけど、練習すると判っていたら、もしかして、ここには来なかったかも知れないわね。

田村くんが言う通り、さっきの安定したリターンで、慶の怪我がほぼ治ったって事は判ったわ。でも、治った報告なら、明日の部活に行けばみんな判る事じゃ無い？　どうしてこんな所にわざわざあたしを呼び出さないといけないのよ？

何だか姫香と田村くん達から、良いように利用されちゃったみたいだけど、それがどうしてあたしなの？

「土橋！ 右！ 抜かれる」

「あ？」

あたしはここに呼び出された理由を考え込んでしまい、前衛の守備が疎かになってしまった。

ガラ空きになった右サイドに、慶から――レベルスイングで強烈な――シュートボールを打ち込まれてしまい、後衛の田村くんがフオローに走るけれども、球足の速さに追い付けない。

「はい、――ゼロ、ワンね」

姫香が嬉しそうに言い、田村くんは面白くなさそうに「ちえつ」と軽く舌打ちした。

「いいか土橋？ 川村はオマケだ。アキバケイを狙って返球しろよ？」

後衛に居る田村くんが、ラリーを続けながら声を張り上げる。

「やかましい！ ダレがオマケよ？ このあたしを無視すんなー！」

田村くんの言葉に姫香はムツとして顔を赤らめた。そのまま彼を睨むと、腰に左手を当て、仁王立ちになってラケットで差す。

田村くんは承知しているのか、へへっと笑って舌を出した。

この二人……いつの間にか仲良くなってる。『抜け駆けしないで

ね』って言っていたのは、姫香の方だったのに……。』

少し悔しくなってしまったけれど、姫香と田村くんってなんだかお似合いって気がするわ。姫香の今年のバレンティンの成果は、無駄じゃ無かったってコトなのかしら？

「アキバケイを狙って行けよ？」

「え——？」

繰り返して言う田村くんの言葉に、あたしはラケットを抱えてうるたえた。

「また無視するー！」

「うるせえ、外野！」

「なにいい〜〜！」

二人の遣り取りにあたしは退いた。今気が付いたけれど、慶も相手コートで退いちゃっているわ。

でも……なんて口の利き方なの？ まあ、仲良くなっているからこそ、こんな凄い遣り取りが出来るのでしょうか……

それにしても、慶に向かっての返球って……それってボディショットを遣れってコト？

「『え——？』じゃ無い。一年のジョシで一番コントロールが利くの、土橋だろ？」

「ボディショットでしょ？ それ。何も慶にそんなコト……第一、あたしじゃなくなつたって、他にたくさん……」

あたしの言い訳を聞いていた田村くんは、頭を掻いて面倒臭そうに相槌を打った。

「あー、ハイハイ……でもな土橋？ 他のヤツに頼んで、そいつがOK出してくれると思うか？ 試合が始まったら仲の良い友達でも下手すりゃ組み合わせ次第でライバルになるんだぜ？ 誰もが上位入賞目指して頑張ってるのに、ケガしてリスク背負ったアキバケイの上達の手伝いを遣ってくれと言つたって、そうそう相手してくれるヤツなんか居ないだろ？ 正直、俺だって手を貸すのなんかゴメンだ。アキバケイが居なけりゃ、俺はその分上にのし上がれるんだからな」

「だ、だつたらなんで……」

今、こうして慶の手伝いをしているのよ？ それに、混合ダブルスなら判るけど、男子対女子の個人戦は無いハズでしょ？

「さーあ。なんでだろうな？ 放っておきやあ良かったんだろうけど……俺にも判ンねーよ」

「……なにそれ」

「たださ、不戦勝ならいざ知らず、試合にアキバケイが出る以上は、怪我で練習不足になつてるアキバケイを打ち負かしても、自慢には

ならないんだって。俺はそんなのは好きくないんだよなー」

「…………え？」

田村くんのその言葉で、今まで知らなかった慶の本当の実力が、どれほどのものなのか読み取れたような気がした。

部活練習中、派手なパフォーマンスで周囲を巻き込み騒いでいる田村くんの実力が、他の男子部員よりも上の方だと言う事は知っていたけれども、田村くんよりも控え目で大人しい慶の実力がどの程度のものなのか、興味はあってもずっと判らずに居たし、正直な所、知りたくは無かった。

だって……

あたしの中の慶は、小さかった頃のあの泣き虫慶で居るんだもの。

その慶が、実力を持っていると認められている田村くにさえ、一目置かれているだなんて……本当は、いつまでもあたしを頼って後を就いて来てくれる慶でなくっちゃ嫌だったんだもの。

こうして田村くんや姫香がワンクッションとして間に入って来てくれるお陰で、慶の事を身近に感じて、少しずつ見えて来ているような気がするわ。同時に、慶がどんどん成長してしまい、いつの間にかあたしに追い付き、追い越していた事も、嫌と言うほど思い知らされてしまった。

もうあたしに頼る必要なんか……無いんだね？

そうでしょ？ …… 慶？

あたしはゲームの最中だと言う事をすっかり忘れて、田村くん独りに慶と姫香の相手を任せてしまった。

必死になって対戦する田村くんだったけれども一対二。怪我が治ったばかりだとは言え、小学校では主将を務めていた慶と、途中入部だったけれども卒業前には上位に居た姫香の二人を敵に回して、たった独りで太刀打ち出来るワケなんか無い。

あたしと田村くんのペアは、たちまちワンゲームを落としてしまった。

「ゲームオーバー！」

姫香が嬉しそうにコールする。

「コラ土橋！ ボサツとしてないで、お前もちったア参加しろよ！」

「ひゃああっ？」

ぼんやりとしていたあたしの頬に、田村くんはコートのすぐ近くの自販機で買った、キンキンに冷えたスポーツ飲料をいきなり押し当てて来た。

第37話 我儘な思い込み（後書き）

（レベルスイング ： 腰から胸の間の高さから打つグラウンドストローク。

（シュートボール ： 直線的に打つ、速いボール。野球のシュートとは違います。

（ゼロ、ワン ： カウントは、常にサービス側を先にコール。

第38話 『彼』と『彼女』

「うわっ？ ゴメン」

驚いて飛び上がったあたしを見てふざけ過ぎたと思ったのか、田村くんは慌ててすぐに謝ってくれた。

「なっ？ なに……？」

あたしは姫香から借りたラケットを、思わずしっかりと胸に抱き締めて畏縮いしゆくしてしまう。

「悪い、土橋。でもな、せっかくお前を呼んだのに、なにもせずに帰ったりするなよな？ ほれ」

田村くんは、動揺しているあたしの心を読んだのか、それとも場の空気を読んで和ませようとしたのか判らなかつたけれど、悪戯いたづらつ子みたいな笑顔を浮かべながら、あたしの頬に押し当てたスポーツ飲料をそのままあたしへと差し出した。

そして、もう片方の手に持った同じ物を、ぐいぐいと豪快に呷あおる。

「っそ……」

——そんな……事……判らないわよ。

ワンゲーム落としたけれど、田村くん一人でも慶と姫香の相手は十分じゃない。なのはどうしてあたしを呼んだりしたの？

「あー！ 恭ちゃん、あたしの分は？」

「ぶ——っ！」

あたしに遣した缶を見て姫香が騒ぎ、田村くんが飲んでいたスポ
ーツ飲料を吹いた。

『恭ちゃん』……って、姫香と田村くんはそんな仲なの？

あたしはこの時、既に自分が慶の事を姫香みたいに呼び合っている事に気がさえしていなかった。だって、小さかった頃からお互いに名前で呼び合っていたし、名字で呼ぶ必要なんか今まで殆ど無かったんだもの。

「おまつ、お前なあ……『恭ちゃん』って……んな、なに甘えてんだよ？ じつ、自分で買え」

田村くんは顔を真っ赤にして照れている。わざと田村くんの事を『恭ちゃん』って呼んだ姫香の方も、少しだけ頬が赤くなっていた。

「えー、だって香代には買ってあげてるのにい？」

「あー、土橋は特別。来てくれた駄賃だ」

「いいじゃないのよー。ねーねー買って、買ってえー」

「だーら、自分で買えつての」

姫香が田村くんの袖口を掴み、口をアヒル口みたいに尖らせて、駄々っ子みたいに拗ねて見せる。

——いいなあー、姫香は。

そう思った。

多少のワガママだと承知していても、物怖じせずに自分の思った事を素直に田村くに伝えられる勇気って言うか……今のあたしには持っていないモノを姫香は持っているのだわ。彼女を見習って真似をするかどうかは別にして、小悪魔っぽい姫香の『女性』を見ちやったような気がして、なんだか新鮮に思えた。

普段は自分から『アタシ、毒ばっか吐いてるし』なんて言っているのに。いつもより少しだけ、姫香がお姉さんっぽく見えたのは、あたしがいつまでも進歩していないせいだからなのかなあ。

田村くに声を掛けられた時から、もしかしてのトキメキがあたしに無かったと言えば嘘になる。でも、ゲーム中に姫香との仲の良さそうな遣り取りを目の当たりにしてしまい、そして今此処で愉しそうにじやれている姫香と田村くんを見ているうちに羨ましくなってしまった。

——『彼氏』と『彼女』ってこんな感じなのかな？

羨ましく思う反面、なんだかあたし一人が取り残されてしまった

ような気がした。切ないような不思議な息苦しさを感じて心細くな
ってしまい、二人から視線を逸らせると、少し離れたその先に慶が
居た。

あたしと同じく、姫香と田村くんの遣り取りを見ていたけれども、
あたしとは違って慶はニコニコしながら見詰めている。それは二人
の仲をとくに承知して見守っているみたいな視線だった。

その慶と、視線が合ってしまった。

あたしの視線に気付いた慶は、いつものように穏やかな笑顔を遣
して来る。

「……」

本当は、慶から何か言って欲しかった。

田村くんみたいに、「冗談でも何でも良いの。気の利いた言葉で無
くても良いから、あたしに言葉を掛けて欲しかった。二人の遣り取
りを見ていた直後のあたしにとっては、慶の笑顔に物足りなさを感じ
てしまい、思わずそっぽを向いてしまう。

——帰りたい。

姫香達と逢った瞬間から、ずっと引き摺っていた想いが沸々と湧
き上がり、一段と強くなってしまった。

あたしと慶は、昔はこんな風じゃ無かった。お互いに気心が知れ

ていたから、何でも気軽に……それこそ今の姫香達みたいな遣り取りだって出来たかも知れなかったのに。

でも、そんな関係が続けられなくなってしまったのはこのあたし。

姫香や亜紀に面と向かって慶との仲を問い質^{ただ}されてしまい、自分の気持ちを確認している隙^{ひま}さえ失くして、あたしの方から慶を遠去けてしまったからなのだわ。

——あたしは、慶になんて酷い事をしちゃったんだろう。

慶もあたしに近寄れなくなっているのだと、この時にハッキリと判ってしまった。

お互いに気詰まりしてしまい、言葉を掛けられなくなっちゃった……こんな状態になってしまっただなんて、あの時は思いもしなかったんだもの。

——もう仲直りだなんて、無理……なのかなあ？

じりじりとした焦燥感は募る一方だった。

「おうーい、土橋？　起きてるかー？」

「はっ？」

顔の前で手を振り、あたしの意識を確認している田村くんの声で
我に返った。

またしても驚いて肩を跳ね上げてしまったあたしを見て面白かつ
たのか、田村くんは急に笑い始めた。

「くすくす……土橋ってさー、ビクビクし過ぎだよ。小学校で飼っ
ていたウサギみたいだ」

「うっ、うさぎい？」

あ、あたしが？

「そ。で、因みに川村は凶暴なニワト……リッ」

「はい、そこまで！」

田村くんは姫香から最後まで言わせては貰えなかった。姫香が田
村くんのおでこに向かってラケットをボレーするみたいに強く押し
出すように振ったからだ。

「痛っつだあああ~~~~っ！！！！ん、なっ、ナニすんだよ？」

涙目になった田村くんのおでこには、姫香が付けたガットの網状
痕が、赤く薄っすらと付いていた。

第39話 ダブルスなのに…

田村くんはスポーツ飲料を一気に飲み干すと『ぷはあ———！』
と大きな声を出した。

あたしは彼の声に驚いてビクつき、姫香は『ヤダー、オヤジっばーい』と言ってあからさまに嫌そうな顔をして非難する。

でも、田村くんはあたし達の反応を、全く気にも留めてはいなかったみたいだった。

「アキバケイは治ったつつってゲーム遣っちゃってるけど、それは本人が言ってるだけだよ」

「え？ でもゲーム前にお医者からOKが出たって言ったのは田村くんでしょ？」

あたしは田村くんの辻褄^{つじつま}が合わない言葉に引っ掛かる。

「ああ。詰まり、医者が許可を出したって言っても、リハビリ程度の許可ってコトだよ。落ちてしまった体力や筋肉を元に戻す為のリハビリ許可さ」

「おい田村、余計な事言うなよ」

自分のベンチヘタオルを取りに行っていた慶が、あたし達の会話に合流して来た。

弾んでいた会話が自分の事だと知った慶は、少し怒っていたみたい。

滅多に怒った顔なんか見せない慶だから、単にあたしが場の空気で勝手に怒っていると思っただのかも知れないわ。もしかしたら、田村さんに暴露されて困っていたのかも……

「って、今ゲーム遣っているじゃない？ いいの？」

「良かねーよ。んなワケねーって」

姫香が少し慌てた突っ込みをするけれど、田村くんは平然として受け流す。

「田村っ！」

「あづづづ……んま、参ったっ。こっ、コーサン」

慶から片腕で首を締められてしまい、田村くんは顔を真っ赤にして降参した。慶の照れ隠しだとは思っけれど、幾ら仲が良かったって暴力は良く無いと思うのだけど……

「だったらどうしてリハビリの筋トレじゃなくって、ゲームを遣っているのよ？」

「んー良い質問だねー。要はそこだよ」

姫香の質問を田村くんは待ち受けていたみたいだった。悦に入ってた田村くんが調子に乗って腕組みをする。

「もう止めるよ。続き、遣ろうぜ？」

「お？ おお」

慶が情けない声を出して、ゲームを急かした。あたしには、慶が田村くんに『それ以上言うな』と口止めをしたように思えてならない。

「土橋、いーか？ アキバケイ目掛けて思いつ切り打ち込んで遣れ」
「え——ッ、出来ないわよ」

田村くんはあたしにやつぱり同じ指示を出して来た。

「ダイジョウブだって。香代のヘナチヨコなんか当たりやしないから」

「！」

あたしの心配に突っ込みを入れるよう、相手コートから慶が声を張り上げる。

「……なんか……今さっき力チンと来ちゃったんだけど……本気出しても良いかしら？」

口では出来ないと言いながら、それでもあたしに振って来たボールを慶目掛けて返球する。

キャッチボール等なら身体の真ん中で捕らえるのが基本だけれど、

この場合、身体を目掛けて飛んで来るボディショットは、かわす事は簡単でも、返球となると中々難しい。

田村くんの速いリターンとあたしの集中砲火で、慶はそのゲームを落とした。

「コイツ、新人戦が近付いて来たものだからおとなしく休部出来ないのさ。いきなり俺達男子とゲームしたって、分が悪いだろ？ その点女子なら良いリハビリになるだろうしさ。特に土橋なら声掛け易いし、周りから変に思われたりしないしさー」

その後半部分はどういう意味？ 聞き捨てならない田村くんの回答に、ムツとなってしまふ。

「田村！ 香代に勝手なこと吹き込むなよ」

「はああ？ 土橋を呼べと言ったのは、オマエぢゃね？」

赤面した慶が迷惑そうな……きまりが悪そうな顔をして、田村くんに向かって強烈なドライブを掛けて来た。

「お——つと、そうこなくっちゃな！」

軽口を叩きながら、田村くんも負けずに返球する。

打球が……速い！

さっきのゲームの速さどころじゃ無かった。どんなに集中して見ても、軌道上のボールが点じゃなくて、線に見えてしまふ。

あたしは田村くんの意味深とも取れる発言に一瞬引っ掛かったけれども、二人のラリーに圧倒されてしまって、考えを巡らせている余裕すら持てなかった。

部内女子のリターンとは、比べ物にならない男子の激しい打ち合い。

元々、パワーで押して来る男子のラリーを、アウトコートから見ていて速いとは思っていたけれど、同じコートで、しかもこんなに至近距離で打ち込まれたら……脚が竦んで怖くなってしまう。

「ち、ちよっと！ 怖——い！ なに本気出してシングルス始めてるのよ！ ダブルスじゃなかったのお？」

どうやら相手コートの姫香もあたしと同じみたいだ。手出し出来なくなってしまった男子シングルのゲームに巻き込まれて戸惑っている。

「最初は球速に慣れれば良い。 〽 ポーチ出来そうなら遠慮せずに入って！」

「え〜〜〜、こ、こんなの……で、出来ないわよー！」

「出来るって」

そんなぁ……

笑いながら軽く言っただけのける慶の言葉に、姫香もあたしも退いてしまう。

第39話 ダブルスなのに…（後書き）

（ドライブ：ボールに順回転を付けて強打すること。

）ポーチ：ダブルスで、パートナー側に飛んだボールを飛び出してカットすること。インターセプト。

第40話 ゲームの後で…

結局、二回目のゲーム終盤途中から慶が腕に違和感を覚えてリタイアしてしまった。その後はみんな慶の事が気になって集中力を欠き、あたし達はゲーム続行どころではなくなってしまった。

みんなには内緒にしていたみたいだけど、あたしは慶が一回目のゲーム後半頃から、休憩の度に自販機のジュースを飲みながら、さり気無くティーピングで固定していた手首に冷えたペットボトルを宛がっていたのに気付いていた。

最初、慶がジュースを当てていたのは気のせいだと思っていた。でも田村くんにはさえ気付かれないように慶が取っていた行動は、あたしの眼には疑惑から確信へと変わってしまった。

きつと急に動かしてしまったから、痛み始めたのだと思う。

試合が近いからと言ったって、リハビリに本気出してゲームする事はないと思うのに……そんなに痛い思いをしてまで練習して、試合に臨みたいだなんて……どうかしているわ。慶に付き合っている田村くんだって、姫香だってそうよ。

あたしは、慶の無茶に付き合っている二人の気持ち判らなくなってしまった。もっとも、姫香は単に男子二人に付き合っているだけで、彼等の無茶振りを気にはしないように思える。けれど、そんな慶に気付いていても、あたしの口からゲームを止めるようにとは言えなかった。

『僕はね、お父さんみたいにテニスの試合で優勝するんだ』

小学校の時に軟式テニス部に入部することを決めていた慶は、お父さんが大学生時代に優勝した時のメダルを自宅から持ち出して来て、あたしに見せてくれた。

色あせた紅白のリボンが付いていた金色のメダルは、そのまま飾れるように透明なケースの中央に丁寧に収められていた。それは、慶が四年生になる年の春、お父さんがお仕事の関係で、名古屋に転勤する為の引っ越し作業をしていた時に、偶然書斎の奥から見付かったのだそう。

初めて目にする金色の丸い綺麗なメダルに慶は強く興味を持ち、処分しようとしていたお父さんから貰ったのだと言っていた。

お父さんに対して尊敬と憧れを抱いていた慶は、自分の目標を定めてどんどん先へと進んで行った。あれから三年半――慶はお父さんの事を決して口にしたりはしないけれど、あたしには慶がずっとお父さんの背中を見て、追い付き、追い越そうとしているみたいに思えてならない。

そして、あたしは……

慶から誘われて何となく入部したテニス部で、そこそこの成績を保ちつつ小学校を卒業して、そしてまた成り行きでテニス部に入部してしまった。

アキバケイといつも一緒……そう周りから冷やかされ、慶と出来ているのだと他人から勝手に思われて、結び付けられるのがどうし

ても我慢出来なくて、あたしは慶と距離を置いてしまった。そして気が付けば、あたしの後ろをついていたはずの慶が、いつの間にかあたしを追い越して先を行き、あたしが慶を追い掛けているようになっていた。

焦りとも諦めとも区別がつかないような複雑な想いが、胸の奥底から湧き上がって来る。

田村くんの事が気になり始めていたけれど、かなり強引に引っ張って行く所がある彼にはやっぱりついて行けそうにない気がするわ。何より彼にはもう姫香が傍に居るんだもの……

日はとつぷりと暮れてしまい、川の近くにあつた駐輪場では、涼しい風がそよいでいて心地良い。ポニーテールにしているあたしのおくれ毛が、そよそよと風に煽られてくすぐったかった。

日中、みんなと練習を頑張ったけれど、数時間しか経っていない慶達のゲームに参加した時の方が、疲れ方が半端無いのはどう言う事なのかしら？ 練習量では圧倒的に、部活の時の方が多はずなのに。

「香あー代、まあ〜だ気にしてるの？」

「ん……」

浮かない顔をしているあたしに、姫香が悪戯っぽく笑い掛けて来た。

そう——姫香との事だって、あたしの中ではまだ何一つ解決なん

かしていないのよ？

でも姫香やその場に居た亜紀に吐いてしまった嘘だって、姫香は全然気にしていないみたいだわ。それとも、あの時あたしが嘘を吐くだろうと、承知していたとでも言うのかしら？

田村くんが姫香に囁いていたのは、多分その事。そして、姫香は田村くんの言葉に納得していたわよね？

どうして？

あたしは姫香に問い掛けるような視線を送った。

「あたし、もう気にしていないわよ。あの状況で来ようと思ったら、香代でなくなっただって誰だってそう言うてはぐらかすしか他に方法が無かったと思うもの」

「姫香……」

「って言うか、これは恭介の受け売りなんだけどね。ホントはあたし、香代には嘘を吐いて欲しくは無かったんだゾ」

そう言って、姫香は照れたように笑った。

「……ごめん」

「あ？ ああ、気にしないで？ でも今のはあたしの本音なの。亜紀が居たって、気にする事なんか無いのよ。だって、アキバケイと香代は幼馴染なんだし、お隣さんなんだから」

「え？」

あたしは姫香の言葉に引つ掛かりを覚えて訝った。

姫香は、あたしが田村くん経由で慶から呼び出されていると思っているの？ あたしは田村くんから呼び出されていたのであって、慶がここに居合わせていた事さえ知らなかったのよ？

三人の中の誰かが、あたしの反応を面白がって見ている……そんな風に思った時、頭の中で真っ先に田村くんの日焼けした悪戯っ子みたいな顔が浮かんだ。

四人の中で、彼が一番あたし達の個人情報を知っており、誰に対してどんな想いを抱いているのかさえ……恐らく今の田村くんなら判っているはず。

もしかしたら、意味深な言葉で揺さ振りを掛け、あたしの気持ち確かめようとしたのかしら？

田村くんから試されたような気がして、少しだけ不愉快な気がした。事実、あたしは疑いこそしたけれど、田村くん本人から直接誘われたのだと勘違いして浮かれていたのだから。

第41話 彼女の視線

閉鎖される時間が近付いていたせいか、公園内の広い駐輪場に残されている自転車は、あたし達の自転車を除くと、もう殆ど残ってはいなかった。

自転車を押して並んで歩いているあたし達を後にとすると、慶と田村くんは自転車に乗ってさっさと出発してしまった。随分遅れているあたし達には気付かずに、会話を弾ませているのか時折笑い声が聞こえていたけれども、その声もすぐに聞こえなくなってしまう。

だから、この場での会話を聞かれたりする事なんか無い——そんな安堵感が、あたしと姫香との間で暗黙の了解として成立していた。

「初めて会った時から思っていたんだけどさあ、香代は自分の気持ち、判ってないよ」

「……」

核心を突かれた気分になって、あたしは言葉を飲み込んだ。だってあたしには、胸を張って否定出来そうに無かったから。もしかしたら、姫香の言っている通りなのかも知れないもの。

友達が黙っていても、その子の言動から男子の誰を意識している、どう想っているのかくらいすぐに判るのに……なのに自分の事となると、知りたいと願っているのに本当に判らない。

「恭介が言ってた。怪我をしていたアキバケイを一番気にして心配していたのはあんただって」

「それはお隣同士だから……」

「あー、もう、違うでしょ？」

少し苛立った声。

そして、姫香は声を潜めて……『素直じゃないんだから』とも付け足した。

「……」

反論し掛けた言葉を遮られてしまい、あたしは何も言えなくなってしまう。慶の怪我の事を心配しているのだって、それはお隣ですとあたしが慶のお目付役だったから。単に、お世話係だったから他の男子よりも気に掛けてあげられていたからであって、決して慶の事が……その、す、す……好きだからとかじゃ……ないと思うのに。それに、慶の事が好きなのは姫香の方じゃないの？

あたしの視線から言いたい言葉を読み取ったのか、姫香は少しだけ頬を赤くした。

「あ、亜紀はどうだか判んないけど、あたしは別に……アキバケイが好きだってワケじゃないんだからね。今年のバレンタイン、あたし片っ端からばら撒いていたの。気付かなかった？ ほ、ほら、だ、男子なんて単純なのよ。ねっ？」

「……」

怪しい。姫香は慶に脈が無いと覺って、田村くん達に鞍替えしち

やっ たつて感が拭えないのよね。

あたしの疑いの眼差しに、姫香は少し緊張したのか、おでこに薄っすらと汗が光っている。別にゲーム後の事だったから、汗を掻いていようが荒い息を吐いていようが不自然じゃなかったけれども、今の場合なら姫香があたしの疑いの視線に焦っていると思えない喋り方だわ。

「香代つてばホント^{いじ}弄り甲斐があるわねえー」

「いつ、弄り甲斐つて……そ、そんなあ……そりゃあ、姫香は結構ばら撒いていたけど……だからつて、どうして急に田村くんとそう言う仲になっちゃっていたのよ？」

つて言うか、弄り甲斐があるのは姫香の方でしょ？ なに赤くなっちゃってるのかなあ。

「うわ、そう来たの？ 参ったわねえ」

あたしに矛先を向けられた姫香は、苦虫を嚙潰したような顔をした。

「吐け」

「て、なんであたしの話になるかなあー？ 今は香代っちの事を話しているんだよあ？」

姫香は自分に話題を振って来たあたしから逃げ出そうとしたけれど、あたしはここに呼び出された本当の理由も、姫香がどうして田村くんとそういう風な仲になっちゃったのかが知りたかったから、

赦してあげない。

「さー、吐くのよ」

「香代っちって……シツコイわね」

「それはどうも。褒めて貰ったって事にしておくわ。あたしの事はいいから、田村くんとの仲を吐け」

「やーん、香代っちがいぢめるうゝゝゝ」

姫香が珍しく気弱になった。別に怖い顔で迫った心算は無かったのだけど。そんなに怖かったのかしら……？

「『吐け』ってナニを？」

「きゃ？」

「あー、恭ちゃんにアキバケイ。一体、何処から湧いて出て来るのよ」

「誰が『湧いて出る』んだよ？　つーかマジで『恭ちゃん』は止せってば」

背後でクスクス笑う慶の声にあたしは驚いて飛び上がり、先に振り返った姫香は二人を見付けて、助かったとばかりに明るく振舞った。

見ればそこには自転車に乗ったまま片足を着いて停車している慶と田村くん。確か先に二人は帰っちゃったのだと思っていたのに、

いつの間にかあたし達に気付かれないように、廻り道してここまで戻って来たみたい。

あたしは二人から盗み聞きされ、小馬鹿にされたような気がしてムツとなった。

女の子同士の秘密の会話を盗み聞きするだなんて失礼よ。

膨れっ面になっていたあたしに気が付いて、慶がニコリと笑う。

「そんなに気にしなくっても、今さっき僕達は来たばかりだよ。内容だって聞こえなかったから大丈夫だよ」

「で、聞かれてそんなに怒る様な事を話していたのか？」

慶の『安全宣言』を混ぜ返すように、田村くんがニヤニヤしながらあたしを見る。

あたしは田村くんが何となく苦手に思えて来て、ついと二人から視線を逸らせた。

「何でもないわよ。ねー、香代？」

「え？ う、うん……」

姫香の鮮やかなスルーに、あたしは戸惑いつつ頷いた。そして姫香は、田村くんに向かってからかう様に『お節介〜』と言う。

これって、もしかしてチョッカイを出して来る田村くんからあたしを姫香が守ってくれた事になるのかしら……？ そうとも取れて、

少しだけ気恥しくなっていました。

今まではずっと慶の『お守役』で、守っていた側のあたしだったから。姫香からの助け舟が心地好く感じられた。

「ま、良いけど。でさ、土橋」

「なあに？」

「試合直前まで……詰まり、明日もゲーム遣るからここに来いよ？」

「ええ——っ？」

車の往来が激しい国道線沿いの信号待ち——

田村くんの半ば強制的なゲーム参加に、あたしは思わず不平を漏らした。

第42話 二人きり…

「どうしてそうなるのよ？」

——あたしに拒否権は無いの？

口を尖らせてジトツと慶を睨んだ。

慶を選んだのは、ここに居る中で一番返事をしてくれそうに思えたから。だけど、あたしと視線が合った慶は、一瞬だけ困ったような表情を浮かべると、気不味そうに視線をあたしから逸らせてしまった。

「ちょ……」

——なんで無視するのよ？

答える心算が無さそうな慶の反応にムツとなる。

確かにリハビリ序のゲームなら、パワーで押して来る田村くん達男子ばかりを相手にするのはキツ過ぎるかも知れないわ。でも、だからと言ってあたしをわざわざ指定する必要なんか無いでしょう？ 田村くんだって、妙な所であたしにボディーションのコントロールをするようにと、しつこいくらい指示していたし。

あたしは慶のリハビリ要員として呼ばれただけなのだと思います、不愉快になってしまった。第一、当の本人がこうして無視するんだもの。これはもう、リハビリ要員ですときっぱり言われてしまった

のと同じ事だわ。

「土橋いゝ、ンなに拗ねンなよー」

「だっ、誰が！……す、拗ねてなんかいないわよっ！」

あたしの心を見透かしたのか、田村くんが妙な猫撫で声を掛けて来る。でも、今更ごまかそうとしたって、そうはいかないんだからねっ。

「ホントーかあ？ 俺の眼にはどう見ても拗ねてるようにしか見えねーぞ？」

「う、うるさいわねっ！」

田村くんの直球が一々癪に障る。

だけど、仕方が無いじゃない。何の説明も無しに呼び出されて、姫香に嘘まで吐いて遣って来たら、拳句、慶のリハビリ練習に付き合わされ、疲れた身体を酷使してゲームに参加させられてしまったんだもの。

「ねえ、香代？」

「？」

田村くんとこの遣り取りを黙って見ていた姫香が口を割った。

「このメンバーでゲームしたの、面白く無かった？」

「……うつん」

そんなこと……無い。

普段、男女別々で練習をしているから、練習量も違えば、こなしに行くメニューも若干違っている。ストロークのラリー程度なら男女混合もあるけれど、部員数に対してコート数が少ないから、混合ダブルスのゲームを遣ったりする事は滅多に無い。だから、あたしはこのゲームがとても新鮮に思えた。

正直、男子二人からのパスは速くて中々手が出せなかったけれども、ゲームが進むにつれて眼が慣れて来たのか、ボールに対する恐怖心はどんどん薄れて行ったように思う。

それに、部活中では全く考えられない事だってあった。

ゲーム中に時折あったミスショットへの突っ込みや、冗談を交えて笑いを取り、わざと相手のミスを誘う卑怯な心理戦のお喋りも、ツボに嵌って面白かったもの。こんな楽しいゲームも『在り』で良いのかなあ……なんて。

「なら、明日も来ない？」

「姫香……？」

「愉しめて上手くなれるのなら、あたしはそれでいいと思うよ？
要は『気』の持ち様じゃない？」

「……ん~~~~？ そうなのかなあ？」

「そっだよー」

なんだか姫香に上手く丸め込まれてしまったような気がするわ。
試合が近いと言うのに、こんな事で良いのかしら……？

夕暮は遠く西の空の端に消えてしまい、代わって一面に拡がった
漆黒の空には星が瞬き、東の方から綺麗な満月がぼっかりと浮かんで
いる。日中はまだまだ残暑が厳しいけれど、夕暮れとともに気温
が下がって過ごし易くなってきた。

あたし達は広い歩道を四人が二列になって、自転車を押して話しながら歩いていていた。他愛の無いお喋りから、アゲアシの取り合いや突っ込みまで……こんな時間に、男の子達を交えてこうしてお喋りするのは初めてだったような気がする。なのに、何故だか『懐かしい』と感じてしまったのは、このメンバーの中に慶が居るからそう思ったのかしら……？

「じゃーな、また明日。腕、ちゃんと手当しておけよ？」

「うん。サンキュ。田村こそ、帰り気を付けろよ」

「っせーな。アキバケイに言われたかねーよ、そのセリフ」

慶との遣り取りをしながら、田村くんは慶にふざけて軽く右手でパンチを繰り出し、慶は笑いながらそのパンチを広げた左掌で受ける真似をする。

「香代、明日ね。お疲れー」

「うん、お疲れー」

姫香は田村くんに送って貰うのだそうで、二人は先に自転車を漕ぎ出した。

姫香にはもつと一緒に居て欲しかったけれど、家の方向が違うからこればかりは仕方が無いわ。

そしてあたしは、家がお隣どうしだから当たり前なのだけど……

——慶と二人きりになっちゃった……

こうなると、何から話せばいいのやら……別に意識する必要なんか無いのだと頭では理解出来ている心算なのに、何処か妙に構えてしまい、胸が痞^{つか}えて息苦しい。

そして自然に口が重くなってしまう。

そんな自分が不自然で変だなと思った。

こんなのいつものあたしじゃ無いわ。姫香と田村くんが居てくれた時は、こんな事なんて無かったのに……

「……」

急に黙り込んでしまったあたしを訝ったのか、隣で慶が様子を窺っている気配がしている。だけど、あたしは慶の方を振り向いて直視する勇気が出なかった。

振り向けば胸の奥で痞えている何かが、もっと大きくなってしま
いそうで不安だったから。

慶は田村くんや姫香みたいに、想った事を直感的にズバズバ言う
ような事はしないし、かと言って気の利いた会話をしてくれるほど
器用でも無い。

どちらかと言えば不器用……なのは、あたしと同じね？

だからこそ、慶の事が苦手になってしまったのかしら……それと
も他になにか理由が……？

第43話 帰り道

暫くお互いが黙り込んでしまい、居心地が悪くてどんよりとした重い空気があたしを包む。でも、きっとそれは慶も同じだと思った。

「か、香代、あの……さ……」

「……？」

あたしの斜め後ろで自転車を押して歩いていた慶が、躊躇いながら先に沈黙を破った。

だけど、さっきまでみんなと一緒にだった時は、自然に慶を見る事が出来たのに、今はダメ。

声を掛けられて少しだけホッとしたけれど、振り向いて慶を見詰める勇気が出ないあたしは、自転車を押してのろのろと歩きながら、浅く俯いてしまった。

視線の先には、何の変哲も無いアスファルトが延々と続いている。けれど、あたしの中では慶の事を意識していて、慶の一語一句を聞き洩らさない構えで耳を^{ただ}敬^{ただ}てている。

それは慶がこれから言い出すかも知れない、あたしの禁止NGワードが頭の中を駆け巡ったから。

慶がそのNGワードを話題として取り上げれば、すぐにでもダッシュして自転車を漕いで逃げ出そうと思ったから、両手で握っている自転車のハンドルをぐつと強く握り締めて身構えた。

「今日は来てくれてありがとう」

慶は微妙に照れながらあたしに話し掛けて来た。

ゆつくりと歩いていたあたしの歩が止まり、思わずその場に立ち
停まる。

「……」

「香代が来てくれて、愉しかったよ」

ありきたりな社交辞令なのかも知れないけれども、それでも何故
だか嬉しくて、気持ちがいやや上向きになる。慶が先に話し掛けてく
れたせいか、あたしはそれまで張り詰めていた心の糸が、一気に緩
んできました。そして、胸に^{つか}痞えていた重苦しい不快感が和らいで
軽くなる。

なに？ あたしはもしかして、慶からお礼を言って貰いたくて、
ずっと不機嫌だったとも言っの？

あたしって、そんなに『何様』だったワケ？

「べっ……別にあたしは……」

「結構上手くなったじゃない？」

「なにが？」

「ボールのコントロール。田村がマイペースでゲームを進めたから、

前半は殆どポーチに出られなかったみたいだけど、後半は積極的だったよね。三セット目の時には遣られたなあー。綺麗に決められちゃったし」

ああ、唯一慶がリターン出来ずにパスしてしまったやつね？

何を言い出すのかと思ったら、さっきのゲームの反省会？ 相変わらず気が利かないと言うか、テニス馬鹿って言うか……

呆れて見上げると、眼の前にあたしと同じく自転車を押す格好で立っている慶と視線が合ってしまった。

街灯に照らされて無邪気に笑った慶の顔が何故だか眩しく思えて、あたしは戸惑いながら顔を逸らせてしまう。

「て、手首もだけど、頭はもう大丈夫なの？」

「あ？ ああ、あれ？ 軟式だからそんなに痛くないのは香代だつて知ってるじゃない」

「そつ、それはそうだけど……」

打撃の良い音がしていたし。

「ま、その……あれから川村のサービスの度に、前衛でビビってたのは事実だけど」

慶はゲームの最中に、ペアを組んでいた姫香のミスサーブで、後頭部を直撃されていた。

セオリーとして、慶はあたし達相手コートからのリターンに集中するため、ペアである姫香のサーブスの時に、背後は完全に無防備状態になってしまふ。

姫香だつてわざと慶の事を狙つてサーブしたのじゃないのだらうけど、味方のまさかの攻撃に、前衛で構えていた慶はその場に頭を抱えて蹲り、あたしとサーブをした姫香は驚いて――そして田村くんは慶の不幸を見て、コートに引つ繰り返つて大爆笑した。

ミスサーブでペアを攻撃つて言うのは意外とある事だし、あたしは経験者じゃないけれども何度かそのシーンを見た事があつた。でも、今日みたいに狙い澄ましたようクリティカルにヒットして、慶の真上垂直にボールが高く跳ね上がったのを見たのは、これが初めてだつたから。

あの時は心配したけれど、もう本人が大丈夫だつて言っているんだもの。

そう思つたら気が抜けて、思わずくすくすと笑つてしまった。

「あー？　なに思い出し笑いしてるんだよ」

「え？　だ、だつてえ……」

あたしが笑うのを注意している慶が、釣られてくすくす笑つてる。

声変わりをしてしまった慶の笑い声を聞いたのは、この時が初めてだった気がするわ。クラスの男子の馬鹿笑いとは全く違う、低くて幅の広さを感じさせる慶の笑い方が妙に大人っぽく思えてしまい、あたしは頬とおでこが異様に熱くなつてしまった。

でも、薄暗い街灯の下だから、きっと慶には気付かれたりはしないわよね？

先に口を閉ざして笑うのを止めたのは慶の方だった。

あたしには、慶が急に黙ってしまったように見え、訝って慶に倣^{なら}う。

「なあ、香代」

「ん？」

「遠藤さんには、そのう……この事を内緒にしたい欲しいんだ」
「どうして？」

言葉を選んで言い難そうにしている慶を、あたしは見上げた。

慶の手首の怪我だって、あの時は誰が見たって事故だと思うだろうに、試合間近に慶に怪我をさせてしまったと強く責任を感じて、自分を責めていた亜紀。

だったら、リハビリゲームをしている今こそ、彼女を呼んであげた方が亜紀だって喜ぶのじゃないのかしら？

「ほ、ほら。遠藤さんは責任感が他の女の子よりも強いから、僕がこうして香代達と自主トレしていたのを知れば、きっともっと責任感じてしまうからさ」

「なんで口止めみたいな事をするのよ？ 亜紀も呼んであげればいいじゃない」

『あたしなんか呼ばなくつても、あんたの事をずっと一途に想い続けている亜紀が居るんだよ？』そう口に出してしまいそうになったけれども、あたしはそれ以上言えなかった。

第44話 香代の心

——慶は亜紀の想いを、まだ受け取ってはいないの？

小学生の頃から、亜紀は慶の事が好きで……面と向かって慶には言えないけれども、ずっとその想いは変わっていないみたいだった。だから、慶が怪我をしてしまった時に、責任を強く感じてあれこれと世話を焼いていても、いつも嬉しそうにしていたのも頷けるわ。^{うなず}

一途に慶の事を想っている亜紀なのに、慶はそんな亜紀の想いに気付いて受け取るうとは思わなかったの？ 夏祭りに言っていた、慶の理想の女の子は亜紀の事だと思っていたのに。

探るような眼で黙って慶を見詰めると、視線が合った慶はあたしに何かを言おうとして躊躇った。そして言い出す決心が付かなかったみたい、あたしから思わず視線を逸らせてしまう。

暫く息が詰まってしまいそうな『間』が空いて、慶はあたしに何かを話そうか話すまいかと悩んでいたみたい。

右の人差し指で自分の頬をぽりぽりと掻く仕草を見せたけれど、やがて慶は言葉を選ぶようにして切り出して来た。

「んー、呼ばれても困る……って言うか、迷惑って事があるだろう？ 遠藤さん、いつも習い事が凄じくない。そのう……僕の怪我の事を、なんだかいつまでも引き摺っているみたいだし、こう言っちゃ何だけど、口実にされるのも僕としてはなんだかさ……」

「何かあったの？」

「うん……まあね。悪いけど、遠藤さんに助けて貰っても……却^{かえ}つてこっちが余計に気を遣っちゃうんだ。前に一度、帰りの時に僕の面倒を見てくれていて、習い事に間に合わなくなつてさ。心配した家の人が迎えに来た事があつたんだよ」

「なにそれ？ 一体どんな面倒を見て貰っていたのよ？」

あたしの鋭い突っ込みに、慶は顔を赤くして慌てて手を左右に振る。

「べつ、別に大した事じゃないよ。下校時間に包帯が緩んじやつて……で、困っていたら遠藤さんが『直してあげる』って言っからさ。だけど意外と彼女、不器用って言うか……直してくれていたはずなのに、どんどん緩んでって前よりも酷くなつちやつたんだ」

「はあ。それで塾に間に合わなくなつちやつて、家の人 came の？」

「家の人は困った顔するし、遠藤さんは泣き出しちゃって……そりゃああの時は誰からも責められたりはしていなかったけど、まるで僕が悪者みたいだったからさ」

「ううん。それ、やっぱり慶が悪いわよ」

「ええっ？」

あたしの鋭い指摘に、驚いて慶が退いた。

本当は、慶の気持ちを判ってあげられるのだけど、亜紀はあたし

の友達だから、この際慶が悪い事しておくわ。

確かに亜紀は部活の後、自宅に直帰することは無い。本人から直接聞いたわけじゃないけれど、彼女の家は旧家——地元に古くから続いている家柄で亜紀は文字通りの『お嬢様』なのだそう。

きっと、慶もその事に気が付いていたのよね？ それとも単に亜紀の事が苦手だっただけなのかしら？

「亜紀の事が苦手なの？」

本当は慶から肯定して欲しい癖に、あたしはとんでもない事を聞いてしまった。どうしてそんな事を思い付いて口走ってしまったのか、自分でもよく判らない。

こんな事を聞いてしまって、もし慶が『そんな事はないよ』って否定されたらどうしようだななんて心の片隅で思っている癖に。だけでもそんな返事は、期待しても返っては来ないだろうって判ってた。

判り切っているのに、慶から直接本心を聞き出さくって……うん、あたしはそうだと確認したいと思っているんだもの。

まるであたしが意地悪な小悪魔になっちゃったみたいな気がした。

「そ、そんな事なんか想ってないよ……って言うか、何で僕が悪いんだよ？」

「ウン。優先順だから」

「ゆっ、優先順？ 僕と遠藤さんとじゃ、遠藤さんが先ってコト？」

「っそ」

あたしは満面の笑顔を慶に向けた。

慶は物凄く困った顔をして、あたしの言葉に首を傾げて悩んでいる。

うんうん、もっと悩みなさいね。

あたしは心の中で舌を出す。

もっと器用に立ち回れないのかしら？ 慶ってば……相変わらずなんだから。

亜紀がある日を境にして慶に寄り付かなくなったのは、そんな事があつたからなのねと納得した。きっと、亜紀も慶が普段以上に気を遣って退いちゃっている事に気が付いたのだわ。

そこまで思つて、あたしはハタと考えた。

あたしつてば、なにを期待しているの？ 亜紀の想いが慶に通じればいいと思つていたのじゃなかったの？ 慶だつて……

ううん、違う。

亜紀は大切な友達だし、好きな人が現れたのなら絶対に応援してあげなくちゃ……と思う。けれどその相手が慶じゃダメ……やっぱり慶とは仲良くして欲しくなんか無い。

他の人となら誰でも良いの。慶じゃなければ誰であろうと絶対に応援してあげる。

「……？」

『慶じゃなければ』……？　って、なに？　このあたしの限定は？

「？　どうしたの？」

その慶の一言で、急に顔が物凄く熱くなった。まるで、炎に炙られているみたいに。

そして、あたしは自分の本当の気持ちに今頃になって気が付いた。

第45話 帰宅

「んな、何でも……無いわよっ……」

慶があたしを見てる——そう思うと、余計に胸がドキドキして顔だけじゃなくて身体中が火照^{ほて}って来て熱くなる。

わーん、おち、落ち着け心臓っ！

「大丈夫？ 香代、顔が真っ赤じゃん？」

「ひっ？」

いつもとは違って『退き』の体勢になってしまったあたしを気にしてか、慶は自転車をぐいと一押しして一気にあたしの眼の前まで来ると、心配そうに顔を覗き込んで来た。

驚いてしまったあたしは、思わず涙目になって飛び上がる。

「はあ？ 『ひっ？』……って、ナンだよ？」

「う、うつつ、うるさいわね」

意識しちゃダメだって頭では判っているのに、慶の顔が近過ぎて余計に意識しちゃうわ。

あーん、誰か助けて……

「あのさ、なにも取って食おうってワケじゃないんだけど……って

言うか、香代なに泣いてんの？」

「んなっ、泣いてなんかいいわよっ！」

あたしはありったけの空気で、訝る慶に咬み付いた。

「そうかあ？ でも涙目になってるよ？」

「なつてないっ！」

あたしの事が心配なのか、慶は浮かない顔でまたあたしを覗き込んで来る。

慶の気を逸らそうとして辺りを見回すと、いつの間にかあたし達は慶の家のすぐ傍まで帰って来ていた。眼の前が慶の家って事は、その向こう側お隣があたしの家だ。

「……調子悪いのか？ 今日暑かったからなあ。部活後に付き合わせちゃったせい？」

「ち、違うつてば！ 調子がまだなのは慶の方じゃない。なに言ってるのよ。人の事を心配するよりも、自分の腕の事を心配しなさいよね。ほ、ほら、帰ったわよ。さ、さっさと自分の家に帰んなさいよ」

「あ？ ああ……」

あたしの様子に若干訝りつつ、それでも慶は短く「じゃあ、お疲れー」とだけ言って、自宅の門を潜って行った。

あたしは路上で立ち止まり、家に入って行く慶の白いポロシャツ姿が見えなくなるまで、そつと後ろ姿を見送った。暗くてはつきりと判らなかったせいかな、あたしの眼には、学年男子の中でも背が高い部類に入る慶の背中では、何処かの知らないお兄さんの背中みたいに映っていた。

息が詰まりそうだった状況からやっと解放されて、あたしは誰にともなく深い安堵の息を吐く。

助かったわ……これ以上、慶と一緒にいたら……

……どうなっていたのかな？

* *

「香代く、ご飯出来たわよ」

「はぁーい」

家に帰ってすぐにシャワーを浴びたあたしは、またいつものジャージ姿に戻っていた。

練習をして帰った後は、いつも取っ換え引っ換えてこの格好。お母さんが色気も何も無いわねと愚痴を溢してくれるけど、これが『あたし』なんだもの。

だけど幾ら『外見』が同じでも、この日のあたしの心の中は、い

つもとは違っていた。

毎日繰り返されている『いつも』なのに、なんだかおかしい。自分の事なのに、何処がどう違っているのかだなんて、よく説明が付なくて不思議だった。それでも何か――胸の奥で何か^{つか}が痞^{つか}えているようで苦しい……そんな違和感を感じている。

「香代？ あんた、熱でもあるんじゃないの？」

「えー？」

「顔、赤いわよ？」

「っそ……そうかな？ だ、大丈夫だよお」

食事中、あたしの赤ら顔を見て心配したお母さんが、箸を止めてあたしのおでこに片手を当てようとした。

なんとなくだけでも、あたしにはその原因が得体の知れない違和感からだろうと思っていた。そしてそれは少なからず慶の事を意識し始めてからだと判っていたし、そんなあたしの心の中までお母さんから見透かされてしまいそうで怖くなり、少しだけ椅子から身を引いてお母さんの手を嫌った。

「ほら、ちゃんと座って……あら？ ホントに熱があるみたいよ？」

「え？」

あたしは手にしていた箸を置き、右手を自分のおでこに押し当て

る。

「……？ 判んない」

「自分で触っても判り難いかも知れないわね。まだ上がり始めただけど、寒気とかない？」

そう言ってお母さんは、おでこからあたしの頬に掌を優しく滑らせると、今度はあたしの首筋に触れて、体温を調べている。

家事だけじゃなくて、仕事もこなしているお母さんの掌は、思っていたよりもカサカサで少し荒れていた。それでもひんやりとしていて気持ち良い。

「ううん。そう言われれば、身体がだるいかも……練習の遣り過ぎかな？」

あらら……変だなと思っていたのは、本当に熱が出ていたから？ それなら今まで覚えていた妙な違和感の説明が付くかもだわ。

「香代がこんなに練習熱心な子だとは、お母さん思っていなかったわ」

「試合が近いからなのかなあ……」

「なに言っているのよ。試合なら、あんたもう何度も経験しているでしょう？」

熱が出ていると知って気弱になってしまったあたしを見て、お母さんが笑った。

「だあって、中学校で初めての新人戦なんだよ？」

「はいはい、判ったわよ。判ったから。食べる気がしないのなら無理に食べなくてもいいから、イオン水を多目に飲んで。今日はもう寝なさい。後でお薬を持って行ってあげるから」

「……うん」

第46話 新人戦：1

新人戦が始まって二日目の午後――

四日前まで熱を出して体調を崩していたのがそのまま尾を引いてしまい、あたしは姫香や亜紀達よりも一足先に、ダブルスでは二回戦。シングルスは三回戦で敗退してしまい、新人戦の前半戦で早々とトーナメント表から名前を消してしまった。

せっかく頑張って練習して来たのに、思う様に身体が反応してくれなかった。顧問の先生は『よく頑張ったね』と言ってくれたけれど、あたしにとっては楽勝だと思えた序盤戦の攻防からの、まさかの敗退。後半は完全に息が上がって持久力・集中力ともに欠落していたわ。

あたしの上位入賞を期待して応援に来てくれていたクラスメイトや友達も、流石にあたしの負けを読めなかったらしいけど、それでも皆から温かい拍手を送られ、声を掛けて貰えて嬉しかった。

……と同時に、試合直前まで完全に自己管理が出来なかった自分に対してもの凄く腹が立った。

顧問の先生や先輩方からも期待され、励まされていただけに、こんな不甲斐ない成績を残してしまった自分が堪らなく情けなくて、悔しくて……あたしはコートを後にしながら泣き出してしまった。必死になって我慢しようと頑張ったのに、後から後から止め処なく涙がぼろぼろ流れて来る。

途中、泣き崩れてしまいそうになったあたしは、応援に来てくだ

さっていた百瀬先輩から優しく抱き留められて、それまで抑えていた何かが、安堵したあたしの中で堰を切って溢れ出してしまった。納得出来ない結果のまま終わってしまい、あたしは先輩の胸に絶^{すが}つて、初めて声を上げて泣きじゃくってしまった。

百瀬先輩に『勝つ人が居れば、負ける人も居るの。勝負だから仕方が無いわ、悔しかったらそれをバネにして、次に頑張ればいいのよ?』と言って貰ったけれど、それでも落ち込んでしまったあたしには気休めでしか無かった。

必死で泣くのを止めようとするけれど、息がともに整えられず、あたしは何度もしゃくり上げてしまう。

「先輩、す、すみません。こっ、こんな情けない成績を残してしまっ
つて……」

「香代? 貴方達一年生は、まだまだこれからなのよ? 三年生になるまでに、時間はあるわ。その時間を大切になさいね?」

「……はい」

「ん? 声が小さいわよ?」

「はっ、ハイッ!」

「うむ。宜しい。じゃあ取り敢えず顔を洗っておいで。他の子達、まだ何人か残っているわよね」

「はい」

「一緒に応援してあげよう？」

につこりと優しく笑ってくださった百瀬先輩の笑顔が、あたしにはすごく眩しく思えた。

* * *

「あ、居た居た」

「香代お、こつちこつち！」

あたしのすぐ後を追う様にして敗退した亜紀と姫香が、男子コート前のフェンス横を通り掛かったあたしに向かって、嬉しそうに声を掛けて来た。

残念ながら、今年の女子部員は上位入賞出来ず、新人戦では過去最低の試合結果に終わってしまったらしい。女子部員は残念な結果だったけれど、男子は予想されていた数人が期待通りの結果を出し、ダブルスでは既に慶と門田くんのペアが三位入賞の栄冠を手にしていた。

「今、誰か試合中？」

「うん、アキバケイが出てる。凄い接戦でね、今3―3後のファイナルコールされた所だよ。さっき門田くんが教えてくれたんだけど、もう残っているのはこのアキバケイともう一人……ええと、彼、幽霊部員らしいから、あたしは全く知らないのよ」

「八神くんって言うの。彼、プロの選手が親戚に居るそうよ。凄い

けど、幽霊部員なのに選手として扱われるだなんてちょっと近寄り難いわよね？」

姫香の言葉に亜紀が追加補足をしてくれた。『八神』って苗字、何処かで聞いた事があると思ったら、お父さんが司法書士をしている八神事務所の息子さんだわ。

小学生だった頃、二年生だったか、三年生だったかよくは覚えていないけれど、同じクラスに居た八神くんの事だと思った。此処からは向こう側にあるコートが遠過ぎてよく見えないけれど……確か親戚にプロのテニスプレーヤーが居ると本人から聞いた事がある。

小柄な身体をしていて、サラサラの髪に色白の肌。端正な顔立ちをした物静かな子だったから、当時あたしは女の子だと思っていたのだけれど、間違えられる度に本人が猛烈に否定していたのをよく覚えているわ。

「二人とも負けたとしても、個人戦でベスト八に入るのよ？ 凄く無い？ 香代も応援しようよ」

「うん」

あたしの問い掛けに、亜紀は日に焼けて赤くなった顔でニコニコしながら答えた。

こうしてあたし達が遣り取りしている間にも、弾んだボールの軽快な音がして、見学応援している人達の間からは、歓声と拍手が湧き上がっている。

あたしは慶の試合を観戦しようとフェンスの入り口へ急ぎ、姫香

の隣に陣取った。

「残っているのは二人だけ？ 田村くんや門田くんは？」

「田村くんも門田くんも意外だったわ。先に負けちゃって、そこで応援しているわよ」

姫香の指差す方向に視線を遣ると、見覚えのあるウチの男子部員が固まって慶に声援を送っている。

「ふうん……そうなんだ」

あたしは慶に引けを取らない田村くんの事が頭に浮かんでいた。腕前は慶と互角だと豪語していた。だけど試合の相手は慶じゃ無い。慶よりも遥かに上手い選手はたくさん居て当たり前。

慶達との自主トレを企画して、あたしを巻き込んでくれた田村くんは、慶よりも背が高い。パワーにモノを言わせて、上から叩き落とすようなサービスをする田村くんは、男子部員から恐れられていただけに、彼の敗退の知らせはあたしには意外だった。

第47話 新人戦…2

「アウト！ デュース」

審判（正審）のコールに、場内が湧いた。

慶が一ポイントを獲得して同点になり、応援していたあたし達の観客席側が活気付いて、騒々しく盛り上がる。

これで試合は五分と五分の白紙状態。ゲームの流れは、やや慶が押されているように見えるけれど、それでも慶は表情を変える事無く試合に集中していた。

長身を折り曲げて低く腰を落とし、浅く踵を浮かせた前傾姿勢の慶が、ラケットを真正面に構えて対戦相手の動きを注意深く読み取っている。

相手の一瞬を見逃さず、隙あれば切り込んで均衡を崩し『この試合に勝つんだ』と言う、慶の意気込みが手に取るように伝わって…そして慶の真剣な姿が、あたしには妙にカッコ良く見えた。

「アキバケイ、遣るじゃん」

「うん……素敵……」

すっ……『素敵』って……

あたしは耳に届いた亜紀の言葉に妙な引っ掛かりを覚えてしまった。

今は慶の事が物凄くカッコ良く見えるけれども、亜紀にみたいに『素敵』だなんて、そこまでは思っただけであげられないわ。

あたしは並んで観戦していた姫香と亜紀へちらりと視線を遣した。

二人とも、今でも慶の事が好きなのね？

あたしの視線に気付いていない二人は、小声だけれども弾んだ会話を遣り取りしている。けれどあたしは、一緒になつて応援は出来ても、二人のようにはしゃぎながら慶の事を熱く語ったりする気にはなれなかった。

慶と対戦している相手は、今年の新人戦優勝候補者の筆頭として名前が挙げられている東雲中学とうぐんの高柳遼平たかななくん。あたしの知っている限りでは、過去何度か大きな大会があつたけど、慶はこの高柳くんと何度か対戦していて一度も勝つた事は無かつたはず。

ファイナルコートをされた後、デュースの応酬が続いていた。慶はリードする高柳くんに必死で喰い付き、得点を取られては取り返すと言う、手に汗握るシーソーゲームを続けている。

こうなつたら技術どうこの差じゃなくて、試合から逃げないで勝つんだと言う気力との対決になっている。そして、慶はまだこのゲームを諦めようと言う素振りには全く無い。

鋭い目つきをしたその表情からは、普段のおっとりとした慶の面影さえ見当たらないし、今まで慶の試合なんかまともに見ていなかったあたしにとっては、真剣な慶の顔を想像する事さえ出来なかった。

「すっごーい！ さすがは元主将のアキバケイね！ 対戦相手に一歩も引かないわ。相手の彼、確か今年の新人戦優勝候補だよね？」

「うん」

慶のゲームに興奮した姫香が思わず口走り、つられて夢中で応援している亜紀が大きく頷いた。

ああ、そう言えば、慶は小学校の時にテニス部主将をしていたのだったわ。

あたしも女子部の部長を務めていたけれど、それは部員への統率力と言うか、みんなを纏められるかどうかで顧問の先生が勝手に決めていただけであって、部長に選ばれたからと言って他の部員よりもテニスが上手だと言うワケじゃ無かった。だから男子主将に選ばれていた慶も、きっとあたしと同じ理由だろうと勝手に決め付けていたの。

今、真剣勝負を繰り広げている慶に、あたしはもしかしたら凄く失礼な思い込みをしていたのかも知れないわ。

あたしが気不味く想っていると、隣で応援していた男子部員が急にざわめき始めた。

「どうしたの？」

「ああ、向こうで試合していた八神が負けたってさ」

近くに座って観戦していた慶のペアである門田くんが返事をして

くれた。

そう言えば、慶と同じくこの試合で勝てばベスト四に進出する八神くんが居たのだわ。だけど、男子部員の皆が慶の試合を応援して此処にいるって事は、八神くんの所へは誰も応援に行っていないって事になる。幽霊部員だからと噂されているけれど、誰も応援に行つてあげないだなんて……ちょっと男子って酷いじゃない？

そう思いながらざわめいている男子部員を見ていたら、もう一度門田くんと視線が合った。

「なんだよ土橋。何か言いたそうだな？」

「八神くん、負けちゃったのね？ でも、誰も応援に行つてあげなかったの？」

「ああ？ ったり前じゃん。アイツがそろそろ負けるってコトは、想定内だもんな」

「そんな……」

当たり前のように平然と言い切った門田くんに対して、あたしは少しばかり不愉快になる。

「今回も警告喰らって失格になったんだし」

「え？ 警告で失格？」

大会開催中でのまさかの事態に、あたしは驚いてしまった。

審判からの『警告』は三度まで。その殆どが、ボールのイン、アウトの判定で副審や主審と揉めて、ペナルティが付与されてしまう。たとえばボールの痕跡が残っていたとしても、それは『絶対』の証拠には成り得ないため、プレーヤーがアピールしたとしても頭ごなしに抗議することは無理で、そんなことをすれば警告を受け、三度目には退場させられてしまうと言う、サッカーと似たルールがある。

その事は、八神くんだって知っている筈なのに。

「警告退場だなんて俺等には在り得ねーけど、八神は俺等とは違うんだよ。昨日だって、ダブルスを組まれた田村と初戦で早々負けちまってさ、八神のヤツ、自分の勝手なプレーは棚に上げて、負けたのは田村のせいだって言いやがって……乱闘寸前になったんだ。まあ、その場は先輩とアキバケイが何とか収めてくれたけどな。自己中もあそこまで行けば立派だよ。相手にもしたくねーし、あんな奴の応援だなんて、行って遣ろうとも思わないね」

「そつ、そつ」

あたしには、門田くんの言った言葉が俄かには信じられなかった。昔、プロのテニスプレーヤーが親戚に居る事を何よりも誇りに思い、自分もプロになりたいと言っていた八神くん。自宅にテニスコートを持つていて、毎日練習に励んでいるのだとも言っていたし、何よりも今回の新人戦で、慶とたった二人しか残っていなかった事実を思えば、それは彼がずっとプロを目指して今まで必死で練習していたからこそその結果だと思う。

だけど、その敗退の理由が警告退場だなんて……

あたしは八神くんが幽霊部員になってしまった理由が何となく判

つてしまい、昔の純真だった彼を知ってただけに、凄く残念で切なくなつた。

「つま、プライドのお高い奴には向いてねーんじゃねーの？」

あたしと門田くんの会話を、前のベンチで黙って聞いていた田村くんが、慶の試合を観戦しながら不機嫌にボソリと呟いた。

第48話 新人戦：3

> i 1 1 4 4 4 — 3 1 6 <

「アドバンテージ、レシーバー」

四度目のデュースをコールした主審に、慶がインジュリタイムを求めた。息詰まる接戦の最中、緊張の糸が解れたように観客席でホッとした空気が流れて、そしてざわざわとざわめき始める。

逆にあたし達部員は何事かと思つて息を潜め、コートに居る慶の一挙手一投足を見守つた。

基本、インジュリタイムはファイナルコールをされる前に取るようになっている。

選手は終盤戦に入る前の休憩の僅かな間に水分補給等で体調を整え、集中力を高め、持てる力の限りを尽くして試合に臨むのだけれど、この中途半端な間合いでインジュリタイムを要求したのはどうしてなのかしら？

慶は真つ直ぐに自分のベンチに戻つて行つた。どうやら靴紐が解けたとか、ガットが切れたとかの異常は無さそうに見えるのに。

顧問の先生が駆け寄つて慶の右手を取り、真剣な表情で何事か話掛けている。

全身で大きく呼吸を繰り返し、直飲みの水筒を掴んだ。そして呷るように水分補給をしながら話を聞いていた慶は、乱暴に水筒をも

ぎ取ると、先生に対して強く首を横に振って見せた。

先生は慶の強い意志に一瞬怯んだみたいだった。でも、すぐに救急箱から消炎スプレーを取り出すと、慶の右手にしていた蒼いリストバンドをやや乱暴に引いてずらせ、白いテーピングを施した手首を出した。そしてその手首全体にまんべんなく消炎スプレーを吹き付ける。

スプレーが沁^しみたのか、それとも急激なアイシングが効いて驚いたのかは判らないけれど、慶が肩を怒らせて顔を顰^{しか}め、先生の掛けるスプレーに必死になって歯を食いしばり耐えている姿が眼に留る。

あたしの気のせいかとは思ったけれど、テーピングをしていた慶の手首は、なんとなく腫れて赤くなっているように見えた。

「やだあ！ アキバケイ、こんな時にまさかのリタイア？」

「えええ？」

不安そうな姫香の声に驚き、両手を祈るように胸の前で組んだ亜紀が、今にも泣き出してしまいそうな顔をして、コートに居る慶を心配そうに見守っている。

前のベンチで応援していた田村くんが急に立ち上がると、後ろのベンチへと移動して来た。門田くんの隣に座っていた福原くんは片手で拝むような仕草を見せてひよこつと頭を下げると、二人の間に無理矢理割り込んで座って来る。

「おい、アレ……」

「ああ、昨日はそんなに気にならなかったし、悪いとは思わなかったんだけど……なんか急に雲行きが怪しくなってきたな」

田村くんが何を言いたいのか、門田くんにはもう判っている。

慶の怪我の経過を一番身近で見ていた二人は、心配そうに囁き合った。

「大丈夫なのか？」

「さあ……だけどせっかく自分のペースに引き込んだこの流れを、わざわざ自分から止めるってのは……ちょっとヤバイのかもな」

小学生の時から慶とペアを組んでいる門田くんが、眉を寄せて唸るように言った。

今までの試合で、慶はリストバンドなんか着けてはいなかった。一年生にとって、今回のデビュー戦はみんなそれぞれの思い入れがあるし、もちろんあたしにだってある。

そんな中、慶が着けたリストバンドは単なる汗拭きで、ちょっと生意気な格好付けのように思っていた。けれど、実はそれが慶のテーパーリングを隠すために使われていたのだと判って、あたしは急に心配になって来た。

拮抗している相手からの一ポイント獲得で、慶は気が遠くなりそうな連続ラリーを続けていた。怪我は治ったって言っているけど、縫い込んだ延長戦で、また傷が痛み始めたのだわ。

慶が負傷しているのに気付いた観客は、一層ざわめいた。

これで対戦相手の高柳くんに、慶の怪我——しかも右利きプレーヤーにとって致命的な右手首の負傷を教えてしまった事になる。

「マジでヤバイな……相手にアキバケイの弱点がバレちゃった。フォアのチェックが厳しくなるぞ」

「仕方ないだろう？ この炎天下でこれだけ長期戦に持ち込まれたら。少しでも早く手当をしておかないと後が持たない」

「後のゲームが出来ればいいがな」

「不吉なコト言うなよ」

田村くんの漏らした言葉に門田くんが文句を言った。意味深な遣り取りを耳にして、慶の怪我を知っていた部員はざわめき、それぞれが口々に慶の怪我と勝敗の行方を心配する。

「ノータイム」

正審のゲーム再開コールを聞き、慶はリストバンドを素早く元へ戻すと、左手でラケットを握ってベンチから立ち上がった。

一時は棄権かと危ぶまれた慶の様子に、それまでざわめいていた観客席から、再び試合に挑む慶に向かって盛大な拍手が沸き起こる。

「っしゃあ！ 行っけー！ アキバケイ！」

「頑張れー！」

「ファイトー！」

部員全員が総立ちになった。

慶の背中に向かって、自分達なりの言葉で慶を称^{たた}えて力強く励ます。

慶はみんなの応援に対して、背中を向けてコートに歩み寄りながら、ラケットを持った左手を軽く挙げて応えようと、姫香と亜紀は勿論の事、応援していた女子部員達から一斉に黄色い声が上がった。

「何だよー、アキバケイがオイシイ所全部持つて行きやがって……」

「田村も対戦に残れば、オスソ分けくらい貰えるかもな」

「ンだと、門田あー」

「わ、わっ、たっ、たんま！」

活気を取り戻した部員席で、慶と一番仲の良い二人がじゃれて、調子に乗った田村くんが門田くんの首を腕で締める。

慶は自分に気合を入れる様に、目深に被っていた白いキャップをくるりと反対に向けて被り直した。その素振りがどこかの悪戯っ子みたいで少し生意気そうに見える。

これは慶の相手に対する負けないう意思表示？ 心理戦の心算かしら？

負傷している慶なのに……それでも慶の後ろ姿から気合のオーラが立ち昇っているせいかな、不思議と頼もしく見えた。

第48話 新人戦：3（後書き）

インジューリタイム：文字通りタイム。靴紐を結び直す為や、怪我をした時等、不測の事態が発生した場合に10分ほど取れる休憩。

フォア：フォアハンドストローク。利き手側から打つ基本スイング。バックハンドストローク。

第49話 新人戦：4

慶は左手でラケットを握り、右手にボールを持って、集中力を高めているようにそのボールを片手で何度か地面に着く。

それまでは右手でプレーしていた慶だったけれど、今度は左手に持ち替えてプレーを再開する心算なんだわ。

「お？ 出るかアキバケイバージョン」

田村くんが余裕を出して、慶を冷やかすように笑いながら言った。

みんなは田村くんの情報に、何事かと興味を持ち、息を潜めてコートに立つ慶を見守る。

頼もしい田村くんの解説だけど、あたしには慶が半ば自棄やけを起こしてしまったのかと疑い、さっきの期待は一変してして、この試合の結果が見えたような気がしてしまった。

元々左利きだった慶だけど、今までずっと遣っていたなかった左手が、急に言う事を聞いてくれる筈は無い。実際に何度かあたし達と自主トレゲームをしていて、慶は左手が右よりもややパワーとコントロールに難ありだと知っていたから、試合を見るのが怖くなり、急に不安になって来る。

だけど小さかった頃の慶は本当に臆病で、女の子にからかわれたり、転んで腕や足を軽く擦り剥いただけでもすぐに泣き出していた。そんな慶を知っているあたしには、怪我をしても歯を食いしばって試合に臨む、強気な姿勢で居る今の姿が、まるで……まるで別人み

たいに思える。

正審のプレー再開を合図に、慶は高柳くんの様子を注意深く窺いながらコートに向かつて左足を一步退き、右肩口を正面に向けた。慶の足の位置はクローズスタンスである事から、より安定性を狙うために、スライスサービスを打つ気なのだと判る。

慶は右手に持っていたボールを、小鳥を空に放つように高くふわりとトスアップすると、弧を描くように左手で持ったラケットをボールトスと連動させて流れるような動きでバックスイングを始めた。大きく振りかぶってボールを擦り上げるように叩くと、ボールは矢の様に深くコートに食い込み、跳ね上がる。

慶が利き手をチェンジしたせいで、防御が左右逆になってしまった高柳くんは一瞬怯んだみたいだった。

だけど流石は優勝候補者と噂されているだけはある。普通なら一歩も動けなかったはずなのに、慶のキレのあるサービスを速攻でリターンし、逆にポイントを奪い返されてしまった。

「デユース、アゲイン」

東雲側の観客席からは、割れんばかりの拍手が沸き起こり、慶の応援席からは悔しさが滲み出ている溜め息が漏れた。

「ドンマイ！ まだまだあ！」

「アキバケイ！ ファイトおー！」

「惜っし〜!」

両手で口元をメガホンのように囲った田村くんが、空に向かって声を限りに叫び、彼のリードで部員みんなが慶を応援する。

簡単にはエースを取らせてくれなかったけれど、慶だって負けたままじゃ居なかった。

それまでは片手でリターンしていたけれど、今度は両手でラケットを構えて打つ、両手打ちのフォームに切り替える。

両手打ちにすればガット面が安定するしパワーも上がって、痛む右手首に掛る余計な負担は軽減される。だけどその半面、ボールに届くラケットの守備範囲が狭くなり、的確なリターンを狙う為には必然的にコートを走らなくてはなくなる。

案の定、高柳くんからリターンで左右コートの深い所——サービスラインを狙われて、慶は振り回され、左右に走らされた。

慶が後方に退がっている隙に、高柳くんはネット中央に走り込むけれど、慶は彼の動きを捉えて、ボールを掬い上げるようにして高柳くんの頭上を高く越えるロブを上げる。

サービスラインぎりぎりのロブが上がる度に、あたし達はボールの行く先を見守り、両手を組んだ亜紀が顔を伏せて祈った。

「へえ……中々のコントロール」

「？」

みんなが息を詰めて慶の試合を見守っている最中、不意に頭の上で声がした。

「お、お前、なにしに来たんだよ！」

「他はとうに終わっているのに、まだ続けている所があるんだなと思っただけだ」

田村くんの怒鳴り声で振り返ると、そこには警告処分になった幽霊部員の八神くんが立っていた。

自分の試合が終わった後に慶の試合を応援する訳でも無く、すっかり帰る身支度を済ませていた八神くんに、田村くんが掴み掛りそうになったのを、隣に居た門田くんが慌てて後ろから羽交い締めにして取り押さえ、あらん限りの罵詈雑言を浴びせ掛けようとしていた口を手で塞ぐ。

「てめ、門田あ！ んぐぐ……」

「応援に来たって、素直に言えよ」

田村くんを力尽くで押さえ付けながら、それでも八神くんへ穏やかに話掛ける門田くん。さすがは元副主将……って言いたかったけれど、門田くんの作り笑いが今にも崩れてしまいそう。きっと心の中は田村くんと同じなのだわ。

「はあ？ 僕が？ どうして？」

「同じ部員だろう?」

「止してくれよ。まさか居残っているのがアキバケイだったなんて知っていたら立ち寄ったりしなかった」

「ンだー!」

「アドバンテージサーバー」

冷たく言い捨てた八神くんに向かって、田村くんが門田くんの手を振り解いて怒鳴った途端、正審のコールが耳に届いた。

どつと沸く東雲中の応援席に、あたしはハッと我に帰った。

視線を落としたその先には、コートサービスのスライン付近で、右の手首を押さえて両膝を着き蹲うすくまつていている慶の姿が映った。そして慶の蒼いラケットがずいぶん離れた所に落ちている。

「いやあーん! 負けちゃうー!」

姫香が今にも泣き出してしまいそうな悲鳴を上げた。亜紀に至っては、もう泣いている。

どうやらあたし達が八神くん達の遣り取りに気が逸れてしまった間に、高柳くんのリターンが慶の手からラケットを弾いてしまったみたい。

「フン。居残った割には、大した事ないな。来て損した」

「なにを! 失格になったオマエが言える立場かよ!」

「止せ！ 田村！」

憤る田村くんを門田くんが必死になって宥めている。

八神くんは鼻でフンと笑い、くるりと背中を向けて観客席を後にした。

あたしの知っている昔の八神くんは、そんな事を言うような人じゃなかった。もっと素直であたしよりも純真で……なのに、どうしてそんな風になっちゃったの？

第50話 新人戦：5

「や、八神くん」

あたしは思い切って彼に声を掛けてみた。お節介だと思われてしまいかも知れないけれど、それでも同じテニス部員なのに、一人で放置されるだなんて寂し過ぎると思ったから。

けれども、八神くんはあたしの声が聞こえなかったみたいだった。

うつん。絶対に聞こえていたはずなのに、彼は無視を決め付けたんだわ。だって声を掛けた時に一瞬だけ八神くんが立ち止まったのを、あたしは見てしまったんだもの。

久し振りに逢った八神くんはすっかり性格が変わっていた。相変わらず、女の子かと思間違えそうになるくらい綺麗な顔立ちをしているけれど、何だか今はトゲトゲしていて近寄り難くなっている。

みんなが慶の応援を優先するのは判るけれど、それでも同じテニス部の部員なのに、応援席から立ち去る八神くんを引き留めようとする人は他に誰も居なかった。中学一年生にしては小柄な八神くんの後ろ姿が、あたしの眼には余計に小さくなって見える。

「なんか、取っ付き難く感じて悪いヤツだわね」

「土橋、あんな奴の事なんか気にするだけ無駄だって。もう良いから放って掛けよ」

姫香の言葉に田村くんが付け足す。

「だけど、二人とも昔の八神くんを知らないからそんな酷い事が言えるのだと思った。」

「でも……」

「土橋、あれは自己中な我儘を繰り返した八神自身の問題なんだ。ああなってしまった以上、もう本人が自覚して気付くまで、外野がとやかく言ったって駄目なんだよ」

あたしと同じく昔の八神くんを知っていた門田くんが、視線は慶の試合に向けたままであたしに向かって忠告した。

「アウト！」

審判の凜とした声が響き、慶の試合を観て居なかったあたしは、ハッとして我に返った。

押されていた慶の試合状況を思い出してしまい、あたしは恐るおそる慶のコートへと視線を送る。

慶のコート側の副審が、片手を挙げて高柳くんのボールがアウトになったと判定を下していた。ラインぎりぎりの際どいコース判定に、これで終わりになるかも知れないと、固唾を飲んで見守っていたみんなは、ホッと安堵の息を吐いてざわざわとざわめいた。

「つきつしょー！ アイツ、さっきからアキバケイの弱点ばかり狙って来やがって」

「仕方ないでしょう？ 勝つためには」

「はあ？ お前はどっちの味方なんだよ？」

「そ、そりゃあアキバケイには勝って欲しいけど、でも対戦相手が強過ぎるわよ」

熱くなつた田村くんは、姫香の容赦無い冷静な突っ込みが入る。

軽口を叩いている田村くんだけど、慶がかなり苦戦している様子が彼の焦りとなって表れているのが判って、あたしは正直、この試合をじっと見守り続けるのが辛くなって来ていた。

確かに今の慶はベストコンディションで試合に臨んではいない。だからと言って痛んでいるだろう右の手首を庇いながら、歯を食いしばって必死に対戦している慶がここで負けたとしても、誰も慶を責めたりなんかしないのに――

それでも慶は氣力を振り絞り、果敢に高柳くんに向かって挑戦した。両手打ちでラケットのリーチが短い分、そのリスクに対してコート内を懸命に走ってカバーする。

慶を追い詰める高柳くんは、左右へ振り回すよう慶を走らせながらチャンスとあらば、球足の速いリターンを繰り出し、時には慶の身体目掛けて鋭いボディーショットを仕掛けて来る。けれど、慶は粘り強く返球して、なかなか勝負を彼に譲ろうとはしなかった。

今振り返れば、慶の自主トレにあたしが呼び出されて慶へボディーショットを仕掛けるよう田村くんが注文をしていたのは、この時

の為だったのかなと思った。

激しい接戦ラリーが続いた末、高柳くんよりも先に慶の体力と集中力が遂に底を尽いてしまったらしい。慶がリターンをアウトさせてしまった直後に、高柳くんの強烈なスマッシュが、慶のラケットを弾き飛ばして決まってしまった。

悲鳴とも絶叫とも取れる声が部員達から響いたけれど、お互いが全力を尽くした名勝負に、プレーヤー二人に対して、双方の観客席からは割れんばかりの拍手と声援が惜しみなく注がれた。

勝敗の明暗を分けるように、高柳くんはラケットを握ったまま空に向かって両手を挙げ、観衆の声援に応え、慶は待機していた顧問の先生に連れ攫われるようにして足早にコートから退場し、病院へと向かった。

「良い試合だったな」

「ああ」

「まるで決勝戦を観ているみたいだったよ」

負けてしまったけれども、鳴り止まない拍手に囲まれて満足そうに笑顔を浮かべる部員に混じって、田村くんが冗談を言ってみんなを笑わせる。

「あれ？ 亜紀は？」

「れ？ 何処に行っちゃったんだろ？」

気が付くと、興奮して拍手を送る姫香の隣に座っていた亜紀の姿が消えていた。

もしかして亜紀は慶が負けたのは、自分のせいだと思ったのじゃないのかしら？ でも試合前までに慶の怪我は治っていた訳だし、お医者から暫くは安静にするようにと言われていたにも関わらず、自分からトレーニングを再開して完治を長引かせてしまったのは、他ならない慶本人の責任だわ。だから、今更亜紀が責任を感じる事なんか無いのに。

会場の外で自分を責めて泣いているのかも知れないと思った。あたしは亜紀を探そうと、ベンチから腰を浮かせる。

「良いから、暫くはそっとしておいてあげなよ」

「え？ でも……」

「思い込んじゃうとこのあたしでさえ何を言っても聞かないから。今はそっとしておいてあげて」

あたしが姫香の言葉を振り切って、亜紀を追い掛けないようにしているのかは判らなかつたけれども、姫香はあたしの右手を取り、きゅっと握って来た。しっかりとした口調だったけれど、姫香の手は緊張しているのか少しだけ冷たかった。

多分、姫香もあたしと同じで、本当は今すぐにでも亜紀を探し出したい気持ちで一杯なんだなと思った。

「もう少ししたら、一緒に捜しに行こう」

「うん」

「あー、お前等何？ 女同士で手なんか握り合っちゃって」

調子に乗って突っ込む田村くんを、真剣な顔になった姫香がキッと睨み付ける。

「う、うるさあゝい！」

「土橋さん、川村さん、騒がない！」

「す、すみませ〜ん」

二年の先輩から名指しで注意されてしまい、あたしと姫香は居心地が悪くなり小さくなってしまった。ちらりと騒ぎの張本人を見上げると、田村くんは意地悪そうにニヤニヤ笑ってこちらを見ている。

「ったく、あ、あの馬鹿……なに勘違いしているのよ」

「……」

怒った姫香が、顔を真っ赤にして呟いた。

あたしも姫香と同じように顔を赤らめてしまったけれど、それは男子の田村くんからそんな風に見られてしまったのかと、恥ずかしくなったからだった。

第51話 新人戦…6

新人戦が終わり、解散したあたしの隣に亜紀の姿は無かった。

あれから部員全員で手分けをして、亜紀の姿を捜したのだけれど見付からず、もしかと思って慶を病院に連れて行った顧問の藤野先生に長谷川部長が携帯で連絡を取ると、なんと亜紀は慶に付添って藤野先生と一緒に整形外科までついて行ったのだそう。

「は……なかなか大胆なコトするわね」

「で、でも、亜紀が慶の事を心配するのは仕方ないじゃない。あの時の怪我が無かったら、慶は勝てたかも知れないのに」

部長の報告を聞いた姫香が、開口一番にそう言った。

亜紀と一番親しい間柄の姫香のその言葉からは、少しだけ怒っているような……そんな気配を感じてしまい、あたしは慌てて亜紀の立場を弁護した。

ところが、姫香はあたしの八方美人系な反応が気に入らなかったらしく、険しい顔をしてあたしを睨んだ。

「香代、あんたねえ……まだそんな事……」

「えっ？　んな、なに？　あたし何か気に障るさわようなコト言った？」

「いい加減、惚けるの止めなさいよね？」

姫香はあたしから視線を逸らせて溜め息を吐いた。そしてあたしに聞こえるか聞こえないくらいの小さい声で「一番心配してるのは香代じゃん」と溢こぼしたのを、あたしは聞き逃さなかった。

「……」

なにも言えない。言い返せなかった。

姫香は今のあたしの気持ちをも、完全に見透かしている。

姫香は、あたしが慶の事を特別な誰かさんだと意識しているのを、誰よりも先に……このあたし自身だって気が付かなかった事に気付いていた。だけど、お互いが友達同士。抜け駆けするのは何となくNGだと言う暗黙の了解が、三人の間で成り立っていたのに。

口では慶の事を気にしていないと言い、意地を張ってツレナイ態度を取り続けるアマノジャクなあたしを姫香はとくに見破っていたけれど、亜紀はあたしの嘘にまだ気付かないでいるのかしら？それとも気付いているのに、気付かない振りを装って……？

そこまで考えると、あたしは深く息を吸い込み、大きく深呼吸をして肩を落とした。

……止よそう。友達を疑ったりするのは。

疑い始めればきりが無いだけじゃない。第一、あたしは二人に嘘を吐いているんだから。亜紀は全く悪くはないし、マイナスに考えれば考えるほど、あたしが惨めに思えてしまうもの。

身長が百四十前後の小柄な亜紀は、少しだけぽっちゃり体型。それだけで幼く見られるけれど、普段は眼鏡を掛けて愛読書を片時も手放さないでいる、色白の文学少女。理知的だけれども、かなりの童顔の上に広いおでこがトレードマークのせいか、余計に幼く可愛らしく見える。そして、何より地元旧家の本物のお嬢様。

清楚なお嬢様である亜紀は、本人は全く気付いていないみたいだけど、実は男子からは憧れの対象になっている。普段一緒にいるあたしや姫香は、何度か亜紀を紹介して欲しいと頼まれた事があるけれど、その度にあたし達は「直接本人に言いなさいね」と断っていた。

亜紀本人は気が付いていないくらい鈍い所があるせいか、それとも勇気を持って近寄ろうとする男子が今のところ現れてはいないせいか、亜紀は自分には女の子としての魅力に乏しいのだと思い込んでいる所がある。

だからと言って、なにもよりにもよって慶に近付いちゃうだなんて……こんなのって無いわよ。

自分の気持ちに純粹で、素直な亜紀が羨ましいと思った。晴れない気分を亜紀のせいにする心算はないし、こんな時でも素直になれない自分が悪いのは判っている。けれど、あたしの気持ちは宙ぶらりんにぶら下がったままで、どうしてもスッキリとはしてくれない。

浮かないあたしの気持ちを姫香は代弁してくれたって言うのに、それでも放って置いて欲しいと思ってしまう。

駄目だなあ……あたしって。

「でもね？ ついて行くのなら、せめて一言言っただけよかったわよ。黙って行っちゃうって……無いよ」

「……そうだね」

みんなが散々心配していた挙句がこれだもの。さすがにこれには姫香も呆れてしまったらしい。他の部員も同様らしく、みんな口には出さなかったけれど、心配を掛けてしまった亜紀の事を、良く思わなくなっているような……そんな不穏な空気が流れつつあるのを、あたしはひしひしと肌を感じ取ってしまった。

「まだ自分のせいだって思っちゃっているのかな？」

「どうだろうね。案外今回も口実が出来たと思って、急接近しちゃっているのかもよ？」

やんわりと跳ね返すような口調で姫香が答えた。だけどその言葉の意味は、あたしにとって心中穏やかでは居られなくなるようなものだった。

本当は……

本当は、あたしだって慶の事が心配……なのに。あたしは亜紀が慶の事を知るよりもずっと前から、慶の事を見ていたのに……

周りから『大胆な行動を取る娘』だと思われても、自分に素直な亜紀が羨ましくて……そして少しだけ妬けちゃうよ。

もっとあたしが素直だったら、堪らないこんな気持ちに振り回さ

れたりなんかしなかったのに。今の慶の傍には、亜紀じゃなくてあたしが居たかも知れないのに……

だけど、今更自分の本当の気持ちに気付いたって、あたしは亜紀が慶の事をずっと想い続けているのを知っているし、慶の事で何度周りから冷やかされても、意固地になって否定し続けていたのは、他でもない自分自身だわ。

あたしは今まで自分が慶に対して執った酷い言動を思い出して、胸が張り裂けそうになった。あの時は、本当に自分の気持ちが判らなくなっていて、周りから冷やかされたりしたから余計に意地を張って否定してしまった。

慶を想う亜紀の出現に戸惑って、周りだけでなく自分にまで嘘を吐いてしまったけれど、亜紀の存在から自分の本当の気持ちに気付いたなんて、なんだか悲しいよ。

一度嘘を吐けば、その嘘を隠す為に何度でも嘘を吐く。だからあたしは何度でも嘘を吐いて、あたし自身をだま騙してしまった。

……もう、あたしには……慶を好きになっちゃいけないの？ 好きになる資格だなんて無いの……？

せめて、慶と昔みたいな関係には戻れないのかなあ……？

「……よ？　ねえ、香代ってばあ」

「あつ、え？」

亜紀の事を考えていてぼうっとしてしまったあたしは、姫香から

声を掛けられて我に返った。

「『え？』じゃないわよ。ほら、あたし達も帰るわよ」

姫香の後ろ——ずっと離れてしまったけれど、試合会場を後にするみんなの背中が小さくなって見えた。

こうしてあたし達それぞれの新人戦は終わった。

延長戦を続けた高柳くん達の準決勝と決勝戦の試合は、明日以降に持ち越される。

試合会場は、市内方面と郊外から流れる大きな河が出合う場所があり、振り返ると大きくて真っ赤な夕日が、遠く黄昏に染まる河口の向こうへ溶けて行くみたいに沈みかけていた。

第52話 アンフェア…

「本当にお世話になってしまつて……ありがとうございました」

「いや、こちらこそ大切な息子さんに怪我をさせてしまつてすみません」

慶の家の前で一台の白い自家用車が停まつていて、玄関から慶のお母さんと藤野先生の声が聞こえていた。

あれから姫香や一葉達数人の女子部員で、こっそり打ち上げのお喋り会で盛り上がり、あたしは帰宅するのがすっかり遅くなつてしまった。

あたしは慶が病院から戻つて来たのだと察し、同時に亜紀が傍に居るのではと疑つて、思わず道端で立ち止まつてしまった。もちろん慶の怪我の具合も心配だったけれど、今のあたしには、独りで亜紀と会つて会話をする勇気が無かつたから。

「大会、お疲れでしょう。どうぞ中へお入りになつて、お茶でもどうぞ」

「あ、いやいや、ここはどうかお構いなく」

「でも……」

「玄関先で失礼します。慶くんの症状ですが、試合の……」

なかなか終わりそうもない、慶のお母さんと先生との会話が漏れ聞こえ、あたしはそれを耳にしながら、慶の家の前を横切ろうか、それとも先生が帰るのを待とうかと悩んでいた。玄関に先生が居るって事は、亜紀と一緒に居る可能性が高いから。

どうしようかと迷っていたら、門に設てえてあるポストの郵便物を取りに来たのか、それとも暇を持て余した、居るかも知れない亜紀が外の様子を見に来たのか、門の内側で人の気配がして、あたしはハッとして身構える。

「あれ？ 香代ちゃん、今帰り？」

「ひゃ！」

門からひよつこりと顔を覗かせた女の人に驚かされてしまい、思わずあたしの両肩が跳ね上がり、顔が強張った。

「お帰りなさい」

「たっ、た、ただいま……」

「なあに？ どうかしたの？ そんなに驚いちゃってえ」

引き攣みぎねえったあたしの顔が余程おかしかったのか、その女性——慶の美咲姉さんが、小首を傾げて上品そうに片手を口元に押し当てながら、くすくすと笑った。長くて艶やかな黒髪が肩にさらりと流れ落ちて、あたしは会うのが夏祭り以来だった美咲姉さんが、前よりももっと大人っぽく綺麗になったなと思って息を飲んだ。

「あ、いえっ、そ、そのう……美咲姉さん、今日は帰るのが早いな
って」

出て来た人が亜紀じゃなくてホツとしたわ。

美咲姉さんは亜紀の事を知らないだろうけれども、あたしが拳動
不審なのは、どう見たってバレバレだわ。何かの下心があるように
思われたのじゃないかしらと思い、猛烈に恥ずかしくなった。

「あれ？ 香代、今頃帰り？」

「！」

極めつけにもう一人……先生から送ってもらった慶が、美咲姉さ
んのすぐ隣にひょっこりと顔を出して来た。

「あ、あああ……あんた……じゃなかった、慶」

「はいよ」

「けっ、けっ……」

驚いた拍子に、いつもの呼び方をしてしまい、あたしは慌てて呼
び直したけれど、既に恥ずかしさが倍増してしまったあたしには、
冷静な会話は難しくなっていた。

「『け』？」

「あんだよ？」

あたしの激しい慌てぶりに、きっと二人の頭の中には大きな疑問符が浮かんだ筈だわ。あたしは必死になって、呂律ろれつが回り難にくくなつた舌で、やっと言葉を捻ひねり出す。

「けっ、怪我はどーしたのよ？」

「ああ、大丈夫だって。これくらい」

慶は、門に隠れてあたしからは見えない右手を高く挙げて見せた。アイシングの処置をしているらしく、手の甲まで包帯でぐるぐる巻きにされて太くなった右手は、痛々しく肩から三角布で吊るされている。

「って、大丈夫ってレベルじゃないでしょそれ」

「大袈裟なんだよ。医者も先生も」

「コラ！ さっきそのお医者さんが何て言っていたか覚えてるの？」

「イテ！」

あたしの言葉に反論して、生意気そうに軽口を叩く慶へ美咲姉さんが水を差し、指先で軽く慶のおでこを弾く。

「え？ 美咲姉さんも一緒に？」

「うん。丁度午後の講義が終わった頃に母から連絡があつてね。慶の様子をチョツチ見に行けって」

そう言えば試合会場は、美咲姉さんが行っている大学の近くだっ

ただわと今頃になって気が付いた。

「あ、あのー、女の子が一緒じゃなかったですか？」

あたしは恐るおそる亜紀の事を尋ねる。

「んー？ ああ、あの彼女？」

そう言って口籠った美咲姉さんは、自分の頭を軽くくしゃつと片手で掴み、少しだけ気不味そうな表情を浮かべた。

「遠藤さんなら、もうとっくに帰っちゃったよ」

「え？」

美咲姉さんの言葉を引き継いで、慶が答えた。

あんなに慶の事を心配してついて行っちゃったのに、美咲姉さんの出現で、慶を放って帰っちゃった……ってコトなのかしら？

「あの子、あたしの事を変に誤解しちゃったみたいなのよー」

「???」

美咲姉さんの言葉の意味が理解出来なかったあたしは、キョトンとして眼を瞬き^{しばた}、答えを求めようと二人を交互に見遣った。

「めっ……メイワクなのよね。こんなの『彼女』だなんて誤解されるのは」

「冗談。コツチだつて願ひ下げっ！」

少しだけ頬を赤らめて、仕方なく答えた美咲姉さんの言葉に被せるように言い掛けた慶へ、美咲姉さんの否応なしのゲンコツが襲った。

「痛つて~~~~っ！　うわ、暴力反対！　要兄ようじにいに言つて遣るからな」

「ほ〜う、その度胸が何処にある？」

凄味を効かせた低い声と殺気を帯びた強い目力で以つて、美咲姉さんは慶の胸倉を片手でむんずと掴み、引き上げた。

「うあ〜、んなつ、ナイナイ！　ありませ〜んっ！」

慌てて慶は首を左右に激しく振つて否定し、この状況から逃げ出そつと騒ぎ出す。

「あ、あたし、これで失礼しますねー」

不穏な雲行きを察したあたしは、そそくさと慶の家の前を通り過ぎる。すると、家の方から慶達のお母さんの鋭い声が飛んだ。

「二人とも何しているのっ！　さっさと家の中に入んなさい！」

兄弟喧嘩だと思つたらしいお母さんの一喝が、一瞬で揉めている慶達を黙らせる。さすがは慶のお母さん。美咲姉さんのよりも迫力が違つてゐるわ。

そして次の瞬間には豹変して、会話中だった先生に向き直つたみ

たいたった。

「お？ おう……」

「ばいばい。香代ちゃん」

「はっ、ハイ」

美咲姉さんに向かって、引き攣った愛想笑いを浮かべてぺこりとお辞儀をしたあたしは、十数歩で自宅の門に辿り着く。

相変わらず、慶は美咲姉さんには頭が上がらないと言つか……腕力でも何故だか美咲姉さんには敵わないらしい。

此処からは見えないけれど、藤野先生が退いている姿が想像出来て、あたしは思わず嘖き出しそうになった。

重かった胸の痞^{つか}えが、ほんの少しだけ癒されたような……そんな気がした。だって、もう勝ち目が無いと思って諦めていた慶と亜紀の関係が、美咲姉さんの出現で反故^{ほし}になったみたいだったから。

これで亜紀とあたしは、また同等……同じスタートラインに立てたって事になるのかしら？

だけど亜紀は、あたしが自分の本当の想いに気が付いて、慶を意識し始めているだなんて、きつと気付いてはいない筈。しかも、美咲姉さんが慶の『彼女』だと思って誤解しているらしい亜紀にとつては、凄くアンフェアな立場なのかも知れないわ。

そんな風に、自分に都合よく考えてしまっあたしって、厭な女の子……なのかな？

第53話 文化祭…1

> i 1 3 1 2 9 — 3 1 6 <

男子個人戦の結果は、やはり当初の予想通り、対戦の前評判で噂されていた東雲中学の高柳くんが優勝した。

彼は優勝者のインタビュの中で、準々決勝で対戦した慶との対戦が、今試合で最も印象に残った対戦だったとコメントを残し、慶の技量を高く評価してくれていた。

あたし達の松山中学校では、今大会運動部での新人戦結果報告とその総評を全校集会で行い、とりわけ目覚ましい活躍をした選手数人を、校長先生が名前を挙げて健闘を讃え、その数人の中に男子ソフトテニス部の慶の名前が挙がっていた。

ただ、何かの手違いがあったみたいで、校長先生は全校生徒の前で慶の苗字を言い間違えているのに気付かず、最後まで『秋庭^{あきにわ}』を『アキバ』と何度も連呼して、一部の生徒達からの失笑を買っていた。

お陰で、慶の名前は一躍全校生徒に知れ渡ってしまい、この事がその後起こったある出来事の切っ掛けになってしまう事を、本人の慶はもとよりあたしでさえ予測出来なかった。

* * *

新人戦が終わり、あたし達はまたいつもの慌ただしい学生生活が始まった——と思ったら、瞬く間に二週間が経ち、ひと息吐く暇も無い感じで文化祭に突入する。

先輩から購入する必要は無いと言われていたけれど、あたし達一年生は相談の結果、文化祭での喫茶店用エプロンを同じお揃いにするように決めた。自称ネットオタクの姫香がインターネットでエプロンのカタログを用意して、何度も意見を交換した末に、フリルをふんだんに使った胸当て付きショート丈の白いメイド用エプロンに決まったのだ。

「ひゃーん、やっぱりこのエプロンかんわゆーい！」

「やったネッ！」

「うん！ バッチリ！」

それまでは対戦相手であり、良きライバルでもあるあたし達も、今日だけは関係ない。

前後の名前ゼッケンが貼り付けてある、色気の無い学校の体操服と紺色のハーフパンツに、ひらひらのエプロン。幅広のリボンを後ろでキュッと蝶結びに縛ると、気分は何だか少しだけ大人になってカフェのお姉さん気分だわ。だけど全く同じじゃ個性が出ないって意見もあって、頭に被る三角巾だけはそれぞれが持ち寄った。

あたしはお母さんが学生時代に使っていた、渋めの赤と緑のチェック柄に白いプチフリルをあしらった三角巾。少し古臭いかも知れないけれど、あたし的にはこれが丁度好さそう。

亜紀は何処かのお給仕さんみたいな真っ白な三角巾で、姫香はレスをふんだんに取り入れ、なお且つ原色一杯のハート柄。他には牛柄や豹柄……みんなそれぞれ三角巾一つで個性を出しているものだわねと、思わず感心してしまう。

「一年生、準備は良い？」

「はい！」

廊下からドア越しに掛けられた先輩の声に、あたし達は閉ざしていた部室を解き放つ。同じおろしたて純白エプロンを身に着けた一年生総勢二十六名が部室からぞろぞろと出て来た。

「あらあら、また今年は……」

「合わせなくてもいいって言ったのに。ホント仲が良いわね」

ドアの外で待っていてくださったのは、クスクスと優しくそうに笑った百瀬先輩方数人。去年ウエイトレスだった先輩方は、今年は裏方さんになる。

「じゃあ、各班に分かれてテーブル席の準備を宜しくね？」

「はい！」

一頻り準備とこれからの予定を教えてくれた先輩方に、あたし達は部活練習の時のような歯切れの良い返事をした。

「メニュー表はテーブルには置かずに、席に着いたお客さんに手渡す事。自分の時間が終わったら、次の交代時間までフリーだからね。でも、時間に遅れないようにね」

「はあい」

「先輩」

「なに？ 一葉？」

「当番の人がエプロン姿なのは判るのですが、当番じゃ無い人まで、一日中みんなこの格好なんですかー？」

「うーん、良い質問だね。それはね、貴方達がその格好で校内を廻って、喫茶テニス部の宣伝をしてくれば良いのよ」

「えー？」

みんなの声がハモった。

そして先輩は、当番以外のあたし達に喫茶店の宣伝文字を書いた腕章を配る。

「心配しなくても、男子も同じだから。って言うか、男子の方が恥ずかしいかしらね」

「あつ、でもね、これも売り上げの為だし、毎年恒例の事だから」

「そうそう。あたし達も去年は全員が潜ったんだものね」

そう言い合ってホホホと笑う先輩方に、あたし達一年生は妙な腹黒さを読み取ってしまう。

「先ぱぁーい。結局、今年の男子の格好はどうなったんですか？」

「ああ、今年は……」

姫香が片手を挙げて質問し、百瀬先輩が答えようとした時だった。

突然、階段を慌ただしく駆け降りる数人の乱れた足音と、大声が聞こえて、あたし達はそれぞれが訝り、ざわざわとざわめいた。

「そつちに逃げたぞ！」

「挟み撃ちにして捕まえる！」

「よっしやあ！」

誰かを捕まえようとしているらしいその足音は、何度も教室内でバタバタと行き来を繰り返しながら、徐々にあたし達の居る部室前の廊下に向かって近付いて来ているみたいだった。

「なにあれ。三浦の声じゃないの？」

「誰を捕まえるって？」

金子先輩が、男子先輩の名前を挙げ、宮脇先輩が噴き出しそうになりながら誰にもなく問い掛ける。

あたし達が居る部室は、丁度廊下が『L』字型になっている角の傍で、その先は行き止まりではなくて、他の校舎に繋がる通路へと続いている。だからその先から運動場へは簡単に出て行けるのだ。

逃げているらしい足音が、あたし達が集まって占拠している廊下に向かつて、どんどん近付いて来る。

「つて！ そっちは女子の部室！」

「構うか！ こっちから出られる！ うわ！ 来たあ！」

慶と田村くんの切羽詰まった声がして、少し遠くで『待て』と誰かが走りながら叫ぶ声がした。

なに？ 逃げているのは慶と田村くんなの？ 毎年の恒例行事だと聞いているのに、なんで先輩方に追い掛けられたりしているのよ？

「ちょっと！ こっちに来る」

「あつ！」

言い終わらないうちに、上下長袖ジャージ姿の慶と田村くんが全力疾走状態で角を曲がって現れた。二人とも、通路一杯に拡がって先輩の説明を聞いていたあたし達に、寸前まで気付かずに――

第54話 文化祭…2

「う……ん？」

「あ？ 気が付いた？」

「……え？」

耳元で慶の囁くような声がして、あたしはパチリと眼を開ける。

なに？ どうして慶の声がこんなに近くから聞こえて来るのよ？

温かいベッドの感触と、眼の前には心配そうな顔をした慶のアッ
プが横から不自然な角度で覗き込んでいる。

あれ？ いつもの慶と雰囲気が違う……

ぼんやりとした頭を抱えたあたしは、何故だか判らないけれどそ
う思った。

それにここは一体……？

あたしは頭を少し動かして、辺りの様子を窺う。

白い壁に、病院でよく見掛ける水色の布の衝立。ついたてそして教室に使
われているのと同じ蛍光灯——これって学校の保健室じゃない。

でも、なんで慶があたしを見ているの……？

そう思った途端、急にあたしは我に返り、慶の事を意識し始めてしまった。たちまちあたしの顔がもの凄く熱くなる。

みつ……見られたっ！

あ、あたしの無防備な寝顔を！

「きゃあ！」

予期出来ない状況に驚いて、あたしはがばつと跳ね起きる。

「香代、大丈夫か？」

「な、ななにがよ？　つて言うか、どうして慶がここに居るのよ？　しかも、あつ……あた、あた……」

——あたしの寝顔を見たわねっ！

そう言いたかったのだけれども、余りの恥ずかしさに声すら出せなくなってしまった。パクパクと口は動くのに、言葉に出せないくらい恥ずかしい。

あたしの寝顔……お、女の子の寝顔を見ていたなんて……そんな……

「なに涙目になって怒ってるんだよ？　そのう……悪かったって」

「馬鹿っ！」

この不愉快極まりない想いを、どう説明すればいいのか判らなく

なったあたしは、とにかく慶の視界から逃げ出たくて、ベッドに突っ伏して顔を枕に埋めてしまう。

「あ、謝るからさ、そう怒るなよ」

「それ、謝ってないじゃない」

「……」

あたしの鋭い切り返しに、慶は意表を突かれたのか急に黙り込んでしまった。

少し『間』が空けて気を取り直したのか、慶は「ごめん……」とすまなそうに言葉を濁す。

「今更謝っても遅いわよ」

「じゃあ、どうすればいいんだよ？」

「し、知らないっ!」

あたしは遣り場の無い恥ずかしさをはぐらかそうとして剥きになり、ツンとそっぽを向いてしまった。

慶もあたしの態度が気に入らなかったらしく、怒ってしまったみたいなのを言いたがる。でも、許せないものは許せないのよ。

一体、なんで……なんでこんな事になっちゃったのよ？

あたしは傍に慶が居る事を変に意識してしまい、ドキドキしながら必死に記憶の糸を手繰り寄せてみた。

確か……今日は中学校では初めての文化祭。軟式テニス部は毎年恒例で喫茶店を催し、その利益でボールやネットといった消耗品を購入するようになっていたのだそう。あたし達一年生はお揃いのエプロンで決めて、部室前の廊下で先輩方の説明を聞いていた最中だった。

そこへ男子部員の慶と田村くんが先輩方に追い掛けられていて、通路一杯に拡がっていたあたし達の目の前に飛び出して来た。

慶は咄嗟に急ブレーキを掛け、（たたら）踏鞣を踏んで止まろうとしたけれど、後から来た田村くんは女子に気付くのが遅れて、止まろうとしていた慶とぶつかってしまった。田村くんの勢いを背中からモロに受けた慶は、彼に吹き飛ばされた状態になり、二人は居並ぶ女子部員……しかもよりにもよって端っこに居た、このあたしに向かって突進してしまったのだ。

男子二人分の勢いと体重に、あたしの身体は簡単に飛ばされてしまい、あたしの後ろに居た姫香や一葉達も巻き込まれ、将棋倒しになって……

それからの記憶が全く無かった。眼が醒めると、あたしは保健室に寝かされていた。しかも慶に寝顔を見られてしまうと言うオマケ付きで。

「ここまで慶が独りであたしを運んで来たの？」

「いや。なかなか気が付かなかったから、百瀬先輩と一緒に運んだんだよ」

「田村くんは？」

「あいつはそのまま逃走した。『悪い』なんて言ってね。俺は捕まっちゃったけど、田村は……あいつはまだ先輩から逃走中じゃないのかな？」

『なんで逃げたりしていたのよ？』そう聞こうかと思ったけれど、改めて見上げる視界に映った慶を見て、眼が醒めた時の違和感と、慶が逃げ出した理由がなんとなく判ってしまった。

逃走していた慶達は長袖の上下ジャージ姿だったのに、今は夏用半袖に短パン姿。それに以前ミーティングで揉めていた、まさかのひらひらメイドエプロンを慶が着用していたからだ。

期待していた姫香の答えがこれなのね。結局、予算の都合で今年も去年の使い回しエプロン姿に決まったみたいだわ。

「そ、そんなに見るなっ。門田達は何故か判らないけど、結構この格好が気に入っていたみたいなんだけどさ、俺と田村はね。だって幾ら集客の為だとは言え、一日中こんな格好させられるんだよ？もうカンベンって感じたよ」

情けなさそうにぼやくエプロン姿の慶を見て、その余りの格好に思わずクスリと笑ってしまった。

「あ？ 香代まで笑う。もう、笑うなよな」

「ふふっ……ゴメン」

まあ門田くん達なら多目に見ても『似合う』範囲ギリギリだけど、身体が大きい慶や田村くんなら、幾ら先輩の命令でも逃げたくなるかも知れないわね。でも、そんなに慶が思っているほど似合わなくは無いと思うのだけど？

第54話 文化祭…2（後書き）

踏鞴^{たたら}を踏む：この場合、勢いが余って足が空回りする状態。小刻みに足踏みする状態。

第55話 文化祭…3

機嫌を損ねた慶から注意されても、あたしはまだ含み笑いをしながら慶の『雄姿』を見詰めて、何気に足元を見てしまった。

「わ！ 見るなよ」

「どうして？」

あたしの視線に気付いた慶は、慌ててエプロンの端を握って膝下を隠し、爪先を立てて座っている椅子の奥へと追い遣った。

慶の慌て方が理解出来ずに、あたしはきょとんとして小首を傾げる。

「さ、最近すね毛が濃くなって来ているから恥ずかしいんだよ」

「え？」

一年中屋外での部活で真っ黒に日焼けしている慶に、そんなものが在る事さえ忘れていた。間近で息を詰めて見ないと判らない程度のすね毛なんて、濃いつて言うレベルじゃないでしょ？ それに部活じゃずっと短パンじゃないの。今更恥ずかしいも何もないじゃないと思った。

うちのお父さんのすね毛に比べれば、恥ずかしがっている慶の生脚なんか、まだまだ許せる範囲……って言うか、慶の脚はあたしにとって全然気にならない程度なのに、慶はどうやら本気であたしの視線を意識して恥ずかしがり、困っている。

女の子でも肌を気にする子がいるけれど、案外男の子でも気にしたりするものなのね。

あたしに生脚を見られるのを嫌がった慶は、自分の脚からあたしの意識を遠ざけようとしてか、話をもとに戻して来た。

「香代達にぶつかってから、僕はすぐに追い掛けて来た先輩に捕まって観念したんだけど、『ゴツイメイド』とか『キモカツコイ』だなんて散々茶化されるし、写真部からは追い掛けられるし……」

「で？ 逃げ場を失って、丁度あたしが寝込んでいるから都合が良いつて思っただけで逃げたの？」

「ち、違うよ。捕まった時に先輩から着替えた後でここに戻って良いかって許可を貰っているよ。そのう……香代の事が気になってたし」

あたしの言葉に不満たらたらで、口を尖らせて言いたいだけ言った後、急に慶は口を噤み、あたしの顔をじっと見詰めながら自分の顔を近付けて来た。

「んな、なによ？ ちょ、ちょっと、なにを見てるのよ？」

慶との距離がかなり近過ぎるわと意識して、あたしの胸がどきりと大きく高鳴った。一体、あたしの何処を見詰めているのだろうか。と慶の視線を辿ってみると、どうやらあたしのおでこを見ているらしいと判った。

「そ、そのう……おでこ」

「お……おでこ？ えっ？ ちょっと、なにこれ？ った！」

申し訳なさそうに言った慶の言葉に反応して右手でおでこを触ってみると、じんわりとした鈍い痛みが奔^はつた。しかも違和感のある肌触り。

これって……熱冷まし用の市販品シートが貼り付けられているのじゃないの？

「ゴメン。僕は石頭だから」

「……」

そう言いながら慶は自分のおでこを撫でて見せる。

どうやら慶はあたしとぶつかって転倒した拍子に、あたしのおでこに頭突きをしてしまったらしい。他の女子も一緒になぎ倒されたのに、あたしだけが何故意識を失ってしまったのかと言う理由がそこにあつたみたい。

言われてみれば、確かに慶が覆い被さつて来て、慶の超アップが見えたような……気がするわ。

「眼が醒めてくれて良かった。安心したよ。香代はもう少しここで休んでいればいいよ。百瀬先輩もそう言ってくれていたし」

「ん……」

「じゃあ、僕は部の店に戻るから」

「うん」

慶はそう言っただけで立ち上がり、カーテン越しに居る養護の先生に声を掛けると、保健室の引き戸を静かに開けて出て行った。

「……」

あたしはベッドに半身を起したまま、ぼうつとした状態で、無意識に慶の広い背中を見送ってしまう。

「土橋さん？ 体調はどう？ 秋庭くんはああ言っていたけれど、貴方が大丈夫そうなら行っても構わないわよ？」

「あ？ はい」

慶と入れ違いに、養護の三崎先生が優しい笑顔を浮かべながら、あたしの居るベッドのカーテンに手を掛けて現れた。

まだ少しぼうつとしているけれど、特に気分が悪いとか頭痛がするといった症状は無さそう。それに、あたしは何かを忘れていたような気がしていた。

心の隅に何か引っ掛かりを覚えてもどかしくなる。

「時間、いいの？ 土橋さんはテニス部のウエイトレスさんじゃなかったかしら？」

「えっ？」

先生の何気ない言葉であたしの髪が逆立ってしまった。

そっ、そうだったわ。忘れていたのはこの事よ！ 交代っ！ あたしは『Cグループ』なのに。

「せ、先生！ 今何時ですか？」

「え？ 十時半だけど」

きゃあああ！ あたしの当番は十時からなのに、すっかり三十分のロスタイム。

「先生！ ありがとうございます！」

あたしは慌てて掛け布団を剥ぎ取ると、枕元に置いてあったエプロンと三角巾を握り締め、ベッド脇に揃えられていたシューズを引っ掛けるようにして履いた。

第56話 文化祭…4

廊下の窓越しから見えた会場は……部員全員でこの日の為に作った、色の付いたティッシュを何枚も重ねて折り畳み、綺麗に開かせた花と、折り紙のチェーンで飾られていた。

質素な机は寄せられて、各テーブルに色とりどりの大柄チェックのテーブルクロスが敷かれていて、中央には華道部からの戴き物である、コスモスの花を水に浮かべたグラスが置かれている。椅子には部員それぞれが持ち寄ったクッションが用意されていて、それまで殺風景だった教室は、それっぽい臨時の喫茶店に模様替えしていた。

一度だけ、まだ慶とあたしが仲良しだった頃の小学生時代に、美咲姉さんが通っていた高校の文化祭に連れて行って貰った事がある。そこで美咲姉さんのお友達が遣っていた喫茶店に雰囲気似ているなと思った。

一歩間違えれば幼稚園のお遊戯会場になりそうなお手軽素材なのだけれど、そこは先輩方が工夫して派手過ぎない演出をしている。

あたしが足早にその教室前まで辿り着くと、オーダーを取って隣の調理室に向かう一葉とばったり出会った。

「あれ、香代、もう良いの？」

「うん。準備、手伝えなくてごめんね」

「うっん。みんな心配していたのよー。大丈夫？ 無理しなくても良いのよ？」

みんなに心配を掛けてしまった照れ隠しに、えへへと笑ったあたしを見た一葉は、優しく笑って、あたしを調理室の裏方へ来るよう、おいでおいでと手招きする。

何かな？ と思ってついで行くと、隣の調理室は軟式テニスの男子と女子の先輩方で入り乱れ、もの凄く混雑していた。どの先輩方も、小学校の時から調理実習は受けているけれど、男子の先輩方には応用が効かない人が多いらしく、専ら女子の先輩方が食品担当で、男子の先輩方が飲み物を担当している。

慣れない炭酸ジュースのグラスつぎに、泡だらけになって苦戦している先輩も居れば、お湯を散らせて近くに居た人を巻き込み、大騒ぎして女子の先輩から叱られている先輩も居る。

「あ、香代！ 良かったあゝ気が付いたんだあー」

その声に振り返ると、先輩方に混じって姫香がサンドイッチの手伝いを遣らされていた。

「え？ 姫香って、ここ？」

「うん。せっかくみんなとこのエプロンでキメていたのに。急に人手が足りないって、裏方さんに廻されちゃったの。ほら、例の田村くんも捕まって働かされているわ」

姫香の指差す方を見ると、慶と一緒に逃走していた田村くんが、居並ぶ女子の先輩方に囲まれて、フライパンを片手にホットケーキ

の実演を披露していた。

先輩方に捕まっても、彼は意志を曲げなかったらしく、慶達みたいに半袖短パン姿じゃなくて、上下の長袖ジャージに支給されていたエプロンを着用していた。慶よりも似合わない彼の姿に、あたしは保健室に運ばれた原因を作った本人なのに、そんな事さえ忘れてしまっただけ、思わず吹き出してしまった。

「あたしも家の事情で自炊くらいするんだけど、田村くんほどベテランじゃないからねー。裏方なら長袖ジャージでもOKって事らしいわ。でも……流石に似合わないわよねー」

姫香は田村くんの姿を横目で盗み見ながら、クスクスと笑った。

そう言えば、田村くんは小学二年生の時にご両親が離婚されて、お父さんと弟さんの父子家庭。だから調理の腕前は中々のものなのだと噂で聞いている。実際、ガスコンロから少し離して、ホットケーキの生地を焦がさない様にする彼のフライパン捌きは、料理番組でも見ているような錯覚を起こしそうになるくらい見事だわと思った。

「っあ！ 笑ったな？ 笑うなよな川村あー」

姫香の声が聞こえたのか、顔を赤らめた田村くんが、こちらを向いて不満そうに頬を膨らます。

姫香は田村くんに判らないよう、あたしに向かってこそつと舌を出した。

調理室内はガヤガヤして賑やかなのに、田村くんの耳は地獄耳な

のかしら？ それにしても、姫香ってば……あたし達だけの時は『恭ちゃん』で、学校内じゃ『田村くん』ってちゃんと区別しちゃってる。結構、お似合いのカップルなのねと自分で勝手に納得し、妙にこそばゆくなって、あたしは頬が熱くなってしまった。

「あ、ねえ、亜紀は？」

「亜紀は急遽^{きふじん}谷先輩達と買い出しに行ってるわ。香代の様子、亜紀と覗きに行く心算^{つもり}だったのに、行けなくてごめんね」

「うっん、大した事無かったもん。あたしの方こそ心配掛けてゴメン」

「まあ、アキバケイが行ってたと思うから、オジヤマ虫が行かなくて良かったのかもだけどね」

「えっ？ ええっ？」

にやにや笑う姫香の何気ない言葉に、思わずあたしの髪が逆立った。

「あれ？ 行かなかった？ 彼、行くなって言って……それでさっき、香代よりも少し前に戻って来たわよ？」

それって……どう言う意味？

厭な予感に、あたしの心臓が締めつけられたみたいに苦しくなる。

姫香が知っているって言う事は……もしかしたら、部員みんながこの事を知っているのかも知れない……そう思った瞬間、頭の中に

亜紀の顔が浮かんで来て、彼女に対して物凄く悪い事をしているような罪悪感を覚えた。

——亜紀が慶の事を好きだと知って、自分から勝手に慶と距離を置く様にした癖に……

——ううん、違う。あたしはただ慶と昔みたいに……

昔みたいに……

心の中で、そこまでの言い訳を試みたけれど、それ以上先の答えが見付からず、あたしは金縛りに遭ったようになってしまった。

それよりも、眼の前に居る姫香が、慶とあたしが二人つきりで逢っていたと知っている事実を、とにかく掻き消してしまいたかった。不安な気持ちたちが胸の中にもやもやとした黒い影として渦巻いて来て、あたしは我慢が出来なくなる。

「そっ……そうなの？」

「えー？ 行ったハズだよ？」

「きつ、気が付かなかったわ」

……あたしはこの期に及んでもなお、姫香に嘘を吐いてしまった。

「ああ、じゃあもしかして、香代がまだ寝ていたから戻ったのかも知れないわね。はい、これ七番のテーブルに持って行って。でも、その熱冷ましシート取って行かない？」

「え？ あ、ああ……」

あたしは姫香から指摘された熱冷ましシートを慌てておでこから剥ぐと、たった今姫香が作ったハムサンドと、七番の数字が書かれた番号札が載ったトレーを受け取った。

「どうしたの？」

「え？」

「それ」

姫香に指摘されて彼女の視線を辿ると、あたしは自分が手にしたトレーが微妙に震えている事に気が付いた。

——あたしってば、また嘘を吐いちゃったんだ……

もしかすると姫香の事だから、あたしの嘘をとっくに見破っているのかも知れないわ。

あたしは後ろめたい気分になって気不味くなり、調理室を後にした。

第57話 文化祭…5

『一度嘘を吐けば、その嘘を隠す為に何度でも嘘を吐く……だから貴方には嘘を吐いたりしない子になって欲しいの』

小さかった頃から、お母さんが繰り返してあたしに言っていた言葉が、頭の中で聞こえたような気がした。

——嘘を吐いたりするだなんて、そんなことをあたしはするような子じゃないもの。

お母さんの言葉は、何度聞いても遣つてはいけない当たり前の事だと判っていたし、自分が嘘を吐いたりなんかする筈が無いわと思っていた。なのに振り返ってみれば、最近のあたしは親友の姫香や亜紀に嘘を吐き、調子の良い事ばかり言つて、彼女達の機嫌を取っているような気がする。

今年の軟式テニス部喫茶店は思いの外好評で、まだ一時間半しか開けていないと言うのに、二つの教室を使用した喫茶店の席は既に満席になっていて、去年のお客さんの倍は来ているとの事だった。

「お待たせしました」

あたしは先輩に教えられた通り、四人のお客さんが座っている七番テーブル席の前で、軽く膝を曲げて浅くお辞儀をすると、サンドイッチを注文していた人を捜してその人の横に歩み寄り、静かにテーブルへと注文の品を置いた。そして、先にテーブルに在る品数と持って居た注文品のリストを確認する。

「ご注文は以上でしょうか？」

あたしの問い掛けに、四人がそれぞれ軽く頷いた。

ふう。初めてにしては、なかなか上手に言えた……かな？ そう
思って気を緩ませた時だった。

「あ、ねえ、この子じゃない？」

「あ、ホント。この子だよー」

あたしの顔を見るなり、お客さんだった四人の先輩方が急に騒ぎ
始める。

先輩だと判ったのは、この中学校の制服に縫いつけているプラス
チックの名札の色が、三年生の白い色だったから。ちなみに二年生
は濃い赤で、あたし達一年生は黄色い名札が付いている。

知らない先輩から『この子』だと特定されてしまい、何の事だか
判らないまま、あたしはトレーを胸の前で抱えると、取り敢えずニ
ッコリと愛想笑いを浮かべてみた。

「あ、あのう、私がなにか？」

初対面の先輩方から騒がれても、良い気は全くしない。それどこ
るか、この先輩方からはあたしに対して好意的な態度とは逆の態度
を取られているみたいにしかなえなくて不快だった。

「貴方、今朝保健室に運ばれた子でしょ？」

「彼氏にお姫様抱っこして貰っていたわよねー。羨ましいわあ」

「なっ……はあ？」

あたしにとつて、在り得なかった先輩方の爆弾発言に、体中が力ツとして熱くなる。

今……今、なんて言ったの？ あたしを保健室に運んでくれたのは、確か慶と百瀬先輩だった筈……慶はそう言っていたのに。し、しかも『お姫様抱っこ』……って、嘘でしょう？

「あらら、どうしたの？ 固まっちゃって」

「良いじゃない。校内で有名な『アキバケイ』くんに、お姫様抱っこされたんだから」

チラチラとあたしの表情を盗み見ては、お互いに視線を合わせてクスクスと笑う先輩方の意味有り気な態度がどうしても厭だった。まるであたしが小馬鹿にされているみたい……そんな上から目線で見詰められているのが、堪らなく不愉快になる。そして、その視線がずっと前——あたしの記憶の奥深くに閉じ込めた、小学校で初めて出逢った頃の姫香と亜紀の視線と重なって見えてしまう。

「貴方が土橋さん？ 確か『アキバケイ』くんの、お隣さん……よね？」

あたしが持つて来たハムサンドに手を伸ばしながら、長い黒髪を左右に振り分けた先輩が、にやにやと笑いながらそう言った。

「そんな……」

否定出来ない事実を言い当てられて、あたしは身体を一層小さく縮みあがらせる。

なんで……なんでそんな事まで知っているの？ 確かに慶は新人戦で一躍有名になっちゃったみたいだけど、だけどどうしてあたしの事まで知っているの？

慶の事だけならまだしも、なんであたしの事まで……

「なに？ この子、泣きそうになってるわよ？」

「馬鹿じゃないの？ なに泣きそうになってるのよ」

あたしの真向かい側に座っていたショートカットの先輩が、鼻で笑うとツンと澄ましてソッポを向いた。

先輩の大きな声に驚いたのか、ざわついていた室内が水を打った様にシン……となる。そして、他の席のお客さんがあたしに注目してしまい、固まっていたあたしは恥ずかしさと理不尽な不快感に一層身動きが取れなくなってしまった。

「なあに？ あの子誰？」

「アキバ系の彼女？」

「ええ？ 嘘、付き合ってるの？」

「ふーん、普通の子ね。もっと可愛い子なら幾らでも居るのに」

『自分で可愛いとも思ってるのかしら？』

ヒソヒソと囁き合う声が、あたしには殊更大きく聞こえる。そのどれもが否定的な発言で、聞くに堪えられない言葉ばかりだった。

どうして？ どうしてあたしが見ず知らずの人からそんな風に言われないといけないの？

「ち、違います……」

『あたしは慶の彼女なんかじゃ無いし、付き合ったりもしていません』そう言葉に出して言いたかったのに、あたしの口はそれ以上動いてはくれなかった。

だって、今のあたしは慶の事を……

「あ？ 来たわよその『彼』」

その声に反応して、あたしは部屋の入口に視線を奔らせる。

そこには、この先輩方から噂されている事なんて何も知らないだろう慶が、例の短パン夏の体操服にメイド用エプロン姿で、注文されていたオレンジジュースとクリームソーダを一杯ずつトレイに載せて現れた。

「ちよつと、まさかの本人？」

悲鳴とも歓声とも取れない声が、テーブルのそこかしこで湧き上

がり、一種独特の雰囲気にも包まれた室内に遣つて来た慶は、何事かと一瞬怯んで視線を左右に泳がせる。

彼女達からの視線の束縛から解放されたあたしは、その場から逃げ出す様にして教室を出て行った。

第58話 文化祭…6

「あ、お疲れ様。どうだった？ 初のお仕事は？」

教室で何が在ったのか知らない姫香は、戻って来たあたしを見るなり笑顔で迎えてくれた。

「う……うん」

「どうしたの？ 元気、無いなあー。あ、もしかしてテーブルを間違えたとか？」

「そんなことないわ。ハムサンドはちゃんと注文先のテーブルに届けたもの」

「じゃあ、どうしてそんなに落ち込んでいるの？」

「え？ ああ……ちよつと……ね」

あたしの様子に気付いた姫香は訝って訳を聞いて来た。だけど、今のあたしには姫香にさっき教室で起こった事を、そのまま伝える気にはなれない。ううん、あんな事、伝えられるどころか、相談出来る訳が無いじゃない。

そう思っていたら、姫香の方から彼女なりの推測が……

「さっき、アキバケイが香代の後から行ったでしょ？ 急に騒がしくなったから。で、その事で香代に何かあったみたい……って、在ったんでしょ？ 大体「今年は三年の女子がやけに多いね」って、

先輩方が言っていたもん。殆どがウエイトレスのアキバケイを見に来てるって専らはの噂だよ。けどなかなか来ないって。それで待っている間、みんなあれこれと噂していたらしいからね。香代の不利になりそうな噂も在ったのじゃないの？」

「……うん」

「そうだったんだ。それはちょっと気不味かったわね。なんならあたしと一緒に裏方に居る？」

「いい。大丈夫……だから」

姫香の言葉は嬉しかったけれど、既に持ち場を決められているあたしには、先輩の許可無しに勝手に持ち場を替えるわけには行かなかった。しかも、それが慶の事が原因で……となると、ますます他の人達から怪しまれて妙な誤解をされてしまうかも知れない。

慶と昔の時みたいな関係に戻りたいと想うのに、慶に近寄って来る女の子にはどうしても心の何処かで嫉妬みたいな意地悪な気持ちを抱いてしまう。その癖、他人から慶の彼女なのかと聞かれてうるたえ、否定してしまうなんて。

一体、あたしはどうしちゃったのかしら？

今のあたしには、一旦離れてしまった慶との距離をどう保つべきなのか、それさえよく判らなくなってしまうている。

「ただいま帰りましたー」

「おっ！ 待ってたよ〜んホットケーキの素〜」

「って、あたし等を待ってたんじゃないんかいっ！」

買い出しに出ていた谷先輩と亜紀が戻って来た。浅井主将の御迎えに、即突っ込みを入れる谷先輩との遣り取りに、調理室が明るく賑わう。

「香代、もう起きて大丈夫なの？」

姫香の隣に座っていたあたしを見るなり、亜紀は買って来た荷物を実習台にそそくさと置いて、真っ直ぐにあたしの処へと近寄った。

亜紀の姿を見たあたしの頭の中で『お姫様抱っこされて』と言った三年生の先輩の言葉が繰り返して聞こえている。慶の事を今でも一途に想い続けている亜紀には、その時のあたし達がどう映ったのだろうか？ もし、あたしが亜紀だったら、あたしの事をどう思ったのかしら？

亜紀が近寄って来る……でもあたしは心配してくれている彼女を無視したりは出来なかった。

「う、うん。心配してくれてありがとう」

「なに？ 他人みたいな事言ってるのよ」

お約束の言葉を切り出したら、姫香から突っ込まれてしまった。

慶は、自分と百瀬先輩とであたしを保健室に運んだと言った。で

も、さっきの先輩は慶があたしをお姫様抱っこで連れて行ったって……一体どっちの言葉を信じればいいの？　そして、今のあたしは亜紀になんて言えば良い？

亜紀の接近に思わず一步後ずさってしまったあたし。その挙動不審な態度はたちまち亜紀に伝わってしまった。

「どうかしたの？」

立ち止まった亜紀が、あたしの様子に訝り小首を傾げる。髪に天使の輪が掛った亜紀の肩までの黒髪がサラサラと流れて、同性の女の子であるあたしでさえ、ハッとさせられてしまった。

——亜紀、随分と綺麗になって……る？

ふっくらとしていた亜紀の身体は、小学生の時よりも少し痩せたように見える。低いと思っていた背丈だって、なんだかあたしと同じくらい。

ずっと傍にいたせいか、あたしは亜紀の見た目の成長でさえ見落としていたんだわ。離れてしまった慶だって、あんなに成長していたんだもの。

亜紀の成長は、見た目の外見だけじゃなかった。

「ん、な、何でもないよ？　亜紀は大丈夫だった？」

「これくらい、平気よ？」

そう言ってクスッと笑った。今朝の騒動に巻き込まれて肘を擦り

剥き、絆創膏を貼っているのに、それでもあたしの事を気遣っている。そんな亜紀の純粹さが、あたしには眩しく見えた。

亜紀は、今朝のあたしと慶の事を何とも思わなかったの？

慶が言っていた事と、先輩が言っていた事の一体どっちが本当なのだろう？ ……あたしは自分が取るべき態度の判断に迷い、亜紀の出方を窺^{うかが}おうとした。

その時だった。

急に隣の喫茶店が一際騒がしくなり、次いでさっきあたしと入れ替わりでオーダーを取りに行った一葉と美帆が、バタバタと調理室へ駆け戻って来た。

「廊下は静かに歩きなさいって……」

「た、大変ですう！ さっき来たお客さんの中に……」

長谷川部長の注意を遮る様にして、美帆が息を切らせて報告する。

「し、し、東雲中のあの『彼』が来て、アキバくんに再試合を申し込んでいます」

「なんですって？」

驚いている女子部員一同とは全く逆の反応で、男子部員はそれぞれが奇声ならぬ雄叫びを上げて一斉にざわめき立ち、まるで蜂の巣を叩いたような騒ぎになる。

「ちよつと……浅井！」

長谷川部長は男子の浅井主将を呼ぶけれど、その声は全く届いていなかった。

「雪辱戦だ！」

「こんな時に、試合だなんて駄目よう！」

反対する女子部員の声を無視して、男子部員の先輩方がコート使用の許可を貰いに、顧問である藤野先生を探しに何人かに分かれてそれぞれの方向へと散った。

第58話 文化祭…6（後書き）

この辺りで最新話に出てくるキャラ設定の整理です。（ちと怪しいかも）

ご不要ならスルーしてください。

主人公：土橋 香代（中学一年生軟式テニス部員）

親友：川村 姫香、遠藤 亜紀、一葉、美帆、他

男子同級生：秋庭 慶、門田 雅人、田村 恭介、他

二年生（女子）
キャプテン

部長：長谷川 舞

副部長：真鍋

会計：谷

先輩：百瀬 真奈美、金子、宮脇

男子部員 この時点ではまだ二年生は辞めていません。

部長 小林（三年） ↓ 浅井（二年）
キャプテン

副主将 原（三年） ↓ 北村（二年）

会計：三浦（二年）

顧問：藤野先生（男子部）、岡先生（女子部）

第59話 文化祭…7

文化祭は週末の日曜日に行われ、あたし達は次の月曜日に振り替え休日となっている。

大抵の中学校は文化祭が特定の日曜日に集中するから、他校生が遣つて来る事は稀だけれど、かと言ってそんなに珍しい事じゃ無い。一般の父兄や学校のご近所に住む人達が自由に参加出来るイベントなのだし、問題の無い身なりであれば簡単に正門を通してくれるのだ。

だからと言って、なにも東雲中学校の制服姿で新人戦の優勝者である高柳くん本人が、わざわざこの学校に遣つて来るだなんて……

まさかの高柳くんの訪問と、その彼の目的を聞き付けた部員の殆どが、自分達の役割分担を忘れてしまい、調理室から出て行った。慶の同級生であり友人でもある田村くんや門田くん達は、真っ先に調理室から逃げ出し、そして姫香や亜紀をはじめ、一年と二年の女子も殆どが隣の喫茶店へとなだれ込んでしまった。

残ったのは、みんなから遅れを取ってしまい、調理室に取り残されてしまったあたしと数人の先輩方の五、六人だけ。それでも、外から情報を仕入れて来た先輩数人が先輩方と合流して、あれこれと話題を振った。

「正門でも、彼の事が噂になっていたのだそうよ」

「堂々と乗り込んで来るだなんて、良い度胸だね」

「えー？ 東雲中も今日が文化祭じゃなかったっけ？」

「何でも八神くんが来るように誘ったのだって」

「八神？ って、あの幽霊部員の子？」

ヒソヒソと囁いているはずの先輩方の声が、静かな調理室でことさら大きく聞こえる。

八神くんは身内にプロが居るし、あたし達よりもずっと顔が広い。彼自身、将来はプロを目指していると言うのだから、彼が高柳くと繋がっていても何ら不思議だとは思わなかった。

でも、幾ら他校の生徒が出入り自由でも、大会で堂々と試合に勝った高柳くんが、なんで今更慶に試合を申し込んで来るの？ 普通なら、負けた慶からのリベンジの申し込みじゃない？

「ねえ、試合したとして、どっちが勝つと思う？」

「東雲中の彼でしょ？ ウチのアキバケイもあの時は大会入賞が懸かっていたけど、今日試合やっても無理じゃない？」

「真紀まで何言っているのよ」

「厭だわ舞ちゃん。だからあ、もしもってハナシ。仮定よ。仮定」

金子先輩と百瀬先輩の会話に、長谷川先輩がムツとして突っ込んだけれど、百瀬先輩が軽く受け流してしまった。

「怪我はもう治っているでしょ？」

「だからさあ、気持ちの持ち様だって」

「きっと、ウチのアキバケイを完膚なきまでに叩きのめしに来たのよ」

「そうなのかなあー？」

高柳くんが再試合を申し込む理由にあれこれ思いを巡らせてみるけれども、そのどれもがみんなが口にした憶測の域を出ないでいる。

無責任で他愛の無い会話を耳にした、長谷川先輩の怒りが徐々に高まっているのが見て取れたあたしは、先輩の怒りが伝わってくるみたいで怖くなってしまった。

あたしも小学校の時に部を纏めるべき部長をしていたから、今の長谷川先輩の腹立たしい気持ちが判る気がする。部員達だけで盛り上がっているみたいだけれど、今は勝手に試合に応じるべきじゃないと思うし、第一、肝心の先生がまだ見付かつてはいない。先生の許可を得なければ、この高柳くんからの挑戦は受けるべきものじゃない。今日は学校行事の文化祭なのに、こんな馬鹿騒ぎは止めるべきだと思った。

「おいアキバ！ 潔く応じろよ！」

廊下を集まっていた男子部員の何人かが、田村くんの声に『そうだ！ そうだ！』と口々に煽る。

「止せよ！ アキバ！ 挑発に乗るな！」

「ンだと門田あ！」

隣の部屋から田村くんと門田くんの大きな声がして、二人が揉み合い、誰かがそれを止めようとして更に騒ぎが大きくなった。

さすがは門田くん。慶の副主将をしていただけのことはあるわ。きつと慶だつて主将をしていたのだから、あたしと同じ考えなのだろうと思つた。でなければもうとくにコートの準備がされていて、慶と高柳くんはそこに居るはずだから。

「おい、センセ居たか？」

「え？ 正門の方に居なかつた？」

「職員室に戻つたのか？」

「もう一度捜しに行つて来い！」

お店を投げ出して顧問の藤野先生を呼びに行った男子部員がぼつぼつと調理室に戻つて来ては、情報交換をする。けれども、誰もまだ藤野先生を探し出す事が出来ないみたいだつた。

「居たか？」

「居ません」

「こつなつたら、もう勝手にコートを遣わせて貰おうぜ！」

誰かが言った一言に、喫茶店内から『きゃー！』と言う黄色い声と拍手が起こった。

男子部員の全員がこの試合が始まるのを、今か、今かと期待しているみたい。しかも、喫茶店に入っていた他のお客さん達までが、突然の予期せぬ大きなイベントに歓声を上げて喜び、みんな浮足立ってしまっている。

「ちょっと！ 貴方達、お店はどうするのよ！」

男子部員の勝手な行動に対して、居残っていた部長の長谷川先輩が苛立って声を荒らげる。けれど、みんな高柳くんの事で頭が一杯らしく、この試合が当然行われてしまいそうな……そんな危険な空気に包まれていた。

「ここまでお膳立てされたら、もう中止するの無理じゃないの？」

「ねえ……」

ひそひそと囁く他の部員達のお喋りを耳にしたあたしは、どんな不安な気持ちが大きくなって行く。

「香代！ まだそこに居たの？ あんたも早くこっちに来なさいよ」

「う……うん」

先に隣の様子を窺っていた姫香が戸口に立ち、瞳を輝かせてあたしを手招きしたと思ったら、ぱっと身体を翻して隣の教室へと戻っ

てしまった。

あたしは気乗りしないまま、思わず居残っている長谷川先輩達の顔を窺ってしまい、視線が先輩と合ってしまった。

「貴方も行くの？ 土橋さん」

姫香に流されてしまいそうになっているあたしに対して、怒っているような長谷川部長。騒ぎについて行かなかったあたしを見直していたのに、がっかりだわ……と言わんばかりの視線に、あたしは身動き出来なくなった。

「あ、あのつ……今は文化祭で喫茶店をやっているのに……わ、私はみんなを止めるべきだと思います」

「よく言ったわ」

長谷川先輩の満足そうな声に、あたしは少しだけホッとする。

別に良い恰好を取った心算は無かったし、顧問の先生不在の今は勝手に試合をするべきじゃないと思う。だけど……

「おい！ コートの準備が出来たぞ！」

男子の誰かが大声で叫んだ。

あたしと長谷川先輩達数人は、ハッとしてお互いの顔を見詰め合う。このまま先生の許可も無しで勝手に試合を始めれば、幾ら慶が試合を拒否した事実が在ったとしても、先生方からは何らかのペナルティを覚悟しておかないと……

「あれ、まだ先生見付からね？」

「原くん、浅井は？」

ひょっこりと調理室に戻って来た副主将の原先輩に、長谷川先輩が声を掛ける。

「え？ 知らねーよ」

「……もう！ 浅井は何処？」

遂に長谷川先輩が立ち上がり、この馬鹿騒ぎを止めるべく、男子の主将である浅井先輩を探しに行ったしまった。

第60話 文化祭…8

「この試合、何が何でも止めさせなくっちゃ」

「あ、待ってよ、舞ちゃん」

元々責任感が人一倍強い部長の長谷川先輩は、廊下でざわめいている部員の在り様に、遂に我慢が出来なくなったらしく、椅子から勢い良く立ち上ると、肩で風を切って歩くみたいにずんずんと調理室を出て行った。そして、その後を追う様に残っていた百瀬先輩方も出て行く。

「……」

残されたあたしは、複雑な気持ちで先輩方の後ろ姿を見送った。

姫香達と一緒に、もう一度慶の試合を見てみたい気持ちが半分と、残りの半分は長谷川先輩と同じく、顧問の先生の許可無くして『今は遣るべきでは無い試合』にSTOPを掛けなくてはいけないと言う気持ち。だけど本当は、長谷川先輩の気迫に吞まれて怖くなつて、素直に先輩に合わせてしまった——あたしは無意識のうちに先輩から嫌われるのを避けて、在る意味良い子ぶってしまったのかも知れない。

どうしよう。長谷川先輩からは快く思われたかも知れないけれど、一緒に居た百瀬先輩や金子先輩からは、あたしはどう思われてしまったのかしら？ 他の一年生はみんな隣の教室へ行っているのに…もしかしたら、変な子だって思われてしまったのかも知れないも

の。

あたしは何故だか急に先輩方の視線を意識してしまい、咄嗟とっさに口にしてしまった自分の言葉に、自信が持てなくなってしまった。

「おい、準備が出来たって言ってる……」

「その必要は無いわ！」

慶達をコートへ引つ張り出そうとしていた男子先輩方が再び外から声を掛けた途端、長谷川先輩が更に大きな声でぴしゃりと言いつつ。

一瞬にして、ざわざわして浮足立って居た部員全員が息を飲み、空気が凍ったように思えた。

あたしは得体の知れない不安を抱きながらこっそりと、廊下に集まっているみんなの傍に歩み寄る。

「当の本人達はその心算が無いみたいだし、外野がとやかく言う必要は無いでしょう？ それに、今日は何の日だか、みんな判っているの？」

慶達の様子を見て安堵したのか、落ち着いた長谷川先輩の声に、あたしはそっと教室内を見廻して、慶の姿を搜した。

みんなが遠巻きに高柳くんの座っている席に注目している。その視線を辿って、あたしは向かい側に座っているエプロン姿の慶を見付けた。先輩が噂していた八神くんはその場には居なかったし、彼

の不穏な存在感さえ微塵も見出せない。

「あの時、グリップチェンジでまさか秋庭が切り返して来るとは思わなかったよ」

「僕にはもう後が無かったからね。単なる苦し紛れさ」

「そんな事はないさ。秋庭はいずれ硬式に？」

「うん。その心算。高柳は？」

慶の問い掛けに、高柳くんは注文していた紅茶を一口飲んで、にっこりと笑った。

「僕もだ。だったらこれを機会にもっと積極的にグリップチェンジを遣った方が良いかも知れない。特に、バックハンドストロークでのヘッドスピードを上げたいと思う時に、浅めのイースタングリップで手首と腕をしならせてヘッドを加速した方が間違いなくヘッドスピードは上がると思うんだ」

「あ、なる……」

あたしの心配を余所に、どうやら慶は高柳くんの再戦を無難に回避出来たみたいで、二人の間には和やかな雰囲気醸し出されている。

「ちえ、つまんねーの」

「せっかくのイベントだったのに」

ホッと胸を撫で下ろしたあたしのすぐ横で、男子の先輩それぞれが呟き、その場を後にした。その先輩方に倣う様に、次々と部員が愚痴を溢しながら各自の持ち場へと散って行く。

「はあ、土橋、アキバケイって、根性無しか？」

「えっ？」

不意に背後で田村くんの声がした。田村くんは慶の試合を待ち望んで、反対していた門田くんと揉め合っていたのを、あたしは知っている。

「あ、あの……」

「ホント。せつかくのチャンスなのに馬鹿だわ」

気弱になってしまったあたしの言葉に被せるように、姫香がキツイ一言を浴びせた。

『そんなことは無いわ』と否定したかったけれど、それ以上あたしは何も言えなくなってしまう。

「土橋、気にすんなよ。一時はヤバイ空気になりそうだったけど、アキバケイだって今は何をすべきかくらい^{わきま}弁えてる。それに、高柳って奴も判ってくれたみたいだしな」

誰かと思つて振り返ると、その声はすれ違いざまに発せられた門田くんのものだった。

門田くんは、慶を炊き付けようとしていた田村くん達に反論して

言い争っていたのだったわ。

あたしは門田くんの声に励まされた気がして、沈んでいた気持ち
が軽くなる。そして、ここにももう一人……

「秋庭くん、彼と仲良くなれたみたいで良かったわ」

そう言って笑い掛けてくれたのは、慶の事を今でも想っている亜
紀だった。

「う、うん」

「あのままみんなに流されて、許可無しで試合なんて遣ればどうな
っていたか判らないもの。でも秋庭くん、きっぱりと彼の申し込み
を断っていたわ。後日お互いの都合の良い日にゲームをしようって」

「そうなの？」

「ええ」

意外だった。だって、慶は昔から人に頼みごとをされれば断る事
が出来なかったから。

何事も穏便にしようとする傾向が強い慶は、時には自分にとって
厭な事でさえ引き受けたり、不利になる様な事を押しつけられたり
……でも、それでも他の人に頼ったり、泣きついたりなんかしない
頑固な所が在ったから、いつもあたしが見るに見兼ねて慶の代わり
に断ると言っ、意地悪な女の子の役を引き受けていた。六年生の時
から慶と距離を置くようになってからは、門田くんが慶の断り役にな
っていた事だって、あたしは薄々気付いていた。今日の高柳くん

の事だつて、自分からハッキリと断る事なんか出来ない、気弱な慶だから廻りや先輩方に流されてしまつて、とんでもない事になってしまうのじゃないかしらと思つて心配していたのに。

ところが、高柳くんの来校は、慶にとっては単なる交流として終つたけれども、それまでの経緯^{いきさつ}が顧問の藤野先生の知る所となり、勝手に試合をさせようとした男子部員に厳重注意が行われ、藤沢中学校の男子軟式テニス部はとんでもない事態に巻き込まれてしまつた。

第61話 気まずい関係

文化祭はその後、何事も無く……写真部の撮影襲撃に遭い、一年生男子の数人が撮影を拒否して逃げ出すと言う多少の騒ぎはあったものの、それでも軟式テニス部は去年の売上を大幅に上回る好成績で終わった。

三年の先輩方から『よく頑張ったわね』とお褒めの言葉を戴いたし、暫くは公式戦も無いと、安心していた矢先の事だった。

あたしが『その異変』に気が付いたのは、文化祭の振り替え休日後一週間が過ぎようとしていた。

隣のコートで、慶達一年生はみんな揃ってラリーの練習をしているけれども、部員数が少ない。よく見ると、二年生の先輩方の姿が一人もいなかった。

「ねえ、何だか男子部員が少なく無い？ 二年生どうしちゃったの？ 模試？ それとも何か……」

気になって、隣で球拾いを一緒にしていた姫香に声を掛けると、意外な返事が返って来た。

「香代、知らないの？ 二年の先輩は受験勉強だと言って、主将の浅井先輩を残してみんな退部しちゃったのよ」

「ええ？」

あたしは思わず耳を疑った。受験勉強だなんて心配しなくても、三年生になれば残り一学期で終わりになるのに。

「おかしいと思うでしょ？ でも、これは表向きの退部理由なのだから」

「表向き？」

「うん。実はね……」

姫香は文化祭であった慶と高柳くんとの試合を煽った先輩方が真先に退部してしまった事。そして、その先輩方が部内で一番『顔が効く』人達だったから、他の先輩方はその人達に睨まれるのが怖くて退部してしまったらしい事を話してくれた。

「そんなのアリなの？」

「表向きは進学の為の退部なんだから、顧問の先生だってそこまで言われれば文句は言えないでしょう？ 元々ウチの学校は進学校だしね」

勝手に試合をさせようとしたから注意されたのに、その事がどうしても納得出来なくて気に入らなかつたのね。でも、自分達は勝手に辞めちゃって清々しているのかも知れないけれど、残った後輩はどうなるのよ……

だけど、あたしはこうも思った。

幾ら新人戦だったからと言っても、自分達では無く後輩の慶が目された。今回の再戦だって、先輩として後輩の慶を立ててあげよ

うと少なからず思ったのに、先生方にはその想いが届かず、理解して貰えなかった……もしもあたしも同じ立場だったら、部活を続けたいわ。

「尤も、浅井主将が残ってくれたからこそ、こうして部活動が続いているのだけど」

そう言った後、姫香は少し悪戯っぽい目つきをしてあたしを見た。

「でね？ もう先輩が居ないから、部長は浅井主将が兼任するらしいのだけど、副主将や会計、補佐なんかはもう決まっているのだった」

「ふうん」

「副主将、誰だと思う？」

「さあ」

本当は、慶が副主将をするのじゃないのかしらと思った。慶は小学校の時はキャプテンだったし、門田くんだって副主将。成績はぱっとしないけれど、統率力から見れば、田村だって十分候補者になるわと思った。もしかしたら、あたしの知らない男子部員がなっているのかも知れない。

だけど、今回の先輩方の退部事件の本当の理由が慶にあるのだとしたら、慶が副主将になればそれこそ退部した先輩方の神経を逆なでするみたいになるし……

迷っていたら、姫香がクスリと笑った。

「副主将はね、アキバケイだよ」

「え！」

まさかとは思ったけれど、その『まさか』が的中した。

姫香もあたしの心の内を察してか、同情してくれているみたいな眼であたしを見る。

* *

「おい、香代」

練習が終わって姫香達とも別れ、もうすぐ家に辿り着くという時に、あたしは慶から呼び止められた。

先輩方から裏切られ、さぞかし落ち込んでいるのかと思ったら、案外あたしが思っていたよりも慶は陽気だ。

「な、なによ？」

「僕さ、副キャプテンに選ばれたよ」

ただでさえあたしよりも大柄な体を揺すって、慶は自信に満ちた笑顔を向けて来た。

慶は……慶は先輩方が退部してしまった本当の理由を知らないん

だ……そう思った時、この能天気で無神経な慶が、なんだか齒がゆく思える。

「そ、そう？ おめでと」

「先輩方がみんな受験勉強に集中したいって退部しちゃったからさ、浅井主将以外、僕達一年生だけになっちゃって。で、門田が会計で田村と壬生が補佐役になったんだ」

聞きもしないのに、慶は嬉しそうにあたしに話して来る。

あたしは慶の知らない本当の理由を口にしてしまいそうになって、必死に素っ気ない態度を取った。

慶、あんたは先輩方が受験理由で退部しちゃったって事を本気で真に受けているの？ おかしいとは思わないの？

あたしは慶の『人を疑わない性格』が純粹過ぎて怖くなった。

「土橋、どこを見ている？」

「あつ、は、はい！」

数学の授業中、あたしは先生から注意を受けてしまい、咄嗟に席を立った。

授業中に注意を受けたのは、これでもう三回目。あの時の慶の反応が意外だったせいで、授業中であっても気が付けば無意識に慶の事を見てしまう事が多くなってしまふ。

「ああ？ ドバシはアキバケイを見ていたんだよなあ」

「『アキバ系』に『アキバかよ』って語呂が良くね？」

後ろの方の席から男子の誰かが囁し立ると、それに便乗した他の男子が騒ぎ出す。授業中にどっと沸いた教室で、あたしは恥ずかしくなって居た堪れなくなってしまった。

「だっ、誰が『アキバかよ』よっ！」

馬鹿にしないでっ！ どうしてあたしばかりが損をするの？ 慶の事を心配するのは大きなお世話なのかしら？

そしてあたしの怒りは、何故だか慶の方へと向けられてしまった。

時々慶があたしの方へ視線を送ってくるけれども、あたしはその一切を無視してしまい、その後半年近くも、お互いに気不味い想いをしてしまう事になってしまった。

第62話 オトナの約束

勝手にあたしの方から慶と離れてしまったけれども、お隣同士だと家庭の事情は多少なりと筒抜けになっってしまう。

それは、慶からあたしが距離を置く様になって、半年くらい経った春の日だった。

「お隣の慶ちゃん達、これから大変になるわね」

「どう言う事？」

春休みの昼食時、お母さんがご近所のおばさんから貰ったおうどんを調理してあたしと一緒に食べていると、お母さんが、ふと、お箸を休めて気の毒そうな顔をしたと思ったら、急に慶の事を口にした。

あんな鈍感で無神経な慶の事なんか、もう関係ないんだから一方的に突っ撥ねてしまったあたしだったけれども、さすがにこのお母さんの一言が気になってしまう。

「慶ちゃんのお母さんね、暫く入院しないといけないのだって。あ、でも美咲ちゃんがいるから、心配しなくても大丈夫かしらね？」

お母さんは余計な心配をしてしまったかのような素振りをみせたけれども、あたしはお母さんの様に心穏やかにはなれなかった。いつも優しく笑って声を掛けてくれる慶のお母さんが入院するだなんて……その事を聞いたただけでも胸が塞がる様な厭な気分になる。

あたしのお母さんは、ずっとお父さんと共働きで、昼間は仕事に行っている。だから専業主婦でいつも家に居る慶のお母さんが羨ましかった。昼間幼稚園や小学校へ行っていたあたしの急な病気の時に、お母さんの代わりに迎えに来てくれたり、お母さんが会社から帰って来るまでの間、ずっと傍で看病してくれていた……いつも家に居て、急な時でも安心出来る優しい慶のお母さんがとても羨ましくて、あたしのお母さんもずっと家に居てくれればいいのと思う時もあった。

その慶のお母さんが入院……だなんて。

「入院……って、どこが悪いの？」

あたしが不安になってしまったのに気付いたのか、お母さんは話題を振ってしまった事を後悔した様子だった。

「ああ、大した事は無いのよ。け、健康診断で再検査になったって言うていただけだから。それから、この事はご近所のおばさん達には内緒にしておいてね。噂されると慶ちゃんのお母さんにご迷惑が掛るからね」

「うん……」

あたしは軽く頷いて、それ以上聞こうとはしなかった。

心配させまいとしてわざと明るく振舞っているのが見え見えだった。お母さんは嘘を吐くのが下手なの、あたしはもうとつくに知っているんだもの。浮かないお母さんの表情で、慶のお母さんの状態がどれだけ悪いのか、なんとなく判ってしまった。

それに、お母さんやご近所のおばさん達にはナイショだけれど、美咲姉さんは大の家事嫌い。結婚しても、家事が苦手だし専業主婦にはなりたくないから働きたいわと言っていたのをあたしは美咲姉さんから直接聞いた事がある。慶のお父さんは仕事の関係で、慶とあたしが小学校四年生の時に、名古屋へ単身赴任をして、久しくこちらに帰って来ているのを見た事が無い。

慶のお母さんが入院しちゃったら、慶達はどうなってしまうのかしら……

不安な気持ちはどんどん膨らんで大きくなる。

「あら、香代？　なに泣きそうな顔をしているの？」

「だって……だって、おばさんが……」

「ああ、却って心配させちゃったわ。言うのじゃ無かったのかしらね？　でも、いい？　くれぐれもこの事はご近所のおばさんや余所の人に喋っては駄目よ？　慶ちゃんのお母さんは『そんなに長い間の入院じゃないし、ご近所の皆さんへ余計な心配を掛けたくないから、黙ってこっそり行きますね』って言っていたから。でも、お母さんよりも香代の方が、昼間、慶ちゃんのお母さんに会う事が多いでしょう？　暫くお留守をしている事を香代に伝えておかないと、香代が心配するからと思ったの」

「……うん」

聞きたくない事だったけれども、その半面、話してくれて良かったと思った。お母さんの言う通り、仕事で遅く帰って来るお母さん

よりも先にあたしは下校している。慶のお母さんはお花が大好きで、慶が下校して帰る頃になると、いつも庭に出ていてお花の手入れや水やりをしていて、慶だけでなくあたしにも『お帰りなさい』って声を掛けてくれる。その『いつも』の情景が急に見られなくなって、慶のお母さんがいなくなれば、きつとあたしは心配になってじつとしては居られなくなってしまふもの。もしかしたら、お母さんが帰って来るまでにご近所のおばさん達に尋ねて廻り、慶のお母さんが望まない事になっていたかも知れないわ。

「慶ちゃん達の事は、美咲ちゃんが居るから大丈夫よ。香代は黙って静かに慶ちゃん達を見守ってあげてね？」

「うん」

半ベソを掻いたあたしの頭をそつと撫でながら、お母さんはそう言った。

ショックな話だったけれども、あたしはお母さん達オトナの内緒話に、少しだけ参加させて貰ったような気になった。

自分で勝手に慶の事を放り出しておきながら、心の底では慶の気になっていて仕方が無かった。だけど、慶はあたしが思っていた以上にずっと成長していて、あたしが気に掛けたりする必要なんか、もう無いのだわと思っていたのに……

第63話 意地っ張り

——慶は……あたしが気にしなくなつて、もう大丈夫なんだから……

やっとそう思えるようになって、何だか胸の奥の痞え^{つか}が取れたような……ふっきれたと言うか、そんな気になれたばかりなのに……

あたしとしては思い出したくも無い、あれはついこの前のバレンタインでの出来事だった。

去年行われた新人戦での健闘を学内で称えられた慶には、お約束みたいに慶を応援しようと言う女の子が増えた。中には、慶を意中の彼氏として付き合つて欲しいと言う子まで現れる始末。

あたしがこう思うのも何だけど、確かに慶の見掛けは『黙つていればカッコ良い』。背が高いお父さんの遺伝なのか、まだ中学一年生なのに身長は軽く百七十を超えていてまだまだ成長期真っ只中。

しかも責任感が割と強くて、二年の先輩方が急に退部してしまつてから、慶が副主将として男子軟式テニス部を上手に引つ張つていく。見た目はしっかり者。部員の中には個性的な田村くんや、彼とは仲がもの凄く悪い幽霊部員の八神くん達が居るのに、それでも慶は主将の浅井先輩を立てて毎日練習に励んでいる。

そんな慶の姿からは、あたしよりも気弱だった幼稚園の頃の面影は微塵も無い。

練習中の慶はいつも真剣そのもので、時々見掛ける普段の府抜けた表情は窺えない。中学生になって、たった一年も経たないうちに副主将に選ばれてしまったのだから。それだけ同じ学年の部員とは一線を画し、気を張り詰めて練習をしているのには違いのだけれど……

慶の眼に見えない努力に気付かずに『名前を聞いて知っているから』とか、『見た目がカッコ良いから』だなんて、そんな上っ面だけに惑わされてファンになる女の子達の多い事。

きつと、今年のバレンタインは女子から沢山チョコを貰うのだから……そう思いながら、あたしは姫香と亜紀に付き合って、デパートの一角に設置された、有名菓子店が主催している手作りチョコのコーナーへと足を運んでいた。

「このマカダミアナッツとカシューナッツ、アキバケイはどっちが好きかな？」

「ふん、で、今年はナッツを入れてプレゼント？」

「うん、そう！」

「じゃあ、あたしは生クリームにしちゃおうっかな」

嬉しそうな姫香の弾んだ声に、亜紀が陽気に答えた。

二人とも、今年も慶に渡す心算なのね？ だけど、普通ならお互いライバル同士になるような雰囲気なのに、毎回そうならないのはどうしてなのかしら？ しかも姫香は田村くんだけでもう良いのでは？ と思わず言いたくなってしまう。

「ねえ、香代はどっちのナッツが良いと思う?。」

「ど、どっちでも同じでしょ?。」

「えー? 同じ豆でも微妙に味が違うんだからー。好みだつてあるんだしいゝ」

姫香はもう上機嫌。チョコに入れようとしている豆のサンプルを何種類も両手一杯に持つて、あたし達との遣り取りの合間に、あれこれ店員さんと情報を交換している。

そりゃあそうよね。三人の中で、姫香が一番先に『カレシ』が出来ちゃったんだもの。だけど、まさか恋愛相談相手だった田村くんと、いつの間にか『そんな仲』になつていたなんて……ちよつぴり羨ましいな。

「ねー、香代もアキバケイに作つてあげるんでしよう?。」

そう亜紀から言われたのだけれど……『ううん。今年は自分にするの』だなんて言つてしまった。

* *

全く……なんで毎年毎年バレンタインなんか在るのよ? いつも思う事なのだけど、お菓子屋さんの企みに世の中の女の子みんなが踊らされちゃったりなんか……しないんだからねっ。

湯せんで溶かした甘いチョコの香りに攪くすくられながら、台所に立つたあたしは多少なり自分の意味不明な行動に腹を立てて……そしてちよっぴり、何故か慶にも八つ当たりみたいな感情を覚えて腹を立てた。自分にチョコを作っているのに、どうして慶の事を思い出してしまふのだろうかと悩みながら。

「香代、なにこの買い物は？ お菓子屋さんでもする心算？」

会社から戻って来たお母さんが、家に着くなり開口一番にそう言った。

「えっ？」

「まあ、今年も慶ちゃんにあげるの？」

「ちっ、違うつて！ こっ、これはあたしに……じ、自分に作って……」

あたしはすぐに否定して、思わず顔を背けてしまった。だって、その後で物凄く顔が熱くなって、笑ったお母さんの顔を見詰める事が出来なかったから。

気が付けば、あたしの眼の前には大きさが違う『トリュフ』らしいチョコ団子が一杯転がっている。

今までは型に流し込んでいただけのチョコを作っていたのだけれど、今回は、姫香達と見に行った手作りチョコのコーナーで遣っていたのを、見よう見真似で作っている。元々あたしは不器用な方。だから作り慣れない方法に、あたしの顔や手にはチョコが付いていたい。

「そう？ 頑張つてね。後片付けはちゃんとしておいてよ？」

「う……うん……」

あたしの奮闘振りを察したのか、クスクス笑いながらお母さんは台所から出て行った。

何だかお母さんに、あたしが気付いていない自分の心の中を見透かされたみたいなのがして、妙な気持ちになってしまう。

「お母さん？ これは、あたしのだからねっ！」

「はいはい」

「ねえ、ちゃんと聞いてる？」

「聞いているわよ？ 香代のチョコでしょう？」

「うん」

自分に言い聞かせる心算と、お母さんへのダメ出しの心算で、自分の部屋に行ったお母さんへ声を掛けたのに、あたしの心は晴れる処が薄曇りになって来た。

『今年こそ自分へ』……だなんて、何だかOLのお姉さんになった気分で居れたのに、言葉に出してしまうと、それはちよっぴり切ない響きだと感じてしまった。

今まで慶にあげていたけど、今年からはもう必要なか無い。き

つと他の女の子達がチョコをプレゼントしてくれるわよ。

そして、あたしは出来上がったチョコを市販の容器にラッピングすると、そのまま台所のテーブルの上にわざと置いて、学校へ持つて行かないようにした。手元に持っていれば、あれこれと余計な想いを抱いて悩んでしまいそうだったし、このチョコはあたしへのプレゼントなのよと、硬く自分に言い聞かせる心算で。

第64話 あまのじゃく…1

小学校の『あの時』から、あたしは慶よりも遅れて登校するようになっている。先に家を出てしまえば、あたしや自分の立場といった『傍目』を意識する処か、全く考えていない慶が追い掛けて来るからだ。

しかも、バレンタインのこの日は、いつもよりゆつくりと家を出て行ったのに、何故か慶の足に追い付いてしまったみたい。ううん、慶が自分の靴箱の所で立ち往生していたから、あたしが追い付いてしまったのだ。

「げっ！」

「！」

正門に入るなり、慶の聞きたくない奇声を耳にしまい、朝っぱらから煩^{めづ}いわねと言わんばかりにあたしは顔を顰める。

見ると、慶の下駄箱の丁度真下に、宛名付きのA - 3用紙大の段ボール箱が置かれていて、その中にはチョコレート^{うずたか}が堆く積まれている。

「あ？ か、香代……」

登校して来たあたしに気付いた慶が、照れくさそうに段ボール箱の前に突っ立ってもじもじしながら、何かあたしに言いそうにして

いたけれど、あたしはそんな慶を見た途端、急に不快感に煽られた。

「おはよ。早く退いて。邪魔だわ」

あたしは慶の^{すが}縋る様な視線を横顔に感じながら、それでもプイッとそっぽを向き、チョコの山の一切を無視して、自分でも驚くくらい冷たく慶に言い放った。そして自分の上靴用シューズに履き替えると、それっきり慶に背中を向けてしまう。

「はようゝつす。すっげーなオイ。さすがはアキバケイ。去年までとは全く違うな。後で俺に分けてくれよ」

「あ？ ……あ、ああ……」

「はあ？ どしたい？ 元気、ねーなあ。こんなにチョコ貰える一年の奴なんてそんなには居ないぜ？」

「う……うん……」

「なにシケてンだよー」

背後から、門田くんの声がした。

あたしが来た時は、確かに戸惑っていたみたいだったけど、こんなに元気が無かったかしら……？

「ういゝつす。おっ！ アキバケイ様。そのチョコの『おコボレ』を是非良しなに〜」

「おー、田村あ、おまいもか！」

「いやー、これで暫くはオヤツにあり付けるってモンだよ」

「全くだ」

「って、そう言う門田！ て前え自分の靴箱にあんだろよっ！」

「ああ？」

門田くんは、会話の最中に靴箱を開けたらしい。田村くんが調子に乗って話している途中に、ドサドサと何かが床に落ちた音がして、田村くんが突っ込みを入れていた。

「これだからよー。ったく。自分のがあるってーのに、ナ二人様の分を横取りしようってんだか……って、うわっ！」

ブツクサ言っている田村くんも自分の靴箱を開けたみたいで、門田くんの時みたいに複数の何かが勢い良く落ちる音が聞こえた。

「いつ痛え……足に角があ！ ダレだよこんなに重いチョコを遣して来やがるのは！」

「どれ？ うわっ！ 重っ！ 板チョコ何枚分だコレ？」

全く……馬鹿ばっか。そうやって女の子からチョコレートを貰って、浮かれて騒いで居れば良いのよ。

何かが落下した音に反応してちらりと振り返ると、落した複数のチョコを拾おうとして背を屈めた門田くんと、それを一緒に拾って

あげている慶の姿が映った。けれども、あたしは慶の姿を見まいとして、ポニーテールを翻して再び正面へと向き直る。

もじもじしていた慶は、あの時何を言いたかったのだろう。普通なら『凄いだろ?』って言うって自慢してもいいんじゃないの? : 一度はそう考えたあたしだけど、慶の性格から考えると逆に『貰ってしまつて困つたな』って所でしょね。変な所で妙に几帳面な性格だから、送り主へのお返しとか。律儀に考えたりしているのじゃないのかしら?

「……」

そこまで考えて、あたしは自分の顔が熱くなるのを感じた。

なつ、なに慶の事なんか考えているのよ。大体、あれだけのチョコを貰つておいて、男の子の癖に、堂々としていないってどう言う事?

あたしの予測していた通り、慶は今回初めて複数の女子からチョコレートを貰っていた。なのに、貰った本人は何処かオドオドとしていて……見ているとこっちが苛々するわ。

「おはよー、香代」

「はよー」

教室の入り口前の廊下で、姫香と亜紀があたしの登校を待ってい

た。

「ねーねー、見た？ あの『箱』」

にやにやしなから早速姫香が口にする。

「え？ 何の事？」

「嫌だなあ、惚けちやつて。『箱』って言えば、靴箱の所に置いてあつたアキバケイのチヨコ的事じゃ無い」

「あたし達もあの箱の中に入れて置いたのよ。だから、香代も入れているかなあゝって」

二人とも、あたしが素直にその箱の中にチヨコを入れたと思っているのね？ でも、残念でした。そんな事は遣りません。

「え？ そんなのあつたっけ？」

「え？ 無かつたの？」

「あ、もしかしたら、香代が着く頃には秋庭くんが部室か何処かに持つて行つてしまつたのかも知れないわね」

惚けて嘘の返事をしたら、意表を突かれたのか二人とも驚いていた。

誰が慶のチヨコの話なんかしたりするもんですか。あんな不愉快なモノをあたしに見せ付けておいて、本人は『どうしよう……』だなんて気弱な態度を見せたりするんだもの。

「香代はもう渡したの？」

亜紀の言葉に、あたしは首を横に振った。

「うん。今年は誰にも渡す心算は無いもの」

「本当？」

姫香の疑り深い視線が突き刺さる。

「うん。だって、学校に持って来てないモン」

そう言っただけであたしは自分の鞆を開けて見せると、二人は頭をくつつける様にしてあたしの鞆を覗き込む。

「ふうん。その言葉は本当みたいね。でも、そうになるとなんで香代は怒っているの？」

「え？」

怒っている？ あたしが？

「うん。顔……真っ赤だから」

「……」

指摘されると尚の事、自分の顔が熱く火照^{ほて}っている様に感じた。ついでに胸のドキドキが早くなる。

きつと二人に『箱』の事で嘘を吐いてしまったからだわ。そう自分
で納得出来たと思ったのに、姫香から意外な一言が……

第65話 あまのじゃく…2

「ああ、香代ってば、本当はあの『箱』を見たんでしょう？ あんなにたくさんの女子から想われているんだものね。そっかあ。それでヤキモチかあ……」

「ええっ！ だっ……誰が『ヤキモチ』なんか妬くのよっ……あ！」

勢いに任せて喋ったら、反応しちやいけない筈の言葉に釣られてしまった。

ハッ和我に返ったあたしは、思いつ切り振り上げてしまった右腕をどうすればいいのか判らなくなって、しゅんとする。勢いを失くしてしまったあたしの腕は、肩から力が萎えてしまって、へなへなと元の位置に落ち付く。

「……やっぱり、惚けていたのね」

「そんな事だろうとは思っていたのよ。大体、香代の態度はバレバレだわ。別に長い付き合いだもの。香代の考えそんな事は読めるわよ」

「そうそう。気にする事なんか無いわ」

クスクス笑う二人。あたしが嘘を吐いたのに、怒っていないの？ それに姫香は慶にあげたチヨコが義理チヨコだとしても、亜紀にとっては本命くんのように……

そう言いたかったのだけれども、あたしはその言葉を口にはしなかった。どうして言い出せなかったのかは自分でも判らない。ただ、慶についてそれ以上の事を聞こうとすれば、あたし達三人の仲が壊れてしまいそうな……そんな気がしたから。

* *

一年に一度だけ、朝からチョコ話題で女の子達が盛り上がるその日は、一時間目の授業からずっと慶の視線が気になっていた。別にあたしが意識して慶の事を見詰めた訳じゃ無くて、その逆。慶の方からあたしに視線を遣して来るのだ。

始めは自分の気のせいだと思っていたのに……視線を感じる度に意識してそっちを見ると、そこには必ず慶が居て、あたしに向かって笑い掛けて来る。

それってあたしへのチョコの催促なの？ それとも今更だけど、貰ったチョコの数を自慢しているのかしら？ もの言わぬ視線がそうとも取れて、あたしは不快感に煽られてしまい、慶と視線を合わせる事さえ億劫になり、何度も無視を決め付けていた。

お昼休みに入ると、姫香が機嫌を損ねてあたしの席に遣って来た。

「どうしたの？」

「あたし、もう二度と『あんな奴』にチョコなんかあげないわ」

口を尖らせた姫香の言葉が一瞬理解出来なくて、あたしは眼をパ

チパチと瞬^{しばた}く。『あんな奴』て誰の事？ 姫香がそう言っているのだから、相手は田村くんの事かしら？ だけど、チヨコの事で田村くんと喧嘩になりそうになるかしら？ 田村くんも慶よりは少なかったけれども他の女の子からチヨコを貰っていたし、そもそも姫香は『自分が想っている男の子が、他の女の子からチヨコを貰えない様じゃカツコ付かない』って豪語しているくらいなもの。

「『あんな奴』って？」

「もう。名前を呼ぶのも嫌になっちゃう」

珍しく姫香は不愉快全開で、それがあたしに対しても向けられている様な、そんな空気を読んでしまった。

それって、まさか慶の事？ そう尋ねてみようかと思った時、丁度日直だった亜紀がクラスの提出物を職員室へ届けて戻って来た。

「あ、亜紀！ ちょっと聞いてよ！」

「なに？」

教室へ戻るなり呼ばれた亜紀は、何事かと小走りにあたし達の許へと遣って来る。

「もう……信じられる？ あのアキバケイ、今朝貰ったチヨコ全部を先生に渡しちゃったのよ」

「ええ……」

流石にこれにはあたしも退いてしまった。普段、学内にはお菓子

類の持ち込みは禁止されている。だからこそ女子はこのバレンタインのイベントに、見付かれば叱られて取り上げられるのを覚悟でこっそりと持ち込んでいたのに。そんな事をすれば、来年から益々持ち込み難くなっちゃうじゃないの。

「いきなり箱単位で貰っちゃったからビックリしたのかしらね。あの馬鹿、本当に融通が利かないんだから」

姫香が鼻息を荒くすると、亜紀は少しだけ悲しそうな眼をした。そして、微かな声で『そうなの……』と呟く。

がつがりと肩を落として力無く俯いてしまった亜紀を見たあたしは、彼女とは正反対に頭にカツと血が昇って熱くなった。

慶はなんて酷い事をするの？ 亜紀がせっかく勇気を奮ってあげたチヨコを……女の子の気持ちを無視するだなんて。

そこで初めてあたしの頭の中で、今朝からの慶の挙動不審な視線が、姫香の話に結び付いた。

何かを訴えたいと言う雰囲気はあたしにだって読み取れた。後ろめたい事をしちゃったから、慶はあたしに視線を遣して問い掛けたかったの？ でも、残念だけどあたしは慶の相談役なんかじゃない。チヨコの持ち込みを先生にばらしてしまった慶なんかも知らないわ。

*
*

「そう。それは慶ちゃん大変だったわね」

シチューをお皿に盛りながら、お母さんはあたしの話を聞いて困った顔をした。

「誰が『大変』ですって？ あんな自己中なのを、お母さんは味方するの？」

お母さんの意外な言葉に多少なりショックを受けたあたしは、自分の考えが正論だと訴えたくて食い下がった。

「そりゃあ香代……今まで数人からしか貰えなかったチョコが急に沢山増えちゃうのよ。それもどこの誰とも判らない女の子から貰って……単純に嬉しいって思える？ 第一、お返しだって考えなくちゃいけないでしょう？ 慶ちゃんのお母さんが大変だって事、この前話したわよね？ 入院しないといけないのなら、それなりに大きなお金が必要なのよ。慶ちゃんのお小遣いで如何こう出来る金額じゃなかったのでしょうか？ 香代、貴方が慶ちゃんの立場ならどう？」

「え？ そ、それは……」

あたしはそれっきり口を噤んでしまった。

第6話 あまのじゃく…3

お金の問題を出されてしまったては何も言えないけれど………だけど、あたしは……

あたしは慶に、そんな事………して欲しくは無かったな。

「きつと、切羽詰まってしまったのね。あの慶ちゃんの事だもの。チヨコを貰った女の子達には、全部お返ししないといけないと考えてしまったのじゃないかしらね？」

確かに、箱一杯に貰ったチヨコのお返しとなると、かなりの金額が必要になる。今まであたしの『義理チヨコ』にだってお返しをしてきていた慶だもの。返そうと思っても半端じゃない今回の分は返しきれやしないわ。

「お……お母さんは慶に甘過ぎるわよ」

お母さんの理屈は判る。だけど『して欲しくなかった』と言う気持ちはどうしても先に立ってしまって、あたしは簡単に同感する事が出来ず、尚も反論してしまった。

「そうかしら？ でも、『あの』慶ちゃんがねー。男の子って、背が高くなったりカッコ良くなったりして、急にモテたりするのね。お母さんは、慶ちゃんが自分の子供みたいに思えて嬉しいわ」

そう言って、お母さんは話題を微妙にずらし、照れたような笑みを浮かべながら、温かい湯気が立ち昇るシチューをあたしの目の前へ差し出した。

「急にモテただなんて……そんなのじゃ無いわ。慶は新人戦で校長先生から名前を呼んで貰ったから……校内で有名人になっちゃったからよ」

「まあ、そんな理由なの？　なら尚更かも知れないわね」

ムスツとなってあたしが無気なく言った言葉に、お母さんは反応した。

「どう言う事？」

「興味本位に面白がって慶ちゃんにプレゼントしても、された方は迷惑って事なのよ。だったら慶ちゃんは凄く勇気があるわ」

「どうして？」

「慶ちゃんは、学校で禁止されている事を報告した事になるのよ？　それって今まで慶ちゃんの味方になってくれていた子達を、在る意味裏切っちゃったって事よね」

「だから勇気があるって……」

「そう」

あたしはその時、ちらりと脳裏に怒った姫香の顔が過った。

慶の遣った事は、新人戦からの有名人から一転して、好意を寄せていた女の子達から逆に嫌われてしまったんだと。

「でも……」

あたしは再び言葉を飲んだ。

その箱の中には、ずっと慶を想い続けていた亜紀のチョコも入っていたのに……

そこまで思うと、何だか胸が痞^{つか}えてモヤモヤして来た。

あたしは本当に……本当に亜紀と慶が付き合って欲しいって思っているの？

以前、新人戦の個人練習の時、あたしは慶に亜紀とは付き合って欲しく無いなと思ってしまった。それは、あたしの心の貧しさから来た嫉妬みたいなものかなと思っていたけれど……亜紀はとても可愛くて頭が良くて純粋で……姫香やあたしよりも何倍も素敵な娘^こだなど思っている。だけど、どうしても亜紀と慶とが頭の中で結び付かない……と言うよりも、結び付いては欲しく無いの。

どうしてそんな意地悪みたいな事を考えてしまうのかしら……それは、あたしの心が醜^{みにく}くて貧しいからなの？

でも……

「なに考え込んでいるの？ 早く食べなさい。せつかく温めたシチューが冷めてしまうのに」

「えっ？ あ、うん……熱っ！」

促うながされた条件反射で、まだ熱の籠かこっているシチューを口にしてしまい、熱さに思わず飛び上がった。

「慌わがてなくても……ほら、お水」

「ん、んん」

涙目で冷たい水が入ったグラスを受け取り、一気に飲み干した。

「ああ、そうだ。香代、自分で作っていたチョコがあつたわよね？」

「え？ あ、うん」

「あれ、お母さんが一個貰もらったから」

「ええー！」

あつたわよね。そう言えば……別に誰にもあげる心算の無いチョコが。

あたしは頭を巡らして、自分が作っておいたチョコを捜した。チョコはあたしが置いていた対面式のキッチンカウンターの隅に、ちよこんと置いてあつた。中身を一個貰もらったとお母さんは言いったけれども、きれいに元通りにラッピングされていて、とても中身を出したとは思えないくらいの器用さだつた。

「驚おどろかなくても良いじゃない。どうせ自分に作つたものでしょう？」

「う……うん」

「だったら一個くらい、お母さんに頂戴」

「って、事後承諾なの？」

「うんそう」

「お、美味しかった？」

あたしの質問には答えずに、お母さんはふふつと笑った。その笑顔があたしの心の裏を読み取っているみたいで、余りに意地悪に思えてしまう。

「食べないの？」

「ん」

「食べないのなら、それ頂戴」

「うん……」

『食後のデザート』とでも言いたげなお母さんの声に、あたしは一層肩を落とした。せつかく箱に詰めて見た目可愛くラッピングが出来たのに……なんだかガッカリ。

だけど、もうこの中には一個足りなくなっちゃっているのよね？

そう思うと、少しだけ寂しくなった。自分に向けて作ったものなのに、どうしてこんな気持ちになってしまったのかは判らない。ただ、中身が足りなくなっているだけなのに、無性に寂しい想いを抱

いてしまう。

どうしてなのかな？ 自分へのチョコなのに……誰にもあげたりする心算なんて……無かったのに……

手持無沙汰になってチョコの箱を弄んでいると、インターフォンが鳴った。

「はい！」

お母さんが応対に出ると、返事したのは回覧板を持って来た慶だった。

「慶ちゃんだわ。丁度良いじゃない。香代、あんたそのチョコ食べないのなら慶ちゃんにあげたらどう？」

『あげたらどう？』だなんて、か、簡単に言ったりしないでよ。あたしは慶にあげる心算なんか……あげる心算なんか……

お母さんが慶を迎えに玄関へ足早に去って行った。

ほぼ同時に、あたしの手の中から忽然とチョコの箱が消えている。

「……？」

ん、ないっ！

「まーまー、慶ちゃん御苦労様。はい、これあげるね」

「あ……ありがとう」

玄関からお母さんのやけに明るくて弾んだ声がして、それから慶の照れた様な声がした。

「お、お母さん……遣ったわねっ！」

慶が帰った後、顔から火が出るくらい恥ずかしい気持ちで一杯になったあたしは、暫くお母さんと口論になった。

「香代からだとは言っていないし、別にあんたが食べないのならあげても良いでしょう？」

「んな……なによその理屈はあああゝゝゝ」

まさかお母さんがこんなに強引な態度に出るだなんて思わなかった。貰ったチョコを全部手放した不憫な慶に同情したのか、それとも『自分チョコ』を手にしてウジウジしているあたしに同情したのかは判らなかつたけど。

第67話 あまのじゃく…4

『香代からだとは言っていないし、別にあんたが食べないのならあげても良いでしょう?』

頭の中で、お母さんの言葉が繰り返し何度もぐるぐると廻っている。

確かにその通りなのだけど……でもあのチヨコは大きさが全然違っていて、どう鼻屑目に見てもお手製チヨコ。しかもこの家でそんな事を遣りそうなのは、このあたししか居ないじゃないの。

慶だって、あのチヨコを作ったのはこのあたしだって、きっと気付いている筈だわ。

どうしよう……今更慶の後を追いつけて行って『返して』なんて言えないじゃない。

他の子達のチヨコを手放した慶に、チヨコをあげてしまったなんて……亜紀や姫香達に気付かれてしまう前に、早くなんとかしなくっちゃ。

それ以来、あたしは慶の事が気になって仕方無かった。まさかとは思っけれども、いつ慶がクラスでチヨコの話をするかも知れないと思うと、それだけであたしは生きた心地がしない。だから、少しでも時間があれば自然と眼が慶を捜して泳いでしまう。

ところが、慶の馬鹿はそんなあたしと視線が合う度に、何を想ってだかにっこりと笑顔を返して来るのだ。

んな、何勘違いしているのよ？　べつ、別に慶に気があるとか、そう言うのじゃ無いんだからね？　き、期待なんかしたりしないですよ。あ、あたしは、慶があたしのチヨコの事を口にしゃしないか、み、見張っているだけなんだから。

慶にチヨコの事を言われちゃ困るのよ。その為の……だからこそ
の監視なのに……

気持ちは焦っているのに、自分の心の何処かで何故だかホッとしている部分が有る。どうしてなのかしら……なんでホッとしたりしているの？　あたしは自分の気持ちがよく判らなくなつて、凄く不思議だった。

*
*

あたしからの慶への監視は、いつの間にか『無意識の日常』となつてしまった。慶と視線が合う度に慶はあたしに笑い掛け、あたしは慶の視線を振り払うように、ぷいとそっぽを向いてしまう。そんな毎日の繰り返しが一カ月近く続いたある日の出来事だった。

今日も部活の練習時間に慶と視線が合つてしまい、グラウンドストローク中にも関わらず、思わず顔を逸らして、みんなの前で見事な空振りを披露してしまった。

あたしが慶の視線を意識して嫌っている……？

その事に最初に気付いていたのは、他でもない姫香だった。

「あ？　今アキバケイと眼が合ったの？」

「え？　あ、ああ……」

言われてハッと我に帰る。

「香代もアキバケイの事が嫌いになった？　あたしはねえー『嫌い』ってトコまでは行っていないんだ。でも、流石に『あの日』の事だけは許せないんだけどねえー」

その言葉に、姫香の後ろで順番を待っていた亜紀が反応する。

「仕方無いわ。そもそも、学校にチョコを持ち込んだりした私達女子が悪かったのだから。秋庭くん、本当に困ったのだと思うわ。私も少し反省しているの。手渡しせずにみんなと同じに箱に入れたりしたから……『ばち』が当たったのよね」

「って……そこ？」

微妙に焦点がずれているように思える亜紀の発言に、姫香が少々呆れて軽く突っ込む。尤も、あたしだって二人には内緒の隠し事で、慶の事を見張っている。それぞれが微妙に違う理由で慶の事を想っているのね……そう思うと、姫香の突っ込みに素直に笑えなかったあたしなのに、タイミング良くクスリと笑ってしまった。

「あ、あのう私、何か違っていたかしら？ 香代までどうして笑うの？」

「い？ いやあ、別にそんなに深い意味は無いのよ。あんな事されたのに、亜紀は優しいなって……」

「そうなの？ んー、そうなのかなあ……」

イマイチあたしの言葉が納得出来ないような亜紀の反応に、あたしと姫香はお互いの顔を見合って苦笑した。

「はあゝ暑う！ 香代、先に自販機に行っているから」

「あ？ うん」

練習が終わり、コート整備に走り回ったあたし達一年生は、グラウンド脇にある対面式の手洗い場で、順番に顔を洗って帰り支度を始めていた。

「……よ」

「？」

コートに背を向けて顔を洗っていたあたしは、誰かに呼ばれたような気がして手を停めた。

「……」

気のせいだったのかしら？　そう思ったけれども念の為に水道の蛇口を捻って水音を止める。

「香代？」

あたしを呼んだ声……それは消え入りそうな小さな声だったけれど、確かに聞こえた。

「誰？」

「俺だよ」

声の相手はそう言いつと、反対側の手洗い場からヌツと姿を露わした。

「け……」

……慶？

「うん」

対面式の洗い場の壁は、あたしが軽く屈むと反対側が見えなくなる程度の高さがある。立ち上がった慶はまた少し背が高くなったみたいで、あたしの視線からは伸び上がったように見えた。その身長に気圧されて、思わず委縮してしまう。

慶は、顔を洗っていたあたしの廻りをキョロキョロと見渡して、姫香達が居ないのを確認していたみたいだった。

「な、何か用？」

「あ、あのさ……う、これ……」

てつきり、今まで無視を決め付けていたあたしに対しての苦情がイヤミでも言うのかと思つて身構えると、慶は気の抜けてしまいそうな弱々しい声で何かを言い難そうにモジモジしている。

拍子抜けしたあたしは、相変わらずの慶のそんな態度に妙に苛立つてしまい、強い口調で言い放った。

「なによ？」

「あの……これ、この前の『お返……』」

背後に廻つて何かを隠していた慶の大きな手が、あたしの眼の前へ、何かの包みを持つて差し出して来た。

その瞬間、あたしはその日がホワイトデーだったのだと気付き、カッと頭に血が昇る様な厭な感じを覚えた。

「要らないっ！」

慶の言葉に被せる様にぴしやりと言つて撥ね付けると、あたしは慶にくるりと背を向けて、その場から逃げる様にして一目散に、正門の道路向かいに置いてある自販機へと走り出す。

あたしの周りに姫香や亜紀が居なくても、まだ一葉や他の女子や先輩達だつて居る。そんな場所で堂々と……『お返し』だなんて言われたくないし、言つて欲しいとは思わないもの。むしろその逆！慶には、あたしのお母さんから貰ったチョコの事をそつとしてお

いて欲しかったのに……どうして……どうしてこんな時に……

第68話 あまのじゃく…5

慶の『お返し』ホワイトデーの日は散々だった。

小さい頃から融通が利かなくて、不器用で、空気が読めなくて…
…って、なんて相変わらずなの？ 義理チョコのお返しなら、家が隣同士なんだから直接渡せば済む事じゃないの。それをどうして学校でなんか… しかも他の女子が居たのに渡そうとなんかするのよ？

許せないわっ！

帰宅後、あたしは勝手にチョコをあげてしまったお母さんに八つ当たりをしてしまった。

「お母さんもお母さんだわ！ 幾ら慶にチョコが無いからと言ったって、本人が勝手に持て余して手放したチョコじゃないの。同情し過ぎ。甘過ぎだわ！」

「お母さんは『頂戴』と言ったのよ？ 貰ったチョコを別に慶ちゃんにあげても良いでしょう？」

「そう言う理屈じゃないの！」

「なにを怒っているのよ？」

あたしは慶が律儀に『お返し』を他の女の子の前でしようとした事。迷惑だと思ったあたしは逃げ出した事を、興奮しながらお母さ

んに打ち明けた。

「慶のせいでこんなに恥ずかしい想いをしなくちゃいけないだなんて、小学校の修学旅行以来だわっ！ 大体、あの時だってお母さんが慶に頼んだりせずに直接持つて来てくれれば良かったのに」

「そうね。でも、あの時は凄く急いでいて……お母さんだって遅刻しそうだったの」

「だったらパートなんて止めれば良いじゃ……」

「香代っ！」

あたしが喋れたのはそこまでだった。

いきなりお母さんの右手が素早く伸びたかと思った瞬間、あたしの左頬が音を立てた。お母さんから叩かれた頬は鋭い痛みを伴って、たちまち熱を帯びて熱くなる。

「痛っ！」

驚いて眼を見張るあたしを見て、お母さんは一瞬ハッとしたみたいだったけれども、すぐに口元をきゅっと引き締めて、強い眼力で以って見返して来た。

「少し我儘過ぎやしない？」

「……」

お母さんはそれだけ言うと、あたし一人を置いてリビングから出

て行つた。

「……」

なんでだろう？ 胸が痛いよ。どうして？ 視界が揺らいで見えるの？

お母さんは今、地元銀行のパート勤務。本当は、あたしが生まれる前までは、その会社の正社員で、かなり上の役職に就いていたらしい。あたしを身ごもって四力月だった時に、流産をしそうになつて急に入院をしてしまい、会社に迷惑は掛けられないと、一旦は辞表を出したそうだ。けれども、会社からのお母さんへの評価が高く、無事出産して育児にひと段落着けば、また復帰して欲しいとの連絡を貰っていた。

子供を育てながらの会社勤務は、今時ならそんなに珍しい事では無いらしいけれども、あたしが小さかった頃は、なかなか会社側からの理解を得られない場合が多かったのに、お母さんの努めている銀行はそうでは無かった。

『そんな会社だからこそ、パートでも頑張つて働いているの』それがお母さんの口癖であり、あたしから見れば一種の『誇り』みたいなものだった。

『人にはそれぞれ事情があつて、他の人には判らない。理解出来ないかも知れないけれど、譲れない部分があるの』そうも言っていたっけ……

だけど、どうしてお母さんと関わって来るのが『慶』なの？

お隣さんだから？ 小さい頃から知っているから？

* *

次の日の朝、あたしは学校へは行きたくなかった。だって慶との『あんな所』を一葉や先輩方に見られてしまったんだもの。

きつと姫香や亜紀の耳にも届いている筈よ。そして『香代がズルをして抜け駆けした』だなんて、言いふらされているんだわ。

『誰とも今日は話したくない』だなんて思いながら重い足取りで教室へ入ると、あたしの斜め後ろの席で、先に登校していた慶が門田くん達数人で朝から和気あいあいと盛り上がっている。

好い気なものね。まったくもう……慶のお陰で昨日はお母さんに叱られちゃったんだから。

あたしは話に夢中になっている慶の背中に向けて、キツイ視線を送ってやった。

「あ、香代おはよう」

「おっおはよう」

あたしを見付けて声を掛けて来た亜紀に小さく驚き、そしていつ慶の事を言い出されやしないかと怯えて小さく縮こまってしまふ。

ああ、もうそれ以上は何も言わないで……だなんて思っていたのに、着席したあたしを追い掛けて早速亜紀が遣って来た。

「はい、これ」

「え？」

亜紀が嬉しそうにあたしの机の上に出して来た物は、見覚えのある包み紙。しかもこれって昨日慶があたしに向かって差し出した包み紙じゃないの！

どうしてこれが此処にあるのよ？

あたしの身体の何処からか、すうつと血の気が音を立てて引いて行った。

「あ、あ、亜紀？」

「なに？」

「これ……ど、どしたの？」

だっ、誰から？

「ああ、秋庭くんからよ」

亜紀の何気ない一言であたしの髪が逆立った。

あたしが素直に受け取らなかったから、今度は亜紀に押し付けた

の
?

第69話 あまのじゃく…6

『秋庭くんからよ』 そう言って笑顔を浮かべながら、慶から預かった包みをあたしに差し出して来た亜紀の何気ない表情がどうしても頭の中で繋がらず、納得出来なかった。

慶の事を一途に想い続け、あたしや他の女子みたいに気軽に慶と言葉を交わしたりする事さえ儘ならない亜紀にしてみれば、慶と幼馴染であるあたしはライバル的存在になるだろう。なのに、どうしてそんな笑顔であたしに慶からの預かり物を手渡せるの？

「どうしたの？」

「うん……うん……」

あたしは亜紀の反応に怯えて警戒しつつ、彼女の顔と差し出された包みとを何度も交互に見比べて、中々手を伸ばそうとはしなかった。

差し出された平べったい包みは、淡い水色に白い水玉——少し皺になっちゃってて、中の物がくたくたになっっているものが、それとも他に柔らかい素材を包んでいるものなのかも知れないと判る。

とにかく、バレンタインの『お返し』にしては少しばかり不格好なものだった。

「これ、なに？」

思い切って聞いてみた。

「嫌だ。だってこれ香代の『忘れ物』でしょ？ 秋庭くんがそう言っていたの」

「は？」

「あ？ ああ、ラッピングしているから判らなかった？ 西門に近い水飲み場にあった忘れ物を秋庭くんが見付けて、香代の名前が書いてあったからって。昨日部活の帰りに渡そうとしたのに、香代が無視して帰っちゃったからって」

「あ？ あ……ああ、あれ？ な、失くしちゃったかと思ってたわ」

忘れ……物？ そんなもの、あったかしら？

あたしの頭の中で、疑問符が乱舞する。

あたしには全く心当たりが無かった。だけど、亜紀がそう思ってくれているのなら、受け取っても大丈夫。ううん、むしろ否定して受け取らなかつたら、それこそあたしだけじゃなくて、慶の事さえ怪しまれる。

あたしはしどろもどろになりながら、何とか慶と口裏を合わせることにして、改めて亜紀から包みを受け取った。

「秋庭くんが見付けてくれて良かったよね」

「う、うん……？？？」

亜紀から受け取った包みには、ラッピングの紙を通して軽い布の様なふんわり感が掌（しる）に感じ取れる。

何？ 慶はあたしに何を遣して来たの？

あたしは小さなドキドキを覚えながら、それでも亜紀の視線を気にしつつ慶が『忘れ物』だと言っていた紙包みを開けてみた。

軽いカサカサという音を立てて、あたしは中に入っているものを覗（のぞ）き込む。

「……わ」

思わず『可愛い！』と口走りそうになって、あたしは大きく息を飲んだ。

そこには、淡いピンク色のふんわりとしたぶ厚いスポーツタオルが一枚入っていた。あたしはそのタオルを引き出して広げみると、隅っこに黄色いヒヨコのキャラクターアップリケがされている。

あたしがヒヨコのキャラクターを集めていたの、慶は知っていたんだわ……

あたしの胸がどきんと大きく波打ち、次いで頬が熱くなった。

これが慶の『お返し』だと言う事くらい、あたしには判る。だけど、あたしは素直に慶から受け取る事が出来なかった。だって、他の女子がいる眼の前で、慶が渡そうとなんかするから……聞き取り辛い程の小声で『お返し』と言ったから、あたしから未だに廻りの空気が読めない馬鹿って勘違いされたりするのよ。

あたしは必死になって、慶を見下していた自分を心の中で弁護した。でも、幾ら弁護したって、あたしは慶に対して酷い思い込みをしちゃったのだわ——そう思うと何だか居心地が悪くて、自分が情けなくなってきた。

「へえ、香代、こんなの持ってたんだ」

「う、うん。可愛いでしょ？」

「うん」

あたしにおでこをくっ付ける様にして覗き込んで来た亜紀に、タオルにあたしの名前が無いのを気付かれてはと、さり気無く半分に折り畳む。

「買って貰ったばかりだったのに、何処かへ失くしちゃったと思っていたの」

誰から買って貰ったのかを伏せて、あたしは再び亜紀に合わせる。

「見付かって良かったね」

黙ってこくと頷くあたしを全く疑っていない亜紀の純真な笑顔に、良心がチクリと痛んだ。

丁度その時、一時間目の授業のチャイムが鳴り、あたしはホッと胸を撫で下ろす。

亜紀はあたしの席から離れ、他のみんなも自分達の席に座った。

彼女の視線から解放されたあたしは、黙って斜め前に座っている慶の広い背中を見詰めた。

慶が成長していなくて昔のままで居るのは、あたしの心の中だけに住んで居る慶なのだと、この時強く思った。

第70話 慶のお母さんの入院…1

な、なによ……変に気を利かせた心算なんでしょうけど、あたしには却って迷惑だったって事、慶はどうして判ってくれないの？

そ、そりゃあ、プレゼントは嬉しいけれど……だからと言ってこんな渡し方をして欲しくは無かったのに……

慶の事を独りで誤解していたあたしは、結局自分の執った酷い行動を理屈で正当化してしまい、素直に慶に謝る事が出来ないままだった。

* *

あたし達は二年生に進級し、学年で七クラスあったにも関わらず、やっぱりと言うか、お約束通りと言うべきなのか、それとも神様の気まぐれだったのか……あたしと慶はまたしても同じクラスになった。

そして軟式テニス部も新入生を迎えて、ひと段落したかしらと思えるようになったゴールデン・ウィーク明けの最初の週末。

穏やかな春の日差しが降り注ぐ朝だったけれども、その日はいつもの朝だとは思えなかった。

何がそうさせるのだろうかと思議な胸騒ぎを覚えたあたしは、

それがお隣である慶の家がいつもの空気と違っているのだと気付き、そつと二階の窓辺から慶の家の庭先を見下ろした。

小学生になった記念にと慶のお母さんが庭に植えた八重桜が、明るい日差しを浴びて濃いピンク色の花弁を綻ばせている。慶はその桜の木陰に美咲姉さんと並んで立ち、出掛けて行こうとする慶のお母さんとおばさんを見送っている所だった。

「行つてらっしゃい」

けれども、明るくそう言った慶にはいつもの元気が無く………それどころか少しだけ心配そうに送り出しているような声をあたしは聞いてしまった。

お母さんが慶達に何か話掛けている最中、タクシーの運転手さんと付き添いの人らしいおばさんが、一緒に大きな荷物をタクシーの後部トランクに載せている。

あたしはそこで、あたしのお母さんが話していた通り、慶のお母さんがとうとう入院してしまうのだと知った。

おばさんが検査入院じゃなくて、本当に手術が必要で入院すると言う事を慶だけには知らせていないらしい。だから、あたしは絶対に慶にその事を言つては駄目よとお母さんから釘を刺されている。当事者である慶が知らない事を、どうしてあたしが知らなくちゃいけないの？ お隣同士だからって、お互いの家庭事情を知っておく必要があるのかしら？ それともお母さん達は、あたしがまだ慶のお守役を買っているとも思っているのかしら？ 大人達はどうしてそんな廻りくどい事をしないといけないのかしら？

そう疑問に思ったけれども、逆にあたしが慶の立場だったらと考えた時、そのワケがなんとなく判ったような気がした。

だって、あたしが慶の立場であつたら、絶対に知りたく無いもの。知ってしまえば気になって、勉強どころじゃなくなってしまうし、心配ばかりして駄目になっちゃいそう。不安に押し潰されてしまいそうなんだもの。

でも、だからと言って、あたしにそんな大切な事を伝える必要があつたの？

『昔はよく慶ちゃんのお世話をしてあげていたじゃない。香代はしつかりしているから……』お母さんはそう言っていたけれど……

あたしだって、おばさんが大変な事になっていると知って平気で居られる筈なんか無いじゃない。本当は、まだ脆くて崩れ易い心しか持っていないのに……

慶のお母さんがタクシーに乗る間、慶は美咲姉さんと何やら小競り合いをしていたみたいだったけれど、お母さんがタクシーに乗ってしまった途端、慶は『母さんは自分の心配だけをしていなよ。僕達は大丈夫だから！』と、大きな声で叫んだ。

気追い込んでしまったのか、それとも車のドアが閉じられてしまったからか、突然大きな声を出した慶の後ろ姿を、あたしはハツとして見詰め直す。

成長して大きくなった慶の広い背中が、小学生だった当時の小さ

な背中と二重にダブって見えてしまった。

そう言えば……あれは慶が小学四年生になった春——慶は今と同じように、自分の気持ちを抑えて単身赴任になった自分のお父さんを見送っていた。慶のお母さんと美咲姉さんが家の中へ入ってしまった後、慶は独りで泣きながらいつまでも手を振っていたのを、あたしはこの窓から今と同じように見ていたのだわ。

あれから数年が経ったけれど、今でも慶が家族へ必要以上の心配を掛けさせまいとして気を遣っているのが判る。慶の『気遣い』……と言うか、優しさは昔も今も変わってはいない気がした。

むしろ、変わってしまったのは……

変な息苦しさを感じて、あたしは思わず窓辺に背を向けると、そのまま座り込んでしまった。

「や、やだ。あたしったら、なんでストーカーみたいな事しているのかしら？」

お隣を覗き見している自分に気が付いて、思わず独りで呟いてしまった。幾ら気になるからって、こんなのはいけないわと反省して恥ずかしくなってしまう。

あたしが心配しなくても、慶は独りじゃない。慶には美咲姉さんが居るんだもの。きつと美咲姉さんが……

「……あれ？」

美咲姉さんって、確か家事が大の苦手だって言っていなかったっ

け
？

第71話 慶のお母さんの入院…2

「いつまで寝てるんだよ！ 起きろよ美咲っ！」

「ったく、うるさいわねえー。頭に響くからそんなに怒鳴らないでよおー」

「遅刻したって知らないからな。大体なんでそう毎日毎日、夜遅くに帰って来るんだよ」

「付き合いがあるんだから仕方無いでしょ」

「『仕方無い』じゃあないよっ！ じゃあ付き合いに十歩譲るとしても、朝くらい自分独りでさっさと起きろよ！」

「あああ、もう！ うるさあゝい！」

「だったら起きろーっ！」

「……………」

まさかとは思ったけれど……………まーた今日も始まったわ。お隣。

慶のお母さんが入院した次の日から、慶と美咲姉さんとの遣り取りが二日連続で続いている。

あたしはお隣から聞こえて来る喧嘩腰の遣り取りにうんざりしな

がら、制服のブラウスに袖を通してベストを羽織った。

それにしても、慶が取った美咲姉さんへの起こし方は疑問だわ。朝っぱらからあんな風に起こされちゃ、誰だって堪らなくなっちゃう。

あたしは慶の強引な起こし方に対して、少なからず腹を立ててしまった。美咲姉さんが逆ギレするのも頷うなずけるし、可哀想じゃない。第一、その遣り取りを嫌でも聞かされてしまうこっちの事だって考えて欲しいわ。

スリッパのぱたぱたと言う軽い音を立てながら、あたしは機嫌を損ないつつ階下のキッチンへ向かった。

キッチンの入口にある暖簾のれんを潜ると、既にお父さんは会社に出勤した後で、お母さんも自分の会社へ出掛けるために、先にトーストを食べている。

「香代、おはよう」

「おはよ」

あたしはお母さんの向かいにある、いつもの椅子を引いて座った。

「今日も慶ちゃんが美咲ちゃんを起こしているのね」

「みたいね。でも、美咲姉さん可哀想。だって、あんな起こし方をするんだもの」

お母さんの言葉にあたしは素っ気なく言い返すと、お母さんはク

スクスと笑った。

テーブルの端に置いていたトースターから可愛らしい音がして、中からアツアツのトーストがポン！と飛び出した。あたしは左手にお皿を持つと、そのトーストへ空いている右手を伸ばす。

「男の子らしくて良いじゃない？」

「冗談。怒鳴られて起こされるだなんて迷惑だわ」

焼きたてのトーストにバターを塗りながら、あたしはお母さんからそれ以上慶達お隣の話は止めて欲しいと思って、わざと興味無さそうな素振りをした。

だって、お母さんってば何かあるとすぐに慶達の事を話の引き合いに出して来て、『香代も姉妹きょうだいが欲しかった？』だなんて言い出すんだもの。そりゃあ姉妹が居れば今とは違った生活があるだろうけれど、今更って感じだわ。あたしは今の生活で十分なんだから。

「そう？ でも慶ちゃん偉いわあ。ちゃんと朝起きて美咲ちゃんを起こしているんだから」

「だからあ、その起こし方に問題があるって言ってるの」

ああ……昨日もだったけど、なんだか朝から苛々する。

自分の言葉に合わせるように、あたしは眼の前に置かれていたサラダの中のトマトを、フォークで無造作にぷつりと刺した。

お母さんはそんなあたしの心を読んだのか、『そう？』とだけ言

って軽く笑いながら、あたしの反論を受け流した。そして、食べ終わったお皿とコーヒークップを流しへ持って行く。

「ねえ、香代」

「ん〜なに？」

「慶ちゃんのお母さんが戻って来るまで……少しだけでいいから、慶ちゃんの事を見てあげて？」

「なんで？」

咄嗟にそんな言葉が口を突いた。言葉の響きの冷たさに、言ってしまったあたし自身が驚いてしまう。お母さんもあたしの返事が意外だったらしくて怯^{ひる}んでしまったのか、少しだけ「間」があった。

「そうね……『見る』のじゃなくて、時々で構わないから『気に掛けてあげて』欲しいの」

その時、あたしはお母さんの言葉の意味が良く判らなかった。でも、先に言った自分の冷たい言葉に退いていたあたしは、迷わず「うん」と言って頷いてしまう。

「ただど……慶の事を『気に掛けてあげる』……って、どうすればいいの？」

お母さんから滅多に受けない頼み事を聞いてしまったような気がして、その日からあたしは無意識に慶の事を眼で追い掛けてしまうようになった。

＊ ＊

「土橋イ。お前さつきから、アキバケイの事はつか見てね？」

「えっ？」

「あいつになんか用か？」

三時限目の理科の授業中に、あたしは隣の席に座っていた藤田くんから囁かれて、飛び上がってしまうほど驚いてしまった。

だけど、あたしが慶の事を見ていたなんて認めれば、また昔の頃の……小学校の時と同じように、クラスのみんなから誤解されてからかわれてしまいかも知れない。

あたしはそんな幼稚な誤解をされまいとして、精一杯冷静さを保って小声で冷たく言い返した。

「別に気のせいでしょ？　なんであたしが『あんなの』を見てなくちゃいけないのよ？」

「お？　お、おお……」

「うへえ、土橋ってキツツウ」

あたしの強烈な拒絶を喰らった藤田くんは息を飲み、それまで黙って彼の隣であたし達の遣り取りを聞いていた森くんが、あたしの言葉を混ぜ返した。

「そこ、私語は止めなさい」

「すみません」

先生からの注意を受けて、あたしは素直に謝って頭を下げた。その間、隣に並んでいる二人の男子をじろりと睨んで遣ったら、二人は居心地が悪そうにしてそれぞれがあさつての方を向く。

ついでに視線を泳がせたら、偶然こつちを見ている慶と視線がぶつかってしまい、どきり！と心臓が大きく音を立てた気がした。あたしは胸のドキドキを廻りに聞かれてはと、思わずふいとそっぽを向いてしまう。

あ、あたしは別にあんたの事を気になんか……していないんだから……

そう強気で想い込もうとすればするほど、あたしの気持ちは……
本当の気持ちは、慶の事が気になって仕方が無かった。

お母さんが入院して家にいないのに、慶は昨日も今日も特別変わったような素振りは見受けられない。それどころか、かなり雑で乱暴だけれど、美咲姉さんのお世話だって出来ているじゃない。もし、あたしが慶だったなら、きっと落ち込んでしまっただけで何も出来ないでしょうね。

小さかった頃は、あたしが慶の傍を離れただけで泣き出していたくらいなのに。人に頼ってばかりいた小さな男の子だったのに――

一体、いつからそんなに強くなったの？ どうすればそんなに……

慶の事を気に掛ければ掛けるほど、あたしは慶が判らなくなってきた。お隣で幼馴染だと言うのに……

どうしてなのかな？　口先では慶に対して興味が無いように言っているのに、その実、慶に惹き付けられているみたいな気がする。

そんなちぐはぐな気持ちを他の子達には知られたくなくて、あたしは自分の気持ちを隠そうとして、慶に対し今まで以上に、冷たい素振りをしてしまうようになって行った。

第72話 慶のお母さんの入院…3

「慶ちゃん、今日はやけに遅かったのね。今さっき帰って来たみたいだわ。香代、なにか知っている？」

時計の針は、既に十時を過ぎている。

戸締りをしていたお母さんが、リビングに戻って来るなりあたしに聞いて来た。

「さあ……別に部活はいつもの時間に終わって解散したけど」

「確か、昨日は病院に行くと言っていたの。でも、まさか今日も行ったのかしら？」

「そうじゃないの？」

それまで雑誌を読んで寛^{くつろ}いでいたあたしは、お母さんの問い掛けが少しだけ面倒になって、いい加減な生返事をする。

慶がどこへ行って遅くなったのかは、別に聞かなくても想像出来る。そりゃあこんなに遅くなって心配するのも判るけど、本人がもう無事に帰って来ているのだし、別に騒ぐほどの事は無いと思うのだけれど？

「偉いわね。慶ちゃん」

「『偉い』？ 慶が？」

「そうよ。お母さんの病院へ通って……美咲ちゃんが遅く帰っているみたいだから、あの調子だと家の事も慶ちゃんが遣っているのじゃないかしら？」

「……ふうん」

そう言われれば……

あたしはお母さんの言葉に共感して雑誌から視線を外し、リビングの入り口に立って居るお母さんを見上げながら、慶が自分のお母さんが居る病院へと辿り着くまでの道のりを想像した。

慶のお母さんが入院しているのは、隣の市にある県立の大学病院だそう。家からは車で行けば一時間くらいだけれど、公共の乗り物を利用すれば、バスや電車なら一旦市内中心部にあるターミナルへ行ってから、郊外行きの便へと乗り換える。大きく迂回^{うかい}する事になるから、時間的には車と殆ど変わらない。

運転免許を持って居て、なお且つ車を持っている美咲姉さんが一緒なら、あたしのお母さんだってここまで心配なんかしなかったと思う。でも、最近美咲姉さんの姿を見掛けてはいない。大学が忙しいのか、デートで忙しいのかよく判らないけれども、あたしが眠りにつく頃になると、お隣から美咲姉さんの乗る軽四自動車が、車庫入れをしているエンジン音が聞こえて来る。時には夜中の二時、三時頃、ご近所に申し訳なさそうに帰って来たりする。

そして、次の朝には慶が美咲姉さんを叩き起こして……

「あ……」

そこまで記憶を辿ると、あたしはどうして慶が毎朝美咲姉さんの事を酷い遣り方で叩き起こしたりするのか、判ったような気がした。

美咲姉さんが帰って来るまでの間、慶は自宅ですつと独りきり。部活で疲れて帰って来ても、家には誰も居ないから、御飯はお弁当を買って来るか、自分で作らないといけないし、洗濯だって遣っておかなくちゃいけない。

もう中学生なんだから、料理や洗濯と言った家事は一通り習っているし、頭では判っているけれども、それをいきなり独りで遣るとなると……

もし、あたしが慶の立場だったら、あたしには……無理だし、長続きなんかしないだろうなと思った。慶みたいに姉弟が居れば、お互いに協力して家事を分担出来る事も考えられるけれども、美咲姉さんがあの調子じゃ頼る事も出来ないわよね。

そして慶は、家事を独りで四日間も続けている。美咲姉さんに対しての多少の不平や不満は出ちゃうかも知れないわよね。だからと言って、あんな酷い起こし方をしても良いって事にはならないと思うのだけど……

あたしが慶の生活を真剣に心配し始めた六日目の夕方、自宅の駐車場には、珍しくお父さんの車が停まっていた。いつもなら八時や九時頃に帰って来るのに、今日はあたしよりも先に帰って来るだなんて。

「ただいま」

どうしたのかなと思ひながら玄関のドアを開けた途端、男の人の豪快な笑い声に迎え入れられて驚いてしまい、思わずビクンと肩を跳ね上げてしまった。そして、その笑い声に交じって聞き慣れたお父さんの陽気な話声がする。

誰？ この品の無さそうな笑い声は？ 一体誰が来たのかしら？ お父さんの寛いだ様子から、かなり気の置けない人が来ているみたいだけど。

不審に思いつつ玄関先に視線を落とすと、お父さんの大きな黒い革靴と、その隣にはお父さんの靴よりももっと大きい革靴が、きちんと揃えられていた。

「あら、香代お帰り」

お母さんはたった今台所から出て来た所だった。手にしている御盆には、温かいお酒が入っているらしい『徳利』が数本載せられている。

「ただいま。誰が来ているの？」

「ああ、お隣のおじさんよ。名古屋からさつき着いたのですって」

「慶のお父さんが？」

「そうよ。懐かしいでしょう？ もう何年振りになるのかしらね？」

「おーい、母さん。熱燗はまだかい？」

「はいはい。今行きますから」

奥のリビングから、お父さんがお酒の催促をする声が聞こえた。

お母さんはリビングの方へ顔を向けると嬉しそうに応える。そしてあたしの方へ向き直ると『香代も着替えて後から来なさい』と言った。

久し振りに会う慶のお父さん。名古屋にずっと単身赴任で中々此方へは帰って来られず、もう三年以上も会っていなかったせいか、会うのが少し恥ずかしくて嫌だった。

だけど、これで慶の苦労が軽くなるのだと思った。きっと慶のお父さんが、慶の今までの負担を軽くしてくれるだろうから。

リビングに行ってみると、二人は顔を赤くしていて締りが無く、すっかり『出来上がった』状態だった。二人のどちらかが並べて置いていた空いたビール瓶を倒したらしく、散らかった瓶をお母さんが片付けている。それでも久し振りにお互いが会えたせいか、みんな嬉しそうににこにこしていた。

「おお、香代ちゃん？ ええと……香代ちゃん……だよね？ 覚えている？ おじさんの事」

「そ、そうです。こっ………こんばんは」

「ご機嫌で話掛けて来るおじさんに、あたしは何故だか数十年後の慶の姿を妄想してしまい、思わず退いてしまった。」

「いやー、大きくなったねー。おじさんが知っている香代ちゃんは、まだこのくらいの小学生だったから」

おじさんは右手を軽く挙げて、少し膨れた自分のお腹の前にかざして見せた。

あたしは思いっ切り愛想笑いを浮かべる。

おじさん、少し太った？ それともそのお腹はビール腹？

「香代ちゃん、お母さんに似て美人になったじゃないですか」

「いやいや、秋庭さん言ってくれますね」

「本当じゃないですか。なあ、香代ちゃん」

「は、はあ……」

そこまで言うと、二人とも何がおかしいのか再び陽気に笑い出した。そして、お互いのお母さんの褒め合いになった。しかも普通に話せば良いものを、ご近所に聞こえるのじゃないかしらと心配してしまうくらいの大声で。

「嫌ですよ、お父さん」

手放して褒められたお母さんは流石に恥ずかしくなったのか、お父さんに軽く眉を顰めて見せる。

「じ、じゃあ、あたしは宿題があるから……ごゆっくり」

あたしはおじさんにぺこりと一礼をして、そそくさと二階へ逃げた。

慶のお父さん帰って来て良かったと思った。だけど、幾ら久し振りに会ったからって、お父さんまでお酒に吞まれちゃって……シヨツクだわ。あんなに酔ったお父さんを見るのは初めてだったし、正直、あたしは見たくない姿だったから。

あたしは二人のだらしない姿を眼にしまい、奇妙な嫌悪感を抱いてしまった。

そもそも、なんで慶のお父さんが帰省するなり、着替えもせずにスーツ姿で家に居るのよ？ とは思ってたけれど、考えてみれば慶の家にはまだ誰も帰って来ていないから、家に入れないんだわ。

おじさん慶達に帰って来る事を知らせていなかったのかしら？ それとも慶達が聞いていたのに忘れているの？

早く慶が帰ってくれば良いのに。おじさんだって疲れているだろうし、あたしだって酔っ払いの声なんか聞きたくない。

二階に引き籠ってしまったのに、二人の開け透けない笑い声が嫌でも耳に入って来て不快だった。こうなっちゃうと宿題もなにも手に着かないじゃないの。

苛々していると、間もなく階下でインターフォンの音が聞こえた。そして『こんばんは』と言う慶の声がする。

まったくもう……もっと早く迎えに来てよっ！

第73話 慶のお母さんの入院…4

> i 2 4 2 7 0 — 3 1 6 <

「こんばんは」

「はぁーい」

お母さんが返事をした時だった。

リビングで会話が盛り上がり、大笑いをしていたお父さん達が、酔った弾みでテーブルに置いていたグラスが何かを倒した音が聞こえた。

慌てたお父さんがお母さんに雑巾を持って来るようにと声を張り上げる。

「香代？ お母さん、今手が放せないからちょっと出てくれない？」

「ええ？」

やっと宿題に集中出来る様になった所だったのに……

机に向かっていたあたしは、嫌な顔をしてシャーペンを乱暴に置いた。

声の主が慶だって事は判っている。きっとお父さんを迎えに来たのだろっから、わざわざ出迎えなくたって、勝手に上がって貰えば良いじゃないの。

「香代？」

「はい」

宿題の邪魔をされてテンションが低くなったあたしは、のろのろと椅子から立ち上がった。

階段を下りると、丁度玄関で立って居た慶と眼が合った。

「やあ、香代」

「……」

慶の声に何故か委縮してしまい、あたしは返事もしないで立ち尽くす。

ここ最近、あたしはお母さんから頼まれたせいもあつたけれども、自分のお母さんが入院してしまった慶の事が気になってしまい、気が付けば慶を捜して見詰めていた。

慶は、あたしが慶のお母さんの入院の事を知らないのだと、今でも思っている筈。そのせいか、自分を見詰めるあたしの視線に気付く度に、慶はふと表情を和らげて軽く笑顔を浮かべてくれていた。

あたしは、慶にとっては知らせたく無いお母さんの入院の事を知っている——そんな後ろめたさがあつたせいか、どんな顔をすれば良いのか判らなくて言葉に詰まり、あたしは慶と視線が合う度に、

慌ててそつぽを向いていた。もちろん、慶の事を見ていると言う事実を他の子達に知られて、冷やかされたく無いって言う気持ちもあった。

でも、ここは学校じゃない。視線を合わせて困る事も無ければ、そつぽを向いて逸らせる必要も無い……と言うよりも、訪ねて来た慶に対して無視は出来ないもの。

ぎこちないあたしの様子に気付いた慶は、まるで腫れものに触るみたいにそつと話掛けて来る。

「あの……さ、うちの父さん……居る？」

「……」

「あ、上がったも……良いかな？」

あたしがこくんと頷くと、慶は『了解』とばかりに目配せを送って来た。

「お邪魔します」

奥に居るお母さん達へ聞こえる様に声を張り上げた慶は、脱いだサンダルを揃えると、階段下で立ち尽くしているあたしを置いて、お父さん達が居るリビングへと急いだ。

「こんにちは。すみませんおじさん、おばさん」

「やあ、慶くん大きくなったね。何処のお兄さんかと思ったよ」

あたしの両親に謝る慶の言葉に、二人とも笑いながら『遠慮しないで』と温かく迎え入れる。

朝が早くて夜が遅いうちのお父さんに見れば、幾らお隣に住んでいるからと言っても、慶と会う事は滅多に無い。

「父さん！ なにお邪魔してンだよ」

「慶か。久し振りだな。どうだ？ お前も一杯付き合わんか？」

「なに言ってるの？ 僕、未成年なんだよ？ さ、帰るよ」

「お？ おお……」

「慶ちゃん、お父さん少し酔っているみたいだから、暫く酔いを醒ましてからでも構わないのよ？」

「いえ、大丈夫ですから」

そんな遣り取りが聞こえて間もなく、慶は自分のお父さんに肩を貸して玄関先まで遣って来た。

慶のお父さんは背が高く、百八十二センチもあるがっしりした体形だけど、そのお父さんに肩を貸している慶も、もうすぐお父さんの背に追い付いてしまいそうだった。

「お隣だし、もっとゆっくりして行けば良いのに」

見送りに出て来たあたしの両親に向かって、慶はぺこりと頭を下げる。

「お邪魔しました」

「ああ、またいつでもいらっしやい」

酔って顔が真っ赤になっているお父さんが答える。

「ごちそうさま」

「ご機嫌になって酔っている慶のお父さんが、お礼を言って頭を下げた。その拍子にバランスを崩して倒れそうになったけれども、肩を貸していた慶がお父さんをしっかりと支えて事なきを得る。

「しっかりしなよ。歩ける？」

「ああ」

「靴、ちゃんと履いて？」

「あ、ああ……」

酔ってしまったお父さんに対して、しっかりとした態度で接している慶の姿を初めて見てしまい、あたしは何故だか自分の顔が熱くなっているのを感じた。

「ありがとう香代。また明日」

「ああ、香代ちゃん。お邪魔しました」

「えっ？ あ、ああ……」

突然声を掛けられて驚いてしまったあたしは、つられて思わず片手を小さく振ってしまった。

『ありがとう香代』慶のその言葉が、あたしの熱くなった顔を一層熱くする。

みなで慶達を見送った後、あたしはリビングの片付けを手伝おうと思って、二人の後に付いて行った。

「いや、慶くん頼もしくなったなあ」

「本当ね」

久し振りに会った慶の姿に、お父さんは驚いていたみたい。だって、同じクラスで毎日一緒に居るあたしでさえ、慶の成長を感じてしまつんだもの。滅多に会えないお父さんなら尚更そう感じちゃうわよ。

「良いなあ。あと何年かすれば、一緒に酒が飲めるんだよな」

そう言ってお父さんは、慶のお父さんを羨ましがった。

「あら、香代だってそうですよ」

「うん。でもちょっと違うんだよ」

「なにが？」

あたしは片付いたテーブルを拭きながら、お父さんの妙な拘りこたわを感じて眉を顰ひそめた。

テーブルを片付けながらくすくすと笑うお母さんに向かって、慶のおじさんが使用したグラスを手渡すお父さんが微笑する。

「息子と酒を酌み交わす事と、花嫁の父で居られるって事は、その家庭だけの父親の特権だからなあー」

「はあ？ なにそれ」

「香代がもつと大きくなったら……判るかも知れないな」

それ以上は何も言わず、ソファに座り直したお父さんは嬉しそうな顔をして、自分で御猪口おちよこにお酒を注ぐ。

「……？ 変な拘り」

なにその答えにもの凄く時間が掛るクイズみたいな言い方は。なんだか心に引つ掛かっているみたいで、居心地が悪くなっちゃうじゃないの。

あたしは不満を残しつつ、ご機嫌なお父さんをリビングに残して、二階の自分の部屋に戻った。

二十歳が来れば、女の人でもお酒は飲めるようになるし、もちろんあたしだってその年になればお酒だって飲める……飲める……の

かな？

宿題の続きを遣ろうと、シャーペンを握ったあたしの頭の中には、
全くお酒が飲めないお母さんの顔が浮かんだ。

第74話 人見知り

慶のお父さんが帰って来た。

慶のお父さん——おじさんと会うのは、本当に久し振りだった。新聞記者をしているおじさんが名古屋へ単身赴任する事になり、最後に会ったのは……確かあたし達が小学四年生になる年の春休みだった事を覚えている。

うちのお父さんよりも身体が大きいおじさんは、昔はいつも優しくうにニコニコ笑っていて、傍にいるあたしまで笑顔にさせてくれていた。あたしはそんな笑顔のおじさんがとっても大好きだった。

大好きだった筈なのに……

お酒を飲んでうちのお父さんと笑っていたおじさんは、あたしが好きだった昔のおじさんとは、何だか少し違っていた。もちろん、帰省の長旅の疲れが滲み出ていたのは判るのだけれど……

おじさんは慶のお父さんであり、同じ人なのに……

それは、あたしがおじさんと何年も会っていなかったせいなのかも知れないとも思った。

『大きくなっただね……』

笑ってそう言ってくれたおじさん。だけど、あたしにはそんな自覚は無かったから、おじさんの言葉にどう反応すれば良いのか判らなくて、つい、愛想笑いしか浮かべられなかった。

「香代も人見知りしちゃったのかしら？」

「え？ 『ひとみしり』？」

お風呂に入るようにと呼ばれて下へ降りたあたしに、お母さんは微笑しながらあたしに向かってそう言った。

「『人見知り』……って、赤ちゃんがするものじゃないの？」

「そうね」

失礼しちゃう。

「あたしは赤ちゃんなんかじゃないわよ」

「そうよ」

「んな、なにが『そうよ』なのよ」

頬を膨らませてムツとなったあたしを見て、お母さんは眉を寄せて苦笑した。

赤ちゃんの『人見知り』については、三年生になれば家庭科の授業で習うそうだし、まだ詳しくは知らないのだけれど、産まれたばかりの赤ちゃんは、眼が明いていてもまだ視力が無くて物がまだ見えてはいないらしい。その後、数か月して見えるようになり、自分のお母さんやお父さんの顔と、他の人の顔の区別が見分けられるようになる。その頃に、頻繁に外出して赤ちゃんを人と会わせている

と、見慣れない人と会っても急に拒絶して泣き出したりするような『人見知り』のサインは出ないけれど、逆に家に閉じこもっている『人見知り』の行動が出るのだと聞いた事がある。

だけど、それはあくまで『赤ちゃん』の行動であって、あたしは何もおじさんを見て泣いたり、あからさまな拒絶なんて遣ってはいないのだけど？

「あんたくらいの年頃になると、今まで余所の人に挨拶出来て居たのに、急に気恥しくなっちゃって、今まで通りに出来なくなったりするものなの」

「で、でも、あたしはちゃんとおじさんに挨拶出来たわよ？」

「その時、少し恥ずかしく無かった？」

「っえ？」

「慶ちゃんのお父さんが引越して行く前と同じ様に、挨拶出来た？」

「そ、それは……」

言い当てられて、ドキツとする。確かに、おじさんと久し振りに会うのは気が引けて、何だか恥ずかしくて嫌だったもの。

「別に気にしなくても、香代だけと言う訳じゃないのよ？ 慶ちゃんだって恥ずかしそうにしていたし」

「って、それはおじさんが……うちに来ていたからじゃないの？」

「それだけだと思っ？」

「……」

何だかお母さんからかわれているみたいで嫌な気持ちになった。

「心配しなくても大丈夫。お母さんもそういう時があったから。『お年頃』って言うのかしらね？」

「お……『お年頃』？」

『そう言う次期』……って『思春期』の事……なのかなあ？

あたしは脱衣所の中にある鏡の前に立って、自分の顔を見詰めた。

おじさんの記憶に残っているだろうあたしの小学生の時の顔と、今の顔は少しばかり違っている。目線だって、背が伸びたからあの頃よりも高くなった。視線を下げれば……Ｔシャツに黒いジャージ姿だけれども、その下はそれなりに……あたしだって成長している……と思う。

見た目、慶が大きくなって成長しているのと同じ様に。

そして『心』も……

いつの間にか、その場の雰囲気や居合わせたメンバーによって、思った事をストレートに言えなくなったりして、言葉に詰まってしまう場合が多くなって来たみたい。

『大きくなっただね』――

おじさんの言葉がまたしても聞こえたような気がした。

* *

慶のお父さんが帰って来てくれたから、もう大丈夫よね？

そう思っただ安心していた。

ところが、次の日の五時限目。古文の授業の最中に、慶は居眠りをしてしまい、普段から授業を面白くないと思っていた連中からかわれて、授業を中断してしまう騒ぎを起こし先生から注意されてしまった。

もしかして、お父さんが帰って来てくれて、嬉しさのあまり眠れなかったのかしら？

そう思うと、何だか慶がもの凄く単純で子供っぽく思えた。

授業が終わった後で、職員室へ来るようにと先生から言われた慶は、肩を落として教室から出て行く。

「意外だね。秋庭くんでも、居眠りなんかしたりするのね」

慶の後ろ姿を見詰めて首を傾げながら、亜紀があたしに向かって聞いて来た。

「まあ……ね」

「あれ、香代は何か知っているの？」

「え？ ううん。知らない。って言うか、なんであたしがあんなのの事を知っていないといけないのよ？」

亜紀の問い掛けに、思わず誤解されてしまうような微妙な合槌を打ってしまった。

危つく誘導尋問に引つ掛かりそうになってしまったあたしは慌ててしまい、慶に対して反抗モードに切り替える。

「そ、そうだよね。変な事聞いちゃってゴメン」

「う、ううん。良いよ別に……」

心穏やかではなくなったあたしは、亜紀から視線を逸らせる。

危なかったあ……慶のお母さんが入院している事を、思わず口にしてしまいそうになったんだもの。

第75話 サービス

どうしてなのかな。咄嗟に慶の事を『あんなの』だなんて言っちゃったりして。

亜紀の探る様な視線から逃れたあたしは、言い表し様の無いモヤモヤ感に襲われた。

慶の事を聞かれる度に、いつの間にかあたしは慶の事をこんなに悪く言ってしまう様になっている。酷い言葉を口にする度に、自分が汚れて行く気がして嫌になる。そうして慶の事を訊かれる度に、あたしは顔を強張らせてしまう……

なんなの？ この嫌な気持ち……

一呼吸置くと、逸らせた視線を亜紀へ戻した。今のあたしの動揺を亜紀に覺られまいと、わざと余裕があるみたいに腕組みをして、浅く首を傾げて見せる。

「居眠りしたから心配になった？」

「うん……」

「夜ふかししたり疲れてたりすれば、居眠りくらい誰だってするでしょ？ 別に珍しくもなんともないじゃない」

「そ、それはそうかも知れないけれど、でも……でも、秋庭くんはそんな事……するような人じゃないわ」

「さあ、それはどうかしら」

昨日は久しぶりにお父さんが帰って来たんだもの。積もる話に、つい夜更かしをしちゃった……なんて、ありそうなもの。

「ご、ごめんね。香代は秋庭くんの事が……そ、そのう……き、嫌い……だったんだよね？」

「え？ いや『嫌い』とまでは……」

んっ？ ナンか誤解してない？ べっ……別に『嫌い』とまでは行かないんだけど……

余程あたしの受け答えが好ましく思えなかったのか、亜紀は少し戸惑った顔をして、いつもの『遠慮がち』な言い方をした。

「でも、最近の秋庭くんの様子がなんだかおかしくて……お隣の香代なら何か家での事を知っているかもと思ったの」

「あたしが？」

あたしはいいやと首を横に振る。

「だって秋庭くん、昨日も練習中に田村くんと話をしていて、キャプテンから叱られていたもの」

「はあ？」

練習中に田村くんと外周を走っていたから、何か遣らかしたのかなーと思ったら、そう言うコトだったのね。

「あの練習熱心な秋庭くんが、私語でキャプテンから叱られるだなんて……それに、何だかここ最近、元気が無いみたいに見えるから……」

「そ……そう？ あ、あたしには変わり無いように見えていたけどな」

亜紀の言葉にドキリとさせられてしまった。

慶のお母さんが入院して、昨日お父さんが帰って来るまで独りで大変だったみたいだもの。だけど、その事を亜紀は全く知らないハズ。なのに、どうしてそこまで読み取って心配出来るの？

あたしは亜紀が慶の事を、今でも本気で想っているのだと知った。亜紀は真剣に想っているのだわ。でないと、事情を知っているあたしでさえ気付かなかった慶の些細な変わり様を、こんなに敏感に感じ取れるはずが無いじゃない。

そう思ったら、何故だか急に胸が熱くなり、眼の前がぼやけて見えた。

やっぱりあたしは……慶の単なる『幼馴染のお隣さん』でしかないのかなあ……

そんなもやもや感に囚われてしまったあたしは、それ以上慶の事で亜紀と会話を続ける事が出来なくなってしまった。

後続く授業も全然頭の中に入ってきて来ない。早く気分を切り替えてしっかりしなくっちゃと思うのに、焦れば焦るほど亜紀の想いが

読み取れて余計に授業に集中出来ず、あたしは気分が晴れないまま授業を終えて、部室へと向かった。

* *

> i 2 5 5 4 3 — 3 1 6 <

「香代良い？ 亜紀、準備出来た？」

手際が早い姫香が、ラケットを握って立ち上がり、いつもの様に声を掛ける。

「うん」

「あ……うん」

あたしはテニスシューズを履き終え、亜紀はロッカーの扉を締めながら返事をした。

「でも、なんだか今日は静かだね」

「まだ誰もコートに来ていないのかな？」

亜紀の言葉に、姫香が答える。

普段は誰かが先に来て練習を始めているのに、この日は珍しくボールの弾む軽快な音も、コートを整備する一年生の声も聞こえては来なかった。

「あたし達が一番乗りかな？」

「かもね？」

『一番乗り』——あたしが口にしたその言葉が受けたのか、姫香がふふつと含み笑いすると、つられてあたしも亜紀もくすくす笑ってしまう。

そんなに早い時間でも無かったのに、まだ誰も来ていない午後のテニスコートに遣って来るのは久し振りで、沈みがちだったあたしの気持ちをほんの少しだけ上向きにさせてくれた。

このまま少しずつでも良いから、気持ちが晴れて行ってくれれば良いのにな……

そう思っていたのに、コートであたし達に背を向けてラケットを握っている独りの男子部員の姿を見付けてしまった。

相手側テニスコートのコーナリー二か所には、サービスの練習の時に使用される赤いカラーコーンが置いてある。

「誰？」

「あ……」

姫香も亜紀も、その誰かさんに気が付いたみたい。

『慶だわ』——その言葉を口にせず、言い淀んでいると、亜紀が『秋庭くんだわ』と小声で言った。

誰よりも一番乗りでコートに現れた慶は、独りでサービスの練習

をしている。

左手に軽く握ったボールを数回、手毬の様に突きながら相手コートを見詰め、これから放つサーブに集中しているらしく、グラウンドに現れたあたし達には気付いてはいないみたいだった。

ゆっくりとした慶の動作が弾んだボールを手にして、青い空へ小鸟を放つ様に投げ上げた瞬間、右手に握っていたラケットが大きく振り降ろされた。

ボールは鋭い音を立てて、相手側コートに置かれている赤いカラーコーン目掛けて、矢の様に吸い込まれる。

狙い澄ました慶のサーブは、見事サーブエリアの左側に置かれたカラーコーンを直撃した。

「……」

慶の正確且つ攻撃的なサーブを眼にして、あたしは思わず息を飲む。

男子部員の中でも『練習バカ』と言われているだけあって、慶のサーブは本当に模範的で綺麗なサーブだった。

暫く慶のサーブをじっくりと見る機会が無かったけれど、少なくとも去年の新人戦の頃よりも、狙いもボールの速度も格段に上手くなっている。

「っしやー！」

慶が今のサービスに満足したのか、左手を握って小さく胸前でガツツポーズをした。

「ナイス・サーブ!」

亜紀のその一声で、あたしはハッと我に帰った。

こちらを振り返った慶の顔は、得意満面の笑みだった。

「遠藤さん、サンキュ!」

「あ、あのう……」

笑顔で応じた慶の返事に、亜紀は頬を赤らめる。

何か気の利いた言葉を掛けようとしているのか、それとも見詰められて頭の中が真っ白になっているのか、亜紀は慶の視線に何か言いたそうにもじもじして、一層顔を赤らめて俯うつむいてしまった。

第76話 不機嫌な香代

『遠藤さん、サンキュ！』

慶の言葉に真っ赤になって俯いていた亜紀は、少し『間』を置いてからこくりと浅く頷いた。肩に掛った亜紀の艶やかな黒髪がざらりと流れて、慶の言葉に対して快い返事をしたように見える。

「……」

二人の何気ない遣り取りが、急に羨ましく思えた。慶と亜紀の二人だけの世界が出来てしまい、あたしと姫香の存在が慶達から掻き消されてしまったように思えて切なくなる。

もしも……もしもあたしが、亜紀と同じ言葉を彼女より先に掛けたとしたら……慶は亜紀と同様、あたしにも笑って応えてくれたのかしら？

会心の出来だったサービスをあたし達に披露し、褒めてくれた亜紀に向かって、自信満々の笑みを浮かべている慶に対して、あたしは何故だか素直に認める事が出来なかった。

そうして次の瞬間、あたしは自分の存在を主張しようと焦る余り、剥きになってとんでもない言葉を口にしてしまう。

「なっ、なによ。あの程度のサービスくらいで……ち、調子になんか乗らないでよね」

「ホント。なーにが『サンキュ』よ！ 格好付けちゃってナルシ」

だわ。カラーコーンに当たったのって偶然でしょ？」

ほのぼのとした二人の空気を微塵に砕くような容赦の無い鋭い突っ込みを入れてしまい、俯いていた亜紀がそのままの姿勢で固まっただけに見えた。しかも、バレンタインの出来事以来『アンチ慶』に傾いている姫香が、あたしの肩を持って追い討ちを掛けてくれたのだ。

けれども、そんなの……本当はちっとも嬉しくなんか……無い。

自分でも、どうしてそんな事を口走ってしまったのか、そして、どうしてこんなに切なくなってる胸がきゅっと痛くなるのかが判らなかった。

「なーんだ。川村に香代。居たの？」

無愛想な慶の言葉に神経を逆撫でされてしまい、カッとなったあたしは、荒れた心に火を灯されたみたいない気分になる。

「んな、ナニよっ！ 影が薄いアンタから無視される覚えなんかないわっ！」

「はあ？ よく言うよ」

あたしの行き当たりばったりの棄てゼリフに、慶が肩を聳そびやかして軽く吹いた。そして右手に持って居たラケットを大きく振りかざすと、慶はビシッと正面からあたしを指して、不敵に口端を歪めてニヤリと笑った。

「香代、お前今、何も考えずに言っただろ？」

「な……」

「十分影が濃くって困っていますが…… なにか？」

今まで思いも寄らなかった慶の強い態度に、あたしは怯んで息を飲んだ。

まさか『あの』慶が言い返して来るだなんて……この、あたしに向かつて……

泣き虫で、いつもあたしの後ろを着いていた男の子だったのに、今の慶は、そんな昔の面影なんか全く無い。寧ろ、自信に満ち溢れて自分の意見をちゃんと口に出来る、少しばかり生意気そうな男の子になっていた。

「う、ううつるさい！ あ、ああアンタなんか黙ってオタしてりやいいのよ！」

「香代？ なに真っ赤になってんだ？ ヘンだぞ？」

「んな、なな何言ってるのよ！ アンタこそ変態だよっ！」

「はあ？ 『変態』って……ナニ言ってる……」

「馬鹿っ！」

興奮が限界を超えたのか、あたしは慶の言葉を鋭く遮ると、涙眼になってキツと睨んだ。

あたし……どうしてこんなに怒っているの？ 慶だって……なに冷静になっているのよ。普通、ここまで言われたら怒って当然じゃないの？

なのに、慶は少しも怒っている様子を見せない。それが何故だか悔しかった。

「行こう？ 香代、亜紀。アキバケイなんか放っておいて」

「……」

姫香があたしを宥めながら、慶の事を肩越しからジロリと睨む。

違う……違うのよ姫香。

おかしいのはあたしの方。だけど、慶と亜紀との雰囲気^{きふき}が良過ぎて、息が詰まりそうだった。友達としてなら二人の光景を微笑ましく思えるのかも知れない。なのにどうしても胸の中にモヤモヤとした『^{つか}痞え』が不快で、仕方無かったんだもの。

『何しに来たんだよ？』……見上げた慶の顔は、あたしにそう言いたげな表情を浮かべていたように見えた。

ああ、あたしって自己嫌悪……どうしてあんな事を言っちゃったのかしら。これで慶はあたしの事を、余計に嫌いになっちゃったかも知れないわ……

どんよりと落ち込んでいたら、二階の教室の窓から、日直の松原さんが亜紀を呼び、亜紀はそのまま教室へ戻って行った。

亜紀の後ろ姿が校舎の陰で見えなくなったのを見計らうようにして、姫香が徐に口を開く。

「香代、あんたも言うわねえ」

「え？」

「アキバケイの事、本当はやっぱり好きなんでしょ？」

「そ、そんな……」

核心を突かれてしまい、あたしはどうすれば良いのか迷って視線を左右に彷徨わせた。

「『そんな事無い』って言いたい？　ねえ、亜紀は今此処には居ないんだし、別にあたしが聞いたからって、後から亜紀に言ったりなんかしないわよ。だから正直に言っても大丈夫だよ」

「う……」

思わず自分の顔が強張ってしまう。

姫香はあたし達三人の中で一番先に、田村くんと言う男子と付き合っている。此処で姫香が口にした『好き』という言葉は、もちろん恋愛感情での『好き』を意味している事くらい判る。

だけど、本当に慶の事が好きなのか判らない。幼馴染のあたしは、慶のお守役として見守っていたはずなのに……

「判んない」

「は？」

「よく……判んないの。自分の事なのに……おかしいよね？」

「こらこら、またそうやってはぐらかす」

「姫香こそどうだったの？」

「うえっ？」

「ほこみき矛先を向けられて、今度は姫香が上擦った返事をする。」

第76話 不機嫌な香代（後書き）

（ナルシ・・・ナルシスト。地域限定でしかこう言う言い方はしないかも知れません。（現在、中学生の息子達が使っています）

（聳^{そび}やかす・・・そびえるように、肩を高くいからせる。

第77話 きっかけ…

> i 2 6 3 8 9 — 3 1 6 <

「ねえ、姫香は田村くんのきっかけって……どんなの？」

クラス内だけじゃなく、部内でも姫香と田村くんの仲は結構有名で、気が付いたらいつの間にかくっついて居たって感じだった。

あたしも田村くんの事が気になっていたから、尚の事、親友の姫香に先を越されてしまったって言う感が強い。しかも、同じ部活で顔を突き合わせていたにも関わらず、このあたしが二人の仲を直ぐには気付けなかったと言う、悔しい想いをしちゃったんだから、今度は姫香が少しばかり困っちゃっても良いじゃない。

「きっかけ？」

「うん。そう」

「きっかけ……ねえ……」

姫香は眼を細くして遠くを見詰め、田村くと出逢った頃の事を思い出しているように見えた。

でも、あたしが真剣な顔で姫香の顔を覗き込んでいる事に直ぐに気が付くと、いつもの悪戯っ子みたいな眼をクリクリとさせてあたしを見詰めたかと思ったら……急に『ぷ！』って嘖き出して笑い始める。

「な、なに？」

姫香の言葉をワクワクしながら待っていたせいか、彼女の笑顔に釣られてしまい、あたしもクスクスと笑い出す。

「あ、あのねえ、ふふつ、香代はきっかけが無いと彼氏が出来ない
って思ってる？」

「え？ そうじゃないの？」

「くくく……ふふつ、無いわよお。そんなの」

「ええ〜？」

何だかガツカリ……だけど、じゃあどうして姫香は田村くんと部内でも公認になっているワケ？ 絶対におかしいわよ。

「くすくす……な、なに笑いながら『ええ〜？』なんていうのよ？
くすつ……器用な子ね」

「ふふふ……あによう。姫香だって笑ってるじゃない」

「こつ、これはあんたが……くくつ……真剣になつて……」

「うわあ~~~~ん！ 人のせいにして笑いに巻き込まないでよ、も
おー！ お、お腹イタイ……」

「きゃはは……」

姫香の笑いに誘われてしまい、あたしは真剣に話が出来なくなっ

てしまった。真面目に訊いているのに、どうして笑ってごまかそうとするのよ？ それとも本当に面白い質問をあたしがしちゃったって事なのかしら？

二人で一頻りひんつき笑うと、やがて姫香が口を割った。

「でもまあ、きっかけて言われてみれば、そんな感じのシチュエーションはあったのかなー？」

「あつたの？ なーんだ。やっぱりあるじゃない。んねえ、ねえ、教えて？」

「んー、どうしようっかなあー」

「つて、そんな意地悪しないで教えてよおお」

思わず姫香の両肩を掴んで揺さぶる。

「そんな大袈裟な事じゃ無いのよ。話したって詰まらないくらいなの」

「でも訊きたあーい」

「あたしも恭介（田村くん）と似た様な家庭環境だからね。なんとなく、他の子よりも空気が読めるって

言うか……去年の夏休みの終わり頃、恭介が五日間連続で部活を休んだ日があったでしょ？」

「ああ、確か弟くんが熱を出して、田村くんが看病していたんだよね」

あたしは去年の夏休みの事を思い出した。

あの日……初日は連絡が無かったけど『暑いからサボったんだろ
う』ってみんなから言われて、誰も田村くんの事を心配してはいな
かった。事実、他にも両親の実家に遊びに行ったりして連絡が取れ
なかった部員は何人も居たし、夏休み中に無断で部活を休んだから
と言って、それを酷く咎めるほど顧問の先生は厳しくは無かった。

男子・女子ともに顧問の先生方は、どちらかと言えば部員の自発
的な取り組みを評価するタイプだったから。だから幽霊部員になっ
てしまった八神くんの事も、除籍したりはしなかったし、その事で
男子部員との関係がぎこちなくなってしまうただのだけれど……

「それまで恭介はずっと真面目に練習来てたし、本人は前の日まで
元気だったからね。家で何かあったのかな……って」

「それで田村くんの家へ行ったの？」

「うんそう。で、恭介ん家へ様子を見に行ったら、やっぱり駿介しゅんすけ
くんが熱を出して寝込んで、おまけに看病していた恭介もなんだか
具合が悪そうだったから」

「そ、そう……」

田村くんの家庭が父子家庭なのは知っていた。弟さんが少しだけ
病弱なのも。だけど、田村くん自身料理は得意だと自慢していたし、
弟さんが寝込む事だって今までに何度もあったそうだから、別にあ
たし達が心配しなくても田村くんなら何とか乗り切れると思ってい
た。

でも、姫香は……そうじゃなかったのね？

「最初あたしが来たのを知って、恭介はびっくりしてさ。『何で来たんだ？』って。でも、気になって仕方が無かったから……それにあたし、こう見えても料理は得意だから、恭介が治るまで勝手にご飯作りに行ってたの」

「勝手に……って……」

「そう。勝手にね。でも、口では『迷惑を掛けるからしなくて良い』って言っていたけど、本心から言っていないかったから、二人が元気になるまで通っちゃった」

「はぁ……お見舞い？　って、それが……きつかけ？」

あたしには、姫香が強引に田村くんの自宅へ押し掛けて行ったみたいにしかな聞こえなかったんだけど……？

「うーん、だからってワケじゃ無いわ。お見舞いに行ったから付き合い始めたとか、彼氏・彼女の間柄になれたって『してくれた感じが強過ぎて、そんなの嬉しくないわよ』」

姫香は、恩着せがましい事がきつかけで付き合い始めたのじゃ無いと言った。確かにそれって交換条件みたいで嫌だし、第一そんなの長続きなんかしないと思う。

「じゃあ何よ？」

「放って置けなくって……なんとなく……かな？」

姫香はあたしから視線を逸らせると、頬をぽつと紅くさせた。

「……」

『なんとなく』って、なに？ 一体どういう意味なの？

あたしは、今まで見た事も無かった姫香の照れた表情に、呆然としてしまった。

——姫香、綺麗……

姫香って、普段ボーイッシュな感じが強いんだけど……こんなに女の子っぽくって綺麗だったかしら？

「ねえ、香代は赤い糸って信じてる？」

姫香の横顔に見惚れていたら、につこりと姫香が微笑みながら、左手を軽く握って小指を立てて見せる。

「あ、赤い……糸？」

頭の中で何故か慶の顔がちらついて来て、自然と頬が熱くなるのが判る。

「うんそう。『この人ね』って、運命を感じる赤い糸。だからと言って、別にその相手が自分の一生の結婚相手だ……なんて信じ込まない方が良くんだけどね」

「はあ？」

『運命の赤い糸』って、そもそも『そう言う相手』の事を差すのじゃないの？

「だからさあ、『結婚相手』だとかってそう信じ込んで、相手が重荷に感じて逃げちゃうって事なの。まあ、香代にはまだ判らなくて良いけど」

「えー、なにそれー？」

「自分と向かい合って素直になれないコには、まだまだ『お子様』で居て貰いましょうねってコトなのよ」

そう言って、姫香は悪戯っ子みたいな笑顔を浮かべた。

第78話 香代の決心

「別にあたしと恭介が、お互いに『付き合おう』だなんて言っ
てな
んかないわよ？」

「だったら……」

『どうしてみんなから認められているの？』と言いたかつたけれど
も、姫香の穏やかな表情を見ていたら、聞くのがなんだか億劫に……
…と
言うか、聞いちゃいけないような気がした。

「今は『気が合っている』って言うておくわ。恭介の考えそんな事
が
な
ん
と
な
く
だ
け
ど
判
る
か
ら」

「……」

相手の事がなんとなく判ると言うのなら、あたしだって……と思
っ
た。

だけどそれは昔の話。泣き虫で弱々しくて、いつもあたしの後ろ
を
追
い
掛
け
て
付
い
て
い
た、小さかった頃の慶との話だわ。でもあた
しはそんな慶との仲を、自分から断ち切った。あの時は、どうして
あんな事をしてしまったのか、自分でもよく判らなかつたけれども
……
……時間が経った今のあたしなら、判るような気がする。

慶は友達から冷やかされても、何も言い返さず勝手に言わせてい
た。でも、あたしは慶とは違っていた。姫香達やクラスメイト……

周りから冷やかされたり、からかわれたりして、自分が辛くなってしまったから。

お隣で幼馴染だと言うだけで……ただ、慶と気が合うからと言うだけで、からかわれたりするのが恥ずかしくて嫌になって……だからあたしは……

なのに、今のあたしは田村くんと仲が良い姫香がとても羨ましく思える。そして、もしも望みが叶うのならば、もう一度……慶と何の気負いも気兼ねもしないで、あたしらしく自然に振舞えるようになりたいと思った。

あたしが余程思い詰めた顔をしていたように見えたのか、姫香が心配そうにあたしの顔を覗き込む。

「あのね？　難しく考えてちゃダメだって」

「え？」

「アキバケイ、お母さんが家に居るのに自炊しているらしいじゃない。この前にキヨウがアキバケイと一緒に外周ランさせられていたじゃない？　あれって、アキバケイから卵の調理方法を訊かれて、それに答えていてキャプテンに叱られたのだって」

「……」

『うつん。お母さんは今入院していて、昨日お父さんが帰って来たよ』と言いたかったけれど、慶のお父さんの事を話せば入院の事も話さなくっちゃいけなくなると思って、ぐっと言葉を飲み込んだ。

「アキバケイが料理に目覚めたのかどうかは知らないけど、晩御飯はカレーに肉じゃが、シチューのローテーションなんだって」

「それって……」

「そう。お肉に玉ねぎ、ジャガイモにニンジンって言う、おんなじ食材。なんかさあ、メニューを聞いた時、あたしは呆れたわ。幾ら野菜が旬だからって、よくも飽きたりしないわよね」

「へ、へえ……そう」

確かに、慶のお母さんが入院してからは、風向きの関係で慶の家の晩御飯の匂いがしていて、姫香が言っていた三品の匂いが日替わりで香っていた。

てつきり美咲姉さんが作り置きでもしているのかと思っていたのだけど、まさか慶が本当に自炊していたなんて……

想像していた以上に慶が苦勞していた事実を聞かされて、あたしは何だか自分が情けなくなった。お隣に住んでいるのに、こんなに近くに居るのに、慶の事を知らない……知ろうとしなかったなんて。

そんなのじゃダメに決まっているじゃない。仲の良かった頃に戻りたいと思っけていても、ただ想っているだけじゃ、そこから先へは絶対に進めない。だったら、今なにをすれば良いのか……なにをすべきなのかが見えて来た気がした。

「でさあ、日頃のおかずに不自由して飢えているアキバケイに、コ

「で香代がちょっとした手作り料理を出す……ってどあ？」

「あ、あたしが？」

「でなきや、誰が？ ヨリを戻したいのじゃなかったの？」

「あ……あたしは、そつ、そんな事……」

「『言つて無い』だなんて言わさないわよ？ 照れないの。ちゃあんと顔に書いてあるんだからあ」

嬉しそうな姫香の言葉に、あたしは自分の顔がもの凄く熱くなつて行くのを感じ取った。

* *

『手作りの』……つて、一体どんなおかずを作れば良いのかな？

家に帰ると、早速あたしは自分の家の台所へ立った。けど何を作れば良いのか判らない。

あたしはお母さんが台所に置いている料理の本をパラパラと捲^{めく}つてみた。料理の本に出ている出来上がりの写真は、どれもすごく美味しそうだけど、上手に出来るかどうかの自信さえ無かった。

恥ずかしいけれども、あたしの調理の腕はまだまだ未熟で、姫香や田村くんにはとうに及ばない。

姫香から、簡単なおかずなら慶が試しているはずだからと言われ、少し変わった食材や、特に季節の露地物が良いと言われたけど、冷蔵庫を開けてみても、中には特別これといった食材は見当たらなかった。

そんなあたしが無気なく視線を移した先で眼にしたものは、昨日お母さんがご近所のおばさんから貰った大きな筍が、勝手口の傍に置かれた新聞紙に包まれていた。

お母さんも、今日か明日には煮物にするのだと言っていたし、これなら旬の季節の野菜だわ。冷蔵庫には油揚げも入っているし、丁度煮干しの良いのが手に入ったわって言っていたから、お出汁ダシの問題もクリア出来るわよね。

「えっと、確か筍の煮物は二十五ページ……なにに？　筍は二・三枚皮を取り除き、縦に包丁で切れ目を入れて米ぬかと一緒に茹でます……『米ぬか』って、もしかしてこの袋の中身？」

新聞紙の中に筍と一緒に入っていた、小さなビニール袋を手にとった。中には明るい黄土色をした粉みたいなのが入っている。

あたしは帰宅直後の疲れも忘れて、戴き物の筍を調理するのに夢中になった。

第79話 切ない勘違い…1

「出来た……」

あたしは両手を後ろへ廻して、着馴れないエプロンの紐を解いた。

お鍋でコトコトと煮込んだ筍は、ほんのりとお醤油の色が染み込んで、良い色合いに出来上がったみたい。……だけど、筍の煮物だけにこんなにキッチンが汚れるものなのかしら？

あたしは雑然と散らかった台所から、思わず眼をそむけてしまった。

出来たての筍を小鍋に取り分けていると、立ち昇る湯気からは、甘いお醤油の香りがしてとても美味しそう。

——なに？ あたしだって、やれば出来るじゃないの。

思っていた以上の出来栄えに満更でも無いあたしは、自然と頬がゆるんでしまう。

後は、顧問の先生に呼び出されて居残った慶が、家に帰って来るのを待つばかりだわ。そう思って、窓辺でお隣の慶の家を眺めたら、お隣のキッチンから明かりがこぼれているのに気が付いた。

——誰かが帰っている。

きつと慶が帰って来たのだわ。

お母さんが作ったキルト製の鍋掴みを手にすると、あたしは落さない様に小鍋の取っ手の部分をしっかりと握った。

*
*

慶の家の門まで来ると、ドアに取り付けられているウエルカムベルの、金属特有の涼しそうな音が聞こえて、あたしに家の誰かが出て来た事を知らせてくれた。

訪ねて行っているのに、向こうから出迎えられたような気がした。そして出て来た人影を眼にしたあたしの心臓が、ドキリと大きく脈打つ。

玄関の明かりに照らされて現れたのは、白いＴシャツに着替えた慶の姿だった。だけど、今から何処かに出掛けるみたい。ドアに鍵を掛けると、鍵がきちんと掛かっているかどうかを、ノブを何度か捻って確認している。

帰宅直後の慶の外出を予想していなかったあたしは怯み、気後れしてしまった。

慶は門の所で立ち止まっているあたしに、まだ気が付いてはいないみたいで、自転車を出す心算なのか、あたしに背を向けて奥の倉

庫の方へさつさと歩いて行く。

早く声を掛けないと、慶が何処かへ出掛けてしまう……早く引き留めなくちゃ……

そう思えば思うほど、焦って声が出せなかった。

だって、周りにはあたしと慶しか居なかったから。不思議な事に、二人つきりだと思うと、余計に足が竦^{すく}んで身体が強張ってしまう。以前は何でも気兼ね無くお互いに話し掛けられる仲だったのに。

——落ち付けあたし！

自分に言い聞かせようとすればするほど逆効果で、体中が熱くなってしまう。きっと、顔だって凄く熱くなっているから、真っ赤になっているのだわ。相手はお隣の慶なのよ？　なのに、どうしてこんなに慶の事を強く意識してしまうのかしら？

立ち竦んだあたしは、慶の後ろ姿をじっと見詰めてしまう。

このまま慶が出て行って、渡せ無くなっても良いの？

慶が出て行っても、家には美咲姉さんが居るかも知れないし、別に慶に直接渡せ無くて……そう思いながら、慶が歩いて行く先にある空いた倉庫の中を覗くと、美咲姉さんの車は無かった。

美咲姉さん、まだ帰って来ていないのだわ。

選べる選択肢の一つが消えてしまい、あたしは更に焦ってし

まった。

「ど、どこに行くの？」

思い切って声を掛ける。

「え？ そりゃあコンビニへみりんを買いに……ってええっ？」

いきなり背後から呼び止められた慶は、驚いて飛び上がった。そうして恐々肩越しに振り向く。

「か……香代？」

「んなっ、なによ？ そ、そんなに驚かなくなっただって……い、いいじゃない」

慶の大袈裟過ぎる程のリアクションに、思わず吹き出しそうになる。

「どしたの？」

「あ、相変わらずアンタってKYだよね？」

お鍋を持って来ているのに、慶は気付いていないのかしら？ 急に今日の部活での出来事を思い出してしまい、あたしは少しだけ機嫌を損ねてつい、憎まれ口を叩いてしまう。

「悪かったな。KYで」

「……」

言い返して来た慶の声は、疲れのせいか少し掠れているように聞こえた。

無理も無いわ。今まで、家族を支えていたお母さんが入院して、急に居なくなっちゃったんだもの。家の事を任されているんな目に遭った慶が、疲れていて当然なのかも知れないわ。

「何か用？」

慶がそう聞いて来た途端に、タイミング良く慶のお腹が自己主張して鳴った。

もしかしたら、あたしが持っている小鍋に気が付いたのかも知れないわ。

「あつ、あの……こ、コレね……」

「それって『ウチ』へ『おばさんから』の差し入れ？」

「……」

慶の思わぬ一言に、あたしは小さく息を飲んだ。

第80話 切ない勘違い…2

軽い眩暈を起こしたのか、あたしはよろめきそうになって左足を浅く引いた。

一瞬、慶の言葉が理解出来なかったから。

だって……このお鍋の中には、あたしが……あたしが作った……

返事をしなかったあたしを慶は訝^{いぶか}り、顔を覗き込んで来る。

「あれ？ 違ったの？」

「あ？ えっ？ あ、ああ違うわいだよ。そ、そう。これは家のお母さんから……だから……」

後は言葉にはならなかった。胸に何かが込み上げて来て、息をするのさえ辛くなる。

慶の言葉を否定出来ずに、あたしは思わず調子を合わせて嘔を吐いてしまった。

——『あたしから……』って言うのは無し……なの？

残念だけど慶の頭の中には、差し入れイコール『うちのお母さんから』なのだと言う選択肢しか浮かんでくれなかったみたい。で

も、今まであたしが慶に対して執った態度を振り返れば……そう考えてしまうのが当然なのかも知れないわ。

昔のように仲好くなれたとしても、こんな調子だったら……他の男子が慶と同じだったとしても、あたしはきつと平気で許せると思う。でも、慶は……慶がこのままなら、それはそれで辛い気がする。

姫香の助言もあって、勇気を出してこんなことをしてみたけれども……やっぱり、今更……なのかなあ。

手にした小鍋の持ち手を、あたしは両手できゅっと強く握り締めた。なんだか自分の努力が無になってしまったように思えて、悲しくなってしまう。

やだ……なんだか涙が出て来そう……

「？」

浅く俯いてしまったあたしは、その様子を見て戸惑ってしまった。慶の気配が、肌を通して感じ取れた。

どうしよう……

慶があたしを見詰めている……そう意識してしまうと、頬がちりちりと火照って来て、この場から逃げ出してしまいたくなった。

「あははっ、や、やだなあ。ホントに……お母さんからなんだって、
努めて明るくそう言つと、あたしは自分でも不自然だと判るくらいにぎこちなく笑った。

あたしが鍋のフタを取り、中身を慶に見せて『ほらね?』と言うと、それが筍の煮物だと知るや、慶の顔が明るくなる。

「うわあ、久し振りに別のおかずだあー」

「そつ、そつなの?」

慶はどうやら筍の煮物に感動してくれたみたい。毎日がカレーとシチューと肉じゃがだと言っていた姫香の言葉は、どうやら本当だったらしいわね。

「貰えるのなら遠慮無く貰っておくよ。ありがとう。後でおばさんにお礼を言っておくよ。鍋は明日返したのでいいかな?」

「あ? う、うん。それで……いいよ」

「よつしやあー! オカズ一品GETお!」

差し出した小鍋をあたしのお母さんからの差し入れだと思っている慶は、慶は嬉しそうに受け取り、昔の面影が残っている無邪気な笑顔を浮かべた。

あたしとしては少々納得出来ないのだけれども……慶の笑顔を見て、否定して怒る気も、訂正する気さえも起こらないのは、それだけ慶が素直に喜んでくれたから……なのかな?

「なあ、香代はもうご飯食べた?」

「え?」

思いも寄らない慶の言葉に、再び胸がドキリと脈打った。

だけど、慶はそんなあたしの想いなんか、これっぽっちも気付いてはくれないみたい。

「まだだったら、僕ン家で食べてく？　在り合わせのものしか無いけど」

「あ、ああ、アンタ買い物に行くのじゃなかったの？」

「すぐに戻って来るよ。ここの所ずっと独りでご飯なんだ。話し相手になつてよ」

「は、話し……相手って……」

いきなりな慶の提案に、あたしは大きく動揺した。こんな所を近所の誰かや通りすがりの人に見られたりはしまいかと、急にソワソワと落ち着かなくなる。

『お、落ち着くのよ香代……廻りはもう真っ暗だし、顔なんか判るわけないんだから……ってなに考えているのよ。こんなに暗くなつてからの方が、他人から見られた時に誤解され易いのだって』そう自分に言い聞かせると、深く深呼吸をしてみる。

慶が『ナニ遣つてんの？』と言わんばかりに首を捻る。拳動不審なあたしを見て、きつと今の慶の頭の中には、大きな疑問符が一杯飛び交っているのだわ。

「若しくは聞きたいことがあるって言うか……この前、古典の授業

中に居眠りして失敗した僕を見て、泣きそうになっていなかった？」

その言葉にハツとしたあたしは、息を詰めて慶を見上げた。そうして少しだけ緊張してあたしの様子を窺っている慶と、視線が合う。

外灯に照らされた慶の顔には、泣き虫であたしの後ろをくっ付いていた頃の情けない面影は無かった。もちろん、優しいおばさんの面影は今まで通りちゃんと引き継いでいたけれども。試合数も少なくて、馴れ合い状態だったと言っても過言ではない小学校でのテニス部から一転。喻えペアでもライバル同士になり、他校との試合数も断然増えている中学校での練習は、甘えなんか微塵も見せずに真剣に取り組んで居た慶の表情を、良い意味でとても精悍な顔つきに変えていた。

『どうして僕を避けるんだ？』

以前はそうじゃなかった。何でも気兼ねなく話すことが出来ていたのに――

『どうして？』

言葉に出して言わなくても、慶の澄んだ瞳があたしにそう問い掛けている。慶はあたしにその理由を聞きたがっている。

だけど、今ここで喋る気にはならなかった。第一、どうして慶に對して冷たくしてしまうのか、どうして慶と視線を合わせられなくなってしまったのか、あたし自身がよく判らないし、説明のしよう

が無いんだもの。

「僕、香代からシカトされたくないんだけどな」

「な、なんであたし？」

「え？ ええと……それは……」

問い返したあたしに、今度は慶が口籠る。

『判り易くて『嘘』が吐けない娘……』

不意にあたしの頭の中には、去年の夏祭りに慶が口にした言葉が浮かぶ。そして、いつも慶を見守る様にして見詰めている亜紀の姿を思い出してしまう。

あたしは慶に対してどころか、自分に対しても嘘を吐いている。なのにこんなあたしに『無視されたくない』……って……どうして？

慶は亜紀の事をもう何とも想っていないの？

「……なんでかな？」

自分から言い出しておいて、その答えを有耶無耶にして問い掛けて来た慶にがっかりしてしまう。その答えがあたしだって知りたかったのに……自分の気持ちの整理くらいちゃんとしてから言いなさいよ。

その……あたしもそう……なんだけど。

慶との会話から、これ以上一緒に居ても無駄のような気がした。やっぱり、あたし自身の心の整理が着かないと、居辛くなりそうな雰囲気を感じてしまう。

あたしは持つて居た小鍋を、慶に向かって無愛想に突き出した。

「はいっ！ お鍋！ 明日家に持つて来て」

「香代？」

「き……気安く呼ばないでよ。アンタなんか亜紀と仲良くしてればいいじゃない！ アタシ帰るっ！」

あたしはそう言つと、ツンとしてソップを向いた。

それがなけなしの強がりだつて、判っていたのに。

第81話 ダブルス…1

「集合——っ！」

長谷川キャプテンの凜とした声がコートに響き、給水タイムを取っていたあたし達は急いで、キャプテンが立って居るベンチ前へと駆け寄る。

キャプテンの隣には、顧問の岡先生が黒いクリップボードを手にして、なにかを書き込んでいる最中だった。

「先生、全員集まりました」

キャプテンの声を聞いた先生が、ボードから眼を上げると、集まったあたし達を見廻した。

「今日から混合ダブルスの練習が入ります。グループを作るから、みんな、男子のコートへ移動して」

「ええ——っ？」

『混合』と言う言葉を聞いて、大半の女子部員がざわめく。中には嬉しそうな顔をした部員もいたけれども、殆どの部員が嫌だと言わんばかりの表情を浮かべた。

もちろんあたしも不満組の中の一人。

「ふうん。先生も考えたわね」

「なにが？」

「もうすぐ県大会じゃない。他校との練習試合なんて中々都合がつかないらしいし。レベルアップを図りたいんでしょね」

「そうなの？」

「きつとそうだよ。だって、男子には秋庭くんが居るんだもの」

姫香の推理に口を挟んだあたしは、亜紀の言葉にねじ伏せられる。

予想外の展開で上機嫌の亜紀とは対照的に、煩わしくなるくらい重いと感じる足を引き摺りながら、あたしはのろのろと男子コートへ向かった。

男子軟式テニス部は、女子部の去年の成績を照らし合わせると、残念ながらレベルが低い。女子は県大会総合で三位だけれど、男子は六位。去年、新人戦で強豪の東雲中学と善戦したけれども及ばなかった慶の成績を含めたとしても……だ。

レベルが同等か、若しくは自分達よりも上ならば対戦する愉しみもあるのだろうけれど、成績上、明らかに差がついている男子部との練習だなんて、そもそも何のメリットがあるのかしらと思ってしまう。

うつん。これはもしかしくなくても、男子部員のメリットであって、あたし達は単に男子の練習台になっているのかも知れないわ……そう思うと、尚の事合同練習だなんて参加したくない。

——何より、慶が居るんだもの。

あたしはこの時ほど自分が慶と同じテニス部員だと言う事を後悔した事は無かった。

だって、昨日の煮物の件があつたばかりの……よりもよって次の日なんだもの。暫くは慶と顔を合わせたくないと思つていたのに。

慶に誤解されたまま、解く事さえしないで逃げ出す様に家へ帰つたあたし。誤解されて悔しかったわけじゃない。慶の心に近付きそう……届きそうだと思う度に、親友の亜紀の顔が浮かんで……どうしてもそれ以上近寄れなくなつてしまい、悲しくなつてしまう。

あたし達が男子コートに向かつたのを合図に、男子の浅井キャプテンが部員を集める。

「えー、今日から混合ダブルスの練習をする。今日から時間の半分はその練習だ」

「え——っ？」

「混合うっ？」

「ヤッタア！」

顧問の藤野先生がそう言うと、男子部員それぞれが賛否両論の反応を示す。

「女子だからって甘く見ていたら痛い目を見るぞ。練習でもトーナメント形式。試合だからその心算でいろよ?」

「ハイ!」

覇気のある短い返事が帰って来る。

女子部員の最後の方から付いて来たあたしなのに、男子部員の最前列に居た慶と視線が合ってしまい、あたしは思わずそっぽを向いた。

「おーお、男子はもうその気になっちゃってるのね」

拍子に、隣に居た姫香の横顔を見る事になったのだけど、姫香は自信ありげな眼力でもって、男子部員を挑発的に睨み付けながらそう言い、姫香の向こうで亜紀が恥ずかしそうに浅く俯いていた。

「いいなあ。俺も入りたかったなあ」

先週、自転車の事故で怪我をしてベンチ入りになってしまった門田くんが、羨ましそうにボソリと呟いた。

左足の靭帯を痛めたらしく、ぐるぐる巻きにされた白い包帯が痛々しい。

そう言えば、門田くんは慶のダブルスのペアだった事を思い出し

た。だけど、怪我の状態から、とてもじゃないけど県大会までに完治して、試合に参加出来そうには見えない。

必然的に、慶のペアが居なくなるのだけれど、先生はどうする心算なのかしら？

そんな事を考えていたら、名前を呼ばれた。

「土橋？ 居ないの？ 土橋？」

「あつ、ハイ！」

「呼ばれたら、すぐに返事をする」

「すみません」

イタタ……岡先生に怒られちゃったわ。

肩を疎めると、既に別のグループに行った姫香から『ドンマイ！』と声を掛けられてしまった。

「土橋はBチームに入って……次、遠藤」

「はい」

「同じくBチーム。次、金子……」

先生の指す場所へ移動すると、すぐ後ろから亜紀が付いて来た。

「香代、同じチームだね？ 頑張ろう」

「う、うん……」

嬉しそうな亜紀に対して、端っから気乗りしないあたしは、曖昧に言葉を濁してしまふ。

「じゃあ、次は男子のグループ分けた。浅井」

「ハイ！」

「Aチームだ。次、秋庭……」

「……」

慶に対する藤野先生の指示を聞いたあたしは、一瞬、自分の耳を疑った。

頭の中が真っ白になって時間が停まってしまう。

第82話 ダブルス…2

——神様、あんまりだわ……. よりにもよってどうしてなの？

自分のグループに歩み寄った男子部員を見て、あたしは胸が張り裂けそうになった。

「きゃー！ もうこれで勝ったも同然だよね！」

自分達のグループに遣って来た二年生の男子を見るなり、一年の女子二人が嬉しさを隠せずに、黄色い悲鳴を上げてその場でぴよんぴよん跳ねた。

亜紀も嬉しそうに微笑んでいる。

だけど、あたしは自分達のグループに遣って来た慶と、眼を合わせ事が出来ずに、ついそっぽを向いてしまった。

慶も、あたしの様子を察したのか、努めて穏やかに『宜しく』と手短に挨拶をする。

「よろしくお願いしまぁーす！」

「……します」

「……」

一年の女子二人の弾けるような明るい挨拶の後、続いて亜紀が恥

ずかしいのか慶と眼を合わせらず、ぺこりと大きくお時儀をする。

だけど、あたしはこの時、慶とは挨拶が出来なかった。

自分でもカンジ悪いって事くらい判っている。でも、今はどうしてもダメ。慶と視線を合わせたくないの。

慶はそんなあたしの態度に、少しばかり弱っていたみたいだった。

あたしと慶はお互い居辛い空気になってしまっているのに、顧問の藤野先生はそんな事はお構いなしで、次々にメンバー割りを続けて行った。

「Bチームって、ここですよね？」

「あ？ うん。ここだよ」

「ヨッシャー！ アキバセンパイのグループ！」

「……」

彼のはしゃぎ様に、慶が言葉を失っている。

あたし達のグループには、三人の一年生男子部員が振り分けられて来た。そして三人とも慶のグループだと知るや、優勝したも同然のような浮かれ方をした。

「僕が一番強いわけじゃないんだけどなあ……」

強いプレッシャーを感じたのか、慶が溜め息混じりに弱音を漏ら

した。

「ナニ言ってるんすか。センパイ」

「そうですよ」

「センパイ、ガッツす！」

三人とも、慶の弱気発言には全く退いてはいない。

なかなか心強い後輩が来てくれているじゃないの。

そう思っで感心していたら、偶然慶と視線が合ってしまった。安心してた時だったから、あたしは飛び上がりそうになり、慌ててそっぽを向いた。

「じゃあ、早速だけどペアを決めようか。先生が言っていたけど、ジャンケンでもアミダでもいいって事だし……」

グループでの自己紹介が先じゃないの？ と思ったけれども、それはあたしの態度から紹介を見合わせてしまったのかしら？

「はあゝい！ アミダがイイでえゝす」

「あ、じゃあ僕もソレで」

「うん、いいよ」

「俺も」

一年の鈴音ちゃん^{すずね}が片手を上げて発言すると、一年の男子はそれが異存なしだと同意する。

「二年の女子は？」

慶があたしと亜紀に振ったけれど、あたしはこんなだし、亜紀だって慶から呼び掛けられて恥ずかしいのか、俯いて黙っている。

それであっさりと決まってしまった。

地面に人数分の線を引き、男子と女子の名前を上下に分けて書く。そして各自がランダムに横棒を引いて、クジを完成させた。

一年生同士、二組が簡単に決まっていまい、残ったのは、一年男子一人に、あたし達二年生の女子二人。そして最後に残っている慶だ。

「残ったのはこの四人だから、ワンペア決まればすぐだね」

「あ、ああ、アタシまだもう一本線を入れてなかったわ！」

「え？」

あたしは素早く踵で、クジの中に一本の横棒を引いた。

慶は『何をするんだよ』とばかり、あたしを、見上げる。

だって……仕方が無かったの。このまま何もしないでいれば、あたしは……あたしは慶とペアを組む事になってしまうんだもの。

慶の事を想っている亜紀が居るこのチームで、彼女を差し置いてあたしが慶と組むだなんて……そんなの、あたしが平気で居られるハズが無いじゃない。それに……昨日の事だつてある。とにかく、今は慶とは顔を合わせたくないし、口だつて利きたくないの。

胸の中に大きな鉛の塊が入っているみたいだった。苦しくて、苦しくて……出来る事ならこのまま体調が優れないからとでも先生に言つて、早退しようかとまで考えた。

「香代、香代が最後に引いた線のお陰で、あたし秋庭ちゃんと組む事になっちゃった」

「良かったね」

「……うん」

慶とペアが組めると知った亜紀は、もの凄く嬉しそう。彼女のその無邪気な笑顔のお陰で、あたしは早退案を頭の中で却下する事にした。

* *

「あれ？ アキバケイ？ なんでお前が遠藤とくっついてんだ？」

「え？」

アウトコートに現れた慶と亜紀の姿に、初戦の対戦相手になった

田村くんが呆れて言った。

「お前なあー、なんで先生達が全員ごちゃ混ぜでダブルスをさせたのか判ってんのか？」

「え……？」

「お前なあ、空気読めよ。そんなに俺に勝ちたいのかよ？」

「い、いやそんな心算じゃ……」

田村くんは、亜紀が慶の事を想っているのを知っているのじゃ無かったの？ 彼が言う『ごちゃ混ぜ』チームには、二年生同士がペアになつてはいけないだなんて、一言も言っていないのに。

戸惑っている慶の傍で、亜紀がどんどん暗くなり、沈んで行くのが判った。

田村くんは、黙って俯いてしまった亜紀をチラリと横目で盗み見ると、今度は慶に向かって不敵な顔をして笑う。

「ま、けど……そのままでもいいぜ？ 俺が軽く討ち取って遣るからよ」

「あ、あの……わ、私……」

「遠藤さん、別に先生は同じ学年同士が駄目だつて言っていないから、気にする事は無いよ？」

慶の声に、亜紀が顔を上げる。

田村くんの挑発宣言に恐れを成したのか、亜紀の顔は今にも泣き出しそうだった。

「す……すみません。一年の後輩と……チェンジさせてください……」

言うなり亜紀は慶を独りコートに残して、すぐ傍の校舎に逃げ込んでしまった。

その場に居合わせた誰もが啞然とする。亜紀が交代をと言ったけど、ペアはもう既に決まっているし、慶だって今更他の子に換わって欲しいとは言い難いでしょうね。

「……」

ごめんね……亜紀。

あたし……あたし、もしかしたら余計な事をしちゃったのかな？

亜紀の直ぐ後を追いつけようと思った。けれども、こうなってしまった原因を作ってしまったのはあたしなのだという負い目が在って、この場から逃げ出す事も、亜紀を追いつける事も出来なくなつた。

「おー！ アキバケイ！ こっちはダブルスで、お前はシングルスって……ど？」

コートに独り取り残されてしまった慶に、田村くんが強気の発言をする。

慶は少し迷ったみたいだったけれども、黙って事の成り行きを見守っていた藤野先生と視線を交わして、どうしたものかとお伺いを立てているみたいだった。

藤野先生が軽く頷くのを見た慶は、コートへズイツと一歩大きく踏み出した。

「っしゃあ！ 田村あ！ この勝負……受けて立つっ！」

「おう！ そうこなくっちゃな！」

二人の遣り取りに興奮した部員全員が沸き立ち、大きなどよめきがコートを取り囲んだ。

第83話 シングルス VS ダブルス…1

三人がネットを挟んで中央に向かい合うと、慶と田村くんが一斉にあたしを見詰めた。

突然の視線に、あたしはドキリとさせられる。

「土橋、審判して」

「ええ？ あ、あたし？」

「当たり前だろ？ 一年に審判させる気か？」

「う……わ、判ったわよ……」

慶のご指名に驚いてあたしが訊き返すと、田村くんが『当然だ』とばかり強気で畳み込んだ。

亜紀が抜け出してしまった後、Bチームに残った二年生はあたしと慶だけになってしまい、あたしは審判を受け持つ事になった。けれども、田村くんのチームには他に二年の男子も女子も居るのに……なんで二人とも揃ってあたしを指名してくるのよ？

ダブルス対シングルス……そもそもこのふざけた対戦に、審判が必要だなんて思わなかったわ。

しかも、この異例のゲームは慶と田村くんの二組のチームだけじゃなくて、コート空気で控えている他のチームや、試合を始めてしま

ったチームのメンバーまでが、興味津々であたし達に熱い視線を注いでいる。

遣り辛いつたら……無いわ。

不満一杯のあたしは、三人が並んでいるネット傍にのろのろと歩み寄る。

来るのが遅かったせいか、あたしの指示を待たずに、慶と田村くんの二人が勝手に先攻・後攻を決めるトスを行い、田村くんのチームが先攻になった。

「サービスサイド、田村・川島組。レシーブサイド、秋庭。ファイブゲームマッチ、プレイボール」

あたしのコールに、どこからともなく拍手が起こり、拍手の連鎖が次々と起こる。

慶も田村くんも、まさか本気でこのゲームをする心算なのかしら……？

あたしはコールしながら、三人の表情を見比べた。

二人の実力はそれほど大きく差があるわけじゃないけれど、やはり試合を冷静にこなして行く慶の方が、田村くんよりも強い。その實力は、去年の新人戦を前に怪我を負傷したにも拘らず『自主トレ』と称して、あたしと姫香が二人に呼び出された時に見て知っている。

だけど、幾ら慶の實力があるからと言っても、田村くんには地元のジュニアテニススクールに通っている川島さんがペアでいるのに。

あたしは少しだけ不安を覚えて、軽快にスプリットステップを踏んでレシーブ体勢を構える、真剣な表情をした慶を見詰めた。

一年生の中では上位入賞を十分狙える実力の持ち主である川島さん。彼女はもしかしたら、二年生の女子よりも強いかも知れない。だけど、まだ彼女は気弱な面が残っていて、あと一息の押しが出来ないでいる。亜紀とタイプが少し似ているかも知れないわと思った。彼女が目覚めて本気を出せば、かなりの戦力が期待出来る訳だけど……

田村くんの左手から白いボールが放たれる。

長身とパワーで力強く打ち込むサーブは速い。何度見ても迫力があつて凄いと思う。だけど慶は、その重くて速いボールが一旦コートでバウンドして、まだ十分に上がり切らない状態を狙い澄まして振り抜いた。

田村くんと並んで構えていた川田さんがセオリー通りに、彼のサーブ直後前衛へ駆け寄ったけれども、彼女がそのポジションへ辿り着くよりも先に、慶の返球が彼女のすぐ右を抜き去った。

「きゃ！」

堂々と二人の間を抜いたパッシングショットに、不意を衝かれた彼女が驚いて小さく悲鳴を上げる。

強烈なサーブを打った田村くんは、体勢を立て直すのが不十分だったせいか、慶の返球速度に追い付けない。

「ゼロ、ワン」

「いいぞ〜！ アキバ！」

コートを遠巻きに囲んだ部員達が歓声を上げる。

「ゼロ、ツー」

立て続けにリターンエースを取った慶は、田村くんペアをたちまちゼロ、スリーに追い込んだ。

「何だア、しっかりしろよ田村ア！」

「良いトコ見せるよな」

「情けねーぞ！」

たった一人の慶に早くも追い込まれてしまった田村くんペアへ、二年の男子達からヤジが飛ぶ。

「遣るな、アキバケイ」

田村くんの表情が強張った。だけど直ぐに気を取り直したのか、先手を取られているにも関わらず、不敵な笑みを浮かべる。

慶は通常のペースでゲームをすれば、自分が不利になるとでも思ったのかしら。難しいタイミングのライジング返球で、田村くん達のタイミングを狂わせる戦術みたい。闇雲に田村くんの挑発に乗っ

たわけじゃなさそうだわ。慶なりに勝算があったから、このふざけたゲームを受けたのね。あたしが心配するまでも無かったかしら……？

そう思ったのも束の間だった。

川島さんが、早くも慶のタイミングを捕らえてポーチに出た。

球威に競り負けてしまい、青い空に向かって高いロブが上がる。

「いいぞ！」

彼女のポーチに、周囲から歓声が起こった。

慶はボールをしっかりと眼で追いながら、素早く落下地点へ向かって走る。

ボールは左コートの隅を突いて落下して来るが、そこには既に慶がスマッシュの体勢で待ち受けている。

「あっ！ 止めてっ」

慶のスマッシュ姿勢を嫌った田村くんが、情けない声を出した。

「田村くん、ふざけないで！」

「ヘイヘイ。今のは冗談……だって」

審判として注意すると、田村くんがふざけた受け答えをする。

「来るぞ！」

「！」

慶がラケットを素早く振り抜くと、ボールは身構えている田村くんへ向かって、矢の様に飛んで行く。

だけど詰めが甘かったのか、それとも田村くん達を侮ってしまっただのか……慶のスマッシュは、当たりが少し弱かった。

素早く反応したのはやはり川島さんだった。

さっきのリターンと同じくらい球足が速い慶のスマッシュを、積極的にポーチに出た彼女は、何とかラケットに当てる事が出来た。

ボールは彼女の差し出したフレームに当たって弾かれる。

再び高いロブが天に向かって上がった。

第84話 シングルス VS ダブルス…2

ところが、慶はネット際まで詰めていて、このイレギュラーは予想外だったみたい。

再びサービスラインまでダッシュで後退して、やっと追い付くけれども返球が甘くなる。

「戴きッ！」

余裕で待ち構えていた田村くんが一声吠えた。

ネットよりも高い打点位置で地面と平行にレベルスイングをして、素早く振り抜いた。

田村くんのリターンが、慶の左側を一直線に通過する。

殆ど回転ドライブを掛けずに強打した球足は速い。慶はボールに追い付かず、田村くん達への初ポイントを許してしまった。

「よっしゃあー！ ワンポイント！」

「ワン、スリー」

田村くんがラケットのシャフト部分を左手で握り締めて両手を上げた。自分達のゲームを見守っているみんなに向かって、気合を込めたガッツポーズを取って見せる。

けれども、慶のシングルス対田村くん達のダブルスとは、周囲

の応援エキサイト度もなんだか温度差があったみたいだった。

ぱらぱらとしか出無い拍手に、田村くんは不満一杯の顔をした。

「はああ？ ナンだよこの応援はあ？ 士気が下がっちゃうだろ」

「まあまあ……」

文句を言う田村くんへ、対戦相手の慶が宥める。

ところが、この言動が田村くんは気に入らなかったらしく、直情型の彼の闘争心を掻き立てて、火を灯させてしまったみたいだった。

元々田村くんは身体が大きくて力が強い。彼のプレースタイルは、パワーで相手を打ち負かそうとするタイプ。

ライジングでのリターンを見切った川島さんの援護もあって、田村くんは慶を打ち負かそうと直球を仕掛けて挑んで来るけれど、慶だってみすみすポイントを落とす様な事はしない。

田村くんが何度パワーで押し切ろうとしても、慶は粘り強くボールを拾ってリターンする。

何度もネットの上を白いボールが矢の様に行き来して、息詰まる力強いラリーが続いたけれども、何度目かのインパクトの瞬間、ボールを腰の辺りまで引き寄せた慶が、ラケットを水平方向じゃなくて、やや上に向かって振り抜くような変わった打ち方をした。丁度飛行機が離陸するイメージに似ている。

勢いを殺されたボールがふんわりとしたロブになったように見え

た。

待ち受けていた田村くんがリターンしようと大きくラケットをテイクバックして振り被った時、ボールは彼の予測していた落下地点よりもネット寄りに急激な角度を付けて落ち、その次の瞬間、ボールは勢い良く高く跳ね上がる。

ボールがラケットのフェース面に当たったインパクトの瞬間に、慶がドライブを掛けたのが判った。

「この！」

前へダッシュした田村くんは、走り込みながらラケットを大きく薙ぎ払おうとしたけれども、ボールが地面を蹴るように高速バウンドした為か、彼のスイングは空振りする。

「あら？」

田村くんは勢いの余りコートに引つ繰り返った。

「ゲーム・チェンジ・サイズ」

あたしはサイドとサーブスを交代するよう、コールした。

「タイム！」

川島さんが審判を務めているあたしに向かってタイムを求め、あたしは両手を上げてコールする。

彼女はペアの田村くんの居る後衛へと駆け足で走り、彼に何かを

伝える。

あたしは、ワンゲームでもう息が上がってしまったらしい慶と田村くんとを交互に観察した。

二人とも凄い汗を掻いて肩で大きく息を弾ませているけれども、どちらかと言えばダブルスの田村くんの方が、シングルスで戦っている慶よりも消耗が激しいように見える。

田村くんには川島さんと言うペアが居るにも拘らず、彼女に任せべきボールも自分一人が拾いに行っている。慶への返球も単調で、真っ直ぐのパワーショットしか返していなかった。

どんなに力強いパワーショットでも、相手が返球出来る場所へ打てば、彼の力に打ち負かされない程度の返球力さえあれば、必ずリターン出来る。

噂で田村くんは試合ではなかなか決勝に残れないと聞いていたけれど、こんな戦術なら自分からスタミナ切れして自滅するでしょうに。

あたしは心の中でそう呟いてしまった。

ところが、次のゲームが始まった途端、田村くんのプレイに変化が起こった。

さっきの川島さんが取ったタイムの時に、彼女から何かアドバイスを貰ったであろう事は、眼に見えて明らかだった。

田村くんが川島さんと声を出し合って、連携するようになったのだ。しかも、返球はことごとく慶の裏を掻くように見事に決まり始め、慶はシングルの自分のコートを前後左右、余すところなく走らされてしまい、たちまちツーゲームを落としてしまった。

「アキバー！ 根性出せ！」

「先輩！ ファイトおー！」

応援は自然と慶に集中し、大きな渦となつて試合中である他のチームや、近くで練習していた吹奏楽部、陸上部と言った他の部からも注目を集め、彼等を巻き込む。

だけど、最初のゲームで田村くんとのパワーショット攻防戦が後を引いたらしく、シングルスで立ち向かう慶には、集中力が残ってはいなかったみたいだった。

田村くんの力強いランニングショットが、『決まれ！』とばかりに慶の足元すぐ後ろへ突き刺さり、慶は身動きさえ出来なかった。

「ゲーム・セット。三対一で田村・川島ペアの勝ちです」

あたしのコールに、ゲームを見守っていたみんなから溜め息が漏れた。

初回の慶の善戦に期待していただけに、一方的な流れを絶って自分の流れへと立て直せなかった慶に軽く失望したみたい。

ネット越しに向かい合った慶と田村くんペアがお互いに頭を下げる。

「うつしゃー！　一回戦貰ったー！　アキバケイ、あんがとな」

「あ？　ああ……」

どんな試合でも勝ちも勝ち。慶に勝てたのが余程嬉しかったのか、田村くんは陽気に笑ってそう言っていると、慶に握手を求めた。慶も田村くんのはっちゃけた喜びように多少退きはしたものの、少しだけ引き攣った笑顔を浮かべて彼と握手する。

「良く遣ったぞー」

「アキバケイー、ガンバー！」

ぱらぱらと周囲から拍手が起こり、その拍手はだんだん大きくなって行く。

第85話 勇気をください！

「そっち、居た？」

「ううん、図書室には居なかったよ」

慶と田村・川島ペアの一番が始まる前、ゲームに出無かった姫香や一葉達二年の女子が先に手分けをして、居なくなった亜紀を捜していた。

あたしは審判の務めを終えると、急いで姫香達が居る亜紀の捜索グループに合流する。

「おかしいわね……家にもまだ帰っていないし、居そうな所は他に思い付かないんだけど……」

「もう一度家の人に連絡してみたら？　もしかして、行き違いになっているかも知れないし……」

「もう二回も電話を掛けてるのよ？　これ以上掛けたら、家の人をもっと心配させちゃう」先に彼女を捜していた姫香は、苛々しながらあたしの提案を遮った。「大体、何が原因だったの？　亜紀がどうして逃げ出したりしたの？」

「そ、それは……」

ゲームの審判をしていて、居なくなった亜紀を直ぐに探し出せなかったあたしは、姫香からきつい眼差しで睨まれて、思わず言葉を詰まらせた。

「最初のグループ分けからして、何か起こりそうだとは思っていたのよ。アキバケイに亜紀と香代。他にもグループがあるのに、よくもまあ一つのグループに三人が集まってしまったわね」

それはあたし達の責任じゃないし、一つのグループになってしまったあたし達の方が驚いていたくらいなもの。

「そうね。だけど文句ならグループ分けした先生に言って欲しいわ
取り敢えずの相槌を打ったけれど、姫香の言い様にムツとなった
あたしは、口を尖らせる。

「ねえ、何があつたの？」

首を巡らせて、周囲にあたし達二人しか居ない事を確認した姫香は、声を潜めて問い掛けた。

「実は……」

あたしはゲーム前のペアを決める時に遡り、姫香にはあたしが遣ったクジ引き操作の事は伏せて、事実を正直に話した。だけど、話し終えた後も姫香は釈然としない様子で、眉間を寄せてあたしの眼を見詰めた。

「本当に……それだけ？」

「え？ ……う、うん……」

在りのままを話したけれども、肝心な部分はあたしの胸の奥にし

まっている。それで負い目を感じたのか、あたしは姫香の眼を直視する事が出来なかった。

だって、みんなで一人一本ずつ線を引くルールだったし、あたしは遅れて後から引いただけだから、誰もあたしを怪しいと疑っていなかったもの。

誰もが慶とペアになりたいと思っていたみたいだったし、クジに後から線を引いた後でも、あたしは慶とは組めなかった。これが、あたしが線を後から引いた事であたしと慶がペアになったのなら、みんながあたしの事を怪しいと疑うでしょうけれど、慶とペアになったのは亜紀だもの。誰もあたしが不正をしただなんて思っただんかいなわよ。

クジ引き操作の件を話すのは余計だと思った。けれども、姫香と二人っきりで向かい合っていると、何故かあたしの良心がチクチクと痛む。

きつとそれは、姫香があたしの本当の気持ちに、あたしよりも先に早く気が付いていたからだと思った。

自分の本当の気持ちに整理が付いていないだなんて……あたしって、なんでこう……情けないのかな。

同じ年なのに、お姉さんみたいに頼り甲斐がある姫香が羨ましく思えた。

「香代？　こら、ちゃんとあたしの眼を見なさいよ」

「う、うん……」

居心地の悪さを感じたあたしに、姫香は落ち着いて……だけでも強制力のある強い口調でそう言っ、あたしの顔を覗き込む。

「ほら、香代こっち見て？」

「ん……」

姫香の顔を見上げたら、急に眼の廻りが熱くなって、彼女の顔がぼやけて見えた。

試合中は審判に夢中だったけど、今は亜紀に遣ってしまった自分の行動が気になって仕方が無い。

あたし、やつぱりあんな事……遣らなきゃ良かったのかな？ 亜紀にとつて、あたしが遣った事は、『大きなお世話』でしか無かったのかしら？

あのまま線を引かず、あたしが慶とペアを組んでいたとしても、対戦相手の田村くんから指摘されていた筈。そして多分、あたしも亜紀と同様に慶とペアは組めないからと言い出して、辞退するに決まっているわ。もしかしたら冷やかされて、亜紀みたいに逃げ出してしまったかも知れない。

あたしは自分の身代わりを亜紀にさせてしまったのかも知れない。

亜紀に嫌な思いをさせてしまったのは……あたしなのだわ。

——— 本当の事を話せば、姫香は怒り出すかも知れない。

『それで良いの?』……姫香は何度もあたしに助言してくれていたけれど、こんな話を話せば、絶交されてしまいかも知れない……そう思うと、怖くて足が震える。

自分に不利になる余計な事だから、話す必要なんか無いのよと言う気持ちと、たとえ嫌われる様な事になったとしても、素直に話さなきゃいけないと思う気持ちの板挟みになってしまい、あたしの心は大きく揺れた。

「どうしたの?」

決められないと思った時、姫香が優しい声で諭す様に声を掛けて来た。

姫香の声で、揺らいでいたあたしの心が大きく傾く。

他の子には話せなくても、姫香ならあたしの気持ちをあたしよりも理解してくれているもの。正直に話して胸の痞え^{つか}を取り除きたかったし、話した事で姫香から非難されて嫌われても、仕方の無い状況なのだから諦めようと思った。何より、友達に話せない事を、これから先ずつと背負って行かなくてはなくなる方が、あたしには重荷に感じる。

『香代? 嘘は吐いては駄目よ? 一つ吐くと、その嘘を隠そうとして、また嘘を吐いてしまう。お母さんは、香代が嘘を吐くような子になって欲しくはないわ……』姫香の優しい声を聞いて、小さかった頃にお母さんからよく言われていた言葉を思い出した。

「うん?」

「姫香、あのね……」

もしかしたらこの事が原因で、二人の親友を失ってしまうかも知れない。

神様、あたしに……勇気をください！

第86話 心の枷

「姫香、あのね……」

言えない……

それっきり、あたしの時間が停まってしまった。実際には、そんな事なんかに在り得ないのだけれども……もしかしたら、小学生の頃からの友達を、この一瞬で二人も失ってしまうかもしれないと思うと、口元が強張ってしまい言い出せない。

心の中で、どんなに神様をお願いしても、あと一步を踏み出す勇気が湧いて来ない。

「どうしたの？ 香代？」

「……」

急に口を閉ざし俯いてしまったあたしを訝り、姫香があたしの顔に自分の顔を近付けて来た。姫香の澄んだ黒い瞳が、真っ直ぐにあたしの眼を見詰める。

「何か……あつたの？ ううん。あつたんだよね？ それって香代も関係してるんでしょう？ それで言い出せないの？」

「う……」

「怒らないから話してくれる？ もしかしたら、あたしの予想が当たっているかも知れないから」

「姫香……」

「大体、何年香代と付き合っていると思っているのよ。大丈夫。何が在っても絶対に怒らないから言ってみて？」

姫香から優しく諭されて、急に心の中で堅く縛っていた紐が緩んだ気がした。

亜紀は慶の事をずっと今でも想っている。その事を知っているあたしは、自分が慶とペアになりそうだったから、亜紀と慶が組めるようにクジを操作したけれども、田村くんから指摘されて試合を放棄してしまったのだと素直に話した。

「そう……それで亜紀が居なくなっちゃったのね」

低いトーンでそつと話すあたしの言葉に、姫香は静かに耳を傾けてくれる。だけでも、姫香の表情は、困っているのか怒っているのか、あたしにはよく判らなかった。

彼女を信頼して総てを正直に話したあたしは、それでもまだ自分が喋ってしまった事を、これで本当に良かったのだろうか、言っただけじゃなかったのじゃないかしらと、寄せては返す波の様に揺れ動いている。そして、あの時、もっと他に遣り様が無かったのかしらとも思った。冷静になつて考えれば、もう一度クジを引き直す方法だつてあつたかも知れないのに。

「あたし、大きなお世話を遣っちゃったのかなあ……」

姫香に問い直したけれども、彼女からの即答は帰って来なかった。

彼女の沈黙が息苦しく感じられ、せつかく動き始めたあたしの時間が、再び止まりそうになる。

姫香の沈黙が、あたしには彼女の肯定に思えて……それが彼女から無言の非難を受けてしまった気がして辛くなる。

だけど、本当の事なんだもの。

暫く姫香は黙り込み、遠い目をして何かを考え込んでいた様子だったけれども、やがて縋る様なあたしの視線に気付いたのか、ふと表情を和らげた。

「香代……もう自分の気持ちに嘘を吐くの、止めない？」

「え？ 何のこ……」

「今までだって、もう何度もあたしは言っているのよ？ 少しは成長しなさいよ」

「……」

言い掛けたあたしの言葉に被る様に、姫香は少し強い口調でそう言った。

彼女が何を言いたいのかが直ぐに判り、あたしは軽く息を飲み、言葉を失う。

「あ？ ゴメン。言い方が悪かったわね。自分の気持ちにもっと素直になりなよ……」って言えば良いのかな」

「す……素直だよ？」

だから、亜紀と慶がペアになる様に細工したんだもの。

「それは亜紀の気持ちを香代が知っていたからでしょ？ そうじゃなくって、香代の本当の気持ちなの。この先ずっと、亜紀の顔を窺って行く心算なの？」

「窺うだなんて、そんな……」

「あたしが亜紀だったら、そんな気を遣ってくれる方が却って迷惑だわ」

「姫……香？」

「だってそうじゃない？ あたしにはモロ判りなもの。好きなんですよ？ アキバケイの事」

「んな……」

身構える余裕も無い直球ストライクの姫香の言葉に、あたしは驚いて反論さえ出来ない。

「確かに、小学生の頃の『好き』と、今の『好き』は意味が少し違っているんだけど……ね。それでも香代はアキバケイが好きなんですよ？ 隠したって無駄なんだからね」

「なんで……？」

「そりゃあ友達だもの。ずっと傍に付いていれば、香代の考えている事くらい判るわよ。ついでに、あの単純鈍感なアキバケイも、亜紀じゃなくて香代を見ているってコト。香代よりもブレてないよ。アキバケイは」

「……」

「良い？ もうこれ以上あたしに語らせないでよねッ！ 親友想いはありがたいけど、自分の気持ちを抑えちゃって……最初はそんな心算じゃ無かったのかも知れないでしょうけど、ここ最近の香代を見てると……ああもう！ 傍^{ハタ}から見ていて苛々するのよ。香代？ そんなのじゃいつまで経ってもアンタは変わらないよ？ 自分が幸せになれないのに、他人に幸せを押しつけようとしたりしないでよ」

勢いで一気に畳み掛けて来た姫香は、そう言った後であたしに聞こえる様に『あゝスッキリした』と付け加える。

確かに、今のあたしは自分でも変だと思う。だから、昔の頃のあたしに戻りたいと想ったりしたのかしら……？

「亜紀だって、香代がアキバケイの事を好きだと知っている筈よ？ あの子、一見おっとりしてるけど、そんなに馬鹿じゃないもの」

「姫香……」

「あたしを誰だと思ってるのよ？」

姫香はそう言って自分の胸をポンと叩いた。

第87話 親友…1

姫香の言葉に励まされたあたしは、思わず心が緩んでしまった。

めめめする心算は無かったのに、急に眼頭が熱くなったと思ったら、顔を顰めていないのに大粒の涙がぼろぼろと毀れて、乾いた膝の上に滴り落ちる。

「まあ……最初は自分達の事ばかり考えてて、香代の気持ちを踏み躪るような事をしちゃったから、こうなっちゃったんだよね。あたし達が悪いのもあったんだけどさ」そして姫香は少し照れた。「……べつ、別に『鞍替え』したワケじゃないわよ？ たつ、たまたま恭介と気が合っちゃったから。でも恭介と一緒にいると、なんだか香代と亜紀に申し訳ない気がしちゃってさ」

「どうして？ 姫香は田村ちゃんと上手く行ってるじゃない？」

「そりゃあまあ……でも『自分達だけが上手く行ってる』のって、居心地が悪いものなのよ。しかも昔はあたしだってアキバケイの事を想っていたんだし、他人事じゃなかったもの」

「そうなの？」

「『そうなの？』って、香代、あんたねー」あたしの問い掛けるような視線を意識した姫香は、肩を落として呟いた。「まあ、確かに義理チョコを多量に撒いて、本命を隠していたから、印象薄いのかもだけどねー」

姫香はそう言って、手当たりしだいに男子を物色していた事を反

省するみたいに照れ笑いをする。

うん。知ってたよ。

口では知らなかったような言い方をしたけれども、姫香が慶の事を意識していた事くらい判ってた。だけど、あたしは慶との……男の子との友情よりも、女の子同士の友情を大切にしたかったの。いつまでもみんなと仲良しでいたかったんだもの。

慶と距離を置いてしまったきっかけは、姫香と亜紀に冷やかされた感が強くて、つい反発して慶に冷たくしてしまったから。けど、女の子同士なら、男の子には話せない事だって相談出来るし……

そこまで考えると、あたしは何か違和感みたいなものを感じてしまった。だって、今は慶と少し距離を置いてしまったから喋れなくなっちゃったけれども、そうじゃなかったら……慶と距離を置かずに、昔のままの友達付き合いを続けていれば、心強い異性の相談相手になってくれたのかしら？ そんな疑問が湧き起こる。

あたしの中で、幼い慶との思い出がどんどん掘り起こされ、膨れ上がって来た。

利き手を注意されて泣き出した慶を庇って、先生に言い返したあたし。お遊戯会で突然台詞を忘れて半ベソを掻いてしまった慶に、舞台の裾から小声で教えてあげた事。夜店でヨーヨー風船や、金魚すくいが上手に出来なくて、一つも獲れなかった慶の代わりに、慶の分まで獲ってあげた事……

て、どれを思い出しても、結局あたしが慶のフォローばかり遣っ

ていたのだったわ。

その慶が、暫く見ないうちに見違えるくらいしっかりして、今じや後輩から頼りにされちゃっているんだもの。

あたしは、少しだけ損な役を必然的にさせられちゃったのかしら？　そう思うと、なんだかガツカリしてしまうけれども、今のしっかり者の慶が居るのは、もしかしたら、あたしが慶と距離を置いたからなのかも知れないわ……とも思うのよね。

「ねえ、姫香」

「なに？」

「小さい頃の『好き』って、違って来るものなの？」

「よく判らないけど、少なくともその『好き』が成長して行くに連れて細かく分かれて行くでしょ？　だから男子の友達や、友達以上だけど彼氏未満の存在になったり、彼氏になったりするのじゃないの？」

「彼氏……未満」

姫香の言葉が妙にあたしの心の中に響く。

「ああ、気にしなくても人それぞれだから」

オウム返しに言ったあたしの言葉に、姫香は慌てて言葉を足した。

「『彼氏』って言えるのは、これは片一方だけがそう想っていても駄目なのよ。相手の気持ちが在ったの事だから……だから、アキバケイの事を亜紀がどんなに好きでも、あやつはちっとも亜紀に靡いていないでしょ？」

「慶の気持ち……それがあたしに向かつてるって言うの？」

「そうよ。だって、アイツ、部活で暇さえあれば香代の事見ているんだもの。大バレだわ。単純って言うか……判り易いのよ」

「ちょ！」

視界に映った人の姿に、慌てて姫香の口を塞ごうとしたけれど、遅かった。

偶然、あたし達が居た第三校舎の一階フロアへと階段を降りて来たのは、試合放棄して逃げ出した亜紀。何人もの部員が手分けして探していたのに中々探し出せなかったのは、どうやら校舎の屋上に隠れていたらしい。

泣き腫らして真っ赤になった亜紀の顔が痛々しく見える。

「……」

姫香も亜紀の姿を見て、しまったと言う顔をした。

亜紀は一言も喋らずにあたし達から顔を逸らせると、女子の部室へ向かって走り去る。

「どうしよう……い、今の話、聞かれちゃった」

「仕方が無いわよ。遅かれ早かれ、こうなる事は判っていたんだもの。亜紀だってもっと前から判っていたはずよ？」

「そんな……」

慌てるあたしとは対照的に、姫香は意外と冷静に落ち着いている。

「香代、待つて！」

追い掛けようとしたあたしを、姫香が腕を掴んで引き戻す。

「だからって……」

「香代、あんたね、その八方美人なトコロは止しなさいって言うの」

「そんな事ない！」

あたしはきつぱりと言い捨てて、姫香の手を振り払った。

姫香に言われなくても……他の誰かから言われなくても、あたしはもう自分の気持ちに気付いていた。

以前の様に、慶と普通に一緒に居られて、普通に会話をしたいとそう願っていた事に気付いた時点で。

今更どうして慶の事が気になって仕方が無いのかを考えれば、答えはたった一つに行き当たるもの。だけど、友達の亜紀の切ない想いを知っていたあたしには、彼女の気持ちを踏み付けるような事は

出来なかった。亜紀だって、大切なあたしの友達なんだから。

第88話 親友…2

「亜紀……」

彼女は体操服姿のまま、慌ただしくロッカーの中に入れていた制服と荷物を引き出し、それを両腕で抱えると、入り口ドアの所で突っ立っていたあたしを無視して、逃げるように部室から出て行くとした。

「亜紀、待って！」

彼女を引き留めようとしたけれど、続く言葉が出て来ない。

一瞬、呼ばれた亜紀が踏みとどまって顔を上げ、あたしと視線が合った。

つぶらな眼に今にも溢れてしまいそうな涙を一杯に溜め込んだ、そんな亜紀の顔を見た瞬間、あたしはハッと息を飲み、言葉を失くしてしまった。

「『アイツ、部活で暇さえあれば香代の事見ているんだもの』」

頭の中で、姫香がさっき言った言葉が鮮明に蘇る。

姫香からあんな事を言われてしまったのだもの。あたしだって預期していなかった言葉だったし、『靡かない』だなんて言われた亜紀にとっては尚更ショックだったと思う。必死になつて涙を堪えているのに、それをあたしが引き留めるのは気が引けたし、今はそっ

としてあげなくちゃいけないのだと思った。

「……ごめん、亜紀……あの……」

あああ、そうじゃないわよ。なんでこんな時にあたしは謝ったりしているの？

彼女の涙を見た瞬間、勝手に口が動いた。それは今まであたしが薄々自分の本当の気持ちを知らながら自分にずっと嘘を吐いて、亜紀や姫香達を騙していたからなのかも知れない。

だけど、仲良くしてくれている彼女達から、進んで笑顔を奪う様な真似はしたくなかった。結果としていつまでもウジウジしてしまい、姫香や亜紀を混乱させてしまったけど……

『もう、終わりなんかじゃ……ないよね？ だって、あたし達……あたし達友達なんだもん！』そう口に出して言えば良かったのかも知れない。でも、あたしは何も言えなかった。何か気の利いた言葉を掛けてあげたいと思ったのに、何も……

「……」

亜紀はあたしの縋る様な視線を振り切ると、そのまま部室から走って出て行ってしまった。

「香代？ 亜紀は？」

遅ればせながら姫香があたしに追い付いた。

姫香は何も起こらなかったように、努めて冷静に声を掛けてくれる。だけど、それは姫香が気を利かせてわざとそんな態度を取ってくれていたのだと判った。遅れて来たのも、多分あたしと亜紀を二人つきりにする為に時間を稼いでくれていたからなのだと思うた。

「……」

肩を落として頂垂れたあたしは、姫香の声に反応してゆっくりと首を横に振る。

「帰っちゃったのかあ……まあ、聞かれちゃったのはマズかったし、本人はシヨックだろうから仕方無いわよね」

「そんな言い方止めてよ」

「ごめん」

あたしは亜紀を引き留める事が出来なくて、自分でもどうしようも無いくらい苛々していた。彼女はあたしに気を遣ってそう言ってくれたのに。姫香に当たるだなんてお門違いだって判ってる。

判ってるのに……

悪いのはあたしだ。

姫香が慶の事をあんな所で言い出したから、偶然亜紀に聞かれました。だけどその話題だって、大元を辿れば……いい加減で曖昧な態度を取っていたあたしがいつまでも自分の気持ちをはぐらかしていたからなんだもの。

いつもは三人で一緒に居たけれど、さっきは亜紀が丁度居なくて二人つきりになれたから、それとなく姫香が忠告してくれていたのに、あたしが気付かない振りをしていたから……ううん、それはもつとずつと前からだった。けどあたしは素直になれなくて……

どうしよう。亜紀、きつと怒っているんだろうな。

今まで慶の事を一筋に想い続けていたんだもの。それをあんな風に姫香から言い切られて……あんな事を聞かされれば、誰だって自分が引き立て役だわと思ってしまっわよ。あたしが亜紀の立場だったら、その場で怒り出すかも知れないわ。

亜紀が先に帰ってしまった後、あたしと姫香は亜紀を捜してくれていた他の子達とコートへ戻り、いつも通りのメニューを淡々とこなしてその日の練習は終わった。

ああ、明日から亜紀にどんな顔をして会えば良いのか判らなくなつたわ。

あたしは沈んでしまった気持ちと同じく、重い足取りで帰宅の途に就いた。途中まで姫香や一葉達と一緒にだったけれど、みんな亜紀の事を心配しているみたいで、誰もが重く口を閉ざしてしまい沈んだ気持ちが益々沈んでしまった。

* *

ふと空を見上げると、明るい空に霞みが掛かった白い月がぼんや

りと浮かんでいる。

お天気予報のテレビでは、日本列島に梅雨前線が近付いて来ていると言っていただけあって、流石に今日は湿度が高くて蒸し暑い。

見上げた視線を左下に落とすと、もうお隣の慶の家が眼の前に見える所まで帰って来ていた。

あたしの家は、住宅街を地区別けされる広い通りから一軒飛ばしたその奥に建っている。飛ばして通り過ぎた一軒――が慶の家で、あたしは家に辿り着く為には必然的に慶の家を廻り込まないと帰れない。

慶のお母さんが入院してからと言うものの、美咲姉さんが早く帰宅する事は無かったらしくて、うちと同じく慶の家もいつも電気が消えて暗くなっていた。

あたしにはそれが凄く不自然に思えて仕方なかった。慶の家の明かりは点いているのが当たり前。慶のお母さんが居て、それが当たり前だと思っていたから。

ところが、今日はもう明かりが灯っていた。

確か慶は先生に呼ばれて居残っていたから、あたしよりも先に帰ったりするはずは無いのだけれど……と思ったら、駐車場に大きな黒いバイクが停めてある。

そのバイクは、普段あたしが眼にする『原付バイク』とは大きさもデザインも全く違っていた。

慶のお父さんも美咲姉さんも車だし、一体誰がこんな大きなバイクに乗って来たのかしら？

見慣れないバイクを眼にして、あたしは少しだけ不安になり怖くなってしまった。

慶の家からいつもとは違う雰囲気を感じたあたしは、自宅に辿り着いた時も驚いてしまった。だって、いつもならあたしが一番最初に家に帰って来るのに、慶の家と同じく家の電気が点いているんだもの。

「ただいまー」

「お帰り」

「どうしたの？ 今日」

あたしを迎えてくれたお母さんは、余所行きのスーツ姿に着替えていた。

第89話 親友…3

「会社の人が事故に遭ったの。カブでお得意様を廻っていて、その帰りにね」

悩んでいたあたしは、事故の話を聞いてしまい悪い予感に襲われた。

これは良く無い前兆かもしれないわと思って顔を強張らせると、あたしの顔を見たお母さんが、ふと表情を和らげる。

「大丈夫よ。カブは酷く壊れちゃったらしいけど、本人の意識はしっかりあるそうだから。会社へ『心配しないで』って連絡があつたそうなもの。でも、お母さんはその人にいつもお世話になっているの。だから、これからお見舞いに行くね」

「カブって？」

「ああ、銀行や郵便局の人が乗っているビジネスバイクよ。お得意様を訪ねて行くには必要だから。でもね、乗る人がどんなに安全運転をしていても、事故に巻き込まれてしまう事だってあるわ。それは車やバイクだけじゃなくて、徒歩で登下校している香代だってそうなのよ。お母さん、本当はいつも香代が無事に学校から帰ってくるように、心の中で祈っているんだから」

「あ、あたしなら大丈夫よ」

急にあたしに話を振られて、気恥しくなった。

無事に学校から帰って来ているのかを、毎日心配してお祈りしてくれているだなんて……そんな事、あたしは思い付きさえしなかったもの。毎日無事に帰って来るのが当たり前だと思っていたし、お母さんだってそれが当然だと思っているものだと思っていたから。

普段口にならない言葉をお母さんが言った事で、得体の知れない不安に悩んでいたあたしの心が少しだけ温かくなった気がした。

「どうかしたの？」

「え？ う、ううん。それでいつもより早く帰ったのね？」

本当はお母さんに、亜紀との事を相談に乗って貰いたかった。だけど、お母さんだって今は大変なんだからと、自分に言い聞かせる事にする。

「そうよ。だからお留守番宜しくね。九時頃にはお父さんが帰るそうだから」

「判った」

出掛ける為の身支度をしているお母さんを一階に残して、あたしは二階の自分の部屋へ階段をのそのそと上がって行った。

あたしの事を気遣ってくれているお母さんの心を知って嬉しくなり、あたしの気持ちがいさだけ軽くなっても、それだけでは気分が晴れたりしなかった。

やっぱりあたしは亜紀の事が気になって仕方が無い。でも、どん

なに心から謝っても、きつと亜紀は許してはくれないだろうと思った。もしかしたら、テニス部も辞めてしまうかも知れない。

だって、亜紀は表向きには『積極性を持ちたいから』って言うていたけど、本当は慶が軟式テニスをしているから、慶に少しでも近付きたいと思って入部したんだもの。

元々肌の色が白くて、他の女の子よりも運動オンチな所があった亜紀だったけれども、一生懸命練習には参加したし、地元の短期間テニススクールがあると聞けば、可能な限り参加していたそう。その甲斐^{かい}あって、今では部員の女の子とほぼ同じレベルになっている。日焼け止めでも底い切れない日差しのお陰で、白い肌は真っ赤に日焼けしていても痛そうだったけれども、それだけ亜紀が熱心に練習していたからなのだと判る。

反射神経は他の子達より少しばかり^{おぼつか}覚束なくても、彼女は常に冷静に試合の流れと対戦相手の癖や性格を素早く読み取り、分析する力が優れている。どちらかと言えば心理戦に強い。ミニゲームを遣っても、相手に簡単には勝ちを譲らない粘り強いゲームをするタイプで、見習うべき所が沢山ある。あたし達女子部に居て貰いたいタイプの部員だし、もちろんあたしにはかけがえの無い大切な友達。

なのに、なのに……

あたしは亜紀に部活を辞めるよう、仕向けてしまったのかも知れない……

どうしよう……大切な友達を、傷付けちゃった……

居た堪れないほどの罪悪感を覚えて、苦しい想いが込み上げて来

る。

あたしは手にしていたカバンをベッドの上に放り投げると、そのまま自分の身体をベッドの上に投げ出して、何も無い天井を見詰めた。

「ああ、それから、慶ちゃんのお母さん、明日の午後に手術をするそうよ」

二階に上がったあたしに聞こえるように、お母さんは声を張り上げる。

あたしは驚いて半身をがばつと起こす。

「連絡、あったの？」

「ええ。明日は仕事を抜けられない用があつて、どうしても休めないの。仕事が終わればその足で慶ちゃんのお母さんの所へ行く心算だから、遅くなるわ」

その後でお母さんは『二日も続けて帰りが遅くなつて悪いわね』と付け加えた。でも場合が場合だもの。お母さんがお世話になつていた人のお見舞いに行くのも、慶のお母さんの様子に気がなつて遅くなるのも仕方が無いわ。

「判つた」

いつもなら『遅くなる』イコールあたしの不満や文句だったのに、素直に返事をしたあたしに対して、お母さんは少し驚いていたみた

いだった。

「台所に香代とお父さんの分のお弁当を買って来ているから……それで良い？」

「うん」

だって、もう買って来ているのでしょうか？ 良いも悪いも無いわ。お母さんだって、自分の支度で忙しいのに。ご飯を作っている暇なんて無いでしょう？ ちゃんとした理由があるのなら、あたしだって晩ご飯くらい……もう小学生じゃないんだから。ちょっとおかずだって出来るし、電子レンジのお世話やコンビニのお弁当のお世話だって仕方ないもの。平気よ。

……慶にあげた筈の煮物は失敗しちゃったけど……ね。

「じゃあ、行くね」

その声は、あたしの返事に安心してくれたみたいだった。

お母さんが玄関で靴を履いている気配がする。

「あ、お母さん」

ふと、慶の庭の駐車場に停めてあったバイクの事が気になって、先に帰っていたお母さんがお隣の事で何か知っていないかと思い、急いで階段を駆け降りた。

「どうしたの？ 急に降りて来て」

「あ、ねえ、お隣に停めているバイクって、美咲姉さんの？」

「違うわよ。美咲ちゃんの彼氏の方でしょう？　なに言っているの。美咲ちゃんはある大きなバイクの免許は持っていないわよ」

「あ……そうなんだ」

「じゃあ、今度こそ行くから」

「うん。行つてらっしゃい」

お母さんから、お隣の大きなバイクの持ち主が美咲姉さんの彼氏だと聞かされて、内心ホツとした。同時に、お母さんが口にした『彼氏』と言う言葉が妙に心の奥に引つ掛かる。

一昨年、美咲姉さんおとしから好きな男の人が出来たのだと聞いていた。でも、あの時は確かまだ、美咲姉さんの一方的な片思いだと言っていたけれど、その片想いのお相手が、もしかしてあのバイクの持ち主なのかしら……？

あたしとしては、そうであつて欲しいなと思った。

第90話 お隣の窓

二階にあるあたしの部屋の窓を開けると、眼の前には美咲姉さんの部屋があつて、その奥に慶の部屋がある。でも、確かずっと前……お隣の慶の家族が引越して来てまだ間もなかった頃、今の美咲姉さんの部屋が慶の部屋だった。

新しく出来たお隣さんのお友達に、お互いが嬉しくなつて、いつまでも窓を開けて話し込んでいたっけ……

幼稚園の先生が、先生の集まる部屋にあるストーブで焼き芋を作つて食べていた事とか、園内の小さな池に園長先生が落つこちそうになつたのを見てしまったとか、ご近所で飼われている三毛猫が赤ちゃんを産んだとか……同じ組なのに、あたしが知らなかった事や、慶が知らなかった事……そんな他愛もない発見や出来事を、毎日飽きもせずにこの窓を通して話していたのだけ。

だけど、いつの間にかお隣の部屋には見慣れた青いカーテンからピンク色のカーテンに――美咲姉さんの部屋に変わっていた。いつもなら窓を開けてあたしが声を掛ければ、慶が自分の部屋から顔を出してくれていたのに。

あたしが亜紀や姫香と出逢つて慶に冷たくし始めたのも、確かその頃だったと思う。

気になつてお母さんに尋ねたら、慶が自分から部屋を交換して欲しいと美咲姉さんに頼んだのだそう。お母さんは、直接慶から部屋を替えて貰つた理由を聞いたわけじゃないけれども、慶は男の子だから、そんなにいつまでもお隣同士で居るのが嫌と言うか、気恥し

くなってしまったのじゃないかしらと言っていた。

確かに、あたしだって慶と付き合っていると誤解されて妙な噂をされたし、嫌な想いも一杯した。今思えば、そんな嫌な想いをしていたのは本当にあたし一人だったのかしら？　もしかしたら、慶だって男子からあたしと同じ眼に遭わされていたのかも知れない。もし、そうだったとしたら、嫌な眼に遭うのがこの世の中にあたし一人つきりで、あたしはなんて不幸なんだろう……だなんて、独りで悲劇のヒロインを演じてしまった。

だって、慶は何にも言わなかったし……

「……」

うつん。慶は『言わなかった』のじゃない。『言えなかった』んだ。あたしよりも内気で大人しい慶が、廻りから冷やかされて嫌な想いをしたって事を直接あたしに言って傷付けるような事なんか……するような子じゃないもの。

何気なく落した視線の先には、白いシャツと学生ズボンを穿いた慶が家の門の外に立っていて、こちらを見上げていた。

辺りはもう薄暗くなっていて、そこに居るのが慶だと判るのに数分掛った。いつから慶がそこに居てあたしを見ていたのか、それさえも判らない。ただ、慶があたしを見ていた事実だけは理解出来た。

「や……やあ、香代早かったね」

「な、なに言ってるの？　先に女子が帰ったの知ってるでしょ？」

慶の事を想っていた時に現れた本人と、予想以上に噛み合わなくて余所々しい慶の会話に居心地が悪くなってしまい、あたしは思わずその場から逃げ出そうとして、開けていた窓の縁に手を掛けた。

「あ、待つて！」

「？」

急に声を上げた慶に驚いて、あたしの動きが止まる。

「あの、そっその……」

「なに？ 言いたい事があるのならハッキリ言って」

「……その……」

引き留めておきながら、もじもじして煮え切らない慶を見ているうちに、あたしの苛々が大きくなる。

『もうこれ以上引き留めないで』と口にした時だった。

「あのっ、こっ、この間の筈……あっ、ありがとう」

「……」

『筈』と聞いた瞬間、あたしの時間が止まった。

慶はあたしの様子を気遣ってか、妙にどもっている。それでも何とかあたしにお礼を伝えようと努力してくれているのが痛いくらいあたしには判った。

一生懸命作った心算だったのに、あの後家で食べた筍の煮物はお母さんから特に不評で調理方法を嚴重に注意されてしまった……あたしにとっては失敗作。汚点だと言っても過言じゃ無いモノなのよ？

なのに、それを『ありがとう』だなんて……言ってくれるだなんて。

「まだお礼を香代に言っ てなかったから……あれ、香代が作ってくれたんだよね？ あの時『おばさんが作った』ってこっちが勝手に誤解しちゃって……その……ごめん」

「な……な……なにを言い出すのよ」

「でも、嬉しかったよ。ありがとう」

やっとお礼が言えて肩の荷が降りたらしい。それまで言い難そうだった慶がにつこりと微笑んだ。そして自宅の門を開けて家の中へと消えて行く。途中、あたしと同じく庭に停めてある黒いバイクを眼にして少し驚いた様子だった。

——『ありがとう』

そう言っ て笑った慶の笑顔が、あたしの脳裏に蘇った幼かった頃の慶の笑顔とダブっ て見えた。

身体は大きくなっ てしまっ たけれども、慶の心は昔と変わっ てい

ないわと思った。素直で不器用で何かが付きそうなくらいに正直で……

慶にあたしが作ったって事がばれてしまった。って言うよりも、その日のうちに慶が勝手に誤解しちゃったって事を知っちゃったでしょうに。

失敗作をあげた事を再び思い出してしまい、その上お礼を言われてしまったあたしは、猛烈に恥ずかしくなった。両頬から火が出そうなくらいもの凄く熱い。

この恥ずかしい気持ちは、失敗作の出来事を思い出してしまったから？ それとも慶からお礼を言って貰えたから？ どっちなのかしら？

その日、お隣に停めてあったバイクが帰る事はなかった。次の日の朝、起きてお隣の庭を覗き込んだあたしは、一晩中停まっていた黒いバイクの事が気になって仕方が無い。

ああ、亜紀の事だってまだ全然解決出来ていないし、今日は慶のお母さんの手術が午後にあるって言うのに……考えが纏^{まと}まらないわ。

第91話 誤解

あたしは亜紀にどんな顔をして会えば良いのか判らないまま、とうとう次の日の朝を迎えてしまった。

一晩中、亜紀の事が気になり、そしてお隣の慶や手術を受ける慶のお母さんの事や、お隣の駐車場に停めていた黒いバイクの事が気になって、夢現ゆめうつにあれこれと浮かんでは消え、消えては浮かびしてしまい、あたしは殆ど眠る事が出来なかった。

昨日の出来事が、本当はみんな夢だったのなら良かったのにとさえ願ってしまう。そうだったのなら、あたしはいつもと変わらない穏やかな日々を迎える事が出来るのに。

だけど、その望みは儚く消えてしまった。

「おはよう……」

「おはよう。どうしたの？ 元気、無いわね…… ああ、遠藤さんがまだ来ていないから？」

沈んだ声で挨拶をしたあたしに、先に来て他の子と楽しそうに話をしていた一葉が不思議そうな顔をして声を掛けて来たけれども、彼女は直ぐにその理由を見付けたのかそう言った。

「え？ 亜紀、まだ来ていないの？」

いつもなら、あたしよりも先に登校している亜紀が居るはずなのに……

「まあ、部員みんなに多少の迷惑を掛けちゃった『あの後』の次の日だし、来れ無くなっても仕方ないわよね」

「……」

一葉は、亜紀が昨日の部活で逃げ出した事を言っているのだと判った。でも、あたしは返す言葉が出て来ない。

彼女を捜す為に、二年の女子の殆どが練習を中断させられた。中々見付からない亜紀を、もう先に帰ったのだと決め付けて、時間の無駄だと迷惑がっていた子達も何人か居たもの。

まだ登校して来ない亜紀の心中を察したあたしは、急に胸に大きな石を詰まらせたみたいに塞がって、苦しくなった。

何も言えなくなったあたしは、思わず一葉達から視線を逸らせて俯いてしまう。

「どうしたの？ 何かあったの？ 元気だけじゃなくて、顔色も良くないわよ」

「う……うっん。何でも……昨夜よく眠れなかったから……」

曖昧な笑みを無理矢理浮かべる。

いつもと違うあたしを見て、一葉が心配してくれる。彼女の心配りは嬉しいけれども、亜紀を追い詰めてしまったのは、余計なお節介をしてしまったあたしだ。あたしがあんな事を遣らなければ、彼女に辛い想いをさせたりはしなかったのに……だけど、あのままで

あたしがクジに『余計な操作』を加えなければ、あたしは慶とペアになって田村くんから……

本当は、あの時結果がどちらに傾いたとしても、恥ずかしくて嫌だったんだもの。

「あのさ、あたしは別のグループだったから詳しくは知らないんだけど、遠藤さんがアキバケイとペアったのを、田村のアホが冷やかしたからあんな事になっちゃったんだよね？」

「う、うん……」

思い出したくも無い昨日の出来事を彼女の方から切り出されて、居心地が悪くなったあたしは直ぐにこの場から逃げ出そうかと真剣に考えてしまった。

「全くう。昨日の組み合わせは昨日だけの限定だったのに。あの馬鹿だったら……本っ当に子供なんだから」

「え？」

『限……定』？

一葉の言葉に驚いたあたしは、思わず顔を上げて彼女を見詰め直す。

「『期間中、グループ内の全員とペアになるよう一巡する』って藤野先生が言っていたわよ。まあ、あの時はグループ分け直後でみんながざわざわしていたから、藤野先生の声が届いていなかったグループもあったみたいけどね。だから、別に二年どうしてペアにな

ろつが、三年どうしてペアになるろつが、男女ペアの練習期間が続く限り関係無かつたのに……」

「そんな……」

じゃあ、あたしが遣つた事は……

「あれ？ 香代は藤野先生の説明が聞こえなかったの？」

「うん」

「ああそうなんだ。じゃああの田村にも聞こえていなかったって可能性が高いわね。だけど二年生にもなって、田村ってば考えるコトが幼稚なのよ。冷やかされた遠藤さんにも同情しちゃうし、アキバケイだって迷惑な話よね。無理矢理シングルス対ダブルスをさせられちゃってさ。外野は結構盛り上がっちゃって楽しかったらしいけど、アキバケイ本人は堪らないわよ。帰り、ボロボロだったわよ。今日はまだ来ていないみたいだけど……」

一葉はそう言って、ぐるっと教室内を見廻して慶の姿を捜した。

「変ね。いつもならもうとっくに来ているのに」

慶は来ないだろうと思った。だって、今日はお母さんの手術がある大切な日なんだもの。

そう思っていたあたしは、聞き覚えのある男子の声に驚いて、声が聞こえた教室の入り口へと振り返った。

「おう、はよッス！ なんだあ？ おまい、昨日のゲームが応えた

のか？ 元気がねーぞ」

教室で先に席に着いていた門田くんが、慶の姿を見付けて声を掛けると、慶はくたびれた笑顔を浮かべた。

「はあ？ なんなの？ 誰かさんと同じじゃない」

一葉があたしと同じだと言って、苦笑する。

慶が学校に来た事自体、あたしにとっては意外だった。てつきり慶はお母さんの手術に付き合っつて、学校を休む心算だろうと思っつていたのに。だけど……ああ、確か午後からの手術だとお母さんが言っつていたから、午前中は授業に出る事にしたのかな。

慶が学校に来た事に納得出来ても、あたしの心は少しも晴れたりしなかつた。だって、亜紀がまだ遣つて来ないんだもの。

昨日の混合ペアの事で、一葉達が亜紀を可哀想だと同情していても、彼女はきつと今日は来ないと思つた。彼女を傷付けたのは田村くんじゃなくて、本当はあたしが傷付けてしまったのだから。

こんな時、あたしはどうすれば……どうしたら良いの？

あの時一緒に居た姫香は別のクラス。今から彼女の居る一組に行つたとしても、話している時間がもう無いし、他のクラスの事だから、一時限目から教室移動して会えない可能性だつてある。

それに、姫香ともしも話せたとしても……それでも以前から、姫香はあたしの態度に苛々していたのは判つてゐる。だから昨日あんなにハッキリとあたしに注意と言うか……警告をしてくれたの

に。それが原因で、亜紀を傷付けてしまったんだもの。今更どうしようだなんて、相談なんか出来やしないわ。

第92話 運命の女神様…1

> i 3 3 7 7 1 — 3 1 6 <

姫香と言う頼れる相談相手を失ってしまったと思い込んだあたしは、自分ではどうする事も出来ないくらいの堪らない不安感を抱え込んでしまった。

あたしの嫌な予感は的中して、始業時間が来ても亜紀は教室へ姿を見せなかったのだ。

彼女の事をホームルームの時に、先生から『遠藤さんはお休みです』と言う短い言葉で片付けられてしまい、堪らない不安感は益々現実のものとなってあたしの心を締め付ける。

心配になったあたしは、職員室まで足を運んでクラス担任の石田先生を訪ねて行くと、亜紀は昨夜遅く、強い腹痛を訴えて救急病院へ行ったのだと聞かされた。

「遠藤さんね、丁度さっきお母さんが病院から連絡があつたそうよ。どうやら急性虫垂炎になつたらしいわ」

教室に居た先生の代わりに、亜紀のお母さんからの連絡を誰かが受けていたらしい。きちんと片付けられている先生のデスクマットの上には、風で飛ばされない様に伝言メモがテープで貼り付けられていた。

「先生、虫垂炎って？」

「ああ、盲腸の事よ」

「もう……ちよう？」

聞き慣れない病名を耳にして、思わずあたしは眉を顰めて小首を傾げる。

「右手で自分の右側の骨盤に手を当ててごらんさい」

「こつ……ですか？」

あたしはわけが判らないまま、先生の言われた通りに右手で自分の腰に手を当てる。

「そう。それで指を伸ばした状態。指先の辺りが『盲腸』になるの。その部分が炎症を起こして痛むのよ。薬で痛みを散らしたり、炎症を抑えたりも出来るけど、遠藤さんの場合はどうやら手術になるらしいわ。これからご両親が主治医の先生と今後の予定を相談するのですって。予定が判ったら先生に連絡してくれるそうだから」

「……はい」

伝言のメモを手にした先生からそう言われて、あたしは仕方なく頷いた。

いつもの元気を失くしてしまったあたしを見て、先生は気の毒だと思ったのか、ふと表情を和らげて言葉を続ける。

「仲良しの遠藤さんが入院してしまって貴方も心配でしょうけど、

もう少し待って居て。ご両親から連絡があったら、貴方に教えてあげるから」

『仲良しの……』先生が口にした言葉が頭の中で何度も響く。

こんな状態になってしまったけれども、それでもあたしにとって亜紀はクラスメイトであり、部活の仲間であり、そして……大切な友達。親友なの。あたしの中の亜紀の立ち位置は全く変わってはいないけれども、亜紀は……

きつと、亜紀はあたしの事をもう友達だなんて思っではくれないんだろ。うな。それどころか酷い子だって……きつと思ってるんだろ。うな。

あたしは切なくなつて、心の中で何度も亜紀に『ごめんね』と謝つた。けれども、自分の心の中で何度彼女に謝ってみても、この想いは亜紀へは届いてはくれないのだ。

「先生、盲腸って何が原因なの？」

「盲腸の原因はまだよく判っていないらしいんだけど、食べ過ぎと言った生活環境やウイルスから発症する事もあるし、時には心因性などからも来るそうよ」

「……」

『心因性』……心が原因になる病気……

やっぱり、あたしが原因なのだわ。

昨夜、どんな顔で亜紀と会えば良いのかとずっと悩んでいたのに、もうこうなったらそんな次元で悩んでいる場合じゃなくなっちゃってしまった。

どうしよう……あたしのせいで、亜紀が病気になって学校を休んじやったんだ。

いつもニコニコ笑っていた亜紀から、あたしが彼女の笑顔を奪ったのだと思うと、居ても経っても居られない。授業だってちっとも身に入らなくて、ただ悪戯に時間が過ぎていくばかりだった。時間が経つにつれて彼女への罪の意識から、あたしはどんどん息苦しさを覚え始める。

「ねえ、香代。遠藤さん、何かあったの？」

そう言っただけでクラスの女子の何人かがあたしに訊ねて来たけれど、あたしにはその理由が判っていても、答える事が出来なくて『判らない』としか言えなかった。

——誰かに相談したい……

そう思いながらふと斜め前を見へ視線を移すと、学校指定のポロシャツを着た慶の白くて大きな背中が眼に留った。

丁度、前から配られて来たプリントを後ろの門田くんに渡そうとして慶が振り返り、偶然だけでもあたしとしっかり眼が合ってしまった。そしてあるうことが慶はあたしに向かって愛想良く微笑んだのだ。

「……」

あたしはドキリとして瞬間的に慶の笑顔へ引き寄せられてしまったけれども、すぐに我に返った。

慌ててそっぽを向いて、慶の視線から逃げ出す。

なに？　　どう言う事なの？

慶は今日、お母さんの手術がある。あたしは自分のお母さんから大変な病気だと聞いていたのだけれど、今の慶の様子からは少しも不安や苛立ちなんか感じ取る事が出来なかった。

でも、どうしてそんな顔が出来るの？　　今まであたしは慶に対して随分な事をしちゃったのに。どうしてこんな時に、そんな優しい表情を浮かべられるの？

——お願いだから……優しくしないでよ……

あたしには、慶の優しさを受け留められる資格なんて……無いのよ。

あたしは心の中で泣きそうになった。うつん、もしかしたらもうとつくに泣き出しているのかも知れない……何故だかそう思った。

慶の笑顔が堪らなくて辛いと感じてしまった筈なのに……

不思議とそれから、薄いベールを剥がして行くみたいに重苦しい胸の痞えが取れて、どんどん軽くなって行った。どうしてそうな

ったのかは自分でもよく判らないし、説明出来ないのだけれども…
…少なくとも、慶の顔を見た時に、あたしの心の中で何かが癒され
たみたいな気がする。

前向きに考えられるようになったあたしは、とにかく今日の授業
が終わったら亜紀の居る病院を訪ねてみようと思った。たとえ亜紀
に嫌われていても、一言でも良いから謝らせて貰おうと心に誓って
心の整理が付いた気がして、少しだけ余裕が出来たあたしは授業
に集中出来るようにまで回復した。

ところが、運命の女神様は慶の様に優しくはしてくれなかったみ
たい。

その日の三時限目になる前の休憩時間。理科の実験教室へと移動
していた時に事件が起こった。

第93話 運命の女神様…2

「わ？」

始業五分前にクラスでひと塊りになつて教室移動をしていた時、後から付いて来ていた男子生徒の何かに驚いた声が聞こえた瞬間、筆記用具が床へとばら撒かれる大きな音がした。同時に傍に居たらしい女子の短い悲鳴と、男子の怒鳴り声が被る。

「何すんだよ！　ちゃんと前を向いてるアキバ系！」

「……」

何？　筆記用具を落としたのって……慶なの？

慶の名前を耳にしたあたしの心臓がドキリと嫌な音を立てた。驚いて振り返ると、数人居るクラスメイトの向こう側に、通路の真ん中で慶が尻餅を着いている姿がチラリと見えた。

男子生徒の小競り合いが何やら険悪になりそうな空気を読み取つて、傍に居た誰もが巻き込まれないように慶達数人をぐるりと遠巻きに囲み、慶に絡んでいる数人の男子達を、口々に誰だと尋ねてざわめいた。

「オイ！　何言ってる！　そっちがぶつかって来たんじゃないかよ！」

「謝れ！」

慶といつも一緒に居る田村くと門田くんが、ぶつかった相手の男子を睨み付け、喧嘩腰で言い返した。

「ンだとコラ！ ふざけんな！ 因縁付けんのかよ。上等だ」

「言い掛かりだ！」

相手の男子も二、三人の友達が居て、二人の気迫に負けまいと、もの凄い剣幕で食って掛る。

「大体、優勝したワケでも無いのに、ちょっとセン公からチャホヤされたくらいで天狗になってンじゃねーよ。クソうぜーアキバ系の癖に！」

「！」

彼等から慶の名前を呼ばれて、お互いに知っている奴かと眼で合図を送っているけれど、慶も、慶を庇ってくれている田村くんや門田くんも、彼等には全く見覚えが無いらしく首を横に振っている。

慶はわざと他人にぶつかって喧嘩を売るような子じゃ無いし、万が一自分からぶつかってしまったって、咄嗟に自分から謝る筈だわ。それに口が悪くてガラも悪そうに見える田村くんや門田くんだって、自分から騒ぎの種を蒔くような事はしない。そもそも、テニス部員なのだから喧嘩や不祥事が学校側に通報されれば、その部は廃部になってしまうもの。

「いやーね。アイツ、二組の不良達じゃん」

「シッ！ 聞かれたらマズイって」

「でもさあの男子、アキバ系ってあだ名でしょ？」

「あれ、本名じゃなかったっけ？」

「本名？ 変な名前。でも見た目イケてない？」

「知らないの？ 彼、今年のバレンタインに女子から一杯貰ったチヨコを全部捨てちゃったんだって」

「うわ、勿体無い。馬鹿じゃない？ どんだけナルシなのよ」

丁度通り掛かった別のクラスの女子数人が、ひそひそと囁いているのを偶然耳にした。そして彼女達の遣り取りを聞いて、クスクスと小さく含み笑いをする生徒達。

『慶は人から貰ったものを意味も無く捨てたりするような人じゃないわ。貰った数の多さに困ってしまったから、職員室に持って行っただけよ。捨てたのじゃないわ。人から聞いた噂を勝手に信じて決め付けないで！』そう言いだしそうになったあたしは、ぐつと奥歯を噛み締めた。どうして急に慶を庇^{かは}おうと思ったのかは判らない。けれども、本当の事を知らない彼女達が噂話で勝手に慶の事を誤解しているのを見るのが、とても不愉快で腹立たしく思えた。

彼女達の心無いひそひそ話の声は意外と大きかったらしく、慶本人の耳にも入ってしまったようだった。

俯^{むく}いたまま慶はゆっくりと力無く立ち上がると、文句を言う男子へも、勝手に噂話をして盛り上がっている女子へも何の抗議もせず、のろのろとした鈍い動作で廊下にばら撒いてしまった筆記用具

や教科書を拾い始める。

「お……おい？ アキバケイ？」

「……」

リアクションが全く無い慶の反応に、傍に居た田村くんや門田くん達も何かおかしいと気付いているみたい。もちろん、あたしはいつもの慶じゃないわとづくに気付いている。それは、このフロアの中でただ一人。あたしだけが、今日と言う日が慶にとってとても大切な一日だって知っているから。

慶のお母さんの手術は、そんなに大袈裟に考えなくても大丈夫だし、今の医学技術は昔と比べると格段に上がって来ているから心配する事はないわと聞いていたけれども、お母さんが入院する事自体慶にとっては初めてなんだものね。やっぱり不安で心配なのよ。

そう思っただけを見ていたら、もう一度慶と視線が合ってしまった。

「……」

慶は何かを思い詰めているような……そんな表情をあたしに見られて恥ずかしかったのか、さり気無くゆっくりと視線をあたしから逸らせる。

「おい！ ぶつかっておいてシカトするなよ！」

「喧嘩売ってンのかよ！」

「お前には言っていない！ 関係ねーだろが！ 邪魔すんな！」

慶とぶつかった男子は、慶に謝らせようと剥きになり顔を真っ赤にして怒り出すけれども、慶は彼とは視線を合わせようとはしなかった。

代わって田村くんが彼の挑発に乗せられて、声を荒らげる。

熱くなって今にも大乱闘になりそうな……一触即発の空気なのに、無関心を装っている慶の周囲だけ特別な温度差が感じられた。

「おい田村、もう止めようや……」

そう門田くんが言い出した途端に、慶は拾った筆記用具を再び足元に落としてしまった。誰もが慶の行動を訝り、どうしたのだろうかと思ひ、慶を窺い注目する。

「……」

今度は落した筆記用具を拾おうともせず、慶は身を翻したかと思つと、急にその場から逃げ出した。

「あ、おい、アキバ！」

門田くんが呼び戻そうと声を掛けるのに、慶はその声さえ振り切るようにして一目散に廊下を走った。

「コラー！ 廊下を走るな！」

廊下を走る足音を聞き付けて、余所の教室に居た先生が顔だけ出して大声で注意する。

その場に居た誰もが、慶の突然の行動に驚いて呆氣に取られて彼の背中を見送る。一番肩透かしを食らったのは、慶とぶつかって絡んで来た連中だった。納まりが着かなくなつて、それぞれが捨てゼリフを吐いて引き上げて行く。

いきり立つて居た田村くんはまだ遣り足らなかつたみたいで、彼等に咬み付こうとしていたけれども、それを門田くんが必死になつて背後から羽交い締めにして取り押さえていた。

予測出来なかつた慶の今の行動から、それよりも少し前にあたしに向けた微笑みの理由がなんとなく判つたような気がした。あの時、あたしはどうしようも無いくらい不安だった。誰かに話を聞いて欲しいと思つてあれこれと悩んでいたら、偶然慶と眼が合つてしまい微笑まれてしまったけれども、たったそれだけで何かが通じ合えた気がした。

今のあたしが落ち着いて居られるのは慶が微笑んでくれたからなのだと思う。そして、あの時微笑んでくれた慶も、自分自身の不安に押し潰されそうになつていたのかも知れないわと思つた。

第94話 運命の女神様…3

三時限目の授業が始まっても、慶は教室へは戻っては来なかった。

今まで真面目一本だった慶が突然授業を放棄した事で、授業が始まった直後にクラスは騒然としてしまう。

「芳賀、秋庭は戻って来た？」

「いいえ。まだです」

理科の実験中に、職員室から担任の石田先生が遣って来て、委員長の芳賀くんに声を掛けた。慶の失踪は早くも先生の耳へと届いていたらしく、先生の後ろには学年主任の先生や教頭先生も控えていて、何だか物々しい空気を感じてしまう。

亜紀の時とは違って大袈裟だと思ったのはそこまでだった。きっと、校内のどこかに隠れているのじゃないのかしらと思っていた。慶の気持ちが落ち着けば、また教室へ戻って来れば良いのよ。と、軽くあたしは考えていたのだけど……先生方の浮かない表情を見ると、どうやらそうじゃ無かったみたい。

教頭先生の姿を見た数人の生徒が更に騒ぎ出した為、石田先生は慌てて理科の河野先生から時間を貰って、授業は急きょホームルームになった。

「はい、みんな静かに！」

石田先生は生徒が注目するように数回大きく手を叩くと、蜂の巣を叩いたみたいに騒々しかった実験室は、驚くくらいシン……と静まり返った。

「知っている人も居ると思うけど、クラスの秋庭さんが早退しました」

「え？」

想いも寄らない先生の言葉に、クラス全員は一瞬意表を衝かれて驚いた。

『早退』って……慶が？ あの状態で？

何度思い返しても、慶が早退をするよう予定を立てていたらしいと言う素振りは一切無かった。二組の不良らしい男子に絡まれて、心にも無い噂話をされてしまったから慶は逃げ出したのだと思っていたのに。

あたしが不思議に思っていたら、他の生徒も同じだったみたい。特に、すぐ傍に居た田村くんや門田くんは、二人で顔を見合わせて『納得出来ない』と言わんばかりだもの。

「センセ、アキバケイは早退するなんて何も言っていなかったです」

右手を中途半端に挙げて、田村くんが反論した。隣に座っている門田くんも、同意だと大きく頷いて見せる。

「ご家族からの呼び出しがあったそうです。ですから、みんなは授業に集中するように」

田村くんの意見に、先生は少し怯んだけれども、すぐに強い口調でそう答えた。

だけど、あたしから見れば……

うつん、もう止そう。きっとみんなだつて先生が、何らかの事情があつて事実を捻じ曲げなきゃいけなかったのだと思つてゐるわ。

先生方が出て来た事で、あたしは慶が学校から逃げ出してしまったのだと知つた。逃げ出した原因が嫌がらせかどうかは別として、他のクラスの男子に意地悪されたくらいで逃げ出すだなんて……と今までのあたしなら慶に対して見下した想いを抱いてしまふかも知れない。けれども、今は全く違つている。このクラスの中であたししか慶の事情を——お母さんが……誰よりも大切な人が手術するの

あたしはどうすれば良い？

何をすれば良いの？

だけど、学校から居なくなつてしまつた慶に、あたしがしてあげられることなんて無いんだもの。

石田先生が理科の先生と少しだけ言葉を交わすと、先生は待つて居た教頭先生方と一緒に引き揚げて授業が再開された。

「香代？ どうしたの？」

「え？」

授業が始まって暫く経つと、あたしは実験班のメンバーで隣に座っていた輝ひかるから声を掛けられた。

「気分でも悪いの？ 顔、蒼いよ？」

「う……ううん、大丈夫」

「無理しないで保健室に行けば？」

「ありがと。でも、本当に大丈夫だから」

そう言つて愛想笑いを浮かべると輝に『心配させてゴメンね』と小声で謝る。

それでも、輝はまだ心配そうに小首を傾げて、あたしの様子をちらちらと窺うかがつてくれている。

・「ダイジョウブだから」

彼女と視線が合い、あたしは思わず小声でそう言つて実験机の下で軽く手を振った。自分では自覚していなかったけれど、彼女の態度から、自分がどれだけ具合が悪そうに見えているのかが判った。そして彼女の気持ちが嬉しくて……反面、あたしには人から心配して貰えるような、そんな資格なんて無いのだわと思えて、本当に申し訳ない気持ちで一杯になる。

駄目だあ……

あたしは輝達に気付かれないように、小さく溜め息を吐いてそつと肩を落とす。

慶の事を心配してあげられる余裕なんて、今のあたしには無い筈なのに……なのに、どうしてこんなに気になってしまうの？

暫くの間あれこれと悩んでいたけれども、独りで悩んでいるよりも、事の始終を知っている姫香を頼って相談してみようと思った。

授業の終了を告げるチャイムが校内に響き渡る。

「起立——！ 礼！」

クラスみんなが一斉に席を立つ。

慶が居ない三時限目の理科の授業が終わった直後、ざわざわと騒がしくなった教室から出て行こうとしたあたしは、理科の山崎先生から呼び止められて、担任の石田先生が居る職員室へ行くようにと指示された。

授業中、ずっと慶の事を考えていて上の空で授業を受けていたから、てつきり注意されるものだと思って覚悟していたのに、一体何の用かしら？

第95話 運命の女神様… 4

「失礼します」

入り口で一礼すると、教室よりも広い職員室へと踏み込んだあたしは、五、六人の先生方と話をしている石田先生を見付けた。足早に近寄ると、先生もあたしに気が付いてくれる。

「ちょっと失礼します。土橋さん、良い？」

「はい……？」

先生は他の先生方との話の輪から抜けると、職員室の横にあるカウンセリングルームへ移動するようにあたしを促した。

カウンセリングルームへは、今まで入った事がなかったけれども、職員室とは打って変わり、狭い部屋の中央に生徒用の机がぽつんと置いてある、割りと殺風景な部屋だと思った。しかも、ここへは不登校になった生徒や生活指導を受ける生徒が案内される部屋だと判っていたせいか、中へ一歩踏み出した瞬間に、室内の重苦しい空気が纏わり付いて来る気がする。

まるでドラマで見た刑事物の取調室みたいで、あたしは良い気分にはなれなかった。

「先生の都合で来て貰ったのだけど、気分でも悪いの？」

「いえ……」

先生も輝と同じ事を言っている……気分はそんなに悪いとは思わないのだけれども、あれこれと悩み事を抱え過ぎちゃっているせいなのかしら？

心配してくれる石田先生へ、あたしは少し表情を緩めて笑顔を作った。だけど、今の先生の浮かない表情の方が、具合が悪そうに見えるのだけど……どうしたの？

「そう？　じゃあ少し話をさせて貰うけど、構わないかしら？」

「はい」

「クラスの子達にはああ言ったけど、あの授業が始まる前に秋庭さんが学校から出て行ってしまったらしいの」

「……はい」

あたしは俯いて小さく頷いた。

やっぱり、慶は学校から出て行っちゃったのだわ。些細な事^{から}で絡まれてしまって……

いつものあたしなら、情けない慶の行動を批判したでしょうけれども、今は全く違っていた。

きつとあの時の慶は大きく膨らみ過ぎた風船みたいになっていたよ。余裕が無くて、我慢出来なかったのだと思った。

そして、慶が学校から逃げ出した事を口外せずに、様子を見に来

ていた先生方の言動に、何か引つ掛かりを覚えた。

「他の子に事情を聞こうかと思ったのだけど、先生、少し前に秋庭くんのお母さんから、日は未定だけれど入院する事になりそうだと連絡を貰っていたの。土橋さん、知っていた？」

「それで私を呼び出したのですか？」

「秋庭さんの事で、何か聞いていない？」

「……」

「さつき、実験室へ行ったのはね、実は校門から秋庭くんが走って出て行ったのを、偶然先生が見てしまったの。丁度休憩時間だったから、何か忘れ物でも取りに家へ帰ったのかなと思っていたら、すぐに学校へ一般の人からの通報が入ったらしいの」

押し黙ってしまったあたしの心の中を探っている様に、先生は真っ直ぐにあたしの眼を見てゆつくりと話掛ける。

「『通報』って……どんな内容なのですか？」

その言葉に良く無い響きを感じ取ったあたしは、浮かない顔で先生を見詰めた。

「短時間の間に数件の通報が入ったの。一つは学校を抜け出した生徒が居ると言う連絡が二件。これは先生が確認しているから恐らく秋庭さんの事だと思うの。先生、ちゃんと理科室まで秋庭さんの事を確認しに行ったでしょう？」

「はい」

「それと前後して、中学生らしい生徒が万引きをしたと言うお店からの通報も入っていたの」

「そんな！」

「ええ。これは不確かな情報で、どこの学校の生徒かも判らないらしいの。秋庭さんなら制服のままだから、人違いだと思うのだけど、一応ね……」

「先生疑って……」

「形式だけよ。秋庭さんじゃないって事は、先生も信じているわ。でも念の為なの。土橋さん、秋庭さんが学校から出て行った理由……何か知っていないかしら？ 何か心当たりになるような事は無い？」

心当たりなら、すぐに頭に浮かんだ。

慶は普段、口に出しては言わないけれど、本当は『アキバケイ』と呼ばれるのが好きじゃない。その事はずっと前に……小学生の頃、あたしだけに聞かせてくれた内緒話で教えてくれた事がある。

* *

『本当は、自分の名前が好きじゃないんだ』

『どうして？ 前に、慶の名前はお父さんが付けてくれたんだって
言っていたじゃない』

前に聞いた時は、自分の名前をお父さんが付けてくれたのだと誇
らしく胸を張って自慢していたのに、今は反対の事を言う慶が不
思議でなかった。

『「慶」って漢字が難しくて書けないから？』

『違うよ。ちゃんと書けるよ』

そう言った後小声で『不格好だけど……』と呟いた。

『難しい字だものね』

『違うよ。そんなのじゃないんだ』

『じゃあ、なによ？』

『だってみんなが……「アキバ系」ってみんなが呼ぶんだ』

『「アキバ系」？ 慶の苗字は「あきにわ」でしょ？』

『うん……でも、みんなそう呼ぶんだ』

間違えた呼び方をされたら訂正して教えれば良いのに、慶はそれ
をしなかった。だから友達からは間違えられたままになってしまっ
た。

* *

あの頃は『アキバ系』と言う言葉が一つの文化を示す言葉だなんて、慶もあたしも知らなかった。慶が名前でからかわれるようになってから、あたし達はその言葉の意味を知ったのだから。

呼ばれ方が気に入らなければ、そう言えば良いでしょうに……そう思ったけれども、慶は今更な気がしたのか、結局自分の呼び名をそのままにしてしまった。

物心付いた頃から、お父さん子だった慶。けれど慶のお父さんが単身赴任で行ってしまうと、慶は自分のお父さんの事を全く話さなくなってしまうい、あたしも亜紀と姫香と出逢ってから、慶との距離を置いてしまった。

今、慶のお母さんの入院で慶のお父さんが帰って来ているけれども、長い間離れて暮らしていたのだから、もしかしたらお父さんと何かあったのかも知れない。

第96話 運命の女神様…5

あたしは今日の午後から行われるお母さんの手術があると言う事を伝えた後、教室移動の時に慶を中心にして起こった生徒同士の小競り合いで名前を皮肉られた事を話した。

急に慶の様子がおかしくなったのはその頃だ。

「そう。秋庭さんのお母さん、今日が手術の日だったの」

「昨日、私の母が言っていました。なんでも急に決まったらしいそうです」

「まあ、そうだったの。それは秋庭さん心配でしょう」

慶の不安と焦りを察したのか、先生はそれ以上聞かなかった。

自分の大切なお母さんが手術をすると言う日に、慶は病院ではなく学校へ来ていた。あたしは事前にお母さんから慶のお母さんが手術する日だと聞いていたけれども、今朝の慶の様子は普段と何にも変わっていないかった……と言うか、慶が何を考えているのかあたしには読めなかった。平気そうで居られたのは、午後から早退するからだと思っていた。

でも、実際に慶は早退する準備はしていなかったし、あのまま二組の男子に絡まれたりしなければ、今日一日を平穩に過ごせてしまいそんな雰囲気だった……この矛盾は何なの？

慶のお父さんが帰って来ても、慶は以前と何ら変わらなかった。昔は話をすればお父さんとの自慢話だったのに……もしかしたらお父さんと上手く行っていなかったの？

「失礼しました」

廊下へ出ると、生活指導の先生や体育の先生数人が携帯電話を片手に集まっていた。

人を威圧しているような先生方の厳しい表情から、これから慶を連れ戻しに外出するのだろうなと思った。

「石川先生、お電話です」

「あ、はい」

あたしの後に続いてカウンセリングルームから出て来た石川先生が呼び止められた。先生が再び職員室へと引き返すと、間もなく廊下に集まっていた先生方も職員室へと呼び戻される。

あたしは教室へ戻るように言われていたにも関わらず、この物々しい空気が気になってしまい動くに動けなくなってしまった。立ち竦んだまま訝っていると、石川先生がドアから顔を出した。

「土橋さん、もう心配しなくて良いわよ」

「え？」

「今ね、秋庭さんのお姉さんから連絡があつたの。秋庭さん、見付かつてご家族の方に保護されたそうよ」

「そ、そうですか」

ほつと胸を撫で下ろすと、あたしは職員室の中にある大きな壁掛け時計へと視線を向ける。

慶が居なくなってから、もう一時間以上が経過していた。

亜紀の事も、慶の事も……どっちも気になつて仕方が無い。だけど、今のあたしが優先して遣らなくてはいけない事を考えれば、慶には悪いけれどもあたしは亜紀を選ぶべきなのだと思う。だからこの日、あたしは自分の体調が優れないのを理由に放課後の部活を休んで、気になつていた亜紀のお見舞いへ行つて、一言でも良いから謝ろうと思つて予定を立てていた。

なのに、予定つて思う様には行かないものなのね。

放課後、帰宅しようと準備していたあたしは、石川先生に再び呼ばれて慶のカバンを持つて歸つて欲しいと頼まれてしまった。カバンを持つて歸るだけなら、亜紀のお見舞いへ行くのに十分時間があったかと思つたのに……

自分のカバンと慶のカバン。教科書とノートが入っている二人分だとかかなり重くなる。クラスの女子の中で、あたしはどちらかと言うと普段ラケットを振っている分、力持ちなのだけど、自宅まで一キロ弱の距離を、どうやって二人分持つて歸れば良いのかしらと悩んでいたら、クラスの男子から声を掛けられた。

「土橋、アキバケイのカバン、俺が自宅まで持って行って遣るよ」

「いいの？ …… って、田村くんが？」

ラッキーと思いつつ声の主を捜して振り向くと、教室の後ろの出口に田村くんが立っていた。

最初、クラスの男子の誰が言ったのか判らなかったけれども、とにかく重労働を買ってくれた男子の出現をありがたく思ったのだけど、田村くんイコール姫香の式が頭に焼き付いているあたしは、素直に喜ぶ事が出来なかった。

だって、二人で帰っているのを誰かに見られて誤解されたくは無かったし、第一、姫香に対して悪いと思った。誤解されないような他の帰宅組の女子と一緒に帰れば良いかなとも思ってたけれど、仲の良い子はみんなそれぞれ部活をしているし、帰宅組で普段仲良くしてくれる女子は帰る方向が逆だった。それに、一緒に帰ってくれる女子を見付けたとしても、田村くんの性格から予想すると、今度は彼と一緒に帰ってくれないような気がするし……

あたしが返事に迷っているのに気付いた田村くんは、少し表情を曇らせる。

「ああ、俺じゃワルイ？ 何か問題でもあんの？」

機嫌、損ねさせちゃった。『悪い』とか、そんな心算じゃないんだけど……

「部活はどうするの？」

「カバン持って行っただけだろ？　すぐに戻れば間に合うって」

「でも……あ！」

今日は部活を休むからと、もう姫香へ言っておいたのだけれど、もう一度彼女へ一言伝えてから帰った方が良かったかしらと迷っていると、田村くんからやや強引に慶のカバンを持たれてしまった。

「具合、良くないんだろ？　早く帰った方が良い」

「え……う、うん……」

「ほれ、帰るんだろ？　ってーか、早く行かないと俺が時間に間に合わなくなつて、藤野にゲンコツかまされる」

そう言つて、田村くんは情けなさそうに肩を竦めて苦笑いを浮かべた。

——優しいのね……

自分が遅刻すれば顧問の先生から叱られるって判っているのに、それでも慶のカバンを届けてくれるだなんて。

けれども、その優しさはあたしへ向けられたものじゃなくて、学校を抜け出して居なくなってしまった慶への気遣いなのだと思うた。

第97話 運命の女神様…6

部活の時間を気にしているのか、それとも元々なのかは判らなかつたけれど、田村くんはあたしよりも歩幅のコンパスも違えば歩く速度も違っていて、断然速い。

だからあたしは彼に遅れないようにと、時折小走りになりながら頑張つて彼に付いて行こうと早歩きをした。

慶のカバンが重いだろうと気遣つてくれる優しさはあるのに、一緒に歩いて居る時のあたしへの配慮って、在っても良いのじゃ無いって思うのだけれど……してはくれないのね。

でも、田村くんは姫香の彼氏だし。慶のカバンを持っていてくれるだけでも助かるのだから、時間に追われている彼に、もっと歩くペースを落として欲しいだなんて贅沢なんか言えないわ。

あたしはさり気無く、面倒を買つて出してくれた田村くんに感謝しつつ、歩きながらちらりと彼の横顔を盗み見た。

彼と初めて会つたのは、去年の部活申請をどうしようかと悩みながら姫香達に半ば引き摺られるようにして、軟式テニス部のコートへ遣つて来た時だった。既に男子の中でも慶と同じくらい背が高く、て大きかったから、彼へのイメージはさして去年の頃と変わらない。背が高くて、色黒で、眉がちよつと太いから『我』——と言うか『芯』が強そうに見える外見は、見た目そのまんま。男子の部員の仲間内では、気に入らなければ直ぐに咬みつく彼の性格を『瞬間湯沸かし器』なんて言われている。

特に、公式試合になると何故か現れる幽霊部員の八神さんとペアを組まされて、嘘みたいなお約束で予選敗退。小柄で時々女の子に間違えられてしまう八神さんと陰悪になって、男子部員が喧嘩を止めに入ると言う、救いようの無い繰り返しをしている。顧問の先生からの指示だそうだけれども、毎度々の事なので、もういい加減にペアを替えてあげれば良いのにと思ってしまうほど気の毒な彼。

確かに部活では協調性がどうしても求められるから、ある程度の妥協は必要なのじゃないのかなとも思うけれども、ちゃんと『自分』を持っている田村くんは頼れそうで素敵だと思った。

去年の新人戦前に慶のリハビリと称して集まった自主トレの時、あたしは田村くんに惹かれていた。彼から練習の誘いがあった時、あたしは本当に嬉しかったんだもの。

そんな彼の『カノジョ』になった姫香って……少しだけ妬いちゃうな。

一緒に歩いていて特に話題が無かったものだから、それとなく姫香との仲を探ってみる。

「姫香と上手く行ってる？」

「は？　なんで？」

意外な返事に返す言葉が無かった。あたしはてっきり田村くんが姫香の彼氏なのだと思っていたのに……

「で、でも、付き合っているんでしょう？　姫香と」

「別に『付き合っている』ってホドじゃないよ。お互い片親だし、苦勞してるから話易いだけだよ」

「そつ、そうかなあ……そんな風には見えないけど？」

あたしは自分の振った話題が、なんだかとてつもなく良く無い前触れのように感じて、振ったりするのじゃなかったと内心大いに後悔してしまった。

「あのなあ……俺、別に告ったワケでもないし、アイツに『付き合おう』だなんて言った覚えもないぞ」

「だって……」

傍目からは十分付き合っているように見えるのに、田村くんは気付いてないの？

あたしは、聞いてはいけない事を聞いてしまった気がした。

「ンだよ。土橋の方こそどーなんだよ？ アキバのコト、諦めたのか？」

「あ、あたしは……あたしだってそんな……慶に告白した覚えなんか……な、無いわよっ」

急に慶の事へと振られたために、心の準備が全く出来ていなかった。あたしは機嫌を損ねて言い返した。

少々剥きになったあたしを見て、田村くんはふうんと鼻を鳴らした。

「意外だな。けど、あんまり高いトコばっか理想にしていると、そのうちアキバの方から見向きもされなくなっちまうんじゃない？」

「よ、余計なお世話……」

彼の言葉が癪に障ったあたしは、ぴたりと歩を止めると彼を見上げて睨み付けようとした。途端に、あたしは思わず息を飲む。

田村くんは姫香から、あたしと亜紀の事を聞いている筈よ。きっと、馬鹿な女の子だって思っているに違いないわと思ったのに、見上げた彼の表情には、あたしを馬鹿にしたような素振りは一切無かった。

それどころか、澄んだ瞳の奥に意志の強そうな眼力を感じてあたしは思わず後退って、右足を一步後ろへ引いてしまう。

って言うか、心臓が……

「ちょ、ちょっと顔、近過ぎるわよ」

「そう？」

「そ、そうよ」

あたしは反射的に顔を背ける。

な……なに？ このドキドキは。えーい、静まれ心臓っ！

口では偉そうな言い方をしたけれども、あたしの心臓はそうじゃ

なかった。あたしが見上げた時、同時に田村くんも立ち止まり、あたしを見下ろすように浅く腰を折って屈んだものだから、お互いの息が顔に掛りそうになるくらい近付き過ぎたのだ。

「理想を持つのは良い事なんだろうけど……ジヨシの高いレベルの理想を聞いて凹む男って多いんだぜ。『俺はお呼びじゃねーんだな』って」

「……」

お互いの顔が近付き過ぎているのに、田村くんは少しも慌ててなんかいなかった。それどころか諭すよう穏やかに話し掛けて来たりして、いつもの活発で強気な彼のイメージじゃない。

彼の言葉が意味深に取れてしまい、あたしの動悸はなかなか治まってはくれない。もし田村くんに姫香と言う、本人非公認らしいけれども彼女が居なかったと仮定したら、あたしは……

「……」

あたしは酸欠になったみたいな感覚に襲われて、息苦しさから逃れようと深く息を吸い込んだ。

駄目。今のあたし……最低だわ。少しばかり優しくして貰ったからって、田村くんがあたしの『彼氏』だったら……だなんて妄想したりして。なんて恥ずかしい事を考えたりしちゃうんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4764i/>

あたしの中の ア・イ・ツ

2011年11月15日02時04分発行